
心優しき狼よ、曠野を行け

柿ノ木コジロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心優しき狼よ、曠野を行け

【Nコード】

N6752BZ

【作者名】

柿ノ木コジロー

【あらすじ】

いつも押しが弱くて何かと損をするタイプ、カケルは実家に居候中の失業者。
家でも両親や姉、その家族に押されて小さくなっているのだが、実は彼は狼、そして本来の生業しごはある組織の元、人をかみ殺すことだった。

やがて意思無き排除と名付けられた災厄が人びとを脅かし、ささやかな日常を蝕み、覆していく。

心優しき狼・カケルは見失いそうになる『愛』と現実の『時』をも

とめ、自らの本来の姿を掴むべく曠野を行く。

プロローグ

俺は狼だ。自分では気づいていなかったが、生まれた時から多分。そして人間をかみ殺すことが仕事だった、あの時まで。

俺の頭が変になったんだと、思っているんだろう。

とんでもない、俺がおかしいのではない、世の中の方が狂っているんだ。

と、よくあるよな、こんな話は。

カテゴリ的には

「オレはぐるぐる回る世界のど真ん中に
しっかと留められた金ぴかのピン」。

そう、完全無欠の天動説、中華思想、唯我独尊。

本当に、今の俺はそんな気持ちだ。

それでも俺は「俺が居るから世の中が在る」なんて声高に主張したいわけじゃあない。

ただ単に、訴えたいだけだ、控えめに。

俺を殺さないでくれ、とね。

あんなにも人を殺してきたのに、今さら殺さないでくれ、なんて虫が良過ぎるだろう？

それでもそんな事を言い出したのには、十分な理由がある。
まあそれも、俺なりの勝手な理由にすぎないのだけれども。
聞いてくれるか？

殺せ、ころせ、遠くで声が聞こえる。一人やふたりではない。も
っと大勢の怒号。彼は地面に這いつくばってその嵐に晒されていた。
胸がむかついてきて、口を大きく開けて吐いた。血がかたまりとな
って地面にこぼれ落ちた。何だよ、この血。急に氷水の中に落ちた
ような極端な寒さに襲われる。地面はごつごつと尖り、しかもぬか
るんでいた。硬い上に柔らかい、どちらも不快な感触だった。何故
こんな所にうつ伏せに寝ているのが全然思いつけない。気持ち悪
い、そして、寒い、ものすごく寒い。また気持ち悪くなって口を押
さえようと手を出した、しかし、その手はいつもと違っていた。
絶叫して、彼は跳ね起きた。

姉と弟 01

また夢を見た。

走は^{かけ}布団の上に半身を起こして、荒い息をついていた。腕立てのへばったような格好で両腕を伸ばし、目を見開いたまま布団のへりを見つめている。

夢と現実との整合、温度のちがう水どろしが混じり合うようにゆっくりとふたつは溶け合い、ようやく世界は現実が勝利した。

彼は、そつと片手を上げて口もとにあてる。

血はもちろん一滴も出ていなかった。まばらだが、ざらりとした無精ひげを掌に感じる。

そして、その手にも目をくれる。いつもの自分の手だった。

よかった。彼は今度は仰向けになって、ゆっくりと手足を伸ばす。

仰向けって、何となく怖いんだよな。

カケルは目を閉じて、しばし小鳥のさえずりに身をゆだねていた。

今朝はたまたま母に呼ばれて母屋の朝食に参加していた。父親の介護のことで相談したいと言われたのだ。そのためにいったんはちやんと起きたのに、食事の時にはロクにその話はなかった。なんとなく肩すかしを喰らった気分のまま、食事が済んでからまた自室に戻って寝てしまったのだ。

みんな働いているのに自分だけダラダラ暮らしている、そんなや

ましい気持ち大きい。だからあんな夢をみたのか？

どんな夢だったか？ 思い出せない、思い出したくない。

そうちゃん、いるう？ 姉の声が響く。

カケルは胸の上に拡げて載せていたマンガ雑誌を脇に滑らせ、むつくりと起き上がった。

抵抗してそのまま寝ていようかとも思ったが、結局は部屋の中にも踏み込まれてしまう、そして「ちらかっているねえ、相変わらず」と余計な文句まで言われかねないので、少し急いで土間のサンダルをつっかけて外に出た。

「なに」

「あら、いたのね」

自分で呼んでおいて、姉は意外そうに目を見開いた。しかしすぐにいつものせわしない表情に戻る。

「タクミのお迎えに行ってくれる？ 今日、半日なんだ」

「……」

またかよ、という顔になってしまったらしく、姉が眉間にしわを寄せた。

「忙しいの？」棘のある言い方だ。

「朝ごはんの時に言ってくればよかったのに」

「忘れてたのよ、アンタ、忙しいの？」

「別に」姉の勝ち誇ったような顔を見たくなくて、彼はいったん目を落とす。

ハローワークには毎日行ってみなきや駄目だよ、なんて偉そうに言う彼女も、自分の用事が優先する時には「暇なんでしょ？」という目をして言いたい放題で用事を振ってくる。

今だって、仕事を探しにいつ出かけようかタイミングをうかがっていたんだ、そう言ってやりたかったが食後うとうとして、その後

目覚めてからも枕脇にあつた雑誌を何となく拡げていただけだった、いくらい訳をしてもそんなのもお見通しかも知れないけどね、と足もとの小石に心の中で更なる言い訳をする。

若いうちから結婚して子どもを、しかも少し間を開けながら4人も生んでいる姉の恵はそれほど歳をとつてないのに、すでに疲れきつた老婆のような目をしている。もっと化粧して髪もキレイにしていれば、十分美人で通るのに、カケルは自分のことは棚に上げ、ジヤージの上から脇腹を搔きながら時おり上目づかいに姉の表情を伺っていた。

「私、今からナツミの学校で打合せがあるのよ」ただでさえ忙しいのに、恵は地元小学校の役員もやっている。

「洗濯もの干したらすぐに行かなきゃ、お迎えお願いね」

「半日、つて何時にバス着くの？」

「11時50分」

カケルは言い争うのをあきらめ「……はい」着替えるためにまた自分の住処へと戻った。

姉はオーダーが通ったことを瞬時に察知、すぐに踵を返して洗濯ものの方へと向かう。

カケルが玄関のドアを開けたら、また声が飛んできた。

「そうそう、午後はそっちに置いてくれる？ タクを」

どうせ用事はないんでしょ？ 私、午後まで帰ってこれないのよ。母屋だとかあさんがうるさいから、夕飯までつき合っただけよ。

カケルは聞こえないようにそつと溜息をつく。

着替えた時に上着のポケットから何かがこぼれ落ちた。赤いライターだった。

100円ショップで売っているような、プラスチックでできた半

透明の容器には、まだ半分程度オイルが入っている。

タクミに見つかる大変だ、彼はライターをタンスの一番上の引き出しに放り込んだ。

玄関で今度はちゃんとしたスニーカーを履き、忘れ物がないか部屋をざっと見渡した。

下足箱の上から車のキーを取り上げ、ガレージへと向かう。

カケルの住居は敷地の外れにある離れ、築30年以上の木造平屋建てだった。8畳一間に仕切りもなく2畳ほどの木の床が、そして少しだけ下がって狭い土間がついた、恰好よく言えばワンルームの体裁になっている。木の床部分は後になってミニキッチンを付けていて、一応1人用の冷蔵庫まで揃えているのは、夕飯以外は自炊という取り決めに母屋の家族としていたせいもある。洗濯も土間のすぐ奥に2槽式の古めかしい洗濯機を置いて、そこで自分のものは洗っていた。

夕飯も独りで食べるから作らなくていい、と頑なに繰り返して伝えているのだが、それはなぜか母親が許さなかった。

ただでさえ忙しがっている姉の手をわずらわすだけなので、本当に必要ないから、と何度言っても駄目だった。姉もおかしな所で妙に頑固な母親の性癖はよくわきまえているのか、軽く肩をすくめてこう言い放った。

「1人分増えるのも同じよ、どうせ、そうちゃんはあんまり食べないしね」

確かに、カケルは小さい頃から肉や魚の類が苦手だった。玉子ですら細かくなつて他の食材に混ざったりしてはいない限り口にしない大人になつてからは一度、魚の骨がほろほろになるまで煮込んで挟まっていた昆布巻きを知らずに食べて、みなが食事中だったにも係わらず思い切り吐いたことがあった。

なので、みんながたまの御馳走だと大騒ぎして焼肉を奪いあう間にも、彼だけちみちみと冷ややっこをつついたりしている。

食事がすむと、控えめに「ごちそうさま」と自分の茶碗と皿を流

しまで運び、洗ってから帰る。だいたいカケルが一番先に食事を終えるので、誰かがふり向いて「そう兄、小皿もう一枚ちょうだい」とか細かい用事を言いつけられる前にそそくさと離れに帰っていく。

ここ2年ほど、そういう暮らしが続いている。

今という切り口

いつもと違う朝、そしていつもと違う一日が始まる。その点ではいつもと同じ一日なのかもしれない。どちらにせよ、俺にとって日々は常に新しくしかも無残だ。

生み出されたばかりの時は『今』に晒されたたん、急にみじめに干からび始める。次から次へと押し出されて生まれてくる時間、永遠に新しく、しかも切り口から萎れてゆく巨大な植物……

日常というものに埋没していた時ですら、そんな事しか考えていなかった。

まだ、声が聞こえてくる。

そうちゃん、そうちゃあんと母屋のほうから声が響く。いつものことだった。

たいがいは部屋にいて声を聞く。俺はその声がすると、のっそりと表にでる。まるで巣の中にいたカゴのハムスターが飼い主の声に反応して出てくるみたいだな、というも思う。

「そうちゃん、ちょっとラブの散歩行ってくんない？ アタシ、武宮さんちから呼ばれちゃって」

姉の手には既にお散歩セットが握られている。水色の小さな手提げと、青いリード。

「ねえそうちゃん、ごめん下ごしらえしてたら気がついた、お肉足

りないわ、トリ挽肉200グラム急いでお願い、あ、あと牛乳も2本」

「そうちゃん、タクミのお迎えお願いね。今日、センター混んでるらしいから駐車場空いてないかも、早めに行行ってやって」

「そうちゃん、あのね明日なんだけど……」

「そうちゃん」

俺、今……返事をしていたのかな？

スクールバスを待つ 01

スクールバスの停留所のひとつに指定されている地域交流センターの駐車場は、今日はかなり空いていた。

彼は目立たないように奥の方に車を進め、センター内に入ってくるバスが見えるように車を前に向けて停める。

少しだけ背もたれを寝かし、はあ、と両腕を頭の後ろに組んでもたれかかった。バスが来るまでにまだ15分ほど時間がある。

ここで乗り降りしている児童生徒は全部で8人、親の顔もだいたに分るが、まだ誰も来ている様子はない。毎日のことなので皆けっこう時間ギリギリだ。以前は、5分前には他の親たちと同じようにちゃんとバスの停まる玄関前に立って待ったのだが、そうすると何かと話しかけられて、何と答えていいか分からなくなってきて、非常に気まずい感じになる。

あら、たつくんのオジサンなの？ わか〜い、おい〜つなんです
か？ え、30過ぎ？ 見えない〜。お仕事はあ？ 一緒に住んで
るんですか？

警察の尋問じゃあないんだから、いい加減にしてくれよ、といつもカケルは叫びたくなる。それでも持ち前の性格から、常に温和な笑みを浮かべてはい、はいと適当な相槌をうつってしまうのはどうしようもない。そんなことも度重なって、自分が送迎をする時にはギリギリまで車の中で粘るとというのが習慣になってしまった。

スクールバスは、琢己たくみが通う特別支援学校専用送迎車のうちの一台だった。

利用している子どもは知的、または身体的に障害をもつ小中学生。

もちろん皆ここまで自力で通えないので、学校のある日は毎朝保護者がスクールバス停まで送り、午後3時頃にはまた同じ場所まで迎えに行く。

琢己もその例に漏れず、自家用車での送迎が必須だった。家が電車の駅からはもちろん、定期バス路線からも微妙に離れており、このもよりのバス停でさえ5キロは離れていたため、車がなければお話にならない。

カケルも失業して実家に戻って居候の身となつてからは琢己の送迎にちよくちよく使われるようになっていた。

その前1人暮らししていた頃から、たまに家に帰ると姉からお使いを頼まれたり、子どもらの送迎をさせられたりだったので特に苦にもならない仕事ではあったが、琢己の送迎はこのほか、気が重かった。

琢己は重度の自閉症で中学部の1年生。付き添いなしではとうてい表は歩けない。自宅にいても、何をするか分らないのでいつも誰かがさりげなく見張っている必要がある。

このバスを利用してはいる子どもはみな、多かれ少なかれ同じようだけど……いや、とカケルは目をつぶったまま子どもらの顔を順繰りに思い浮かべる。中でも琢己は、障害が重い方かもしれない。

今日もお昼ご飯いっしょか、カップ麺でもいいよな、あつ、熱いとひっくり返すと危ないか、でも言えば分かるよな、いや、どうだろう。「言って解ればタクミじゃない」なんてメグも言うからな、ひどい親だ。コンビニでおむすびでも買って行こうか、いやいや、アイツを連れてコンビニなんて入れないだろうな。車の中に1人で待たせて置くなんてことも無理だ、じゃあドライブスルーだな。あー、先に何か買ってあげばよかった。

昼ごはんのことをとりとめもなく考えているうちに、先日殺した人間のことがふと、頭に浮かんだ。

スクールバスを待つ 02

がっちりとした体格の、年配というにはまだ若い男だった。背広を着てはいたが、どこか試合の解説に出るプロレスラーといった雰囲気だった。会社役員だと聞いていたが、CEOが何の略かもカケルは知らなかった。カケルが知らないものは、狼だつて知らなくていい。

狼のしごとはただ、追いつめて、殺すだけ。できるだけ素早く、ひと息に。

おびえさせる時間は短ければ短いほうがいい。そして痛みを感じる時間も。

その男の名は、新条雄大しんじょうたけひろといった。会社の裏金をそうと知ってひそかに着服したのだと聞いていた。金額的には7億かそのくらい。どうしてそんなお金が簡単に動くのか、カケルには不思議だった。会社の経営陣から、知り合いを経由してカケルのところに話がきた時には、まだその事件は表ざたにはなっていなかった。

ヤマナシくん、と電話口でいつものやさしい声が響いた。カケルはこの声が大嫌いだった。

しかし、逆らえない。

「シンジョウウタケヒロ、という男だ。明後日の夜11時過ぎに港区の、地図の所を通過することになっているけど、君は、会えるかな？」

逆らうことはできない。20歳の時、恋人の紹介で彼と会い、あのヨレヨレの名刺を受取った時から、いや、自分の携帯番号を赤外

線送信して、相手の携帯がそれを受信してヘンな色で光ってからずっと、感じていた。彼が告げれば自分は従うしかない、と。姉の頼みを聞かねばならぬのと同じように。

久しぶりに新幹線に乗る。さすがに家から走っていくには少し遠かったから。

23区内でも、人けのない場所はいくらでもある。人がいないわけではない。誰も見ていないだけなのだが。彼を追い詰めた時に高架の上にはかなりの渋滞ができていた。赤いテールランプがどこかのビルに反射して、病気の蛇のように少しずつ前に進んでいる。しかし、そのはるか下で行われている殺戮には、誰も気づこうとはしなかった。ビルにはすでに常夜灯しか残っておらず、わずかな店もシャッターをかたく閉ざしていた。そして、風に鳴るその灰色の壁の前で、狼は男を組み伏せていた。

男は倒されて数秒後には喉笛を噛み裂かれて絶命した。悲鳴すら、あげる暇を与えず。

体格のよい男らしく、血が勢いよく噴き上がり、狼の鼻面を熱く濡らした。

新鮮な血は水と同じくらい清らかだ、彼はがっしりと牙を噛み合わせたままその奔流を顔全体で受け止めていた。この熱さから言ったら、温泉を掘り当てたようなものか、ずっと止まらないでほしい、いつもそう願っていた。

しかしその泉は間もなく滞り、くわえていた男の痙攣が収まって完全にぐったりする頃には、完全に流れは止まっていた。

狼になれば、理由も何も必要ない。ただ本能として、匂いを覚えた人間をかみ殺すのみ。

前日速達で届いていた手紙に入っていた男のハンカチを鼻にあて、カケルは思う。どんなに清潔に洗ってあるうとも、いったんついてしまった7億横領という香りはこの鼻に残ってしまう。いや、そんな動機付けすら必要ない。どんな罪があるうと、どんなに悪人であるうと同じだ。

どんな匂いであろうと、唯一の切符に間違いはないから……死への旅立ちへの。

うつらうつらしていたらしい、目があくと既にスクールバスは所定の位置に停まっていた。

今は琢己のことに集中しよう、カケルはゆっくりと息を吐いて車から出た。

ひりつく痛みをこらえながら、カケルは手を冷やし続ける。

琢己はテレビに縛りつけていた。正確に言うと本当に束縛しているのではなく、テレビの前に、大きな紙の上にポテトチップを山盛りにして、吸い口のついた琢己専用マグカップにペプシコーラをたっぷり500ミリリットルは入れて、姉から借りてきたDVDを流しているだけなのだ。

本当に縛りつけたら、多分そのままテレビを引き倒してその液晶画面を足首にくくりつけたまま窓から飛び出して、表に走り出して行ってしまっだろう。画面はだらしない平面犬みたいにぼよんぼよんと弾みながら後に続くんだろうな。その様子を何となく目に浮かべて、それを間抜け顔で見送っている自分までみえて情けなくもつい笑ってしまう。へそに力が入らない。

右手首から手の甲にかけては水につけている間は何の痛みもないのだが、少しでも水から出していると、すぐにこわばったような激しい痛みに襲われる。

琢己を叱っても、どなりつけてもどうにもならない。しかし、ついカケルはふり向いて彼の方をきつい目で睨んでしまう。

琢己は、ごろんと長細い身体をテレビの前に横たえ、左手でポテチをかき混ぜながら（食べているわけではないので取り上げようとしたら、ういっ！ とけたたましい声で手を払われた）、右手でしっかりとコーラのマグカップを握り締め、うっとりした顔でDVDの映画を眺めている。ちなみに番組はかなりマニアックなBSの海外

二ユーを撮りだめしたものだ。翻訳口調のキャスターがしゃべっているのが、リズム的に彼には心地いらしく、これを点けているとだいたいいつも大人しくなった。今回はかなり興奮していたので無理かと思っただが、起死回生のチャンス、どうにか成果はあった……被害は大きかったが。

ポテチはすでに半分以上は粉末状にこなれ、紙からはみ出してカーペットに進出している。紙も大きなものがなかったので、壁にかかっていた今月（まだ半分も終わってない月）のカレンダーを破いて下に敷いた。なのに、琢己はその紙をわざと避けるように油っぽい破片を拡げてしまっていた。

コーラも微妙にストロークから零れている。カーペットは取り替えた方がいいだろうな、とカケルは長い息を吐く。

スクールバス停から連れ帰り、とりあえず離れに入れたはいいが結局昼飯は買って来られなかった。母屋に何か少しは残っているだろう、と、カケルは琢己をひとり離れに残し、彼のお気に入り、『街の達人・便利情報地図』を手に持たせてから母屋に向かった。

出掛ける支度をしていた恵に何か食べるものない？ と聞くが返事が上の空だったので、ちょうど出てきた母親に頼む。以前のような機敏さがすっかり影を潜めた母は、それでも腰を押さえながら息子のために台所に向かった。背後から姉の強い声が飛ぶ。

「冷蔵庫のポテサラは今夜のおかずだから食べないでよね、あと、カップ麺はハルキのだから」

アンタの次男にメシやるのに、どうしてそうツベコベ言いやがる、心の中のチヨイ悪な弟が鼻に親指を当てて姉に向かつてしかめっ面をする、だが、カケルの表面は顔色を変えずに姉のことばに「はい

はい」と大人しく同意して、母について台所に入った。

ようやくきのうのコロッケの残りと、惣菜パンが2つばかり出てきたので「あたためる？」と母に聞かれたのも「いいから」と邪険に振り払い、そのままの口調でそれでも「ありがとう」とつけ加える。離れに戻るのには小走りだった。だが、予感的中とも言おうか、たいへんなことになっていた。

赤いライター 02

スローモーションのように、目の前に展開する光景。玄関先に座らせていた琢己は既に立ちあがって部屋に上がり込んでいた、地図帳は玄関の外に投げ出してある。そして、まるで吸い寄せられたかのように彼は洋服ダンスの一番上の引き出しを開けて、午前中に投げ込んだばかりのライターを出して手に持っていた。

あの赤い、100円ショップのライターを。

軽くはじけるような音と共に、安物にしてはけっこう立派な炎が立つ。カケルは動けない。

琢己は、ゆらめく炎を見て、それからカケルを見て、それからくると向きを変え、窓際に二歩で歩み寄る、カケルはまだ動けない。

琢己は火を、カーテンに近づけた。難燃性、確かそう聞いていた、遮光で難燃だから、と。カケルは動けないまま思う、そう、燃えないはずだ。だが、二拍ほどおいて、カーテンからふわりと大きなオレンジの炎がたった。琢己は日頃の興奮も忘れたように、作業に没頭している。炎が開いている窓からの風にあおられ、琢己の手元を舐めた。

「危ない！」

ようやく、カケルは反応した。タタキに脱ぎ捨てようとしたサンダルが足から離れず、ついてきてしまった。少しひっかかり、カケルは琢己の胸元に飛び込むように駆け寄った。

「やめる、タク！」

上がった炎をすぐ近くにあった上着で押さえつけるように消す。古着の革ジャンだった。琢己は急に間近に現れた闖入者に「きいっ」と抗議の叫びを上げ、ライターを取り落とす。しかし、火からは離れようとしない。カケルは間に割り込むように背中を琢己を遠ざけながら、革ジャンでカーテンを包むように、火を抑えつけた。炎がするりと手の甲を撫でた。

ようやく火が収まった。だが、収まらないのは琢己だった。

暴れまくる琢己を抑えつけるうちに、右手首のあたりが痛み始めた。ズキズキと脈をうつような激しい痛み。火傷だ、冷やさないと、でもその前にコイツを冷やさないと、中学生になって急に背も伸びて体重も増えた琢己には、カケルすらかなわれない時があった。そう、まさに今だ。羽交い締めにした身体がエビのように前でしなっている。窓枠に琢己の足がかかり、反動でカケルは後ろに飛ばされそうになる。ジャッキー・チェンがやったよなこれは。「やめる！」窓の外に向かって叫ぶ。

「メグ！ 助けてくれ！」

行ってきまーす、と呑気な声が遠くからしたので、更に声を張り上げる。

「メーグーっ」

何よ、いつもの不機嫌な口調が近づいてきた。カケルは暴れる琢己を組み伏せながら叫んだ。

「アンタの息子が、オレの部屋を焼き尽くそうとしてんだよー!!」

えっ、と慌てて走ってくる音が聴こえた。ようやく姉の顔が窓からのぞく。その時、奇跡のように琢己の動作が止まった。

「なに……ヤキツクス、って」

ぜいぜいしながら、カケルはようやく琢己から身を放し（彼はすでにぐったりと仰向けになって手をヒラヒラさせていた）、黙ったまま恵に焦げたカーテンを指さす。

姉は、黒くなったカーテンを見て、琢己を見て、それから、カケルを見た。

「……あらら」

感情のこもってない声。カケルはかつとなつて窓枠に手をかけた、その途端右手首に電流並みの痛みが走る。

「なによ」姉の言葉に、それでもつばを飲んでから

「あのねえ、ライターで火をつけようとしたんだぜ、カーテンに」

「何故？」理由を俺に聞くな、そうどなりつけてやりたかった。しかし確かに、今までそんな事などしたことがなかったのだ。いくら行動が読めないとは言え。

「あのねえ……」急に、膨らんでいた怒りがしぼんだ。風船よりも急激に。

「オマエ、カーテンを弁償しろよな」

それでもそうすごんでみると

「ライター、出していた方が悪いんじゃないの？」さも当たり前のように姉。

「はあ？」

カケルの返事は気が抜けていた。もう、どんなモードを保っているのかすら分らない。

「あのさ……出した訳じゃない、しまつてあつたんだつてば」

すでに窓の外に姉の姿はなかった。

琢己は足もとで、うつろな目をしたまま手をひらひらと目の前で

振り続けていた。

カーテンだけじゃない。

カケルは手を冷やしながら、怒りをまとめてみようと努力する。背後からはずっと、翻訳調のニュースが続いている。

「スコットランド一帯から広がった謎の感染症は今や全英の……」

カーテンだけじゃないぞ、カーペットも買ってもらう。絶対に。

「……次のニュースです。ウィンドサーフィンをするのは、何とブルドッグでした」

……ブルドッグかよ。

カケルは笑った、へそから力が抜けたまま。

もともとそんなことになったのは、聖夜のせいだったのだろうか。思い出すたびに彼は耳たぶにそつと手を伸ばし、その傷を確かめてみる。

高校三年になったばかり、ゴールデンウィークにはまだ少しだけ間がある、という頃突然、女子に呼び出された。

クラス替えをして初めてクラスメイトになった子、柳原聖夜、という子だった。

やなぎはら、はすぐ読めたが聖夜をイブと読むのは気がつかなくて、最初にクラスの名簿をもらった時には、てっきり男子だと思っていた。

女の友だちから「いぶつち」と呼ばれて「あんだよ」とふてくされたような返事をしている彼女をみて、ちょっと可愛いな、とは思ったことがあった。

背は高くてカケルともあまり変わらない、すんなりと伸びた四肢はいかにもスポーツが得意そうで、紺ブレザーの制服もよく似合った。特に話もしたことがなかったのだが、たまたま引き当てたあみだくじで同じ国語の教科委員を一緒にやることになった。

「ヤマナシくん、ちょっと」

軽く手まねきされた時も、だからきつとその話だろうと思って「なに」何の警戒心もなく彼女についていった。

教科の話にはやけに長く歩かされ、気がつくとも一番端の音楽室、グラウンドピアノの前にふたりで立っていた。

「ヤマナシくん、私の名前知ってる？」
いきなりそう聞かれたので「ヤナギハラさん、だろ」と応えると
いくらか顔のこわばりをといた。

彼女は特に愛想のいい感じでもなく、大声で笑っているのもあまり
りみたことがなかった。

何となく怒られるんじゃないか、という気持ちが先にたって、カ
ケルは足をかかく踏みかえる。

「なに？ 教科委員のこと？」もしかして、オレとじゃあイヤなの
かな、そう感じていたところに彼女が意外な一言を漏らした。

「キスしてくれる」

固まった。経験がない。かなり晩熟おくてだという意識はあった、それ
でも男子でつるめばつい、理想の彼女の話とかシモネタ系の話で盛
り上がったりもしたし、いつかは可愛い女の子とイチヤイチャして
みたいもんだ、とは人並みに思っていた。

それがいきなり、こんな可愛い子（笑えばもつと可愛くなる、そ
れは保証できた）に向うから「キスして」だなんて。

「あ、う」
ことはすら出ない。それでも、カケルはその場から動こうとしな
かった。目が泳いでいるのが自分でも分かる。顔がかあつと熱くな
った。

「だめですか？」

急に敬語になった彼女は、怖いくらい真剣な目でこちらをみてい
る。黒みがちの瞳なのに、わずかにみえる白目が青く映えていた。

唇は冷たそうな外見のわりに、ややふつくらと半開きになって彼に更なるひとことを発するべく構えているかのようだった。

「い、いいですけど」

ふわりと彼女がかぶさり、唇がふれた。始めは触った感覚がなかった。マジかよ、まじかよ、心の中にはそんな叫びしか出てこない。本物のニンゲンなのか、これは。柔らかい、つつか、何も手ごたえがない。

そのうちに押し付けられるような圧迫感、息が熱い。甘い。カケルは息をとめて、目の前の少女の腰に手を回す。嫌がられるかと思っただが、彼女はかすかに首をかしげ、更にこちらに身を任せた。深いキス。彼女の舌がそつと割り込んできた。彼も舌でそれを受けた。ずしんと下半身に急激な重み、逆にそのせいで彼ははっとなって彼女の身体を突き放した。

「ご、」目の前の少女は、わずかに唇を開き首をかしげたまま、カケルをじっとみつめている。非難の色も喜悦の表情もない、何かをじっと観察するような目。

「ごめん、ヤナギハラさん」

何と言いつればいいのか、カケルは真っ赤になったまま両手を前に出す。

「ごめん、オレさ……何て言うかさ」

説明風に振り回す両手に、彼女は手を添えた。

「あのさ……なんつーか」

「初めて？」手を握られたまま問われ、彼は一瞬嘘をつきたい気分になったが

「あ、ああ」

つい正直にうなずいた。

イブは平然と答える。「私も」

どうということなんだろう？

初めてのキスを、自分から呼び出してこつても無造作にしてしまうなんて。

「あ、あのさ」

「カケルくん、好きだよ」

ごく普通の口調でそう言うてから、イブは右手の人差指でかるく唇をぬぐい、それから彼の方を振り向きもせず音楽室から出て行った。

それから不思議なことに、彼女からその話は一度も出なかった。

教科委員もごく普通にこなし、話す内容も教科のこととか、国語担当のマスヤマのくせについて、とか（〜ね、〜ね、とやたら「ね」の多い優しげなしゃべりと教壇の前を首を縦に振りながら往復するので「コーチン」と呼ばれていた、鶏の名古屋コーチンからとられたらしい）そんなあたりさわりのない話題ばかり。

次にキスしたのはそれからずいぶんたってから、夏休みも終わってた頃だった。

また彼女から誘ってきた。今度は理科準備室。薬品臭い空気の中の長いキスのあと、彼女が言った。

「私、カケルくんと同じ大学に行きたい」

不思議なことに、彼女は聞いてこなかった。ねえ、カケルくんは私のこと、好きなの、とは。

迷って迷って迷った末に勇気を出して、

「クリスマス、一緒にすごさないか？」と誘ったのは今度はカケルのほうだった。

もちろん、好意は持っていた。しかし好きだよ、とは言えなかった、どうしても。なぜなのだろう、向うからも何も聞いてこない。私はカケルくんのが好き、とは何度か言っただけ、こちらが好きかどうかを確かめないなんて、不思議だと思っていた。

それでも聞けなかった。こちらから踏み込むことができなかった。

高校三年のクリスマスイブに、彼女の部屋でふたりは初めてむすばれた。

「ねえ」

彼女はしろい背中を向ける。「お願い、後ろ向きにして」

終わった後で、彼女はこちらを向いた。頬を赤く染めて、濡れているような目をしたままカケルを見た。何か言おうと開いた口を、カケルは塞いだ。下半身に気だるい疲れを覚えていたが、行為が済んだあと、ようやく胸の中いっぱいに温かい想いが満ちて来るのを感じた。長いキスが済むと、彼は言った。

「オレもイブのことが好きだ、愛してる」

イブはようやく、ほっとしたように目元をほころばせた。やっぱり、ずっと待っていたんだ、この言葉を。カケルは喉の奥に感じた痛みをかき消そうと、もう一度彼女にキスした。

ねえカケル、どうして私とする時にはいつもこういうなのか、わかる？

どうして私が最初にキスしていいか、聞いたかわかる？
それから

黙って。ちょっと待って。

大学二年の夏、クーラーが壊れたらしく、下宿部屋の中はむんむんと熱気がこもっていた。クライマックスに達する努力も、少し気を許せば全然別の内容に頭がすり替わって情慾などどうでもよくなってしまうような危険、そんな瀬戸際で彼はイブの背中にしっかかりとしがみついていた。汗がべたついて、腕の間から彼女が逃げたまいそうだった。セックスの前に冷たいビールをかなり呑んでいたのが悪かったのだろうか、イブは飲めないで代わりに、といってカケルは2缶飲まされていた。普段ほとんど酒は飲まないのに、あまりの暑さについて、ぐいっと空けてしまったのだった。

ようやくことが済んで、彼はベッドから落ちるように、ごろりと冷たい床に寝ころんだ。

仰向けになつて、まずティッシュでよくぬぐってから中にゴムを丸めて包み、足もとにあったゴミ缶に放る、それから腹ばいになつてみた。

昨夜は徹夜で論文を書いていたので妙に眠くなった。見上げたベツドの上でも、イブがうつらうつらしているようなので、少しだけ、
と思つて目をつぶる。

何か嫌な痛みを感じて目が覚めた時には、表はすっかり暗くなっていた。部屋にはいつの間にか電気が灯されていた、ベッドの上にイブの姿はなかった。

急に左の耳がかゆくなつて、手をやる。耳たぶの所に何かが触つた。「画びよう？ 針金だろうか。ちょうどここに当たっていたんだな、そう思つてとりのけようと引っぱつたとたん、激しい痛みに思はず起き上がった。

「……」耳たぶがズキズキする。寝相が悪くて何か刺さつてしまったのだろうか、おそろおそろ再度耳に手をやると、やはり耳に何かがついていた。丸い輪のようになった金属が耳たぶを貫通している。ちょうど、バスルームからイブが姿を現した。「目がさめた？」白いバスタオルを体に巻き付け、長くなつた髪を挟むように拭いている。肌が上気して、目は煌めいていた。

「待つて、耳に触つちゃだめだよ」
イブが小走りで駆けよる。カケルは途方にくれたままイブに手をとられ、洗面台の前に導かれた。

「見て、これ」

カケルは目を見開く。鏡に映っていたのは、自分とイブ。

彼はまだ裸のままだった。汗ですっかりくたびれたような顔をしている。少し長くなりかけた髪はくしゃくしゃにもつれ、まるでジヤングルから助け出された少年のようだった。

そして、イブが立つ側の自分の耳たぶに、金色に光るものがみえた。一円玉くらいの大きさの弧をもつ輪が下がっている。

「何だよ、これ」

また触ろうとして、やんわりと押しとどめられる。

「ピアスだよ」

「見りゃあ、判るよ……」横目で鏡の中のイブをにらんだ。

「キミがやったのか？」

黙ったままだったので、少し語気を強め「ねえ、イブ」呼びかけると

「しばらくつけたままにしといて」さも当然のように、彼女は言った。

「傷口が固まって、ちゃんと穴になるまで1ヶ月は外してはだめ」

「あのさ」急に腹の底から怒りが沸き上がる。どうしてこんな酷いマネができるんだ。

「なんでオレがピアスなんだよ、何か悪い事したか？ オレ」

「怒らないでよ」

「怒るにきまつてるだろう」

「仕方ないんだよ」

「なにがだよ」

彼女は、自分の耳をみせる。同じように、左の耳たぶに穴が開いていた。ピアスはない。

それでもかなり昔に開けたようで、ちゃんと穴は穴として残っているようだった。

「なにそれ」カケルの怒りは収まらない。

「キミも開けてるから、お揃いで、ってコトか？ 好きだからピアスも一緒、ってか？ やめてくれよ、オレは血を見るのとか痛いの大嫌いなんだよ」

「血は出てないでしょう」

「寝てたから気がつかないけど、出たんだろう？」

「舐めといたから」

「はあ？」頭がおかしいのだろうか？ 血を舐め取った、って？

「カケル、全然気がつかなかったの」

可笑しがる様子ではない、心底不思議そうに、イブは言った。

「アナタ、気がついてなかったんだ。ねえ、カケル。
アナタは狼なんだよ、私と一緒に」

私たち狼は、匂いで仲間を見つけるの、アナタは今まで仲間を見つけた事がなかったの？

そうイブに問われた時にも、きよとんとしたままだった。

「狼、って何だよ」

「そのまんま、動物の狼だよ」

「でもオレ人間なんですけど」

「私もだよ、でも狼なの」

「……なんで、いつから。いつそう決まったんだよ」急に意地悪な口調で付け足す。

「いつからさ、何年何月何日何時何分、地球が何周回ったときだよ」
イブは、哀れなイキモノをみるような笑みを浮かべ、小指で前髪をかきあげる。

「最初からだよ、生まれた時から狼は狼なのよ」

「オレは自分が、お、狼だなんて知らないし」

証拠は？ そう問い詰められたイブは、黙ってしばらく彼をみつめていたが、そのまま立ち上がって、隣の部屋へと入っていった。

黙って出てきて、彼の前にぺたんんと尻を落として座ると、握っていた片手を彼の前に拡げて見せた。

輪になった、金色のピアスだった。カケルの耳にあるのと同じものようだった。

「これが？」

カケルは、イブの表情を伺う。「冗談を言っているような顔ではない、どこかおもしろい詰めたような目が怖い。わざと明るく言ってみる。」「これが、何？ ナカマの証なのか？」

一言も発しないままで、彼女は自分の耳にピアスをつけはじめた。

目はまっすぐカケルの顔をみつめている。ピアスの金具がすっかり留まると、身体に巻きつけたバスタオルをはらりと解いて、彼女はつぶやいた。

「あれのをゆけ」

カケルはその目に吸い込まれるよう、じっと彼女をみつめた。黒目がちの大きな瞳、白目は相変わらず、あおく、澄んでいる……いや、違う、琥珀色だ。

気がつくとも目の前に大きな狼が座っていた。

ピアスをつけて外を歩くと、どんな天気の時にもなぜか風の音が聴こえてくる。左耳にだけ、なぜかかすかに風を切る寂しげな音がひゅうひゅうと響くのだ。歩く速度を落とすと、その音は大気に溶け込むように消えてしまう。

オレは生業しごになると、まずピアスをつける。もちろん、家族の前ではしない。「ねえそう兄、その耳の穴はなに？」と目ざとい子どもに指摘されたので耳に穴を開けたんだ、とは話をしたことはあったが、えっ、ピアスをするの？ と姉から問われていいや、しようかと思っただけどオレ、金属アレルギーだったみたい、と言いつつ、だよねえ、似合わないよ、と軽く笑い飛ばされた。母はその時、ぎょつとしたように目をむいて俺をみた。茶碗に目を落とした時には平静的な顔に戻っていたが、「いやだねえ」と吐き捨てるようにそうつばやくと、それ以上のことは言わなかった。

ピアスをつけただけでは、狼にはならない。あの言葉を言わない限りは。

だからいつでも好きな時に狼になりたいヤツは、ずっとピアスをしていればいいことになる。ことばさえ呟けば、いつでもあの姿になれるから。

でもオレはいやだ。

最初にキスしたのは、においを確かめるため、イブは涼しい顔でそう言い切った。

なぜ後ろ向きで？ そんな……（彼女は少しだけ頬を染める）面

と向かってなんて、どうやってらできるの？ 私たち、狼なんだよ、そんな恥ずかしいことできないでしょ？

じゃあ本当は、オレのこと好きとか、そういうことじゃなくてただ単に狼だったから……

続けようとする言葉を優しく押しとどめ、イブは上目をつかってカケルの目を覗きこむ。

話さなくても通じあえた。心がきこえる。

最初に見たときから、ずっと好きだったんだよ、一年の入学式の時、落としたプリント拾ってくれたよね、体育館で。ほい、って。手が触ったんだよ、それも知らなかったの？

歩を進めるたびに、ピアスは耳に風のうたをきかせる。

聴こえない彼女の声のように。ずっと、好きだったんだよ。

変わり身

初めて狼となった時のことを思い出すと、何だかカケルは可笑しくなる。

ピアスを開けて、いや、開けられてほどなく、朝夕がそれでも涼しくなってきたかな、という秋の入り口の頃だった。

自他ともに認める小心者のカケルは、試すとしたらそりゃあ自室でしかも保護者同伴、と決めていたので、もちろんそこにはイブがついていた。

「やってみて」腕組みしたまま、イブが目の前に立っている。

「え……どうやって」

「こないだ教えた」

「でさ、ニンゲンに戻るの」

イブは、いいトコロに気づいたね、みたいな笑みを浮かべて

「ノウハウなんだね、そこは」結局答えになっていない。

人間に戻るのに特に決められたやり方はないらしい、実際、狼になる時だって曠野うんぬんはひとつの手法でしかない、と。とにかく、やってみたら？ と簡単に言う。

何となく、姉貴を思い出すんだよなその言い方。カケルはブツブツ言いながら四つん這いになる。まだ服をつけていなかったの何となく居心地は悪い。そのことを訴えるとイブは

「お尻がさみしいの？ 何となく風が抜けてくみたいで」でもさ、とつけ加える。

「なつてしまえば、案外気にならないよ。それに、服着てる狼なんていると思う？」

確かにそうだ。愛玩犬ならともかく、狼に服はないだろう。どこ

かの局のペット礼賛番組じゃあないんだから。カケルはいったん床についた自分の両手に目をおとし、それから小声で「あれのをゆけ」と唱えた。それから、と付けようとしたのかな、自分で訳が分からないまま首をかしげる。

傾げた頭が急に、軽くなった。何だろう、前のめりな感じだ。腕に力が満ちる、というか太ももにも、むずがゆいような緩慢さで力が溜まっていくのがわかる。体中が熱い、アキレス腱がぴんと張り詰め、足先も軽い、何だろう、全体的に伸びた感触がある、うーんと更に背伸びしたい気分だ、既に秋の気配を感じる風がカーテン越しにするりと入る、窓が閉まってなかったのか、ほんのわずかに開いたままの隙間から入る外気に、鼻が反応した。今更気づいたが部屋の中は罪深いほど匂いが充満している。数百万種はあるだろう、優に。ほこり、オーデコロン、イブの体臭、行為の名残香、蚊取りマットの危険な甘い匂い、パソコンの基盤、洗面台からの塩素と歯磨き粉と排水の匂いのミックス、敷居に溜まったゴミ、落ちた髪、カーペットのケバ、積み重ねた紙とファイルのビニル臭、本棚のステイール、何なんだこの強烈な匂いの渦は。また、風が隙間から吹き込んだ。あつ、樹が呼んでいる、岩が、水が、街の喧騒は更に胸の悪くなるような悪臭に満ちてはいたが、それでも外気の魅力には勝てなかった。確固たる意思にも似た峻厳なる香りがその芯に存在している。存在は風に乗る、その風はなりたて狼の鼻づらをぐいと掴んだ、そのまま外に引きずり出そうとする。

夜の芳香。

前に出ようとした狼は、突然強い力で引き戻された。「だめ、外に出ちゃだめだよ」

狼は面くらって、自分の首っ玉にしがみついた白い腕を見おろす。つるりとした美しい腕、しかし発するオーラは、狼だった。

頭を上げると、そこにはぼんやりとしたモノクロの輪郭が現れた。相手の目だけがらんと光っているのが分かる。包み込むような匂い、俺に属するもの、そして、俺が属するもの。夜の匂いと同じように、それは十分に魅惑的だった。

舌先がその頬に触れた。ひんやりと冷たい、陶磁器を思わせる感覚。割れやすそうなその器はぶるつと震え、笑い声が聴こえた。「ねえ、舌べら出っぱなし、顔に触ってるってば」

しゃべっている意味が分からない、狼は更に舌で彼女の顔を撫でてみる。ことばのニュアンスは分かる、でも、初めて聞く外国語かものすごい方言のように、今の頭の中には何も繋ぎとめることができない。

なんだ？ どうしたっていうんだ。頭の中には言語ではない単なる疑問符じみた塊が本能の隙間を埋めていた。そして、

なぜかこみ上げる別の想い。

狼はのしかかるように目の前の白い身体に前脚をかけ、その顔と言わず身体と言わず、ずっと舐め続けた。「ばか、早く戻ってよ、頭悪過ぎ」身体はずっとくすくす笑いを発し続けていた。

一つだけ良かったこと、外に出ようという衝動はもうすっかり、無くなっていた。

優しい声、七色の光

イブに紹介されて会った男は、カケルに名刺を渡したがそれほどうもどこかで突き返されてまた名刺入れに仕舞い込んだうちの一枚のようだった。角が少し折れて、どこことなく薄汚れていた。

保険代理業 株式会社シエルティ 社長 向谷 民次

とあった。ムクヤ？ と聞くと

「ムカイヤ、です」

優しい声でそう応えてこちらに笑顔を向けた。

声も見た目も穏やかで優しい、なのにカケルは冷水を浴びせられたように身を震わせた。

イブもどことなく居心地の悪さを感じるのだろうか、やや俯きがちにして上着の裾を意味も無いじっている。

「これからお願いごとがある時には、電話を入れますので」

常にこういう口調なのだろう、誰に対しても。息を吐きながらしゃべっているはずなのに、何か体中の力が吸い込まれていくような錯覚に陥る。

事務所は古いビルの最上階にあった。最上階といっても4階建てなのでたかが知れている。それでも窓から、地方都市らしい錆びれたようなのかな景色が広がっている。左の方にみえる山は、浅間神社だろうか、古い森の香りが隙間から入り込んでくる。あんなに街に近いのに、深い森。つい目が行ってしまう。あの中を走り回ってみたらどんなだろう、カケルはよほど、窓を閉めて下さいと頼もうかと思って、向谷の襟元と外の風景を落ちつきなく交互に見やっ

た。
「携帯電話の番号とアドレスを教えて貰えるかな」

赤外線通信でいいかな、と彼はテーブルの上にあった電話を取り上げた。

つい最近、イブからやり方を教わったばかりなので、カケルはたどたどしい操作でどうかオーナー情報を画面に出して、『赤外線での送信』操作を選んだ。時々、イブに助けを求める目線を送り、イブも小声で「これ」とか「こつち」とか最小限度のことばで指示をだす。向谷に遠慮しているのか、あまり声を発したくないのか、ほとんど顔を上げず、目の前にまるで人がいないかのようなうだった。

向谷はそんなイブの様子にもいつころにお構いなし、といった風に穏やかな笑顔のまま携帯電話の赤外線端子をこちらに向けている。

軽やかな電子音と共に、向谷の携帯ディスプレイが七色に光った。

もう引き返せない。光を見た時の、正直な感想だった。そしてこのムカイヤという男。

この男とはいつか出あう運命だったのだろう、しかし今、出遭ってしまったことに激しく後悔している自分がある。オレ、まだ20歳になったばかりだ。こんな若い時からこんな人間と知り合うなんて、何かが間違っているのではないか。ということはイブと出遭ったのも間違っていたということなのか。いや、それはないと言いたい。イブは何と言うのか、そう『しつくり』きているんだ。高校三年の春、呼び付けられていきなりキスを求められた時から、なぜか『自分に合っている』という気がしている。すごく相手のことを意識している、あの時からずっと。なのに空気のように自然な存在だった。

それがどこからどうして、この男につながってしまったのだろうか？

やはり何か、自然の摂理と反したものがあるのではないのか。あ

の七色の光に感じた、わざとらしい作為が。

事務所の感じからして、入った時からずつと気に食わなかった。ドアがまずカーキ色で重い鉄製、はめ殺しのガラス窓はどんよりと白く曇っていた、刑務所のような、少なくとも役場みたいだ、しかも古臭い。事務所の中の空気も淀んでいた。こざっぱりと整理されたワンフロアではあったが、どことなく黴の匂いが染みついている。台所とかはないはずなのに（トイレすら事務所の外になっていて水回りは見当たらない）、つい何度も確認したくなる生温かい風が、ふとした時にすい、と漂ってきていた。それは、捨て忘れた生ゴミを思い出させた。

古びたビニル製のソファが原因なのか、かがんだフリをして匂いを確かめてみる、だが、ソファはただのビニル製品だった。テーブルも、出してもらった珈琲カップも少し冷めた珈琲も、向谷が座りなおした時に起きた軽い風も、これといって特徴のない匂いだった。そして甘ったるい何か。これが一番目立たないのだが、一番心の柔らかい部分に突き刺さってくる。不愉快なのだが、何度も確認したくなるという点では、生ゴミ臭に近い物がある。

それはまるで、目の前に座る男の声色をそのまま風に乗せたようだった、甘く、丁寧であるが、決して寄り添うことのない。常に様子を伺っている、ひやりとした丹念さ。

虫酸がはしる、このしゃべり方を早くやめてほしい、しかし……

彼のこの口調が急に変わるといふことがあるのだろうか。それは絶対に、聞きたくなかった。

カケルは、あたりさわりのない話題を口にしながらも、ずつと腕にまとわりつくような寒気にふるえていた。

貰い風呂の事情

お風呂もらうよー、それがいつもの母屋の連中への挨拶のひとつだった。

風呂くらいゆっくり浸かりたい、そう願いながらもカケルの住んでいる離れには風呂の設備はなかった。だからどうしても毎晩、母屋の風呂を借りざるを得ない。

母屋に住んでいる家族は全部で8人。お風呂はみな夕食後に入る、ということでもその時間の風呂は混むに決まっている。

母親は「カケルはぬるいのが好きだから、後でいいでしょ？ その後で私が入るから最後から二番目にすれば」と勝手に順番を割り振ってくれたので、夕飯から戻ってから再度、今ごろかな、と思う時間に母屋に顔を出す必要がある、毎晩。

子どもの都合や姉のダンナの帰宅時間によっても風呂に入れる時間が異なる、だから姉には「入れるって時間にケータイに連絡くれない？」と事あるごとに頼んではいたのだが、姉には「アタシだって忙しいんだから、適当に見に来てよ、遠くはないんだし」と軽くいなされてしまった。

上の子どもが思春期に入るにつれ、事情はもつと複雑になった。もうみんな風呂が終わっただろうと思う頃に母屋に覗きに行ってもまだ子どもが数人入らずにいる、ということが相次いだ。うん、このドラマ終わったら入るから、え？ そう兄、今から入るの？ えっと、あと10分で終わるんだけど、あ、それから髪の毛洗うから時間かかるかも、いいでしょ？

よくない、という返事はない。カケルはその都度だまって離れに戻る。

つい、飲む量も増えてきた。母屋での夕飯時には、晩酌はしない。義理の兄に遠慮している部分もあるし、晩酌をするとつい、ゆっくりしたくなるので酒はいつも離れに帰ってからにしている。

風呂の時間が遅くなるにつれて、飲む量も増えてきた。暑い時にはビール、寒くなると日本酒を熱燗で。ジンやウイスキーは好きなのだが、どうしてもコストのことを慮って4リットルの焼酎がメインとなる。つまみはたいがい、日中にコンビニで買っておく。乾き物でもいい。肉や魚はほとんど食べないので主に豆類やクラッカーが酒のあてとなる。

ムカイヤから依頼された仕事がある晩ですら、飲んでしまうようになった。さすがに軽く一杯程度で止めていたが、ある晩、気づいたら右手が勝手にお代わりをグラスに注いでいた。かなり気の利く部下みたいなヤローだな、おし、えらいぞ明日から主任にしてやる。と独りでつぶやいて右手を褒めてやった。

かなり飲んでしまっただけからよるめきながら母屋に向かうのは辛い。しかし、「今夜は入らない」と言おうものならば母親に「私が待ってるんだから、ちゃんと入ってよ」とプレッシャーを受ける。はつきりとそう言ってくればまだ分りやすいのに、

「私はまだ入らずにいたんだけどね」

という、持ってまわった言い方を。何ごとにつけても母親は回りくどい当てこすりとも取れる言いまわしをするので、いつもドタバタ暮らしていて気の短い姉にはそれが癪に障るらしい。母親にはやや甘いカケルでさえ、疲れが溜まっている時にはムツとすることうがあった。

ムツとするしないに関わらずそんな言い方をされるということ一つ取っても、風呂に入るといって、普通ならば日常の中でも心休まるいっときのはずが自分にはかなりの負担となっている。

今夜もカケルはすっかり酔っぱらった状態で、母屋に向かう。

「遅かったね、もうみんな入ったけど」姉はつつけんどんにそう言
つて、洗濯機に向き合う。脱ぐのは見られたくないなあ、しかも今
日に限って耳もみられたくない、と体をひねるように脱衣所に入っ
たが、姉は洗濯機のタイマーをセットして、こちらもロクに見ずに
また次の戦場へと立ち去った。

姉は「みんな入った」と言ったが母親はまだに決まっている。母
は決して、カケルより先に風呂には入らない。そう明言しているわ
けではないが、いつも態度で示している。母屋に行つて、姉が「み
んな」と言つたとしても、いつも母のことは数に入れていない。

姉は母親に対して、いつも否定的な見方しかしていない。それが
出来ない

場合は、完全なる無視。

自分が父親に感じるうすら寒いような隔絶感を、姉は母親に感じ
ているらしい。

父親と言えば、既に家族の数には含まれていない。認知症がひど
くなるにつれ、進んで風呂に入ることもなくなった。時おり起きて
くるにはくるが、時間もデタラメで、それがまた姉の負担になって
いる。しかし姉にとっては父親というのはどこか親愛なる存在らし
く、彼に対して非道く声を荒げたり、あからさまな無視をしたりと
いうのはカケルも見た事がなかった。

ツイッタ 文字列は壁に並ぶ

その晩も、それでもどうにかいつものようにカケルは風呂に入った。

これから出かけるには、少し飲み過ぎたかもしれない、今夜も文字列がみえるんだろうな、漠然とそんな予感を抱えながら彼は服を脱ぎ捨てていった。下着のシャツが耳の輪に引っかかり、一瞬だけ急に酔いが醒めた。

なんだオレ、けっこうダイジヨウブじゃん。風呂の戸を開ける時に取っ手をつかみ損ね、少しよろめく。

今夜は飲み過ぎだな、そう感じながらどっぴりと垢だらけのぬるい湯につかった。

このまま沈んでしまつかも知れない、それもいいかな、とどこかで感じている自分も上空15メートルくらいの場所にいたりする。

いかがでしょうか、ムカイヤさん、ボス、チーフ、ご主人様。このワタクシ、もう戦線離脱してもよろしいでありますか？ につこりとした顔が一瞬ちらつく、口は「NO」と動いたに違いないが。

その晩はツイッタ をやり過ぎていた、風呂場の白みがかつた壁に、ほの暗いツイッタ の文字列がずらりと隙間なく並んで見えていた。

最初にこれを見た時は、強烈だった。飲み過ぎて風呂の中で寝てしまい、沈みかけてはっと気づいた時、壁に何か虫のようなグレイの影が並んでいた。目を近づけてみると「おやあり」「返信」などと、何となく文字に見える。目を凝らせば凝らすほど文字はあいま

いになって何だか判らなくなる。しかしまた目を遠ざけると、全体的にはツイッタの文字列だと把握できる。初めてこの幻視を見た時には心底ぞつとした。とうとうオレも気が触れたか、と何度もその文字列を目で追いかけた。指で触れてみても、そのあり得ない文字列は消えなかった。2行ほどのラインらしいものがずつと繰り返し壁のパターンとなっているのがまた、狂気らしく思えた。幻影は風呂から上がり、心臓の鼓動がようやく落ちついた頃には自然に消えていた。

それから飲み過ぎて風呂に入る時、必ず幻視が訪れることに気づいた。なんだ、これは単なる現象のひとつなんだ、サイモンとガーファンクルの世界だな、ハロー、暗闇よわが友よ、まさしくこの文字列のことだ。

湯の中で、頭を預けている肩にひんやりと何かに触れる。姉には見られたくないと思った、ピアスだった。今夜は酔っぱらう前に、これをつけていた。

数日前に、向谷からの電話を受けていたから。

ねえヤマナシくん、今度の金曜日、真夜中でいいから出勤できるかな？ 資料はメールで送るね。あと、匂いのもとと速達で送るから、お願いします。

殺戮、の意味 01

殺戮 さつりく むごたらしく多くの人を殺すこと。【大量】

広辞苑 第四版 ほか

初めて複数の人間を殺すしごとの後、カケルは家に帰って落ちついてからまず、本棚の一番下にある重い辞書を出して頁をめくった。

辞書は昔、父親が使っていたものをそのまま譲り受けたもので、机上版とある。A4の大きさに丈が少し足りないくらいだが、厚さが半端でない。こんなものを机の上に置いたら邪魔で仕方ないだろう、と幼い頃から父の書齋をみてはよく思ったものだった。まあ、めつたに父の書齋など入ったことはなかったが、たまに呼ばれた時、目のやり場に困ると本棚の一番下に収まったこの辞書の背表紙を何となく眺めたりして、何かとやりすごしたものだ、苦言やら、小言やら、叱責やら。褒められたということは数えるほどしかなかった、それも気がつくと言教に変わることが多かったが。

20歳の時にムカイヤに会ってから、すでに12年近く経つ。それまでに殺した人間はどのくらいにのぼるのだろう。彼は日記もつけていなかったし、メモもいちいち取ってはいなかった。それにムカイヤから優しいげな声で「記録は残さないで置いて下さいね」と一度だけが注意を受けてから、その教えをきっちり守っていた。

俺がやったのが、サツリクということなのだろうか。

何度かその項目に目を通したが、意味がよく掴めなかった。

家に帰ってまずシャワーを浴びたいと思ったのだが、母屋はすっかり寝静まっていた。真つ暗な固まりが闇の中に更に黒々と沈んでいる。どこにも、複数の人間が息づいているという気配はない。

鍵は持っていたが、開けて入っていくのはためらわれた。

家族が起きてきたら何と言いついていいのかがためらいの原因ではない。

沈黙している人間が中にあるということ自体が、単純に怖かったからだ。

いや、人間が怖いというのは正確な言い方ではない。

彼が今夜かみ殺してきたのは8人。この家の中で静かな眠りについているのも8人、自分の家族と同じ人数だけ、今夜はこの世から消し去ってきたのだ。もしも天が彼に復讐を企てようというのなら、彼が闇に沈む館の中で見つけるのは、冷たくなった8つの屍なのではないだろうか。

いやそれは単なる自意識過剰な妄想でしかない。いくら自分の親しい人びとだからと言え、そんなオカルトじみた繋がりのある訳がない、カケルは昏い目で母屋を見やる。

ただ単に、怖いだけなのだ。生きているはずの人々がただひっそりと、その暗がりの中に横たわっているというその図が。ひたひたと音もなく、生命の時間を刻みながら。

すでに血糊が乾いて頬にこびりついているのが分かったが、彼は立ち止ったのも僅かな間、すぐに、足音を立てずに離れの方へ向かった。

血の匂いが、ずっと鼻にこびりついている。息を半端なところで止めて、それ以上のところは思い切り吸いこんだらいいのか、吐き出したらいいのか微妙に迷うその独特の甘い香り。右頬のこわばりを、彼は指で掻きとる。はらりと薄い固まりとなって血が剥がれ落ち、見えないところに消えた。場所もよく判らないまま、スニーカーの先で土を蹴り、落とした欠片を浅く埋めようとした。見えていないのでいい加減だったが、ほとんど習慣ともいえる動作だった。

自分の部屋に入ると、遮光カーテンをしつかりと閉ざし、明かりをつけて服を脱ぐ。

耳のピアスがひっかかって、少しだけ動作が止まる。首をかたむけて肩で襟の間を払ってから、白いTシャツをおそろおそろ上げていった。脱いでからそのシャツを目の前に払ってみる。顔をこすった時についた、赤黒い汚れが襟のふちにかすかについたくらいで、他に今夜の殺戮をものがたるような痕跡は何も残っていないかった。

水道の水で端を湿らせようと流しの脇にかかっていたタオルを外した。この水道はかなり古いので、軽くひねっただけで悲鳴を上げるかのような高い音が響き、水が勢いよく噴き出してくるため、いつも夜中に使う時にはかなり気を使ってミリ単位で蛇口を動かしていく。今も、慎重に手を動かしたつもりがやはり待ちかまえていたような水の束がどつと飛び出し、その勢いで古ぼけた蛇口が跳ね上がって見えた。ひいひいと泣いているような笑っているような音が水流の轟きの中で響き渡り、蛇口全体が水圧で上に押さえられながら震えている。ステンレスの流しから跳ね返る水に手をかざしながらわずかに蛇口を締め、ようやく音を最小限にまで抑えた。

瞬間湯沸かし器を使うともっとうるさい。毎回、どこかが小爆発を起こすので、冷たい水のまま我慢しながら、彼は流しに顔を突き出してこびりついた血を洗い落した。

とれないこびりつきがあると思い、強くこすったら思いのほか痛

んだ。脇に立てかけた、縁もない四角い鏡をのぞくと、左目の下、あごにかけて糸のような引っかき傷ができていた。最後の男を倒そうと跳びかかった時、シャープペンのようなものを逆手に持っていた彼に反撃されたのだった。急にひりひりと焼けるように傷が痛くなった。目に近い方が傷が深い。目玉を突き刺そうとあわてていたのかも知れない。それでも、一瞬の攻防はあつという間に決着がついた。彼は圧倒的な体重差で男にのしかかり、まず武器を持った右手首を噛みちぎり、それからいつものように喉笛にくらいついた。

皮膚がもろい、というのか筋肉じたいが柔らかい、というのかその男の首には齒ごたえがなかった。まるで初めてのキスの時のように。

顔を洗っていた手を止めた。

外で、何かがぶつかるような鈍い音。カケルはしばらく動きをためて次の何かを待った。

誰かいるのか？

カケルが身を固くして少しおいてから、丈の長い草が押し分けられて擦れあつかすかな音が続き、ぱきん、と細い枯れ枝が折れるのが聴こえた。

確かに、流しの前側、窓の外に何かがある。

彼はタオルの乾いた部分で顔を拭い、少し身をかがめるように出口に近づいた。

しばらくドアの内側で様子を伺っていたが、遠ざかる様子はなく、しかも音が長く止んだままだったので、まず入口脇に立てかけてあったきわめて頼りない太さの土間箒をしっかと掴み、意を決してドアを勢いよく開けた、そして半分ほどの位置で力をかけて止める、もう片手で箒をテニスラケットのように構えながら。

暗闇の中、ドアから漏れる黄色い光をわずかに浴びて立っていたのは父親だった。

「……」
「……」

お互い、黙って見つめ合う。ようやく、カケルが声を出した。

「……びっくりすんだよ、何、どうしたの」
「便所」

父親は遠くをみるように目をやって、カケルの挟まったドア全体をぼんやりと眺めていた。

「心臓が破裂するかと思った、夜中に外で急に音がするからさ」
「うっ」

父は、焦点の定まらない目線のまま、ようやく言葉をつないだ。

「ここはどこだ、カケル」

俺のことは分かるのか、少し口の中が苦くなり、カケルは頬を歪める。傷がひきつった。

「俺の部屋の入り口。離れだよ」

「どこの離れだ」

「うちのだよ」

「誰の家だ」

「……」父さんの、と口から出ずに「アンタのだよ」つい、強い口調になる。

「なことあるか」父が思いがけずムキになって反論してきたので、カケルは思わず目を見開いた。

「オレの、オレの家はここじゃあないぞ、コガネイだ」

「そりゃ、学生の頃だろう？」かつての父親の下宿先は確か、武蔵小金井だと聞いたことがあった。

「ここはヤマナシさんちの自宅だよ、ヤマナシ・ノブキチさんちだよ」

「誰だそれは」

「だからアンタだって」

「違うぞ、オレは違う」父はブルブルと震えている。こっぴどい怒り方は見たことがない。どちらかというと、子どもに近いのかもしれない。カケルは何と声をかけていいのか迷い、ふと父の足下をみる。靴下も履かず、はだしだった。

こっちに入れよ、と声をかけようとして思い出す。便所だ、って言ってたな、離れの脇に外付けのトイレはあるが、できれば使つてほしくない、どうしようか、少しの迷いが惜しまれた。肩に手をかけて少しだけドアの近くに寄せたとたん、足もとに飛沫が飛んできた。

父は立ったまま、小便を漏らしていた。みるみるうちに足もとに生ぬるい水たまりが広がるのがみえた。

「うわぁ」思わず気の抜けたような叫びをあげて、父の顔を見る。

彼は、今、自分の下半身に起っている異変にも無頓着なようすで、どこか遠くを眺めていた。小金井の方だろうか。

結局、そのまま父の肩を抱くようにして、カケルは母屋の玄関まで送っていった。

玄関は、父が出てきたからだろうが、当然のように鍵が開いていた。音を立てないように引き戸を父の入る幅だけ開けて中に押し込むように彼を押す。父は、いやがらせかと思うような小刻みな歩幅で玄関に入ってしまった。ようやく体が全て中に入ったという時、急に彼がふり向いた。

「カケル」

妙にはっきりした呼びかけだった。

「なに」

「オマエ……それは止めたがいい」

カケルは完全に凍りついた。オヤジ、何の話をしているんだ？

「それ、って、何だよ」

父は、答えずにまた小金井方面を眺めていた。

「ねえ」カケルの声が少し弱くなった。サンダル履きの足もとが冷たい。さつき、小便をひっかけられたのを急に思い出し、このまま風呂をもらって行くのかと心が揺らいだ。

「……父さん」ようやく普通に呼べた。「どういう意味なの、止めたがいい、って」

父は、黙ってそのまま廊下を上がって行った、そしてまっすぐ奥の自室へと消えていった。

カケルは引き戸をそっと閉め、ズボンのポケットから合い鍵を出

して慎重にロツクをかけた。この鍵も大きな音をたてるので、妙に肩に力が入った。

どっと疲れを感じながら離れに戻り、濡れタオルで足をよくぬぐって、それからようやく、辞書で調べてみたのだった。そして、しばらく考えてみた。

サツリク、の意味について。

あまりにも淡々と簡単に述べられた、その内容について。

頭の中に、理論展開を司るハムスターがずっと回し車をまわし続けていた、結局眠れたのは朝日の昇るほんの少し前だった。

靴下を穿いていなかっただけで負け

もう、うんざりなんだよ。俺に細かい用事を頼まないでくれ、そう言っただけでやることにした。

姉貴が色々用事を言いつけてくるせいで、近頃まともにハローワークにも顔を出していない、会社の面接だって、行きたいと思っても予定も組めないじゃないか、頼まれれば家族だからタクミの迎えにも行っただけでやらなきゃ、と思う、しかも、俺がどこかに入社して、そのとたん寮になったり、職場が遠くてまた独り暮らしを始めたら一体、どうするつもりなんだ。あまりにも俺に頼り過ぎるなよ、もちろんオヤジの介護も大変だろうし、我儘なオフク口の相手も忙しい中じゃあ苦痛になるだろう。でもさ、俺はオヤジを施設に入れるのは反対してないぜ、義兄さんが反対してるのは、家族に遠慮してるだけだよ。金のことは俺も早く就職して、何とか助けるから。前の会社でやってた財形も渡すからさ。

話したいことは、確かに頭の中にはまとまっていた。

庭でちょうど干しものを終えた姉に、ちょっと話がある、とカケルは呼び止めた。

「なに」

真顔でそう聞かれ、黙って答えを待つ恵の前に立った時、自分は相変わらずサンダルで素足だと気づいた。しかもおしゃれでも何でもないのだがズボン丈が微妙に短くて、くるぶしが剥き出しになっている。姉貴はちゃんと靴下を履いている。すごく詰まらないことだったが、そこからすでに負けてしまったような感覚だった。オレ

は敵の前に喉首をさらしている、そんな気がした。まずどこから話をしているのか急に言葉が喉の奥にひっかかってしまい、カケルは

「う……あ」

幼い頃を感じたのと同じような焦りに頭から抑えつけられ、意味もなく両手を振り回す。

「大事な話？」

そう聞かれると、ますます話しにくい。

どこか遠くの方で、サイレンの音が響いた。かなり遠い。しかし、天気の良いかいつまでもしつこく聴こえてくる。うーうーうーうーうーよくタイチがマネしている。

二人はなんとなく、サイレンに耳を澄ますような格好になった。しばらく聴いてから

「あれさ……」カケルは仕方なく、声を出した。

「パトカーかなあ」

「消防だよ、火事かレスキューじゃないの」

あっさりと恵が断定。

「そうか……」とりあえずのように付け足す。「近頃、あまり聞かないからな、サイレン」

アンタの話って一体何？ そう聞いて来るかと思っただけなら意外なことに、姉はカケルの顔をまともに目をやってこう言った。

「毎日、どこかで鳴ってるのよ、ああいうのは。アンタが気づいてないだけで」

返事を待たずに、そのまま彼女は空になったカゴを小脇に抱えて

母屋へと帰っていった。

頭の中には、ちゃんと収まっていたのだ、カケルはすでに消えてしまったサイレンの音をいつまでも頭の中に響かせながら、何度も自らに言い訳していた。

確かに、言いたいことはちゃんとあったのだ。外に出なかつただけで。

ただ、靴下を履いていなかったただけなんだ。

平和概念は幻想です、と。

リストラされた会社に、一人だけ、真剣にカケルのことを気にかけている上司がいた。

すでに50も半ばのその上司は、のつばでやせ形、しかしいつも少しばかり背を丸めたようななどちからというところら淋しい雰囲気を漂わせていた。眼鏡の奥の目はいつもどこか痛いのかというふうにしよぼつかせ、切れ者というイメージは全くなかった。

部長という立場上なのか、指摘が細かくてしかも少し性格も屈折していたせいか、まわりの部下からはずいぶん煙たがられていた。

しかしなぜか、カケルはそんな彼のことを嫌いにはなれなかった。考え過ぎるところが、自分に似ていたせいかもしれない。

しかも、部長の方でも気づいていたのか、それともカケルが自分に懐いていると思ったのか彼に対してはずいぶん、甘い感じではあった。

業務命令には比較的素直に従うカケルを、かなり重宝していた様子だった。

世間話もよく振ってきた。口の中でもごもごつぶやくように話しかけてくる部長は、他の部下に逃げられることが多く、正直カケルも苦手な気はあった。

それでも、どうしても嫌いにはなれなかった。

そんな部長が、ある日週報にこんなコメントを返してよこしたことがあった。

近所のビルでボヤ騒ぎがあった時、カケルはその時、週間コメントにこう書いた。

「いつもは平和なオフィス街でも、こんなカオスに陥ることがある

のに驚きました」

そのビルの1階からは黒い煙がもうもうとあがり、消防のサイレンはひっきりなしに鳴り響いていた。なのに、ボヤの出たオフィスの上階からは、何ごとが起こっているのかといった顔がいくつも覗いていたのだ。

まるで他人ごとのように。

部長はこうコメントしていた。

「この日本においてすら、平和という概念こそが単なる幻想に過ぎないので」

部長は、社長が代替わりした時に、とぼっちりをうけて左遷された。その一ヶ月後には『一身上の都合で』退職してしまった。

カケルもそれから数ヶ月もしないうちにリストラの余波で会社を退職していた。

サイレンが鳴るたびに、部長のコメントを思い出していた。

「平和という概念こそが単なる幻想に過ぎないのだと思います」

全く、その通りだ。カケルはその時になってようやく思い知る。

平和というものは、幻想に過ぎないのだ、と。

サイレンが鳴った時、恵が言っていたのも同じことだったのだ、多分。

ずっと気づいていなかったのは、自分の方だったんだ。

何に反抗すべきなのか、見失いそうだった。

ずっと後になって、また平和が幻想であるということ思い出した。

その時には、思い至って感慨にふけることすら既に、終わっていた。

何故ならば、幻想すら姿を消しかケルはまさにそのただ中にいたのだから、現実の中に。

今日こそ言ってやる

今日こそ言ってやる、昼下がりの狙いどき、恵は何も大きな用事はなさそうで、家から出たり入ったり、琢己のお迎えも今日はまだ頼まれていない、太一も幼稚園から帰っていない、今日は晴れているので家の近所まで先生に引率されてそろそろとやってくるのがいたい2時半近くだからまだわずかに余裕がある、今を逃して、いつ言ってやるんだ。

履歴書を書き終え、もう一度、アルバイト情報誌の記事をみつめる。

電話をしたら履歴書を持って4時に来てくれ、と言ってきた会社だった。そのつつけんどんとも言える返答もあってなんとなく気が進まないなあ、と思いつながら名を通った製薬会社の工場という安心感と、給料の良さと遠隔地勤務も希望できるというのが魅力で、カケルは思いきってそこを受けることに決めた。無事採用されれば、とりあえず慣れるまでその工場が職場となりそうだった。

よくよく情報誌の記事を読むと雇用先は派遣会社で、実際の面接場所は派遣会社の事務所のようだった。勤めようと思った会社のすぐ向かいにあるらしく、住所を一見した時には気づかなかった。

そちらの情報をもっと知りたかったのでネット検索で派遣会社名を調べたら、出てきた出てきた、とにかく、悪い噂には事欠かないところのようだった。匿名掲示板の専用スレには、地獄の果てまで続くようなスクロールダウンの中に、呪詛と底冷えのするような内容が悪の經典となって連なっていた。

それでもいい、カケルはしばらくその文字列をすごい勢いで天へと昇らせていたが、やがてウィンドウを閉じて、PCの電源も切っ

た。

ムカイヤに言われてやっている仕事に比べたら、はるかにニンゲ
ンらしいことができる。

「大切なお薬をつくる、やりがいのあるお仕事です」
少し大きめの活字が、そうカケルに告げていた。

カケルは鼻息も荒く、サンダルをつつかけた。テーブルの上には
履歴書を拡げたまま。

そして、母屋へと向かう。

母屋の玄関を開けようとした時、声が耳に飛び込んできた。声、
というより投げつけられた叫び。

「もう、うんざりなのよ」

カケルの足が止まった。なんだって？ それ、俺の今からの科白
だよ。

どこのどいつだ、俺の科白を取っちまったアホバカデベソのクソ
ヤローは。

姉がスリッパの足音も荒く父母の寝室から飛び出してきた。そち
らを見たまま更に言葉を投げる。

「いつまでも私ばかりを当てにしないで、ずっとずっとおんぶに抱
っこ、黙ってやるのが娘の仕事だなんて思ってるんでしょ、いい気
になつて」

奥の部屋を見据えながら廊下のまん中でそう吐き出し続ける姉を、
カケルは唾然としたまま眺めている。

突然、恵がこちらをふり向いた。涙が目じりから生まれようとし
ていた。口がへの時になっている、この顔はカケルが幼い頃、二回

ほどみたことがある。8歳も離れているので彼女が泣いたのはあまり見たことがなかったが、彼女が小学5年の時と中学1年の頃に、友人ともめたのか振られたのか、部活で先輩にいびられたのか濡れ衣を着せられたのか裏切られたのか、ともかくそんな、泣いてもいいだろうとしてみたいなことが原因でこんな顔をしていたことはあった。その時もカケルには、気まずいものを見てしまったという苦い思いしか残っていない。今も

「あ

恵が、きつ、となつて睨んだのでカケルはつい、一歩二歩、後退り。

「なによ

押しつぶされたような声で恵が聞いた。奥からは、物音ひとつしない。

「あの……」情けないことに、カケルはつばすら呑み込めない。

「あの……」恵がわずかに視線を外した瞬間をねらつて「何でもないよ、ちよつと出かけてくる、つて」

そうきびすを返そうとしたとたん、彼女が鋭く言った。

「タクミのお迎えは」

えっ、今日は頼まれてない、そう言おうと口を開けてふり返ったが、つい

「いつもの時間？」聞いてしまつ。恵は何も答えず、じつと彼をみていた。

「あのさ、俺4時に玉川町まで用事あるんだ」

「その前に何か用事あるの」

「いや……別に」

「じゃあ間に合うよね」

「ああ、うん」本当は微妙に間に合わないだろう。気が急いでいる時に限つてタクミは車からなかなか降りようとしないうし、またそん

な時に限って母屋には誰も彼を引き継いでくれる人間がない、間が悪い時にはそんなものなのだ、俺が面接にちゃんと間に合うように配慮してくれるよね？ 少なくとも3時35分には家を出たいんだ、ちゃんと着替えてね。しかしそれを伝える勇気はすでになかった。

お願いね、と低い声でようやく恵は付け足し、カケルは、うなだれて離れへと戻る。

履歴書は次の機会に使おう、結局、大切なお薬を作る仕事には自分に向いていないのかもしれない。

ようやく、言ってる

ようやく、言うことができた。タイミングがよかったのだろう、靴下も履いていた、恵も少し弱っているようだし、しかしカケルにだけは絶対君主のように何か命じる気が満々なのが目にみえているし、他の家族は姿がみえないし、まだ日も高い。ここで言わずしていつ、言えるのだろうか。

「もう、うんざりなんだよ」

できるだけ感情をこめずに、はっきりとそう発声する。

姉は、持っていたピンク色のマイバスケットを一旦下に置いて、顔だけこちらに上げた。

ピンク、というには語弊がある、何というんだ、お洒落な言葉が浮かばない……塩辛？　だめだ、そんなところで気が散っては負ける。カケルは慌てて意識を実務に引き戻す。

「俺さ、本気で仕事探したいんだ」既にひとつ、やっているのは口が裂けても言えないが。

それが現在のところ月の内にも1回あるかないかではあったが、確実に日々のひとり暮らしを賄うほどの実入りがある、という点も更に言うならば、母親が姉には内緒で、時々カケルに小遣いを渡していたということも。もちろん差し出されるたびにきっぱりと断っている、しかしなぜか結局、断り切れずに彼の懐に入ってしまったのはいたのだが。

それでも、人としてのプライドはあった。かつてはそれなりに社

会に出てそれなりの成果はあげていたのだ。同じこと　　普通の仕事を普通にこなす、それも外で　　を求めようとして何がいけないのか。

「だからさ、俺にもう家庭の用事をいちいち頼まないでくれ」

恵は無表情だった。

言っつてやったぞー！　カケルは心の中の海に向かって大声で叫んでいる、海にはなぜかイルカとか人魚とかウミガメとか乙姫さまとかタコとかがぶかぶかと浮かんで、叫ぶ彼に声援を送っている。

カケルは幼い頃からなぜか海の生き物たちが大好きだった。テレビや絵本でも海中の様子を描くものは夢中になって見たし、長じては海中生物の写真集まで買いあさった時期もあった。

姉に逆らうということはめったになかったが、小学3年の時にメグがうっかり落としていたラブ・レターを拾って中を盗み読みした時、いきなり頬をぶたれそうになって激しく抵抗したことがあった。「落としてあつた方が悪いんだ、こんな大事なもの、落としてあつた方が」その時、ちらつと海中の光景が浮かんだ。たまたま前の晩、テレビで見かけた、白いイルカが主人公に向かってこう励ますシーン。

「そうよ、あなたは全然悪くない。もっと言っつておやりなさい、強く」

それに励まされてカケルは言いつのる。

「大事だと思っつてなかつたんだらう、ホントは。だから落としたりするんだ！」

なぜかその一言が決定打となったようで、恵は真っ赤になってくるりと踵を返し、その場から去っつていった。そしてその後、盗み読

みのことについては一度も口に出すことはなかった。

白いイルカと海中の生き物たちはその時から、カケルにとって『姉封じ』の大切なアイテムとして位置づけられていた。

頼む、俺を何とか奮い立たせてくれ。

カケルは音を立てないように軽く息を吸う、そしていったん溜める。

「姉貴、頼り過ぎなんだよ、いくら俺が失業者だからっていつて

ちよっと踏みこみ過ぎているかな、思いながらも言葉は止まらない。

「俺だって、いつまでも失業しているわけにはいかないんだ、失業保険だってもうとつくに切れてるし、もっと真剣に就職活動を、だから」

くどいかな。何か反撃されるか、しかしまだ、姉は無言のまま。

「あのさ」

急に、お互いの間に沈黙の風が流れる。

「話は、それだけ」

姉が感慨を込めずにそう言った。聞いた、というふうでもなく、かと言って断定でもない。

「ああ……」

まずいぞ、たった一言で流れが変わろうとしている。海の応援者たちは既に目の前から消えていた。

「うん」

まず、恵は肯定らしき返事。なぜだ？ 説得しているのに成果については何の期待もしていなかった彼は逆にぎょっとする。しかも、何に対して「うん」なのか？

「あのね、そうちゃん」

淡々とした声音のまま、恵はつけ加えた。ごく普通の口調、ごく普通のテンション。

「世の中には、アンタやアタシではどうにもならないことはあるのよ」

そうして、彼女はマイバスケットを抱え直し、母屋へと入っていった。

後には、荒涼たる心の海（支援者の姿ゼロ）を背負ったカケルひとり残して。

なぜだー！ー！ー！っ！！！！？？？

叫びははげしい向かい風に晒され、ちぎれ千切れに白い波がしらに散る。

どうして母屋まで追いかけていけない、俺？

動けない、ここで立ち止まってしまったら、あとは離れに引っこむしかない。

カケルは額を押さえ、敗因を検証する。やはりもつと、くどくどもいから説得すべきだったのか？ しかしメグの返答は何だ？ 論点、違いすぎやしないか？

多分俺は、カゴを持つ姉には永遠に敵わないのだろう、靴下じゃない、カゴが原因なのかも。

それとも……カケルは足をひきずりながら自室へと戻る、ようやく自らの敗因を結論づけて。

狼なんだ、やっぱり俺は。それに気づいてしまったからいけないのかも知れない。

俺は狼だ。

上下関係には絶対に、逆らえないんだろうな。

犬に問う

ラブの前にしゃがみこんで、カケルは何度かお座り、と言ってみ
たが全然言うことをききそうもなかった。とにかく興奮している、
駆け寄ってきては彼の腕と言わず顔と言わず舐めるか噛むか、ある
いはその両方を同時にやろうとして、またすぐ身を翻して逃げるフ
リをしながら、また襲いかかってくる。いや、遊んで欲しいだけな
のだろうが。

「ラブ、おすわり」何度も空しく伝えながら、そうか、ご飯を先に
やらねば。とようやく気づく。

「ねえ、ラブ」

しっぽふりふり。

「……うまいか？」

ふりふり。

「お前、幸せ？」

これもふりふり。

「ところでさ……聞いてほしいことがあるんだけど」

これは無関心。

聞いてみたいことは山ほどあった。俺たちは同類なんだろう？

色々教えてほしいことがある、縄張りとか、本能のこととか。イブ
には結局、詳しく聞けずに終わってしまったこと。

しかし、まずは簡単な質問から。

まずはオトモダチから、ってところか。カケルは少し考える。

「……俺のこと、好きか？」

これにはかなりな高反応。千切れんばかりに振られるしっぽ。

「すげえ、好きなんだ？」

少し、振り方が鈍くなったような気がして内心焦る。質問を変えよう。

「ラブはさ、家族の中で誰が一番好き？」

もちろん、答えはない。

「答えにくいか……じゃあ、一人ずつ聞くぞ。メグのことは好き？」
意外にも、しっぽをふりふり。ちえ、いつもエサやってるの、メグだからな。

「じゃあ、太一は？」

ふりふり。

「夏実は」

ふりふり。

「……琢己は？」

これも意外なほど、しっぽを振る。ほとんど接点がないはずなのに。

「晴樹は」

一応、ふりふり。

「圭吾は」うっ、義兄あにきを呼び捨てにしてしまった、ここだけの話だぞ。

ふりふり。

「ばあちゃんは？」

ふりふり。少し鈍いかな。ばあちゃんは犬には無関心だし、あまり表に出てこないからほとんど接点はない。

「じいちゃんは？」

ふりふり。もう、どうでもいいという振り方になっている。舌は懸命に空の皿を舐めている。

「お前さ……」カケルは半分、あきれたように言った。

「本当は、どうでもいいなんて思ってる？ 俺の質問なんて」

ふりふり。

「……明日、雨じゃなくてパンティー降ってくるらしいぜ、じよしこーせーの、知ってた？」

かなり大急ぎなふりふり。そうだ、コイツも女の子だったなあ、何聞いてるんだらう、俺。

結局、何にも聞いてないんだな、と妙に納得して、カケルは犬の前を離れる。

本当はもっと別のことを聞いてみたかったはずなのに、犬の明るいとも言えるいい加減さに結局、自分も振り回されただけという感じだった。

所詮、犬に相談してみようか、だなんて思ってしまった自分もどうかしている。

ちょうどご飯の終わったラブ、目の前にまだ『大好きな』カケルを認めて走り寄った。

だがそれにはもう目もくれず、カケルは自分の部屋へと戻って行った。

意思無き排除

無人航空機（UAV）、または交戦能力を持つUCAV）が開発されたのはかなり以前、発想そのものは第一次世界大戦中から、と言われているが、通称『ドローン』として一般の耳目に触れるようになったのはごく最近のことである。

軍事に特化した機器の主な特徴としては、遠隔操作による対象物の偵察・攻撃が行えるという点である……（中略）……もちろんのことドローンは操る側の意思によって行動規範が大きく異なってくる。

それらを制御する人間と属する組織がどのような意思、信条、方向性を抱いているかによって、何も意識を持つことのない、自らの判断力を単に演算で求めるのみの物体が、相手にとっていかなる存在となるのかが決定される……（中略）……

もしも、その無機質なドローンが遥か彼方、それらに向きあわされた我々のあずかり知らぬ所に存在する『意思』によって動かされているのならば、しかもその意思すら存在が証明できない、そして、それらが我々を排除しようと作動を始めたのならば、

我々はどう対処すべきなのか？

（『近未来における終末論』より 日下部孝行）

一連の出来事はほんのささいなことから始まった。

あとになつて、そもそも発端がそこにあつたのかと気づいた者も若干いたかも知れない。まだ、国内にSNSの類は空気のように存在していた、自由に言いたいことを言い合っていた時ですら、その関連性についてはあまり大っぴらに取り沙汰されることはなかった。

事態がのつぴきならぬところまで深みにはまつてからは、思い出す人間もわずかにはいたかも知れない。もし、彼らにそれだけの心の余裕があつたのならば。

意思無き襲撃、あるいは意思無き排除、そのような名前で呼ばれるようになる災厄がニュースで大きく取り上げられたのはまず中国からだった。

ある初夏の夜、四川省のどこか小さな村が、63人の村人とともに忽然と消えてしまった。朝、近隣の人びとがみたのは、村のあつた場所に広がる黒く煮融けたような地面のみ、なだらかな山の斜面に沿つて、あり得ない程の黒い色をしたじゅうたんが地を覆つていた。

もちろん草も木も一本たりとも残されていない。建物のあつたようすもない。村で一軒だけあつたはずの2階建てのコンクリート製の建造物でさえ、完全に消えていた。

村があつたという証拠は、どこにも残つていなかった。

中国政府は、原因については調査中、という短いコメントを発表したのみだった。

日本でまず目をひいたことから、それは中国の事件に先立つこと2か月前、高速道路のトンネル事故だった。

新東名高速道路上り線、浜松いなさジャンクション東側の五頭山（ついでに）トンネル出口付近で、急に停止したワンボックスカーに後続の車（車）が

次々と衝突。タンクローリーが追突した直後に爆発が起こり、死者4名、重軽傷者8名を出す惨事となった。

事故自体が大きく、火災も発生したため2日は完全な通行止めが続き、その間にもその後にも徹底した事故調査が行われた。

急に停止した車では、運転手の男性と助手席に乗っていた女性の双方とも死亡、後ろの席にいた子ども2人は幸いにも軽傷だった。小学校にあがったばかりの上の子が、病院で警察にこう答えていた。

どうろに穴がある、とパパが言ったの、黒くて大きな穴。みたよ、ぼくも。どうろからかべのほうにまだ穴がなくなってた、水たまりだったかもしれない、光っていたから。赤い光もみえた。パパはどなって、ふせるバカ、座席の下に、って。シートベルトがはずれなかったんだよ、でも。

穴を避けようと、ハンドルを切りながらブレーキを思い切り踏んだらしい。運の悪い事にたまたま道は少し混んでいた。後続の車はそれをよけきれず、次々とぶつかっていった。しかし

「道路に穴？ 気がつきませんでした」すぐ後ろからぶつかったビジネスマンは、ムチうちのカラーも痛々しい姿ではあったが、はっきりとそう証言した。

「路面は綺麗でしたよ、私が見ていた限りでは。前のセレナがいきなりまん中の車線から大きく左車線にカーブしながら突っ込んで来たんです、急ブレーキで」

その時は、ただの事故だと思われていた。

諭吉に会った日 01

メール着信音。カケルは、思わずちつと舌打ちして、それから誰も見ていないのに顔を赤らめて携帯を取り上げた。

また、アイツからだ。

今ヒマ？

イライラしながらも、ついキーを押す。早く答えてしまわないと、次のメールが追いかけてくる、コイツの場合はいつもそうだった。レス遅いね、とか。

今、暇じゃない

30秒もしないうちにまたメール。

何してる？ ウチにいるの？

なんだっていいだろう、携帯に向かって小声で毒づきながらまた返事を入れる。

いるけど何か用？

忙しいんだ？

まるで馬鹿にしたような声まで聞こえる。へええ、忙しいんだ、平日の今ごろ家にいるのに？ なっしー、家で一体何してるワケさ。

中学の、更に不本意ではあったが高校でも同級生、兼子かねこ原諭吉は

近くの食品加工会社で働いていた。主にうどん玉を作る会社で、パートのおばちゃんが多い中、正社員としてライン管理を担当している。

こないだも、すごかったぜ。メールでは書き切れなかったと見えて、夜中に電話がきたことがあった。

出てからカケルは後悔した。

おばちゃんらがさ、ケンカになって。こないだ話したろ、フクイさん、つう55歳の古株と34歳の新人の女の子、つうかこっちもおばちゃんんだけど、この二人が派閥に分れちゃってさ、34の方には？2がついてるからさ、ほら、気のキツイ尖った目つきの、つて前に言つたら、前原まりも、48のくせにマリモ、だつてびっくりだよな、独身だし、処女だぜきつと。そいつらが急に大声で怒鳴り合つちまつて、ラインに流れてたうどん玉、掴んでバシバシ投げ合つてたんだぜもう止めるヒマもなくて、うどんが飛び交つてんだ、工場内を、玉がね。ぴよん、と端っこがしっばみたいに出たり、ほどけかけたり、もう大笑いだよ、え、もちろんその場で笑える訳ねえだろ、でもさ、妙にシニールで。ところでさ、今度の日曜家にいるのか。

延々と続くかと思われた。2時間近くダラダラと会話に付きあわされて（途中で便所に行きたい、と再三再四言葉を挟んだが、相手はあまり聞いてはいなかった、とうとう、カケルの言っている意味が分かつたらしく「じゃあ」と言ったのでほつとすると「5分後にかけ直す」と言いだした。さすがにそれはハッキリと断った）、電話がようやく終わった時には、耳の上側がじんじんと痺れていた。

しかもその後、話の続きとしてメールも届いていた。

さすがにそれは無視して、カケルは翌朝まで連絡をしないで寝に入った。

朝起きて携帯をみると、メールは1件だけだったので少しほっとする。

しかし、開けてみて「なんじゃこりゃ」思わず大声が出た。巻物のような文面が、スクロールを繰り返しても長々と続いていた。

その朝もカケルはどうしようかと少し迷ったが、返信をこう打った。

何かとね。お前は今日休み？

すぐに返信がきた。待ってましたといわんばかりに。

会社くびになった

はああ？ マジかよ。何と答えていいのか判らず、とりあえず洗濯ものを干すために外に出る。

わずかな干し物が終わって部屋に入ってみると、携帯のイルミネーションライトが激しく点滅していた。バイブ音が連続して響き、携帯はきもち浮き上がるような振動をみせて、かすかに前進を企てている。

いそいで電話をとると、案の定

「ここにやちわ」

いつのギャグだか分からないような、しかも中途半端な明るさをこめたヤツの声がした。

結局、昼に会う事になってしまった。珍しく姉から何も用事を頼まれず、のびのびと過ごそうかと思っていたのに、そういう時に限って他の詰まらない用事が入る。

しかも会いたくない気分ばかりが先に立つ。サンダルで出てきてしまったのに気づき、のろのろとまた玄関まで戻って、スニーカーに置き替えた。

同類と思われているのが、癪にさわった。おいなっしー（その呼び方にも腹が立った、ヤマナシなのでなっしー、そんな呼び方をするのは諭吉だけだった）、オマエもくびになっただんだろう？ リストラだったんだろう？ オレもなんだ、あのさ、ハローワークですぐ金貰えるってホント？ 一回、説明会に出なきゃならねえんだよな。詳しく教えてくれない？ いいじゃんかよ、センパイ。あのさ、二トリの向かいにでっかいファミレスあるだろ、あそこでいいかな。昼飯一緒に喰おうぜ。12時に、え？ 忙しい？ 頼むよなっしー、色々話したいこともあるし。

色々話したいこと、そのことはを聞いただけで胃がずしんと落ち込んだ。それでももう腹はいっぱいだ、まあいい、ドリンクバーでも何でもあるだろう。珈琲でも飲んで適当に相槌をうっていればいいんだから、そう心に言い聞かせながら、カケルは車を走らせた。

南の空に、何か不思議と白い雲がみえた。遠景の下の端にまでかった、茫洋とした裾が霧のようにかすんでいる。海の上にかかっているのだろうか、あの雲の下は雨だろうか、それにしても白い。上の方は硬質な塊のようにもみえる。つい目が行きそうになる。道路に目を戻しながら、そのうちに車が混んできた頃にはその雲のことはすっかり忘れ果てていた。

カケルが珈琲を三杯飲み終え、カップを置いたたところで、諭吉が何の脈絡もなく言った。

「なっしー、オマエ、チャーリー・ブラウンに似てるよな」
「はあ？」

つい頭の上に手をやる。諭吉が笑って

「髪の話じゃないよ」

見かけからすると、丸顔にちいさな目、どことなくずんぐりした感じは諭吉の方がピーナツの登場人物に近い気がする。少し驚いた時に両手を前に持って行って身を引いたようなポーズをするのも、らしくみえる。それなのに

「オレが、似てる？」

ここに入ってからずっと、ガマンして彼の話を聞いていたカケルはつい大きな声を出した。

諭吉はハンバーグステーキの鉄皿を千切ったパンで丹念にぬぐいながら、「ああ」と応えて軽く肩をすくめた。それも何となくマンガのようにみえた。

「どこが、似てるって言うんだよ」

「え？」

パンが手から落ちたのをまた三本の指でつまみあげ、すでにじつとりとソースの浸みたパンで、皿に残った肉片まですくい取るうとしている。その作業に集中しているのか、諭吉のことばはやや滞りがちになった。

「その、なんとというか、おっと」

「フォークで刺せばいいのに」

「え、何を」

「パンをさ」

うんうんとうなずきながらも、諭吉はなおも指でこねるようにパンを皿に押し付けていた。

カケルはじつと様子をみながらおもう、昔からこんなところがあった。他人のいう事はあまり聞かない、自分のやり方に固執する。聞いているフリをして、その実何も考えていないヤツなんだよな。

カケルは自分のカップを脇に寄せる。相手の喰いつぶりを見ていただけで腹は一杯だった。

「似ているってのはさ」

ようやく納得したらしく、びたびたにソースの浸みたパンを口に
放り込み、ついでに指まで舐めてから諭吉が顔をあげた。

「何つうか……」口のはたに脂がついて光っている。

「負け具合、とでもいうのかな」

「まげぐあい」呆けたようにカケルは繰り返した。

「ああ」あっさりと諭吉がうなずく。ようやくパンを噛み下したのか、満足げな表情になって右手で腹をさすりながら、左手で脇のメロンソーダを取り上げる。

「まあさ……似てるって面ではスナフキンとか？ いや、違うな」自分で言っておいてまた否定。

「スナフキンには自己肯定感がある。オマエはさあ……ずっと試合に負け続けてる、ってイメージがあるんだよな」

二人は中学の時、ともに野球部に入っていた。確かに弱小チームだった。監督ですら

「勝とうと思わなくていい、ただ、最後まで試合をしるよ、精一杯」そんな中途半端なことしか言わなかった。別に誰も、怠けているわけではなかった。練習はコツコツまじめにやっていたはずなのに、試合当日にエースピッチャーがインフルエンザになったり、遠征バスが高速の渋滞に巻き込まれてようやく試合には間に合ったものの、チームのほとんどがひどい車酔いになって実力が出せなかったり、どちらかと言うと不幸な感じがつきまとうた。

誰が原因か、とは言わなかったがカケルは薄々、自分が絡んでいる時にアクシデントが多いような気がしていた。三回ほど発熱や家庭の事情で大事な合同練習や試合に出られないことがあったが、その時に限ってチームはいい成績を残すことができた。現に、彼らが入部するまではそこそこに実力があるチームだったし、カケルたちが卒業してからはまた、県大会に出場するまでになった。

「そんでさ」更に心の傷に塩を塗るような、しかも全然いじわるそうな口調でなく、ごく普通の話をしている風に諭吉が続ける。

「すっかりあきらめてる、っていう空気が漂ってるんだよ。最初から勝負しない、みたいな」

「そんなことはない」カケルの声は小さかった。

「……まあな、単なるイメージだから」

はあ、と諭吉はため息をつく。憐みのこもったものではない、ただ単に、腹が膨れたから出てしまった満足の吐息のようだった。

「そうだ」また身を起こす。「あれだよ、ルイージ」

カケルはいつの間にか身構えるように腕を組んでいた。「何だつて？ ルイージ？」

「そうそう、マリオの弟。兄貴にそっくりで、マリオの後から同じステージなぞつてさ、だいたいどこかでゲームオーバーになっちまう。兄貴が戦って敗れたら、仕方なく後に続くんだ。でも勝てる気はしねえ、コツコツと途中で細かいポイント稼いでさ、どっかでやられちまうんだ、飛んできたカメとか、ヘンな毒キノコとかにさ。それで後はしつかり者の兄貴が活躍してくれて、姫を助けてくれるんだ」

それで兄貴はその後県大会にまで進んだ、白抜きの画面文字が見えたような気もした。あつたな、そんなゲーム。母親が厳しくて家にはゲーム機などなかったが、多分、誰か友人の（そのうちのひとり）は諭吉だろう。家でほんのわずか、触らせて貰っていた記憶はある。しかしあの兄弟に力の差なんてあつたのだろうか、それすらカケルには分らない。

「まあ、気にすんなよ」散々言っておいて、諭吉は鷹揚に笑った。

笑った瞬間、派手なげっぷをしてそれがたまたま静まり返った店内に響いた。

背中に店内の視線を感じながら、カケルは組んでいた腕をほどき、身を起こした。もう帰ってもいいだろうか。

「あのだ……」伝票に手を伸ばすのを、諭吉は当然のように見守っ

ている。入ってきてすぐ「オレさ、今、金が全然ないんだ」と言っていたし、カケルは何も言わなかったものの、おごつてもらえると思っていたらしい。カケルはドリンクバーのみで、諭吉は煮込みハンバーグ定食に、ドリンクバーまでちゃんとつけていた。カケルに「なんだ、小食だなあ」と呆れたように突っ込みはしたものの、「悪いなあ、今日は、御馳走になるよ」の一言もなかった。

オマエ、ちゃんと自分の分は払えよ。

そう言ってやるう。俺のことは見くびり過ぎだぞ、諭吉。

その時、急に窓の外に白い光が押し寄せた。

店内の人びとはみな、魅せられたようにそちらを向いてそのまま固まった。窓の外の光は目を焼くほどではなく、じっとり湿ったようなつややかな白。それが一瞬で大気に満ちたかのように、風景をすべて消し去ろうとしていた。駐車場はまだ辛うじて見えていた。だがその向こう側の民家は、屋根のあたりがすでに消えている。

匂いがした。カケルは反射的に身を伏せてテーブルの下にもぐりこむ。カタカタと頭上の照明や食器が小刻みに鳴る音がした、と思つた時突然激しい揺れが襲つた。

悲鳴、ドリンクバーの機械や食器が倒れる音、物が割れる音が続けざまに聴こえたが、カケルは我が身を護るのに精いっぱい、身がかがめて頭を押さえていた。がんがんとテーブルの底面に指が当たる。縦揺れか横揺れかも分らない。悲鳴は更に響いていた。先ほどと同じ人間なのか、違う人間なのか、あれはヒメイ係の仕事です、頭の中のどうでもいいキャスター口調がそう冷静に告げた。ヒメイ係も、早くテーブルの下に入ればいいのに。それよりも本当は、店の外に飛び出せばいいのかも知れない。何人かは実際に、そうしたらしく叫び声とともにドアをばたん、と乱暴に開け閉めする音も耳に届く。

しかしあの光、あの中に出て行くのにも勇氣はいるだろう、しかしこれは一体何だ？

揺れは唐突に収まった。小刻みな震えは、脚からきているのか。まだ揺すられているような感覚が残ったまま、カケルはテーブルから這い出す。今更になって、何か大きな棚が倒れたようで、ずしんとどこかバックヤードで何かが響く。

「地震？」どこかでお互いに確認し合っている声がした。「だいじょうぶ？」「何だったの今は」「火は出てないよな」「ケガしてない？」辺りを見回すと、物が散乱している割に、人びとは無事だったようだった。カケルのようにテーブル下から這い出す姿もまだ何組があった。スタッフが厨房から数人、店内に走ってきた。

「お客様、恐れ入ります」店長だろうか、年輩の男性が大声を張り上げた。

「落ちついて、まず頭を何かで守っていただいてから、すみやかにこちら出口から外においでください。だいじょうぶです、今は収まっていますから。駐車場では他のお車に十分気をつけて」

誰かが財布を出そうとしたのを見たのか「今日はお代はけっこうです、とにかく外へ」と叫ぶ。「サエグサくん、誘導頼む」すぐ後ろにいた30代くらいの女性スタッフに声をかけ、自分はまたあたふたと厨房に戻った。

サエグサという女性は固い表情のまま、出口付近で人びとが集まってくるのを待っていた。奥の方にはもう入りたくないらしい。かちかちとまだ何かガラスのふれ合うような音が残っている中、客だった人たちは荷物を抱えて（文字通り抱えて）、明るい出口へと引き寄せられていった。気がついた時には電気はすべて消えていた。カケルも立ち上がって、ざっと一通りケガがないかを確かめてからふとテーブルに目を戻す。

諭吉はいなかった。木枠のついた鉄皿が辛うじてテーブルの隅に乗った状態で、残してあったニンジンの付け合わせは反対側に吹っ飛んで、踏みにじられていた。くしゃくしゃになった紙のランチシートに靴跡が残っている。あれほどソースを拭きとったはずなのに、皿を踏んだせいで、茶色い肉汁が横並びの薄い線となって、つま先の形に紙に記されていた。

アイツ、案外おしゃれなクツ履いてたんだな。カケルは外を眺めてみたが、諭吉の姿はどこにも見えなかった。揺れと同時にあわててテーブルに飛び乗って、そのまま出口に吹っ飛んでいったのだろ
う。

出入り口のすぐ外側、駐車場にかけて黒い煮融けたような染みが3か所ほどできていた。誰もがそこを大きく避けて通る。タールが融けたのか、というような感じで、わずかに地面にへこみができている。カケルが通りかかったくぼみには、わずかに虹色の溜まりができていた。ぶん、と今まで嗅いだことのない匂いがした。即座に嗅覚を遮断する。この匂いは駄目だ。

人びとは表まで出ると、あたりを見回して不安げな表情を浮かべた。明らかに、周りには特に何も変化がない。駐車場の車も、裏の民家の並びにも特に変化はない。一軒、二階の窓からいぶかしげにこちらの駐車場を見おろす若い女がいた。広い道路を挟んだ向かいの家具量販店にも、野次馬らしい人びとがこちらを向いて大勢、様子をつかがっている。交通誘導の制服まで、赤い誘導棒を中途半端に上げたまま、棒立ちになってこちらを向いていた。

誘導されて出てきた数組が、サエグサにそそくさと声をかけて車に戻っていった。サエグサはここまでの誘導は頼まれたものの、その後はどうしていいか聞いていなかったらしい、明らかにとまどった声を上げ、ここにいてください、と力なく繰り返していたが彼らを止めるまでには至らなかった。カケルもさりげなく、自分の車に戻りエンジンをかける。車には異常はないようだった。

ふと、諭吉はどんな車できていたのだろうか、と気になった。以前は車道楽で3年以内に好きな車に乗り換えていたようなヤツなのできつとまた、洒落た車に乗っているのだろうか、と一通り見渡したが、それらしい車は置いてなかった。店を飛び出してすぐ、車に乗って帰ってしまったんだ、その時はそう思った。

どこかからサイレンが聞こえたような気がして、カケルは少しだけ急いで駐車場を出る。国道側だと緊急車両に阻まれそうだな、と裏手の細い道への進路を選んだ。前の黒い大きな車に続き、彼も店を後にした。

諭吉、ちゃっかりしやがって。今度会ったら必ず言っただけからな。それとも、もう会いたくない、と電話かメールにするか。あんな奴、もう二度と見なくてもいい、ちらつとそんな考えが頭をよぎり、いやいや、それでも昔からの友だちなんだしな、と中途半端な同情心も湧く。俺が教科書忘れた時に何度か貸してくれたし、体操着まで。汗臭くてまいったけど、それでも少しは世話になった。二度と見なくていい、っていうのは言い過ぎだな。それにしても微妙に腹の立つ奴だ。

それにしても、何の騒ぎだったんだろう。

諭吉が完全に消えてしまったのを知ったのは、翌日のことだった。

失敗と罰 01

失敗した時にはどうなるか、考えたこともなかった。

というよりも、敢えて、意識の表面に持ってこなかったただけなのだが。

カケルは腹ばいのまま、敷布団の先にある畳の目をずっと見つめていた。

狼はターゲットを倒し損ねた。何故か判らない、その男に向き合った時、急に見つめ合う形になった。狼は低く頭を下げ、あと一息で飛びかかれる位置にいた。男はカケルより小柄なやせ形、黒っぽいセーターにカーキのチノパンで、白いシューズはナイキらしい、もしかしたらアディダスかもな、と、どこかの片隅で声が出たが飛びかかる時にはあまり関係ない、狼は声を無視した。

殺す理由は特に聞いていない。ただ、名前と年齢、そして匂いのついた野球帽が送られてきただけ。カケルはその匂いをかいで嗅覚のファイルにしまい、時を待った。

なぜ殺せなかったのだろう、カケルはまだズキズキ脈打つような脇腹を押えながらそっと寝がえりをうつ。脇から背中にかけて、ひどく痛む。すでに湿布は貼っていたが、それでも仰向けになることもできないくらい痛い。

男は、じつと黒い瞳で狼を見ていた。恐怖の針が振りきれてしま

ったのか、無表情とも言える顔だった。ただ、目だけは大きく見開いている。元々大きな眼なのだろう、まつ毛が長く、どこことなく少女のような儂さがあつた。彼は林の中、大きな樹を背負って立っていた。崖っぷち、匂いの強い幹は長い苔のような緑で覆われている。そこにびったりと張り付いているので、多分彼の服の背中には、緑色の染みができてしまっているだろう。それ以上喰い込めない、というほど彼は樹に身を寄せていた、そのまま幹の中に吸い込まれていたら、と考えているのか？

男は、カケルと同じ年だった。

いや、それは単なるデータの一つに過ぎない、殺せなかった理由ではない。

ならば、あの大樹が原因だったのか？ あの、強過ぎる匂いが。楠だったのだと思う、あの樹が殺意を削いだのか？

カケルはつい寝がえりをうち直し、あまりの痛みには悲鳴にならない悲鳴をあげる。

ばか、本当に俺は馬鹿だなあ、こっちは下にしてはいけないのに。

目じりに涙がにじむ。ずっと何度もなんども、あの時の状況が頭の中をよぎる。繰り返される光景、まなざし、そして仕打ち。

狼は一步下がった。枯れ葉がかすかに鳴って、目の前の男がびくっと肩を震わせる。飛び出してこようとする前触れか、彼はそれでも目をつぶることなく、じっとこちらを見つめている。

視線を反らしたのは狼のほうだった、下に。そして、そのままきびすを返し、月明かりで縁どりされた闇の中を帰っていく。

男がすぐに逃げ出したのか、それともあまりの衝撃でそのまましばらくそこに貼り付いていたのか、狼はもう確かめることもしなかった。

気がつくと、林道の脇、狼の目の前に誰かが立ちはだかっていた。

男は誘導棒のようなものを右手に握り、それを左の掌にゆっくりと打ちつけていた。音は出ていない、穏やかな叩き方だった。ただ、暇を持て余しているのも何となくやっているという動作にみえた。諭吉が消えた時に、向かいの店の駐車場に立っていた交通誘導をふと、思い出した。

狼は、自然と彼の前に歩み寄り、そこに座った。男は小太りで、どこにでもいそうなオジサンだった。あごの線が丸く、月の光だけでもどことなく哀しげな愛嬌のある顔がうかがえた。オジサンの前で、狼は頭を垂れて自分の胸元をみる。ご主人さま、すみません勝手に散歩に出てしまつて。傍からみたら主人より大きな飼い犬がしよげているようにしかみえないだろう。なぜか逆らえないという気だるいような思い。彼は棒の手元についたスイッチを入れた。かちりというかすかな音すら、虫の声しか響かないこの山の中では異質に響く。誘導棒だから光るのかな、と上目でみていた狼は突然のオゾンの匂いに身を固くした。棒の先から光が伸びる、あつ、ライトセーバーだ、本物だ、すげえなあ。となぜかカケルの声、思う間もなく棒が振り上げられ狼の背中と左脇を強打する。ぎゃをん、と狼は叫んで這いつくばる、耳は完全に寝てしまふ。更に一撃、ライトセーバーだと斬られてしまふのでは、と束の間思うがそれはまるで鉄の棒のように固くはげしく、狼の背にぶち当たる。なんども、何度も振り下ろされる。ゆっくりとしたリズムをもって。罰を与えている奴が決して逃げないのを知っているふうだった。彼は頭だけは守ろうと前足を上げる、いや、白々とした腕だった、いつの間にか人間に戻っていた。カケルは肘を曲げて手を引きつけるように頭をしっかりと覆った。コンクリートじみた荒れた路面が、裸の胸や腰に食い込む。

男は容赦なく棒を振り下ろし、彼に叩きつけた。その度に、月明かりの中で身体が跳ね上がる、8、9、10……狼の時よりもことばにならない叫びが夜のしじまを裂く。

決まりでもあるのだろうか、20回びつたりで殴打は止んだ。後には二人の荒い息づかいが残された。

また、かすかなスイッチの音、懲罰の終わりを告げたようだ。男はもこもことしたズボンのポケットから携帯電話を取り出し、不器用な手つきでいくつかボタンを押していた。カケルは、全身でその様子を伺っていた。背中と言わず腰と言わず、全身至るところがずきずきと脈打っている。何故、何なんだこの男は。いつからここにどうして失敗したって分かったんだ。誰だよアンタ。パニック映画だと一番最初にやられちまう一般市民みたいな顔してるクセに。外の騒ぎに気づいて牛井屋から走り出て様子を見ようと空を見上げた瞬間驚愕の表情、そしてぎゃーって悲鳴と共に暗転、そんな役柄ですみたくない顔して、何なんだよホント。それにケータイのボタン押すのに親指太すぎだろ？ それに何故俺は素っ裸のニンゲンになっちまったんだ？

「クリハラです、」情けない顔だと思った割に、声は爽やかだ。カケルは情けないうめき声を押さえながら、ざらついた舗装面に当たる身体の柔らかい部分をかばうように身を縮めた。

「はい、済みましたので帰ります」ごくろうさま、という返事を待つくらいの間をおいて、彼は電話をたたんでポケットに戻した。こちらを向いたようなのでまた何かされるかと思ひ、カケルは身構えた。と言っても、痛すぎてどのくらい構えられたのか、定かではない。狼でない時の自分は、まるでなっていない、そんなことは百も承知だった。それでも最低限の本能だけで、彼は身をすくませていた。「な……」に「ようやく声が出せた。」

乱れた前髪の間隙からのぞく男は相変わらず小太りで情けない雰
囲気を漂わせていた。どこかうらぶれた姿、しかし爽やかな声のク
リハラという男は何も声を発せず、しばらく彼を見おろしていたが、
やがて向きを変えて去っていった。

どこか少し離れたところで、車のエンジンがかかる音がした。や
がて、エンジン音は徐々に遠ざかっていった。

カケルはよろめきながら立ち上がる。

いつものように家の近くで狼に変わってからずっと走ってきたの
で、また狼に変わる必要がある。今は素っ裸だし、ひどいケガだ。
それでも血は出ていないようで、車が去ってからしばらくすると痛
みも徐々にではあったが、和らいできた。

カケルはとぼとぼと林道を下り始めた。そのままの姿で。

途中からはまた狼に変わったので、山あいの人けのない所を選んで全速力で走って帰った。しかし、一度だけ大きめのトラックが山を下ってきた時に路肩に飛んだ瞬間、狼の姿が解けて彼は思い切り草ぼうぼうの斜面に頭から突っ込んだ。二の腕の内側とこめかみの近くを尖った太い茎がかすった。また傷が増えたようだった。幸いにもすぐにまた狼に復帰して、傷を丁寧に舐めてから痛みを和らげ、その前と同じように走り出すことができた。

ほうぼうの体で、というのがびったりだらうか、帰宅した時にはすでに東の空がうつすらと闇を和らげて朝を迎える準備をしていた。夏至も近いせいで、4時半にもならないのにこんなに明るいななんて、カケルは腫れぼったい目で辺りを伺い、少し広い場所に出た。

幸運にも、恐ろしげな獣の姿も、こっぴどく素っ裸の姿も人目にさらすことなく彼は自宅すぐ前の広場にたどり着いた。

ゲートボール用に拓かれたかなり狭いスペースで、周りにそれぞれの家庭から持ち込まれたような古いパイプ椅子や木のベンチなどがぞんざいに並べられている。その更に隅に、鍵が無くなって扉も半分閉まっっていないようなプレハブの物置が置かれている。イナバ、とかヨドとか呼ばれる類だが、中にはほとんど物が入っておらず、真っ暗だった。いつもカケルはここで服を脱ぎ捨て、狼になるための呪文を唱える。帰ってくる時は狼のままここに入り、中で人間に戻る。

ようやくたどり着いた物置の戸口に手をかけた時は、しかしなぜか小屋の錆臭い匂いは鼻に届かなかった。それで気づく、既に人間の姿に戻っていた。四つん這いになっていたのを泥の中から這い出

すように立ち上がり、間違えてまた「あれのをゆけ」と声に出した。違う、もう狼なんてなりたくない、早く家に帰りたいだけだ。本当に俺はばかだなあ、そう続けざまにつぶやいて、まだ声が出ているのにほっとする。狼にはならず済んだ。

泣いているのか笑っているのか自分でも分からないような息づかいのまま、カケルは高い所に畳んで置いたトランクスを指にひっかける。腕を伸ばした時に殴られた脇の痛みがびりびりと全身を貫き、思わず、中の棚にしがみつく。棚は安定しておらず、半分外れかかって余計にカケルはよろめいてしまった。上に乗っていたランニングとシャツ、それにジーンズが落ち、何か重いものが脇の痛めた所に当たる。踏んだり蹴ったりだ。

ランニングは着ると脱げるかわからないので、とりあえず前開きのシャツを羽織るだけにして、ボタンははめずにおいた。ジーンズを穿くのも一苦労で、昨今の父親がみせる鈍い動作が笑えない状況だった。

丸めたランニングを痛む箇所当てて、隅に脱いであったサンダルをひっかけ、カケルは足を引きながら家へと向かった。

薄暗がりの中、離れの部屋の前に姉が立ちはだかっていた。

カケルの不良じみた姿に驚いたような目をしたが、頬のあたりに赤い傷が見えているのにすぐ気づき、組んでいた腕をほどいた。

「そうちゃん……どこ行ってたの」

「散歩。おはよう」

「夜中から待ってたのよ」

「どうした」

「どうした、はアンタでしょ。何があつたのよ」

「別に。なんで」

「その傷に、その格好……」上から下まで見回している。

「ケガしてるし、その歩き方……どっか痛い」眉間にしわを寄せたまま彼の元に寄る。

「いや痛くない、つてあつっ」急に伸びてきた手が脇腹に触れ、彼は跳び上がる。

「ちよつと転んで崖から落ちたんだよ、触るなよ」

「折れてない？ 何で崖から落ちた、つて」

「ジョギングしてたんだよ」

「夜中に、サンダルで？」理解できない、という目をしている。カケルだつて自分のことばに納得できていない。姉にうまく嘘などつけたためしがない。

「それよか、どうしたんだよこんな夜中に」逆に質問してみた。姉はまだ何か聞きたそうだったが優先順位一位を思い出したらしく、また、はっと目を見開いた。

「父さんが、窓から出てっちゃって……母さんすぐに気づかなかつたらしくて目が覚めた時にはもういなかった、つていうの」

「えっ」そこまでひどくなっていたのか、カケルは辺りに目をやった。

玄関から抜け出すことはしよつちゅうだったが、さすがに寢室の

窓から、というのは初めてだった。

「何時頃」

「気がついたのは2時過ぎだった。アンタのところにもケータイに電話したのに」

「ケータイは部屋だもん」

「こんな時だし、心配したわよ、ホントに」諭吉のことがかなりシヨックだったらしい。彼女は諭吉に対して常日頃からカケル以上に辛辣な講評をくわえていたが、それでもあんな形で行方不明になったのには彼女なりに心を痛めていたようだった。

「アンタまでどっかに行っちゃったのかと思って……」泣いている。カケルはあわてて

「だからジヨギングだって」言い方にも見た目にも説得力無く繰り返す。

「とにかく中に入れよ、車のキーも中だし、どうしたらいいか考えよう」

玄関の鍵を外のブロックの穴から出そうと手を入れた、だが、いつもの隠し場所には鍵がない。穴を間違えた？ カケルはわざわざ覗いてみたが、実際鍵がない。

もしかして、と思ってドアに手をかけると、蝶つがいが軽く軋み、ドアは外側に大きく開いた。

部屋の隅、敷きっぱなしになっていた布団の中で、父親がすやすやと眠っていた。

「オヤジ……」

おそろおそろカケルが近寄ると、ぷうんと小便の匂いが鼻をついた。やられてしまったようだ。

「オヤジ……」

「よかった」姉は、ずっと張りつめていたものが緩んだように、その場にへたりこんだ。

「よかねえよ」カケルは電気をつけ、すぐにもう一段回照度を落とすから部屋中、鍵を探してみた。見ていないようで、いつの機会かに父親は鍵の隠し場所も見ていたのだろう。先日、タンスからライターを出してみせた琢己と一緒に。どうでもいい事だけは、いつまでもしつかりと覚えている。

「そうちゃん、何してんの」姉の質問に珍しくイライラと

「鍵！」一言を投げつけてから、「ドア、開けてみりゃ良かったのに」これも珍しく強気に責めてみた。その罰か、急に脇腹が激しくうずき出した。涙のにじむ目で、あたりを見回す。「あった」鍵はじゃらじゃらしたチェーンや手足のとれた正体不明のマスコットと共に、部屋の隅に投げ出してあった。恵の子どもたちが旅行のたびに、そう兄お土産、キーホルダーだよ、と買ってきてくれるものを次つぎと付けていたので、いつも鬱陶しい位膏が多くてうんざりしていたが、この時に限ってそれがありがたかった。

ふと目をやると、その横にカケルのケータイも放り出してあった。開きっぱなしのものをみると、信じられないことにインターネットに繋がっていた。

しかも、どうやって探しあてたのか、「濡れ又レ熟女サイト」と表示されている。細かい文字が一丁前にけばけほしい。

「オヤジ……」

踏んだり蹴ったり、いや、逆なんだよ。踏まれたり蹴られたり、というのではないのだろうか、本当ならば、とカケルは思いながら痛みのにじむ涙を人差指で目じりにこすりつけた。

「ご飯を食べているラブの目前にしゃがみこんで膝をかかえ、カケルはじつとそれを見守っていた。

「いいよな、お前は」

カケルは下を向いたラブの頭に手を載せた。腕を伸ばしたとたん、脇腹がひきつれるように痛んだ、が、もうひるむほどのものではない。お構いなしにカケルは犬の頭を撫でる。

ラブは今日はあまりキゲンが良くないらしく低く唸りながら、それでも残飯をかつこんでいた。みそ汁とキャベツの芯とアジの開きの残った部分と固くなったご飯とがくつたりと煮込まれていて、特にご飯とキャベツとの絡み具合が絶妙で、魚の骨が嫌いなカケルですら横取りしたくなるような美味さにみえた。

白っぽい、少し巻き毛のはみ出した2歳半のメス犬はかなり丈夫で、こんな塩けの多いものでも平気で腹に収めている。飼い始めた頃はかなり慎重に缶づめやエサを選んでいた恵も、近頃では家族の残りをぞんざいにまぜて煮詰めては犬の餌にしている。

「お前には、苦労はないのかなあ」

カケルのことばに、ラブは少しだけ頭を上げ、彼の手を二回ほど舐めてからまたご飯の続きに戻った。

カケルはぼんやりと想像する。ラブがああクリハラという交通誘導員みたいな男に、ライトセーバーではんぱん打たれている様子を。

気分が悪くなってきた。なんか、それは許せないなあ、素直にそ

う思い、つい、ラブを撫でる手に力が入る。ラブはまた低く唸った。
コイツが打たれる姿には、我慢できないものがある。なのに……
自分の場合にはあまり怒りが沸かない。

「俺、きつとどっか壊れてんだな」

ちょうど食べ終わったラブに向かってそうつぶやく。ラブは名残
惜しそうにいつまでも皿を舐めていた。それからようやく、離れよ
うとした彼の手を舐めた。

「ねえソウちゃん」メグミは煙草の煙を吐き出すような口調だった。「何を悩んでいるのか、アタシには分らないけど」

カケルはずっと、離れの外、コンクリートで固められたポーチに呆然とした顔で座り込んでいる。

洗濯物を干し終えた恵が寄ってきて、いきなり話しかけた時も、どこか上の空で聞いていた。

「アンタの悩みも大きいだろうけど、誰だって同じ事なのよ」

人の生き死に関することを上回るような、そんな悩みというのがどこにでも転がっているというのが信じられず、うつろな目のまま、カケルは姉の顔を見た。

「アンタは、うちの子のことをどう思う」

いきなり尋ねられ、カケルは虚をつかれて目を見開いてから、ようやく聞き直した。

「……うちの子、って、タクミのこと？」

「タクミだけじゃなくて、ハルキもナツミも、タイチも含めてよ」

「……うん」何と答えていいのか、よく分らない。4人ものニンゲンについて一言でコメントを述べるというのはなかなか難しいものだから。

「そうだね、小さいときから見てるから、可愛いとおもっ」

「アタシはね」メグミの目はどこか遠くを見ていた。ちょうどそこから一番遠くに一本生えている木をみているような、憧れの混ざっ

た哀しげな目線だった。

「最初にハルキが生まれたときにさ、そりゃ大変だったのよ、全然出てこないから、って陣痛促進剤まで使って、それでも分娩台に乗ってから更に3時間近くよ、分る？ 分娩台って見た事ある？」

彼はのろのろと首を横に振る。話がどこにとんだのかよく分らなかったが、口を挟まず黙っていた。姉はなぜか自虐的な笑いを浮かべた。

タイチがやってきた。

「かあ」それしか言わずにプラ袋の小さな包みを母に差し出してみせる。シャボン玉のセットだった。

彼女はいつものことなのか、何も問わずにその包みを開けて、中に入っていた緑色のちいさな容器の蓋を開け、ついていたストローを差し込んで返してやった。タイチが嬉しそうに駆け出すところに「お庭でやりなさいね」

母親らしく、やさしい言い方で声をかける。返事はなかったものの、タイチはまるで呪文にかかったかのように敷地端でぴたりと足をとめ、それから道路のほうに向かってシャボン玉を飛ばし始めた。

姉がゆっくりとことばを継いだ。

「マタおっ 拵げでさ、お腹も背中もすんごい痛いのに、腰の骨なんて割れるかと思うくらい、しかもあそこまでバリバリと音がしてるかってくらい、あんまりにも力み過ぎて目の毛細血管がブチブチと切れるのよ、しかもさ、『まだいきまないで、はい、呼吸をふっふっはー』なんてオママゴトみたいなこと、横で言われるの、激痛でどこにも逃げられないのにさ、それにアタシみたいに股関節がうまく開かない体の固いやツに『はい、脚をパタンと開いてー』なんていうの、それもしょっちゅうね。息をすればいいのか脚を開けばい

いのか、叫べばいいのかももうよく分らない、出て来ようとするモノなんてどうでもいいから、一刻も早くアタシを楽にして頂戴、麻酔でも何でもかけて、意識のないうちに中身を出してよ、何ならばアタシごと殺してくれればいいのに、そう泣きわめいてやりたかった、とにかく痛くて苦しい、みんなやっていることだ、なんて言うけれどその苦痛は今現在、このアタシひとりに振りかかっているんだ、この痛みで狂いそうになっているのはこのアタシだけなんだ、そんな思いで、屈辱的なカツコウのままずっとそこに仰向けになつてるのよ、上に着ている服も腹の上までたくし上がって、おっぱいまで丸見え、搦んでいる脇の手すりはもう何人もの出産をぐぐり抜けてきたせいでもうグラグラ、ひときわ酷い痛みが襲ってきて叫んだときに、とうとう手すりが折れちゃったしね」

姉が苦しんでいる様子が、ちらつと目に浮かぶ。そんな苦痛を味わうくらいならば、確かに死んだ方がいいと思ってしまうのかもしれない。

「ようやく赤ちゃんの頭が見えてきましたよ、さあいきんで結構です、がんばりましょう、って言われてアタシは渾身の力であの子を押しだそうとした。ふんっ、ふんっってまるで酷い便秘の人がウンチ出すような感覚でしょうね、なりふり構わないのよ、もちろん、全部垂れ流しよ、助産師さんもわざわざ言うのよ、いいんですよ、ウンチ出してくださいね、全然オツケーですから、って。自分でも出ているの分らないのに、悲鳴も涙も、鼻水まで出ているのに自分では何も気がついていない……そんな時にふっ、と力が抜けた瞬間に『あっ』て小さな声でした。分娩担当の女医が、エイン切開というのをやるのよ、つまりね、大きな赤ん坊が出る時にアソコが破れてしまわないように、先にハサミで切るの、麻酔もなしで。ふつうはいきんでいる際によく切れるハサミを使うから、ほとんど気づかないんだけど、たまたまアタシの場合は、いきみの合間にハサミを入られた。じゃき、って音がして、張りつめてなかつた皮膚が切れる感触がした。信じられる？ 生の肉體、じゅうぶんに神経が通っている生身の身体を切るの、ハサミで」

カケルはかすかに身震いをした。

「どうにか生まれたのは、分娩台に乗ってから2時間半後。その前に陣痛室のベッドで生まれたい焦りとか促進剤をされた時の不安感とか抱えて、ずっと悪夢をみたような時間も含めて、まる一日近く嵐の中でほんろうされていたような気分だった。ほら、赤ちゃんですよ、って見せて貰った時、アタシはついにやった、結局勝ったのはこっちだ、そんな誇らしい気分だった」

少しことばが途切れ、カケルと姉は同じ方を眺めたまましばらく物語の余韻に浸っていた。

カケルがおそるおそる口をはさむ。

「……でも、そんな苦勞して生まれてきたんだし、見た瞬間可愛いと思っただらう」

姉は今度は笑わなかった。

「アタシはすべての感情がすり減っていたのよ、その時は。いいえ、ずっとそんな状態だったかもしれない。その子が真っ赤な体に何だか薄皮みたいな白い粉をふいて丸くなって元気に泣いている姿をみてね、すぐ感じたのは

なぜいつか死すべき者をこんなに苦勞して生んでしまったのだらう……って」

アタシは子どもを愛している、でも可愛いと思えたことは一度もないの。

ずっと可哀そうに、と思いつけている。そして、そんなふうにか思えない自分も。

「アタシはきつと、いつの日か子どもに殺されてしまつわ、これじや」

そう笑った時には、いつもの姉の顔に戻っていた。さあ、買い物行って来る、そう彼女はカケルの肩をぽん、と軽く叩いて母屋の方へ去っていった。

ふり向きざまにこう言っているのが聞こえる。

「タイチがさあ、道端に出ないように見ててくんない？ あの子夢

中になりすぎるとどンドン出ていっちゃうから」

カケルは凍えたように動けず、「うん」声は出たものの目だけでずっとシャボン玉を次つぎと飛ばしているタイチの姿をみつめていた。タイチは無心に、管を小瓶に突っ込んで空に向け、息を吹き込んでいる。大きなものを作るのに夢中なのか、その動作はどちらかというと宗教的におだやかな緩慢さを漂わせていた。かなり大きなものができるたびに、タイチはこちらを振り返り、どうだというように笑顔をみせる。カケルも同意するようにかすかに笑ってみせた。

姉のことばが、耳の中で鳴っていた。

長い夜 01 (前書き)

やや長いエピソードになりますがご了承ください

その晩もカケルはまず先にピアスをしてから、母屋の風呂に向かった。

面倒くさい仕事になりそうで、本当は行きたくないな、と思っている時はピアスの通りが悪いような気がする。自室の流しに立てかけた鏡をのぞきながら、少し苦勞してピアスを刺す。

母屋は全員揃っているようで、そこかはこの部屋に人の気配はあった。全体がお互いに無関心を装いつつ、仕切りの細かいひとつの函にバラバラに収まっているような感覚だった。

「お風呂、貰うよー」一応、扉の閉まった居間に向かって小さく声をかける。

カケルは何気なく脱衣所に入る。匂いがした。誰かの下着が置き去りになっているのに電気を付ける前に気づく。灯りをつけると案の定、染みだらけで、小便の匂いがつんと鼻をつく下着が足もとに丸めて脱ぎ散らかされているのを目にした。

カケルは目を細めて風呂場に目をやる。父親が珍しく風呂を使ったらしい。たまに、発作的に風呂に入ることがある。誰にも告げずに勝手に入るので、追いかけてきた家族からはその度に文句を言われる。今夜も誰かに文句を言われながら、それでも気にせず風呂に入ってしまったのだろうか、それにしても付き添っていた人間が下着くらい片付けてくれればよかったのに。

トランクスを履いたままだったが、先に蓋がちゃんとしてあるのか気になって風呂場を開けた、だがようやく気づいた。父親は黙って一人で、風呂に入ったのだ、誰にも告げず。そして誰も気づくことなく。

浴槽にながながと浮いている姿を、カケルは数秒見つめていた。

浴槽いっぱいには、うつ伏せに、その身体は浮かんでいた。この深さで、浮かんでいる、きつちりとその容積の中に収まったように。パッケージということばが頭に綺麗な字体で浮かび、カケルは何の感情も持たずにただその様子を眺めた。しかし数秒後にはやっと、感覚が状況に対応した。

「オヤジ！」あわてて浮かんだ背中を平手で叩く。「なにしてんだよ、起きろよ」ぴちゃぴちゃと張りのない音が浴室に響く。そうか、自分で起きるわけではない、それすら数秒遅れで気づき、彼はその身体の前に入力して、力を込めて引き上げる。ざばつと水を引き連れてバタフライ泳者の顔を貼りつかせた父を、勢いで浴槽のふちにひっかける。身体は固まっていた。表情も全く変わらない。紫になった口を開け、目は閉じていた。それでもひっつけたまま浴槽には落ちそうもなかった。カケルは助けを呼びに、脱衣所を飛び出した。

「メゲ！ 誰か来て！」

一拍置いて姉が母の部屋から出てきた。着替えを手伝ってやっていたらしい。「なに」不機嫌そうだがいつにないカケルの強い口調に、目には少しだけ警戒心を浮かべている。

「オヤジ、風呂に」それだけ言うとなすぐに気づいたのか、だつと駆けてきた。

浴槽に引つかかっていた父親をみたたん、すぐに廊下に引き返す。

「ケイちゃん！」二階の自室にいた夫に向かって鋭い声を投げる。

「すぐ来て！」返事を待たずに「ハルキ、いる？」今度は居間の引き戸を開けて中に向かって指示を飛ばす。

「おじいちゃん、風呂で溺れた。救急車呼んで、すぐ電話。なつちゃん、おばあちゃんの部屋から毛布取って来て、二枚、それを廊下に敷いて、玄関の近く。バスタオルも三枚くらい。それできたらタイチ連れて、居間かおばあちゃんの部屋に一緒にいてあげて。そうちゃんはケイちゃんと一緒に父さんをついで廊下に出して、心臓マッサージわかる？」

タクミが奇声を発して廊下に飛び出してきた。いつもと違う家庭内の雰囲気を感じたのか異様に興奮している。視線が定まらず、首を大きく振って壁に当たりながら廊下を走り回る。カケルの肩にどしんとぶつかり反動で向かいの壁に当たる。細かいちりが廊下に降った。

「タクちゃん！」恵の鋭い一声に、一瞬動作が止まった。

「おじいちゃんが、たいへんなの」急にしん、となった中、恵の聲が響く。

「タクミ、静かにテレビ観ている。トムとジェリー観ていいから」意味がとれたのか、それとも単にアニメのタイトルがすぐに耳に届いただけなのか、琢己は急に大人しくなって居間へと戻った。

ちょうど階下に姿をみせた恵の夫は、怪訝な表情をしていたものの、カケルの目配せにすぐ反応してすぐ状況を悟ったらしい。「風呂場？ わかった」

もしもし、救急です、はい、住所は……上ずったような晴樹の声が聴こえる。普段はヘラヘラして頼りにならない恵の長男も、こんな時だけはやはり高一という年相応にたくましく思える。母親の部屋に飛び込んでいった長女も小学4年とは思えないきびきびした口調で、毛布を出しておばあちゃん、と指示を出している。恵の口ぶりにそっくりだ、風呂場に戻りながらカケルは少しだけ可笑しくなった。

圭吾に脚を、自分は脇を持ってせーの、で父親を担ぎ出す。水がぼたぼたと落ちるのも気にせず、二人は廊下にすでに敷かれた毛布の上にその身体を置いた。夏実がすぐに、その下半身にバスタオルをかける。

太一がちよこちよこ居間から走り出してきた。「かあ、たくがね、とむとちえい、みてゆ」いっぱしの言いつけ魔だ、しかし、恵は「いいのよ今夜は」と、倒れている父親の姿が目に入らないうちに太一を居間に押し込んだ。「アンタもみていいから」

夏実が彼の肩を抱いて、居間に入る。「ねえねも見る、いっしょに見よ」

ちようど電話を切った晴樹が、廊下に出てくる。

「一分間に100回、心臓マッサージ、って分かる？ 救急車来るまでやってて、って」

圭吾が頭をかく。「職場で前に、習ったなあ」カケルをふり向いて「カケルくん、知ってる？」カケルはよく判らなかつたが「やってみよう」とりあえず父親の脇に膝をついた。

その間に恵は「救急車入れるようにしてくる」車のキーを持って、玄関を出ていった。

母親が怯えたような目で、自室から覗いていた。「お父さん、どうしたって」

「濡れた」カケルの一言にも、特に動じた様子もなく、彼女はそのまま部屋の入り口から成り行きを見守っていた。

圭吾とカケルは交代で父親の胸を押し続けた。はっはっ、と短く息をしながら乳頭の間のかぼみを、肘を曲げないようにぴんと腕を伸ばしたままで押す。リズムカルに、あまり強すぎないように、しかし力を入れて。頭では分かっているが、さすがに下に生身の人間がいるとなると、しかも何も動きがないと思うと行為自体が本当に正しいことなのか疑問に思えてくる。速さは間違っていないか、押さえ過ぎではないのか…… やっていることの意味さえもあやふやになっってくる。一度、嫌な手ごたえを感じたらしく圭吾が手を止めて泣きそうな目でカケルをみた。

「……折っちまったかも」

肋骨が鳴ったのだと言う。カケルは敢えて固い声で答えた。

「プロの人も言ってた、折れることもある、って。そのまま続けよう」

ほっとしたように短く息を吐いて、圭吾は先を続けた。

晴樹が心配そうに覗きにきた。

「替わろうか？」

本当はしたくない、と言いそうな目だった。それでもカケルは「うん、お願い」と場所を譲った。晴樹は自分の父親から小声で指示を受けながら、おそろおそろ倒れている人の胸に手をかける。始めてしまえば、ためらいはないように「一、二、いち、に、」とカウントをとりながら効率的に腕を動かしていた。圭吾が「お義父さんと耳元で呼びかける。」

「がんばって、すぐ救急車くるから」

「人工呼吸は……」自分の部屋から出ようとはせずに、母親が声をかける。晴樹は押しながら

「救急の人からは言われてない、とにかく、心臓マッサージしろ、って」

母親はまた黙って目だけこちらに向けていた。

何度目かの交代を経て、ようやくサイレンの音が近くなってきた。ピーポーという牧歌的にも思える音のすぐ後から消防のサイレンも続いている。太一がすぐに気づいて居間から飛び出してきた。

「ピーぽだ、ピーぽだ」

夏実が居間から出てきて、太一の肩をつかんだ。「ほら待って、カルピス飲も」

太一は、横たわる祖父をちらりと目にしたが特に何も言わず、そのまままた、居間へと戻った。居間の戸を開けた時、「ういっ」とひと声、琢己の叫びが聞こえた。それでも動かずに画面には集中しているらしい。

二つのサイレンは絡みあってすぐ近くまで来てからふつと闇に溶けるように音を消した。

少ししてから、別の声がいくつか呼びかけ合い、そのうちに恵の声が玄関に招く声が出た。取り澄ました感じではなく、いつもカケルに語りかけるような低い声音だった。

白っぽい不織布をはためかせて、二人の男がまず玄関から入ってきた、続けてもう一人、オレンジ色の上下の男。ヘルメットのまま、いかにも仕事にきました、という顔をしている。「どちらに」声を出してすぐ気づいたらしく、手っ取り早く自分らの靴に何かのカバーをかぶせて廊下へと上がってきた。

「後はこちらでやります。状況を説明してください」

カケルだけ残されたような形になった。一通り見たままの様子を話して聞かせると、今度はボードを持った人間が少し奥に立っていた圭吾に向かい、患者の氏名や生年月日を確認しようとした。圭吾はおびえた目で更に後ずさりして、玄関に立つ恵に「おい」と呼びかける。恵が低い声のまま、隊員の質問に答え始めた。

「最初に気づいたのが、8時50分で……」隊員が当然ともいえる

質問をする。

「おじいさんが風呂に入ったのは、何時何分頃ですか」

誰も、答えられなかった。ようやく、晴樹が「ばあちゃん、じいちゃんいつ、部屋を出て行ったんだよ」と奥の部屋に声をかけたが、母親は頑なな目をして「知らない、私あうつらうつらしてたから」拗ねたような言い方でそう応えた。結局、その前に風呂に入った恵と太一が8時少し前だったので、父親が入ったのはその後、少なくとも8時25分にはなっていただろうということに落ちついた。

「……そんなにわずかな時間で」圭吾がつぶやく。カケルはふと、耳のピアスに触れた。

家族の前で、付けっ放しだったが今は全く気にはならなかった。

彼らにはどうせ意味はないものだ。それにしても……

これにあんまり手間をかけていなかったら、もしかしたら助けられたのだろうか。

その間にも、隊員が二人がかりで心臓マッサージを繰り返していた。「持って来て、」もう1人たどりついた隊員に何か指示を出すと、既に用意してあったらしい機器を中に運び入れた。よく街なかにもあるAEDの類らしい。彼らはよどみない動作で寝ている男にパッドを貼り付け、機械のスイッチを入れた。

「少し離れて」そう言われなくても、家族は既に遠巻きに見守るだけだった。晴樹がずっと気にしていたのか

「人工呼吸は、試してません」おそろおそろそう口にした、が、隊員の一人が顔を上げてその声を確認してから、

「うん、だいじょうぶ。車の中にあるから、吸引器が」機器のモニタに目を戻しながらもそう答えてかすかにうなずいた。晴樹は自分も呼吸が止まっていたかのように、そこでようやく長い吐息をもらした。

「救急搬送します、誰か車と一緒に乗ってくれますか」ストレッチャーを運んできた隊員が、恵に向かってそう聞いてきた。

他の隊員から普段飲んでいる薬のことを聞かれていた恵は、台所

へと向かい、小さな薬箱を持って来たところだったが、その声でぴたり立ち止まる。「あの」私が乗って行きます、と口まで出かかったようだが、急に唇を震わせるように「そうちゃん」カケルに目をくれた。

「アタシ……タクミもタイチも……」その言葉に圭吾が弱々しく目を伏せる。普段からあまり子煩悩とは言えない彼は、いざという時子守りができない、それは家族全員がよく分かっていた。

母親が奥の部屋前に番人のように立っただま言った。

「カケル、父さんと行つといで」

どうせそうなると思った。カケルは「いいよ」吐き出す息とともにそう答え、脱衣所に戻る。

ランニングはいつの間にか着ていたが、下はトランクスのままだった。替えに持ってきていたＴシャツをかぶり、さつき脱いだばかりのジーンズに脚を通した。恵は少し目を落としたまま、それでも小ぶりのポストンバッグに父親の下着やバスタオル、保険証や病院の診察券がセットになった二つ折りのポーチを詰め込んだ。財布から数千円出してバッグと一緒にカケルに渡す時も、彼の目を見ずに「ありがとう、お願い」いつもとは違い、不明瞭な声でそうつぶやくように言った。

「行つてくるよ」

カケルは隊員たちが続いて外に出た。太一がまた、居間からのもいでカケルに問う。

「そうたん、ピーぽのりゆの？」

うん、そうだよと答え、後はふり向かずに車へと向かった。

オレンジ色の隊員がひとり、「こっちに乗りますか」と救急車の助手席から覗き、運転席に収まった男が「リュウジ、頼む」とかけた声を合図のように、颯爽と乗りこんできた。

ストレッチャの父親が無事に車内に収まってから、カケルは遠慮がちに後部ドアから上がり、左側のベンチに深く腰をかけ、父親の膝下あたりに手を添えた。

一人がどこかに連絡している。「はい、市立病院向かいます、時間はええと」後ろの父親に付いたオレンジの隊員に向かい「21時16分、でいいか、畜生」小声で聞きながら時計に目をやって毒づいた。どこかで時間を確認するのを忘れていたらしい。ふり向きながらカケルに「21時16分、搬送ということでもいいですね」と問うが、もとより異論のあるはずはない。カケルはぼんやりと父親の寝姿を見ながらうなずいた。

すぐにオレンジの隊員がカケルに声をかけた。「この場で点滴をやらせて頂きますがいいですか」こういう事にも家族の許可がいるのだろうか、カケルはこちらにも「はい」と短くうなずいた。まともな彼らの顔が見られなかった。なぜなら、父親はすでに誰がどう見ても息をしていなかったから。それは死んでいるということに他ならない。たくさんの死人を見ているカケルがそう思うのだから、これはほぼ間違いはないだろう。それなのに、彼らはまるで、少しでも急いで病院に運べば、そして搬送中にも十分に手を尽くせばこの人は息を吹き返すかもしれない、と心から信じているかのよう。全身全霊を込めて仕事に精を出しているのだ。市民の税金を惜しげもなく使い、持てる限りの知識と技術を駆使して、この、死人に向き合っている……死んではいない、という仮定のもとに。

「少し揺れるぞお」運転手が声を出しながらアクセルを踏む。車は

カケルもよく知った道を緩やかに速度を増しながら出発する。広い舗装道に出るのとはほぼ同時に、救急車のサイレン音が始まった。更に県道に出た時に「よし安定」という声とともに、「ルート確保します」とカケルの脇に立つ二人の内の一人が長いチューブを引きだした。脇の一人が「どうだ？」と問いかける、そこに少ししてから「逆流します、再度試します」と処置中の隊員がまた言った。そこに運転手が「前方50メートル、カドワキストア近辺揺れます」と事務的な口調で告げる。「了解」後ろも事務的に答えてから「吸引」言いながら別のチューブを引き寄せる。「開始」ズルズルと音がして「出ましたね、かなり出た」処置中の二人が会話しているのが耳に入る。カケルはずっと父親の膝もとと上のモニタとに交互に目をくれていた。彼らの姿すら見る事ができない。向うも、カケルのことを最大限の敬意を持って無視し続けてくれていた。たまに、「かかっている病気は？」とか手短な質問がくることはあったが、一応決まりだから一通り聞いてくれていたといった感じだった。「リュウジ、どうだルートとれたか」「もう一度やってみます」点滴はどうしてもうまくいかないらしい。それも、彼らは「もう無理だな」「駄目だ、また逆流する」などと絶対に否定的な言葉は使わず、「揺れなくなったらもう一度ね」「バイパス入る、少し待て」と前向きに試してくれている。

カケルは父の頭上にあるモニタに目をやった。少し前に、実はこんなふうに関急搬送につき合ったことがあったのを思い出した。あの時も、長く感じた。早く早く、とにかく一刻も早く運んでくれ、とこのモニタをずっと凝視していたのだ。その時の患者は、脈は乱れ、血圧も安定していなかった。今ようやく見て気づいたが、モニタは全く動いていなかった。父親には何も、モニタすべきデータがないのだとその時思い知った。彼らは、カケル以上に状況が分かっていたのだらう、しかし、できることはとにかくやるうとしてくれていた。

永遠の闇をようやく抜けて、車はすべるように病院の敷地に入っていた。サイレンが止み、車は普通のバンとなって、ゆっくりとバックで入り口につける。「はい到着しました」後ろのドアが開いて、隊員がカケルに声をかけた。

「入って右の、まず窓口に行ってからそこで待っていてください」
「ありがとうございます、カケルはバッグを抱え、邪魔にならないようにひっそりと、しかし素早く車から降りて救急窓口に向かう。

病院はしんと静まり返っていたが、その近辺だけは数組の救急患者やその家族が、時も忘れてそれぞれの事情の中に浸っていた。

受付の紙に住所などを書きながらカケルは、背中で父親のストレスチェアが救急処置室に運ばれていくのを聞いていた。

すでに、自分の手から離れたのだ、彼は。

茶色いビニル張りのベンチには、初老の夫婦が既に座っていたが、その右端に、彼は遠慮しつつも腰を下ろす。女の方が、じつところの耳元をみていた。彼が目をやると、さりげなく視線を外して手元に目を落とした。ピアスを見たのだろう。カケルは、かゆい振りをしてそつとピアスに触れた。そのまま来てしまった。今、あの言葉をつぶやいたらここにいる連中はさぞ、びっくりするだろうな。びっくりなんてもんじゃない。病院の職員も驚くかな。動物が院内に入ったと大騒ぎだろうか。衛生上問題がある、とかね。

そんなつまらないことを次つぎと思いつながら、カケルは両手で顔を覆い、中指で目がしらをこする。ムカイヤに電話をしておかねばならないのに思い至った。今夜は仕事に行けない、そう伝えねばならない。

ズボンのポケットに突っ込んであった携帯を取り出す。いつの間にか、不在着信が2件入っていた。ひとつは自宅の外線電話から、もうひとつは姉の携帯からだった。

メールもひとつ。姉から「着いたら連絡をお願いします」と。彼らは後から来るつもりなのだろうか？ 圭吾は飲んでるので運転はできないだろう、とすると、残りの組み合わせから考えても今夜ここに来られる家族は、他に考えられない。

どちらから先に連絡しようか、迷うのもつかの間、「ヤマナシノブキチさんのご家族の方は」と声がした。奥の処置室、長く続く廊下の途中から紫の作業着に身を包んだ看護師らしい女性が身を伸ばすように受付の方をみている。

「はい」立ち上がり、彼女に続いて通路を進む。出入り口から左にずつとのびる通路の、左側にはカーテンの間仕切りがみえ、4つか5つ、ベッドが並んでいるのが分かった。手前のひとつは空いていたが、父親は次のベッドに寝かされていた。足先が軽く開いてこちらを向いていた。カケルは、そのベッドのある場所、通路を挟んで反対側にあった診察室のような仕切りに案内された。すでに、医者が座って待っていた。

「ツキミサト・ノブキチさん……」と話し始めたので軽く遮って「ヤマナシ」と読むんです」医者のプライドを傷つけないように「……すみません読みづらくて」そう付け加える。

医者は、少しだけ目を上げて全然構わないんだが、といった鷹揚さを口の端にわずかに浮かべてから、「ヤマナシさん」それでも言いなおし、「息子さんですか」と尋ねた。

はい、と答えると、まず簡単に現在までの父親の状況と、風呂で溺れた時の様子を一問一答のように聞かれていった。一通り詳細を掴んだようで、ようやく彼は、カケルに説明を始めた。淡々とした口調だった。

お父様は自発呼吸もなく、血圧もゼロですが心臓はかすかに動いています、しかし心臓が動いているというのは痙攣的でありまして、

ここに電気で刺激を与えますと、少しは持ち直すのですがすぐに乱れてしまう、水を大量に飲んでまして、気管支の分れまで水が詰まっております、ここで思いきった処置をして呼吸器を付けたりすれば、もしかしたら呼吸も戻るかもしれませんが、ただ脳に長いこと酸素が行っておりませんでしたので、万が一呼吸が戻っても、元のように意識が戻ってはつきりとされるかは疑問です。もとより良くなるということは、まず考えられません、そこで今後どうされるかご相談なのですが。

オヤジを、殺してください。簡単にそう言えばどんなに楽だろうか。

お任せします、口の中でもごもごと言う。それとも、母や姉に相談しますと答えたほうがよかったのだろうか。そんな躊躇いがみえたのか、ご家族の方は他にはこちらには？ と聞かれてカケルは口ごもった。

考えてみたら、自分は正式に家族とは言えないのでは？

少し待合室でお待ち下さい、と医師に促されカケルは頭を下げてからその仕切りを出る、が、すぐに後ろから呼びとめられた。

「お父様に付いてもらえますか、あの」やはりもう見込みはなかったのか、最期を看取れ、ということらしい。カケルは看護師に続いて反対側のカーテンをくぐり、簡素なベッドサイドに寄り添った。今度はモニタに波形がみられた。しかし、医者がいうようにその鼓動はかすかで、時おり瞬間的に大きな波形を刻むが、痙攣という表現に相応しい動きだった。

「電気信号のようなもので、鼓動とは言えないのです」遅れて入ってきた医者が、モニタをみていたカケルにそう説明した。父親に目を戻すと、その顔は風呂から上げた時と全く変わる様子はなかった。すでに土気色となった皮膚からは、例え痙攣的にでも心臓が動いているという兆候はまるで読みとれない。

「よろしいですか？」 医師に問われ、カケルは目だけではない、と答えた。モニタが外され、医師が瞳孔を確認する。ピーという音と共に平坦な直線が目の前に現れる、というお終いではなかった。ただ単に見るのをやめただけ。「21時58分」時計を見上げ、それから寝ている姿に深く頭を下げてからカケルに向き直る。「ということでございます」と息でできた言葉が聴こえた気がした、それともご愁傷様です、と言ったのだろうか。彼らの習慣は全然分からない、それでもカケルも同じように頭を下げた。

長い夜 07

長い夜はいつこうに明ける気配がない。

人が亡くなつたからと言って、それで全てが終わるわけではないとカケルは改めて思い知る。遺された人がいる限り、そこには色々な瑣末事が付いて回る。

まず恵の携帯に電話。「9時58分だつて。死んだ、うん、分かつた。まだ帰れない」向うはいつもの口調に戻っていた。悪いけど今夜はこちらから誰も動けない。父さんを寝かせる部屋を用意しておくから葬儀屋さんにそこに行つて貰つてくれる？ 病院でも言うと思うけど、今夜中に誰かに連れて帰ってもらふことになると思うから。葬儀屋さん？ 当てがないわ、そこで聞いてみてくれる？ 多分私らよりは詳しいと思うから。

待合室脇の控え室で、看護師からも色々話を聞いた。死亡の原因が病気ではないか、一応脳と心臓のCT検査をするのだと。それから事故だとはつきりするように警察も入ります、と。警察と聞いてカケルはぶるつと身を震わせた。何故オレが警察と話なぞする羽目に？ そんな思いにお構いなく、江戸紫の制服に身を包んだ看護師は十分同情的ともいえる静けさのまま言葉を重ねている。

ようやく質問ができた。「今夜はすいぶんかかりますか？」看護師の目の色が更に同情を重ねた。「そうですね、少なくともあと2時間はかかるかと。検査も終えて、警察の方ともお話されてですから」今夜そのまま尋問があるのか、鳩尾から下半身にかけてきゅつと縮まつたような緊張を覚える。どうしよう、知られてしまったら、俺は逮捕されるのだろうか、何人も殺したのがばれて。それとも、発作的に狼に変わってしまった、その場で撃ち殺されるのか。今、一番死に近いのは父親ではなくて自分だ。父親はすでに人生の過酷な

レースから解放されているのだから。

動揺を隠しながら、それでも何とか看護師に葬儀屋のことを聞く。看護師は「お父様、どこかに掛け金とかされてました？」と逆に尋ねてきたが意味がよく判らなかつたので姉に聞いてみます、と答えた。看護師から、更に細かいことを聞かれて（帰る際に着せる服とか髭は剃っていいのか、とか）、また待合室でお待ち下さいと外に出されてから、急に脱力して壁に寄りかかるように座った。幼い男の子を抱いた若い父親が片隅に立っていた。足もとのベンチには崩れ落ちるように若い母親が伏せて座っていた。発熱したのだろうか。覗いている耳元が真っ赤だった。男の子はそんな母親の様子が気になる風でもなく、あたりを珍しげに眺め渡していた。反対側の隅には車いすの老婆が一人、ぼつねんと残されていた。3人ほど、作業着のままの中年男性が救急出入り口から駆け込むように入ってきた。救急車が一台到着する。

これが、この場所の普段の様子なのだろう。カケルはぼんやりと座ったまま、一部始終を眺めていた。

それでも、やることはやらねばならない。大儀そうに立ち上がり、人目につかない廊下の片隅でようやく、ムカイヤの番号を探して電話をかけてみた。

発信音がすぐに転送の音に切り替わり、ずっと鳴りっぱなしになつてから唐突な留守番電話サービスの音声に変わる。カケルはつかえながら、家庭で不幸があつて、今病院で、と話し始めた。そこにかち、と音がして「はい」優しい声が出た。

聞かなくて済むなら、聞きたくない声だった。しかしとにかく話だけはちゃんとしないと。

「父が亡くなりまして、突然。今、救急車で一緒に来て、先ほど息を引き取って」

ムカイヤは黙って聞いていた。優しい声でも何もしないのは、やはり不気味だった。

「すみませんが、今夜は仕事に出られません」

「そうか」いつもの優しいさのまま、ムカイヤが告げる。

「それはお気の毒です。仕事はまた、少し落ちついてからでいいから」

案外あっさりと了承される。その程度の命なのかとも一瞬思えたが、それでもありがとうございます、と電話に向かって頭を下げる。それから……と少し言い淀んでからカケルはできるだけ落ちついた口調を心がけて続けた。

「風呂で溺れたんですが、父が。あの……今から病院に警察が来て調書をとるそうで、僕がそれで」

「うん」優しい相槌がきこえる。

「その……一応お知らせしておいた方がいいかな、と」言うてはいけないことだったのか、しかし相談できるのは彼しかない。手が汗で滑る。

「もちろん、その」

「たいへんだね、警察まで来るんだね」全く気にしていないようだ。ムカイヤは労わるような口調だった。

「キミも大変だろうけど、力を落とさないように。何かあったらまた電話して下さい」

電話が切れた。ごく普通の会話だったと思うが、何だか見捨てられた、という感じが漂っている。それでも……とカケルは長く息を吐いてから携帯をシャツの端でぬぐう。

このまま、ヤツと縁が切れる、というのも十分魅力的かもな。

そんなことは絶対にはちよっと、楽しい内容だった。葬式の際に、息子軽く妄想するにはちよっと、と言って香典を持ってくるかな、ヤツはさんのかつての雇主です、と言って香典を持ってくるかな、ヤツは下らない想像だと思いながら、カケルはピアスを外してTシャツ

の胸ポケットにそつと、滑らせた。

恵に連絡を入れる。父が亡くなったことを近隣の親戚に伝えた際に、母親の妹が懇意にしている人が葬儀屋に勤めているから、聞いてやろうかと言ってくれたらしい。姉が葬儀屋に電話すると、病院まで遺体をひき取りに伺います、と話がついたというのでカケルもその電話番号を聞いた。

深夜遅くに関わらず、葬儀屋はすぐに電話に出た。事情を話すと、警察が帰ったら連絡をくれればすぐに伺います、あの病院ですと地階ですね、分りました、とすぐに了解していた。

電話をひとしきり終えてもとのベンチに座ろうとしたが、急にのどが渴いていたのに気づいた。

警察はまだ到着していないようだった。カケルはうす暗い廊下を本館のほうへ歩いて行って、自販機で冷たい缶コーヒーを買った。デミタスの微糖が美味いんだよねえ、と圭吾がよく言っていたので選んで買って見たが、一口飲んで今夜の気分には合わないとすぐに気づいた。いっそのこと、もつと甘いものでも良かったかもしれない、それがブラック。中途半端な甘さが口の中に残る。洗面台に空けてしまおうかと一瞬思ったが、量が少ないので我慢して飲み干した。

厄介払いをするがごとくに缶を捨てて元の場所に戻る。

かなり経ってから通路の向うから先ほどの看護師がストレッチャーを押して戻ってきた。毛布とシートできっちり包まれた父親を軽々と押している。CTからの帰りだろう、身体はきれいに覆われているが、青くなつた足先とまばらな白髪がふわふわと生える頭頂部だけがみえている。息のできる人はあんな包み方はすまい。周囲の人に配慮したのか、人物はみえないようにしてくれてはいるのだ

が、明らかに死人だと分かるところがなんとなく病院らしいとも言える。

看護師はカケルの姿をちらと認め、まずストレッチャーを処置室所定の場所まで戻してから、一人で出てきてカケルを呼ぶ。

「お髭、剃らせていただいていいんですよね」

そんな事も確認するんだ、とカケルが素直に驚くと、ちょうど出てきた医師も苦笑した。

「たまにダンディに残している方もいらっしやいますから」あのオヤジがダンディにまばらな髭を残していたのか、と思うと何となく可笑しくなつて、カケルもつい声を出して笑う。潔癖症とも言える人だったのに。最後の方には自分でカミソリすら持たなくて、介護の恵にかなりの負担をかけていた。庭で髭をあたらうとして泡を立ててから逃げられたり、近所の床屋に連れて行くつもりでもベッドから起きなかつたりと苦労は絶えなかつたようだ。そして、汚い髭面でよくあたりをウロウロしていた。今夜連れてきた時にも、かなりの無精髭が張り付いていた。

お支度できましたら、地階の霊安室にお連れします、警察の方も今、到着したそうです。もしご希望でしたら警察とはこちらの控室でもお話できますが下でも、どちらでも、と言われたので最終的に霊安室から遺体を運び出すのだと葬儀屋から聞いたばかりだったので、いいです、下で話を聞きます、とカケルは答えた。看護師が先に立つて、地階へ案内してくれることになった。

うす暗い病院内、非常口を示す緑がかつた灯りと足もとにわずかにみえる白い光くらいでも、ぎりぎり彼女の後について歩くには支障はない。カケルが後に続くと、看護師は手慣れた様子で霊安室の扉を開け、明かりをつけた。霊安室なのに遺体はなく、がらんとした中に座り心地乗りよさそうな椅子が3脚、まん中ぽっかり空いた床を向いて並べられていた。奥行きのないつきあたりの壁には、どんな宗教でも対応できそうな白い柵がひとつ、しつらえてあった。

カケルが椅子に座ると同時に、霊安室の引き戸が大きく開いて制服に無帽の警察官がふたり、大股で入ってきた。反射的に立ち上がると、「このたびはどうも」と前に立った男が歩を止めて頭を下げた。もう一人は戸口に立ちふさがるように立ち止まる。二人ともカケルよりずっとガタイがよく、背もやや高い。出口を塞がれたような圧迫感があった。それでもカケルは丁寧にお辞儀を返した。コーヒ―缶を捨てておいて本当によかったと心の中で安堵した。

二人は名前を名乗った。前に立った方が青野、後ろのが本河内ほんこうちと言った。二人とも地元警察署の刑事だということだった。一通り、教えてください。これはあくまでも、事故で亡くなった方への決められた手順でして、確実に事故であったと証明するために必ず行う調べなのです、とカケルに近い所に立ったアオノがソフトに語りかけた。後ろのホンゴウチがつかつかと歩み寄って、ドングリ眼をぎろりとこちらに向けて急に聞いてきた。「お風呂で亡くなった、と何か入浴剤とか入れてました？」唐突な質問に、カケルは少し宙に目をやって「……いいえ、いつも入れないし、入ってなかったと」そう答えると「えー」やや興奮したようにこう続けた。

「額に軽く打ちつけたような跡があつて、緑の粉がついていたんですよ、少しですけど。入浴剤かなあと思つて」
剣道や柔道が得意そうな、快活なしゃべり方だった。眉が濃く、マンガに出て来そうな目をしていた。

いきなり推理もののような出だしだなあ、カケルは半ばあきれながらも「いえ、何も入ってなかったと思います。ボクも覗いた時には湯は透明でした」と真面目に答えた。

刑事からすれば『第一発見者』というのだろう。まあお座り下さい、とアオノから椅子を勧められ家族関係から普段の父親の言動や様子、風呂に入った時の状況など、まさに『事情聴取』を受けているという感じになった。若い方のホンゴウチは、うろつろと隣の続き部屋に通じるドアを開けて出ていったり、また廊下側の入り口から戻ってきたりと落ちつかなかった。隣の続き部屋にすでに父親がついているらしく、そこで刑事たちは亡くなった人間の検視を行っているとのことだった。

もう1人、白っぽい実験着のような不織布をまとった人間が続き部屋から出てきたが、これが警察から来た検視官だということだっ

た。彼はカケルに軽く頭を下げ、ホンゴウチにあごで合図して、また隣部屋に消えた。ホンゴウチもちらつとカケルに目を走らせてからそちらに入っていた。

「月見里、と書いてヤマナシさん、ですか」今夜これを確認するのは二度目だ。カケルは生まれた時からずっとこれをヤマナシと読んでいたので、全く違和感がなかったがうどん屋に入った時に『月見うどん』を『やまうどん』と読んで母や姉に大笑いされた記憶はしっかり残っていた。

「ヤマナシさん、亡くなったのがノブキチさん、奥さまがなみ子さん、一緒に住んでるのがまづ娘さんでメグミさん、だんなさんのケイゴさん、ヤマナシさんですね」

「いえ、姉の一家は桐島です」

「キリシマメグミさん、キリシマケイゴさん、お子さんがええと」

「4人です」カケルはすらすらと彼らの名前と年齢を答えていく。

「お詳しいですね」アオノの言い方は特に感情がこもっていない。

「一緒に住んでますからね」

「カケルさんは、メグミさんの弟さんなんですね。で、一緒にお住まい、と」

「別棟ですが。母屋から少し離れた平屋に寝起きしてます」

「独身ですか」

「はい」

「お仕事は」

「失業中です」

「はあ」第一発見者は、第一容疑者なのだろうか。アオノは何やらペンを細かく走らせていた。

「お風呂はいつも、母屋のをお使いなんですね」

「はい」その他にも生活状況について細かく聞かれ、その都度丁寧に答えていく。

やはり俺が一番疑われているのだろうか、本当に形通りの調べな

のか……カケルは細かい内容に受け答えしながら、時々ちらつとアオノの表情を伺った。隣に座っている男からは何も警戒心は感じられなかった。つい、こう言ってやりたくなる。だいじょうぶ、父は殺していません、でも何人も殺したことはあります。狼ですから。でも今はこの件だけクリアになればいいんですよね？

急にアオノが顔を上げた。銀縁の眼鏡の奥で、目がかすかに戸惑いを浮かべている。

「……これもね、形式だけです。聞かねばならないんですよ、お父様が何か生命保険に入っていたらっしゃるか、御存知ですか」

「いや……」金目当ての犯行、殺人事件の動機ナンバー1なのだろうか。愛憎を凌駕し、趣味的要素も排除し、人が人を殺す理由、それはやはり、カネがほとんどなのだろうか。

カケルは心に浮かんだ醒めた思いをみせずに、やや俯きがちに答える。

「でも、多分かけていたと思います。母がすっかりしていたし、葬式の費用くらいは出るといいね、と一通り貯金もしていたようですから」

「どこに掛けていたか御存知ですか」

「……それは、母か姉が全て把握していると思います。僕はちょっと」

「分かりました」

その声を合図にしたかのように隣室からまずホンゴウチ、そして検死の係官が霊安室に入ってきた。

「今からお宅におじゃまして、現場を見せて頂きますがどなたかいらっしゃいますよね」

いきなり本題か。カケルはえっ、と言葉を飲んだが

「……いえ、これも一通りマニュアルがあります」アオノが頭をかき。ホンゴウチが用意してあったらしいA4の紙をカケルに手渡す。

「こちらだね、一応お話を伺ったご家族の方などにお渡ししています。僕の名前も入ってますんで、もし不明な点あればご連絡を」タイトルに「ご遺族と関係者の方へ」とある。事故で亡くなつてから警察や病院が入って行われる手続きの説明書らしい。裏面の最初に「なぜ警察が遺体を調べるのですか」と見出しがある。他にも、

家の中を調べたり写真を撮ったり、生命保険について尋ねたり、全てはマニュアルに従っているという文面が事務的に綴られている。あくまでもカケルのみを疑っているのではないと強調したいのか、ホンゴウチは紙を手渡しながら、照れたようにかすかに笑ってみせた。

「家に連絡入れていいですか」

カケルが聞くと、アオノがさも嬉しそうに

「お願いします。これから支度して、この3人で伺いますので、まずお亡くなりになった浴室をみせて頂きます」と続けた。

カケルはまた、恵に電話を入れる。電波の状態が悪く、彼は霊安室から出て廊下の片隅に立った。ようやくアンテナが2本表示されたので、電話の気が変わらないうちに急いで電話をする。

「今から警察の人が風呂を見に行くって」

そう伝えると、慌てた声で「今、やっと母さんが入ってるんだけど。タイチもまた入りたい、って言って一緒に」と言っている。溺れた湯をいったんこぼして風呂を洗い直し、また湯を溜めたのだという。電話を切らずにそのまま部屋に戻り刑事に伝えると、若いホンゴウチは「ええっ」と目を見開いている。「お湯、捨てちゃったんですね」さも残念そうに言うので「すみません」ととりあえずカケルは謝った。お父様が入っていた時、どのくらい湯があったか分りますか？ というのでいつも決まった量で湯が溜まる仕組みです、と答えたら少し安心したような目になった。恵に返事をしようとしたら、移動のせいで電話が切れていた。また廊下の片隅に行つて、姉に掛け直す。「今から来るの？ こんな夜中に？」雑音混じりの声は震えていた。それでも、拒むと言うことは考えていないようだった。いつもカケルがやるように、長い息を吐きながら「分かった」と言つて電話は切れた。

彼らが現場に移動することになり、今度は先ほどの医師がそこを覗きに来た。役場に出す書類ですが、とA3の左半分が空欄のままの死亡届を渡された。右には死亡診断書という文字が横線で消され、『死体検案書』の文字だけが残されていた。死亡日時と病院の場所、原因に溺水と書かれていた。まん中の欄には『認知症』の文字もあった。

「CTや検死の結果、特に病変もなく、また、不自然な傷などもないことが全て確認できましたので、溺水事故ということで、これを」
ホンゴウチが立ち去り際に、「検案書のコピー、明日、警察に持って来てもらえますか」と爽やかな口調のまま告げた。

「警察署のホンゴウチ、と言えば僕一人なんで、すぐ判ると思います」

じゃあ、と去っていく警官を見送ると、入れちがいに黒いスーツ姿の小男が看護師に伴われて姿を見せた。

「ヤマナシさま、ですか」しゃべり方がどことなく、ムカイヤを思わせる。カケルはぞつと冷水を浴びせられたようにすくみあがつてから、おそろおそろその姿を確認した。姉が伝えてくれたらしい、葬儀屋の担当者が既に病院に着いていた。

「ヤマナシさん、お待たせしてます、お帰りの支度が整うまで少しお待ち下さいね」看護師と葬儀屋とはすでに話が済んでいるらしく、短くやりとりしただけで、お互いがお互いの方向に動き出した。葬儀屋はいったんカケルの前に立ち止まり、丁寧に悔やみを述べてから、

「ご自宅にお連れするようにお聞きしましたので、一緒に乗って頂きますか」と聞いてくれた。

確かに優しい言い方だったが、よく聞くと、ムカイヤのような得体の知れなさは薄くなってきた。匂いのせいかもしれない。その男

からは少し他所よそしい葬儀場の匂いはしたものの、どこにも悪意を感じさせるようなものは漂っていなかった。カケルはわずかに肩の力を抜いて、お世話になります、お願いします、と頭を下げた。

急に尿意を催して立ち上がる。トイレは通路に出て少し奥にある、と看護師が言っていたのを思い出す。

照明は自分でつけるのだろう、さっきこの部屋に入る時には通路には何の明かりもなかった。何となく憂鬱だな、とそれでも自然の欲求には逆らえずカケルは暗い通路に出た。風呂に入る前からずっと我慢していたからな、と思うと急に我慢できなくなる。暗いままトイレの入り口を開け、ドアの向こう側にありそうなスイッチを見ていないまま手探りした瞬間、ドアが勢いよく開いて後ろ向きの制服姿が飛び出してきた。くると半身をひねったときに急に目に入ったらしく、ドアのすぐ外にいたカケルの姿にすっかり固まって目を真ん丸に見開いている。カケルも鼓動が跳ね上がる。

「おおおー！ー！！」二人は同時に叫んだ。

「お、おおお」ホンゴウチだった。叫びながらも薄手のハンカチで手を拭いている。

「すみません……いつも使う所なんで、電気も点けずに入ってた」「い、いいいいえこちらこそ」まだ心臓がバクバクしたまま、二人はあたふたと詫びのことばをかけ合っている。

「な、なんですかこういう場所」ホンゴウチはドングリ目を見開いた顔でそう言うてから、遺族を前にこれはどうか、と気づいたように次の言葉を飲み込んだが、カケルがおずおずと

「……あまり、気持ちいいもんじゃ、ないですよね」

とつなげたら、照れくさそうに笑ってから「では失礼します」と軽く首を動かして去って行った。

カケルは、その姿を見送ってから改めて照明スイッチを探す。明るさに満たされた小部屋はごく普通の場所に戻った。ホンゴウチの

小市民的な叫びと驚いた顔が目の前にちらついて、カケルはひひひと小さな声を出して笑った。声がタイルに響いて、また何となく薄気味悪くなって周りを見回す。小市民で小心者というのならばやっぱり、俺のほうが勝ってるかもな、そそくさと放尿を済ませてから鏡に映る自分を目に収めないように、さっさと手を洗う。

皮肉にも、霊安室に戻ってきた時にようやく落ちついた。彼はどさりと椅子に身を投げ出した。

父の遺体は、隣の部屋で検死を行っていた、そのまま家に連れ帰るらしい。

しばらくひとりきりで、霊安室という空っぽの部屋にカケルは座っていた。

全てが現実とあまりにもかけ離れているような気がしていた。看護師、父親、医師、ふたりの刑事、検死官、そして訪れたばかりの葬儀屋、すべて架空の人物のようだった。今は誰もおらず、もしかしたらカケルの想像上の人物だったのかもしれない。

急に携帯が震えているのに気づいてあわててそれをポケットから取り出した。「もしもし」音が聴こえない。焦って、先ほどの廊下に出る。片隅に立って画面を見た時、表示名を見て立ちすくんだ。しかしもう先に、受話ボタンを押していた。

長い夜 12

好奇心に勝てず、携帯を耳にあてる。アンテナは立っているはずなのに、相変わらず声はしなかった。かかってくるわけがない、声も、するわけがない。

「もしもし」

重ねて呼びかける。しかし、もしかしたら……
あり得ないことが続く、こんな晩ならば。

「もしもし……」

明らかに、耳を澄ませている様子がかがえた。カケルは息を呑んで、ようやく声を出す。

「カケルだけど……誰？」

何も言わないうちに、電話が切れた。

カケルはゆっくり目をつぶり、また目を開けてから深呼吸をして着信履歴を開いてみた。

『柳原聖夜』、確かに、最終にその表示が残されていた。

「イブ」声に出さずにつぶやく、俯いたまま額に電話を押しあて、押し寄せる感情の波としばらく戦った。すぐに掛け直したかった。しかし、カケルにはそれができなかった。

帰路も、同じような取り合わせ。死んだ父親に、自分、そしてま

るつきりあかの他人。多分、今日初めて出会っただろう人。

来た時と明らかに違うのは、急いでいないということだろうか。それでも、行きも帰りも似たような要素はあった。

自分ひとりではどうにもならないことを、他の誰かが仕事としてやってくれている、ということ。

運転手はほとんど無駄口をたたかずに、カケルの家まで静かにハンドルを切っていた。ナビがあるおかげでいちいち道案内をせずつむのが、こんな時にはありがたい。

カケルも自らの思いに沈みこんだまま、ずっと遠い東の空を見つめて車に揺られていた。

家に着いた時にはすでに3時をまわっていた。恵が玄関先に立って、葬儀屋を招き入れた。圭吾は泣いていたのか、目が真っ赤だった。カケルと目が合うと、小さく頭を下げて「悪かったね」と小声で詫びた。

子どもたちのうち夏実だけは、驚いたことにまだ起きていた。

「おじいちゃんにおかえり、って言わなきゃ」手前の和室に安置された遺体を見て、それでもようやく10歳の顔に戻った。

「今夜、母さんと一緒に寝てもいい？」恵は父親の寝姿を見つめたまま、ゆっくりと首を横に振る。

「母さんは今夜は、ここにいなくちゃ」

「じゃあ母さんのお布団で寝てもいい？」

「いいよ」カケルが脇を通り過ぎようとする夏実の頭をくしゃくしゃになでると、ずしんと重たい頭を彼の鳩尾にぶつけてから「おやすみそう兄」そのまま下を向いて部屋に戻っていった。

母親の部屋はすでに扉が閉ざされ、真っ暗なようだった。寝ているようだが、眠ってはいないのではないだろうか。

長い夜は、少しずつ明けようとしていた。

東京は海のこと 01 (前書き)

実在の絵本、さのてつじ氏の『東京は海のこと』よりサブタイトル
をつけさせて頂きました。

何故かと問われると答えようがないのだが、昔から海の生き物が好きだった。

覚えている限りで一番幼い時の記憶で、俺は胸に何かの絵本を抱えていた。

今でも記憶にあるのは、その本の表紙がゼンたい青と藍色とで覆われていたこと、無数の色鮮やかな魚、サンゴ、イソギンチャクなどが散りばめられていたこと、まん中には何もかぶり物をしていない古臭い着物の少年が釣竿をかついだまま、大きな亀の背中にまたがってあたりを眺めていたこと、海底の遠くに朱色の建物が小さく見えていたこと、それと……

俺はなぜかそれを手放すまいと、しっかと握り締めて床を見つめていたこと。

誰かの声が言い聞かせるように上から降っている。

「ねえ、カケルくん、次の人が待つてるから、本を返すんだよ、もう何日もなんにちも持っているでしょう、次にあみちゃんが見たいんだって、ほら、もう本のおうちに戻そうね」

その本を手放すことなんて、考えられなかった。

猫なで声の背後で、小さな女の子が泣きわめいているのが聞こえる。ああん、ああん、カケルくんが本をみせてくれないの、あみはずっとまってるのに。

嘘つくな、俺は分かっていた。俺があまりにもその本を気に入っていたのを知っていて、手放せないのを知っていて、バカにしていたんだ。いや、蔑むようなバカな仕方ではない、何と云うんだろう……そう彼女は多分、本に嫉妬していたんだ。

結局絵本は体よく取り上げられて、あみちゃんに渡された。

彼女はそれをずっと、自分のロッカーに突っ込んだままだった。俺は隙をみて、そちらに手を伸ばそうとしてはなんとか先生（名前が思い出せない）に叱られた。

あみちゃんは、そんな俺を見て、満足したような目をして笑った。

それは今思うと、浦島太郎だったのかも知れない。浦島太郎は助けた亀に乗って、海の底にある竜宮城にたどり着く。そこでもてなしを受け夢のような日々を暮らしたが、ある日急に郷愁を抱いて陸に帰る。陸ではすでに彼の失踪から果てしない時が過ぎていた、あまりの心寂しさに彼は絶対開けてはいけない箱を開ける。

彼は時に追いつく。

これがどうして子ども向けの昔話として残ったのか、その頃からずっと不思議だった。あまりにも恐ろしく、哀しい話だ。ふとした親切心と好奇心から彼は入ってはいけない世界に迷い込み、自らの時を失う。

おと姫さまもどうして「開けてはいけない」という箱をわざわざ土産として持たせたのか。使うことを禁じられている、意味のない贈り物。

大きくなってからずっと考えていた。彼女がそれを渡した理由を。

海は不思議だ。海は何を包んでいるのか分からない。

だからそこに居る生き物や化け物がひとつひとつ目の前に晒されるたびに、俺は確認のためにそれらをじっくりと眺め、挨拶を送る。

「やあ、君の世界に招いてくれてありがとう、僕も仲間に入れてくれるかい？」

よく食事の時、海中の様子が映し出されているたび、テレビにくぎ付けになった。夏実にはひやかされ、恵には小言を言われ、琢己にもよくチャンネルを替えられてしまった。

「何がそんなにいいの？ 海」

ある日夏実から真剣にそう訊ねられ、俺は箸を宙に浮かせたままやはり真剣に考えた。

「自分には、居られない場所だから」

ようやくその答えを導き出した時には、もう誰も自分を注視していなかった。誰かのお代わりを取りにいきながら、恵が言う。

「そんなに好きなら、さかな屋になればいいのに」

それってさ。さかなは海に居ただけで、海とは全然関係ないんだよ。

夏実がそう頬を膨らませた。

恵は「ぜんぜん意味分かんない」と小馬鹿にしたような目で首

を振っていた、もはや誰も会話の成り行きなど気にしていなかった、むっとして口を尖らせた夏実以外は。

俺には、夏実の言いたいことがよく分かった。その時は漠然とこう思ったただけだった。

何て辛いことだろう、最も正しいことが見えている人間が、最も正しく言葉を発するとは限らないのは。

気がつくのが、いつも遅い。だから琢己のことも気づかなかったんだ、ずっと。

あの赤いライターの意味も。

夏実や太一によく読んでやっていた絵本にも、海の生き物が登場するものが多かった。

そして、ひとりの少年が出てくるあの話も。今どきの浦島太郎といった風情の。

彼は東京都内の小学校で、運動会の最中発熱して、保健室に運ばれる。

熱に浮かされていいる彼は、気がついたら水没した町にいた。彼は保健室の窓から軽やかに泳ぎ出し、街中を遊泳し、さまざま魚と出逢う。

マンガみたいなの見つけたよ、絵本をみる年ごろをとくに過ぎた夏実がある日、学校の図書室からこれを借りて帰ってきた。ねえその兄、海の話好きだね、これも気に入るかなあ。

俺は太一に、そして夏実にその絵本を何度も読んできかせた。返却期限ギリギリまで借りてもらい、子どもらが学校や幼稚園に出か

けている間にも手元に置いて眺めていた。

新しく買おうと思って、書店に問い合わせたところ既に絶版だと言われた。

中古ショップに予約を入れて、ようやく在庫が入りました、という連絡がメールに入るとすぐ、値段もロクに確認せずすぐに金を振り込んで本を手に入れた。

夏実はあきれて、そう兄、ほんとうに海が好きなんだ、そんなマンガみたいな子どもの本なのに、わざわざ高いお金を出して買ったの？ 元の値段より高いの？ と、それでも嬉しそうに本を拡げて眺めていた。わあ、やっぱりこのマンボウが急ににゅっと出てくるところが好き。あとさ、満員電車で魚がぎっしり乗っているのか。

ほとんど全てを失ってからも、最後までこの本は手元に残っていた。

『東京は海のそこ』

背表紙は取れ、ページも破れかかっていたのだが。

俺にとっての浦島太郎。俺にとっての海の世界への入り口。

彼は、太郎と同じように夢うつつの中、異世界をさまよう。

しかし、最後には追いつくのだ。彼が時に、ではない。

時が、彼に。世界は緩やかに循環の輪を閉じる。人びとは微笑みながら物語を終える。

それゆえに俺はいつも安堵の吐息とともにその頁を閉じるのだ。

しかし俺はなぜかいつも浦島太郎により同情してしまう。彼はあまりにも不器用すぎた。自らに正直すぎた。要領よく人生のつじつまを合わせることが、どうしてもできなかった。

想像の中で、いつも俺は異世界から帰って来る時、しっかと箱を胸に抱えている。

太郎の代わりにその箱を受け取った時、彼女は言った。深い藍色の瞳で俺をじっと見つめ、そつと発する、最後の言葉を。

「自らが何者か迷った時、そして、本当の自分を知りたいと思った時に、これをお開けなさい。

あなたは決して後戻りはできない。激しく後悔することもあるでしょう。」

しかし、一つだけ確かなこと、これだけは約束します。

箱を開けた瞬間、あなたは自身が抱える疑問の全ての答えを一瞬

のうちに知ることができると」

俺はいざとなった時に、それをためらいもなく開けるだろう。
そしてその時はもう間もなく来ている。

奴らが来た。

どうしても知りたい問いの答えはひとつ。

永遠に持つてはいられない

ほんとうに愛するものは、所有できない。愛すれば愛するほどそれを永遠に保持することなどできないのだ。俺はひりひりするような痛みの中でそれを思う。いつまでも忘れない、とかずっと大切にするよ、という誓約が過去にいくつも重ねられ、そしてそれこそが最初に流され、薄まってやがて大気の中に消えてゆく。人は、そんな場面をあまりにも日々当たり前に目にしているせいか、永遠の所有が不可能だということに気づいても気づかぬふりをしているようだ。

では愛という概念はどうだろう。無形のをずっと心の中に留めておくことはできるのだろうか。

俺は駄目だ。俺が狼だから？

いや、人間と同じく獣であろうと、経験という形のないものを積んで積み重ねて自身を養っていけるはずなのに、いざという時に『現実』を突きつけられてそれがオマエにとってどんな意味があった、実際何だったのか？ と問われると途端に裸に剥かれたような、すっかり喰い尽されたあとの林檎の芯よりまだ寄る辺のない寒々しさに震えあがってしまう。

もとより、形のないものを心の奥底にとどめ置くだけの資質が無いのだ、それが多分、俺の最大の欠陥だったのだろう。

俺はイブを失った。あれほどまでに、愛していたのに。

そして、絶対に離れないと誓いあったのに。

ムカイヤから依頼された仕事も、少し慣れてきた、すでに4回ほど一人で出勤していたから、もう大学の三年になっていただろう。

落としそうになっていた単位のレポートをようやく仕上げ、カケルは耳にピアスを通す。

時計を確認、すでに午前0時を回っていた。

彼はゴム底の薄っぺらいデッキシューズをひっかけて、アパートを出ていった。

そんな時間に女が一人で外出するもんか、カケルはそう思っていたが、狼は違った。

狼はご主人さまの言うことは特に疑うことなく、その通り従う。「ナミキ・シズエ、漫画を描いている。あまり売れていない雑誌とそれなりの雑誌に4コマを2本ずつ、地方企業の広報誌に半ページのイラストコラムを1本、その他細かい仕事をいくつか。

彼女に会って下さい。夜中に仕事をする関係で、ときどき夜食を買いに1ブロック離れたコンビニまで外出します。時間は決まって1時から2時の間。何度か見張っていなければ会えるか判らないけど、3日は待たせないと思いますから。案外近所ですよ。地図と詳細は後から送りますので」

本当に、近所と言っている。大学の下宿や寮が立ち並ぶ中にほぼ隣接するような地区だった。彼はひたひたと夜道を市街地の方向にくだる。

やがて、目当てのコンビニが夜のしじまにぽっかりと浮かび上がっているのが目に入った。

山を背負っているせい、あたりにはめばしい店はない。それでも、この辺りでは主要な県道沿いなのでこの時間でも車はたまに通りがかる。こんな時間でも、コンビニには車が一台、そして大型バイクが一台止められていた。カケルのように軽装の男がラフなアロハ姿で雑誌をいやに真剣に立ち読みしているのがガラス越しに見えた。

カケルは店に入らず、コンビニを通り過ぎて30メートル程前方にある横断歩道まで歩き、それを渡らずに反対側の草むらにまず身を潜めた。明るい時に何度か通りかかって様子を確認していたので、そこから大きな金網の蓋を一つ奥まったところから、ずっと山側に伸びる枯れた溝があるのを把握していた。荒れ地の境になっていて、道路から少し入ったらもう蓋はない。ここから屋根なしの溝が始まる、という金網の縁に注意喚起のポールが申し訳程度に3本、立っでいてよれよれのロープが掛け渡されていた。そのうちの2本を両腕で押し分けるようにして、彼は底に降りる。高さが読み切れずに少しよろめいたがすぐに体勢を立て直す。

コンクリートで固められた大きめの側溝は、ひと2人が並んで歩けるような幅を持ち深さも1メートルくらいはある。普通に歩けばもちろん頭が出てしまうが、両脇にはうっそうと葦だかヨシだかススキだか、カケルには区別もつかないような背の高い草が生い茂っていたのでそこはさながら、青臭い熱気のこもるトンネルのようだった。

身をかがめるように、横断歩道からどんどんと離れ山側に少し歩を進めると、吹き寄せられたゴミがいくつも足に当たった。からからに乾いた場所だが、どこか湿った風が吹きつけてくる。落ちていたペットボトルがからんと妙に明るい音をたてる。

だいぶ山に近づいた頃、側溝が暗渠に替わる手前で足を止め、彼

はそこでおもむろに服を脱ぎ始めた。

真夏のことなので、身につけているものはあまりない、それでも無防備感はぬぐい去れなかった。小声の早口で「あれのをゆけ」と唱えると、彼はいつものように、狼となった。

ぶるつと首を振り、狼はようやく、夜気を心ゆくまで肺に取り込んだ。

狼はカケルが進んできた側溝をまた道路沿いまで戻る、ゴミをたとえ欠片といえども踏まずに上手に避けて物音ひとつたてず進んで行く。そして、車道がよく見える位置になると一旦溝から上がり、道路脇にぼうぼうと伸びる草陰に身を伏せ、その女が自宅を出てくるのを暗がりで見つと待っていた。

女のアパートはすぐ目と鼻の先、窓が少し開いている。狼はあまたの匂いの中から彼女を嗅ぎ分けた。

暑いのに今夜はまだ風呂に入っていない、髪が匂う。綿の服が汗を吸った匂いも。ビールを少し飲んだのか、ホップが香った。饅え臭いようなアルコール臭にかすかに乗っている。そして、紙とインク、焦り、恋人に対する言い訳、編集に対する言い訳、愚痴、家族への細かい怒り、胃の痛み、全てが嗅覚に働きかける情報となって、細い糸のごとくすると開けた窓から外気に乗って漂ってくる。

彼女が立ち上がったのが判った。空腹を抱えて。財布を取り上げてドアノブに触れる。ドアノブの金属臭は少し苦手だが、彼女が出てくるのが判り狼は目を輝かせ少し身を浮かせた。

今夜はどうか分らないが、何となくこの横断歩道はきちんと渡るのではないか、と感じていた。横断歩道のこちら側、ちょうど狼が伏せているくぼみのあたりに、彼女の匂いがやや強く、淀んでいた

から、この場所はよく通るのだろつ。多分、だいじょつぶ、狼はま
たひっそりと草蔭に身を埋めた。

骨はもろく 02 (前書き)

かなりグロテスクな表現をしておりますので、苦手な方はご遠慮ください。すみません。

行きはそのまま見送り、帰ってきたところを狼は襲った、音もたえず。

小柄な女だった。手にコンビニの白いプラ袋をふたつ下げたまま、左の肩口と喉をまる啜えにされ、女は横ざまに側溝の中に引きずり込まれる、ぐふつ、と喉を鳴らす音が漏れたがそれすら遠慮がちに夜の闇に吸い込まれた。嗅ぎなれた血と体液と恐怖の香りの中で、袋から出た揚げたてフライドポテトと、少し遅れて全粒粉パンを使った玉子サンドの匂いが同じような軌跡で彼らを追いかけた、だが、狼が獲物をくわえ直すと指で袋をひっかけていた右手が大きく拡がり、袋は溝の中に無造作に放り出された。両脚は大きく宙に跳ね上がり、ちようどうまい具合に黒と黄色のポールの間をすり抜けた。

狼は軽々とその小柄な肉体を曳いて、溝の中を山の方へ向かって駆けていった。狼の右わき腹に半分のみかかるように、女のけぞり気味の背中と脚が当たる、両脚は始めのうちは何度か激しくばたいて狼を蹴りつけようとしていたが、そのうちに、静かにだらりと下に垂れたままとなった。狼は途中、一度足を止めて女を下に降ろした。女は穴の底でうつ伏せになっていた。ひいひいと息が漏れる甲高い音がずっと聴こえていたので、そこで止めをさそうと決め、前脚を傷ついている方の肩にかけて、鼻先でひっくり返そうとした。

いきなり、その細い左腕が狼の腕に巻き付いた。鼻先に彼女の顔が迫る。激しい苦痛と恐怖とで赤々と染まった彼女の匂いが大声で訊く、何なの？ なんなのこれは？ アタシ、しぬの？

あまりの匂いの強さに顔をそむけようと、狼は大きく口を開けた。その口に彼女は顔を突っ込む、本能とはまるで逆の急激な動きに狼はとっさに口を閉じる。

骨はあまりにももろく、その口の中でほろりと砕け、水浸しになった絶叫と大量の血がどつとあふれ出す、狼はそのすべてを喉を鳴らしながら呑み込んでいった。美しくすんなりと伸びた左腕が狼の横顔を打ちすえた。

インクとペン軸の匂いが染みついていた、コノヒトハヒダリキキナンド、そんなニンゲンの声がどこかでしていた、狼は構わずにぎりぎりと言を噛み合わせる。甘い脳漿のあじが口いっぱいに拡がって、ああ、やっぱり新鮮な肉はいいなあ、と漠然と感じる。

そして彼の中にだけ突き抜けていった悲鳴。断末魔の叫び。

狼は夜と同じように、死を味わい尽した。

カケルは居間で夕飯を待っていた。久しぶりに家族の夕餉に参加したある夏の日のこと。

ナミキ・シズエの失踪はしばらくローカルニュースを賑わせていた、事件に巻き込まれた可能性が、とキャスターは何度も繰り返していたが、なぜかコンビ二近くの側溝には捜査の手は延びなかったようだ。

カケルには、すでに過去の出来事にしか過ぎなかった。それなのに。

「いただきます」

よく冷えた日本酒のグラスを片手に、つまみは何だろう、昆布巻きか、と箸を伸ばしたカケルは全然気づかずにそれを口に入れた。

柔らかく煮えた昆布を噛み切ったと思ったとたん、ほろり、と何かが口の中で崩れた。

それはまるで

ナミキ・シズエの顔面のように。

カケルはいきなり立ち上がる、口を押さえて。恵が目を細めてその姿を見た。

「どうしたの」

それに答えることもできず、カケルは流しに駆け寄り、いつときの間を置いてから、ゲエゲエと胃に収めたものを吐き始めた。

まだ幼い晴樹が、その様子を目を丸くして眺めている。琢己は箸を落とし、きいっとひと声鳴いてから「たぶたぶう」と叫んだ。

「だいじょうぶ？ そうちゃん」

ふり向いて何か答えようとしたが、言葉すら間に合わない。とにかく、吐き気の発作が止まらない。両親は少しだけ箸を止め、咎めるような目を同時に彼に向けた。それでも、止まらないものは止まらない。カケルは食べたものの3倍だろうか、という位の量を吐き続けた。

どうにか吐き気が収まった時に、昆布巻きについて恵に聞くことができた。

「昆布巻き？ 買ったのよスーパーフジミで」

「あの中身なに」

ええとね……恵は視線をさまよわせながらようやく思い出して

「ニシンより安かったから、鮭だわ。鮭の頭をね、コトコトと柔らかく似て骨までさあ」

そう言ったか言わないかのうちに、カケルは次の発作に見舞われた。

「食あたりじゃ、ないの」

心配する恵もそっちのけで、カケルは吐き続けた。

「食事中だぞ」

父親は、言わずもがなのことを口にした。それでも、カケルは情けなく涙の浮かんだ目をさまよわせ、時々襲ってくる発作をただ、耐えていた。

すでに胃には、何も残っていないかった。それでも酸っぱい胃液はしつこく生まれているようだった。

吐き気が十分に収まった頃には、カケルの思いも少しだけそこから離れることができた。

それでも、肉はおろか、魚ですら口にできなくなったのはその時からだった。それまでもあまり好みではなかったのに、もう、肉とか魚とか聞いただけで吐き気が蘇ってきた。

「骨まで柔らかくてお口の中でほろほると」

テレビのグルメ番組でそんな表現を聞く度に、気分が悪くなる。

あの夜の、骨の感触がずっと口の中に残っていたせいだろう。カケルは、骨のもろさが歯の間に蘇る度に顔をしかめた。

それでも何故か、あの側溝で嗅いだ匂いの数々は爽やかな思い出としていつまでも、頭の片隅に残されていた。サンドイッチの慎ましい全粒粉の匂いまでもが。

初めて一緒に

メスはどうだったのだろうか、彼女には何かためらいとか懼れとかはあったのだろうか。

最初に音楽室で『会った』時から、そんなものは全然感じられなかった。

それは単に、自分が鈍感だったからなのだろうか、カケルは何度も追想してみたが、結局何も思い至ることがなかった。ただ、当時の様子が画像の粗い映画のように、断片的に脳裏をよぎる程度だった。例えば

メス狼の噛み方は上手だ、近づき方も。音もたてずに近くまで忍び寄り、至近距離から吸い付くように獲物を捕らえてから流れるような動作で首筋を噛む。

その日はオスの狼にとって初めての『シゴト』となった、狼はメスが人間を襲う様子を脇に感じながら、自らのターゲットに襲いかかった。

先月の狩りに付き添って（その時は単なる見学だった）メスのやり方をよく観察していたおかげで特にためらうことなく相手を襲うことができた。相手の女はあっさりと彼の前に倒れ、そして絶命した。

メスの襲ったのは大きな男だった。それでもいともたやすくメスは人間を斃した。男は風の鳴る音だけを残り軽い痺れんを起こしながら、メスの身体の下で息を引き取っていった。

すごいね、イブ。

カケルは帰ってきてから彼女を抱いて、それから心底感心した目

でその白いからだを見つめた。

あんなにすんなり……何て言えばいいんだろっ、その、あのさ。

「殺すのは、簡単だよ。コツさえわかれば」

え、と少し思考が止まったが、すぐにイブが彼の口元に近づけてきた肩の丸みに心を奪われる。

狼には、何も罪悪感などない。罪悪感というものはニンゲンの特権らしい。

それはいいことなのか、呪われたものなのか。ひたむきにイブを求めているその刹那のカケルにはどうでもいい事柄だった。

目の中を舐める

こんなこともあった。目にゴミが入ったのだ。

「あれ」カケルがかがみ込むと

「どしたの」イブがすぐに駆け寄ってきた。

左目に何か入ったようで、チクチクする。

「見せてごらん」

伸ばしてきた手を軽く振り払い、カケルは鏡をみる。

赤くなつた目の中に何が入ったのか、自分ではよく判らない、しかしゴロゴロする感触にずっと苛まれている。

「ちよつと、こつち向いて」

無理やり顎を引っ張られた。

「やだよ」カケルは更に身を引いた。そこにイブは身体を寄せせる。

「見せてみなよお」

「やだ。オマエすぐ痛くするし」

「しないよお」そう言いながら、何故か彼女は舌を長く出して彼に迫る。

カケル、怖くなって座つたまま後ろに下がる。

イブは、舌先をそおつと彼の左目に伸ばした。「じつとしててね」目の中に、彼女の舌を感じる。温かく、柔らかい。とても柔らかい。

「何……」イブの舌が、彼の眼球を優しくまさぐる。カケルはじつと、その舌を受け入れた。

しばらくその感触を楽しんでいたが「あ」急に、彼女が舌を引っ込めた。

「取れた、気がする」

気づいて、カケルもそつと瞼に手をやる。まだ視界は曇っていたが、確かに、違和感は消えていた。

「……すげえ」

何でこんなこと思いついたのか、聞いてみたら彼女

「昔ね、」急に子どものような口調に戻る。

「ひいばあちゃんがいたのよ、うちに」

大ばあちゃんと呼んでいたのだと。大ばあちゃんは、砂糖をこぼすと

「人差し指をまず舐めて、それからいねいに砂糖を拾うのよ、それで指にくっついた砂糖は全部、舐めとっちゃうの」

昔の知恵をふんだんに教授してくれたのよ、と彼女は爽やかに笑う。

「大ばあちゃんはね」うれしそうにことばを続ける。

「目にゴミが入ったらね、こうして舐めて」また、ばら色の美しい舌を突き出した。

その色と形に、カケルはどきつとする。

「それでたいがいは、きれいに取ってくれた、それを思い出したの」舐めるって、大切なことなんだよね、イブは笑う。へええ、とその時は適当にうなずいていたカケルだった。

ささいなエピソードほど、いつまでもよく覚えているということもある。

カケルがふと思い出したのは、風船のことだった。

あの時は、琢己がまだ小学校三年くらいだったろうか。太一が生まれたばかりだったので、多分そうだ。カケルが、琢己と幼稚園の年長組だった夏実の二人を連れて地域のふれあい祭りに出かけたことがあった。

その頃のメグミは少しばかり面やつれしていたものの、授かると思っていなかった第4子を無事、5月はじめに産んでいた、逆子で、もしかしたら障害があるかも知れないと医者から言われていたが丸まるとした元気な男児で、その子も既に生後半年になろうとしていたので表情にはそれなりにゆとりがあった。

父親は仕事を辞めてから何となくぼんやりしている事が多くなり、家族から「ボケたんじゃないの？」とよく言われてはいたものの、それはまだつまらない冗談の範ちゆうにみえた。それでも心配した母親は今まで長くパートで行っていた会社を去り、家に入った。転んで長期入院する少し前のことで、それなりに家庭内は落ちついてる時期だった、とカケルも記憶していた。

カケル自身は昨年夏の出来事からようやく、立ち直りつつあった……イブがいなくなったあの夏の出来事から。

立ち直ったというのにはやや語弊がある、それ以上考えてもどうにも解決できない、カケルの中の弱気な部分がそう繰り返し自身に囁き続けていた結果だったのだろう。

日常に埋没していさえすれば、オマエは安全でいられるのだ、と。

おせっかいと言っていていいほどの家族の干渉も関係していたかもしれない。その頃はアパートで独り暮らしをしていたカケルに何かと細かい用事を言いつけては実家に寄るように連絡をよこしたのもこの頃からだった。

幸運にも、ムカイヤからもここ1ヶ月ほど電話がなかった。

久しぶりにぽっかりと平原に浮かぶ雲のような漂う気分の休日、カケルはまた実家のリビング、ソファにだらんと寝転んでいた。

そこに夏実が駆けこんできた。息せき切っている。

「あつ、そうにい！ はやくはやく」

「えっ何？」

「おまつりだよ、おまつりいこ、はやく」

ぐいぐいと引っ張られる。カケルはソファから転がり落ちそうになる。

「何すんだよ」頭を搔いて、大きなあくびをひとつ。

「パパは、いないの？」休日になるとさりげなく『銀玉磨き』に出かけてしまう圭吾は、その日もカケルが着いてからいつの間にか姿を消していた。

「ママが、そうにいいつれてってもらいな、って」

「やなママだなあ」そう言いながらも、どっこいしょと起き上がる。

どこかで見張っていたのだろうか、恵の声が洗面所から響く。

「そうちゃん、お祭行ってくれるの？ だったらタクミも連れていって」

えええ、と気のぬけたような返事になった。

その頃、初めて何度かスクールバス停への引き取りを頼まれて、おそろおそろ家まで連れ帰ったことがあった。小柄な割に瞬間的な力があつて、急に掴んでいた手を振りほどいて走り出してしまった。奇声を上げて走りまわったり、実のところ、カケルにはどう扱っていいのかよく解らないものがあった。

それでも、お若いのに偉いですねえ、と周りの保護者やバスの介助員に褒められたりおだてられたりすると、まんざら悪い気もしなかった。そんな時に限って琢己は大人しく彼に手をつながせて下を向いてじっとしていたり、カケルの頬にやさしく触れて、薄く笑ってみたり友好的な様子を示してくれた。しかし、そんなことはまずまれで、一度などは発進しようとするスクールバスの前に飛び出して危うく、轢かれそうになったこともあった。

その時にはさすがのカケルもかなり動揺して彼を激しく叱った。琢己はかなり、しゅんとしたように見えたのだが、やはり帰りの車の中では座席でぴょんぴょんと跳びはね、奇声を上げ続けていた（それでもよくしたもので、仏頂面で運転中のカケルには全然触れることはなかった）。

ねえ、なつちゃんどうしよう？ カケルは夏実が「たくちゃんもいるなら行きたくない」と言ってくれるのを期待してそう聞いたのだが、夏実はもうお祭に行けるといっただけで有頂天になっていて、琢己うんぬんの部分についてはまともに聞いていないようだった。「やったー、はやくいこ！ なつみ、おもちたべたーい！ やきいももかう。しゃてきとスーパーボールすくいもやる。あとね、しよっぽうだんのひとがけむりのめいろもやるの」

すでに計画書はばっちりと出来上がっているようだった。そんな時に限って、琢己もひよっこりと居間に顔を出す。多分コイツもちやんと聞いて理解しているんだ、今までずっと恵の脇で、洗面台の蛇口をひねって水を出したり止めたりして遊んでいたくせに出かけるとなったらこうして気づいてやって来る。さすが、子どもだ。

たつくん、お祭に行く？ カケルはちよつとだけ意地悪な気持ちでそう聞いてみた。痩せて小柄な琢己は全然明後日の方を見ていたにも関わらず、指をしゃぶったままうん、とうなずいた。

連れていけない訳にはいくまい。カケルが「じゃあ車に」と言うか言わないかのうちに夏実は「わーい、そうにいの車、開いてるよねー」と走って行ってしまった。続いて琢己も腕を頭に絡めるように上げて、首をふりふり後について行ってしまった。

全く。さすが、子どもだ。カケルも軽く息をついて、車に向かう。

風船は飛んで行く 02

お祭の会場は公民館で、すでに地域の人びとがあちこちに出店を開いて賑やかに開催されていた。

空は青く、空気は11月のはじめらしくからっと乾いて心地よい。外で楽しむには絶好の日和だった。

夏実は着いて早々、幼稚園の仲間を見つけたらしく、そちらに走っていつてしまった。

おい、なっちゃん離れないで、と叫んだが聞いていない、遠くにいるお友だちの母親らしい丸い顔の優しそうな人がカケルの方をみて、それでもにっこりと会釈してくれたので「すみません」と叫ぶと、琢己のことも知っているのだろうか、

「いいですよ、なっちゃんとうちのアッコといっしょに歩かせますから」

とよく通る声で叫び返してくれた。アッコちゃん、はカケルもよく聞く名前だったので安心して、お願いしますと頭を下げ、3時にここに戻るんだよ、と夏実に向かってまた叫ぶ。夏実は時計が判るだろうか、少し心配だったが「おやつの時間にここで集合だよ」もう一度、メガホンのように両手を口にあてて叫ぶと、わあっ！とOKサインを出して、友達の手を取ってどこか会場の奥の方へ走っていった。アッコちゃんのお母さんも慣れた様子で笑いながら、後に続いて会場の奥へと消えた。

琢己は、思いの他落ちついて彼と一緒に歩いていた。時おり、ひいっと大声で叫んで手を打ち鳴らしたり、5メートルほど走っていて、また戻ってきたりということはあったが、ここの狭い地域ではかなり知ってくれている人も多く、恵もできる限りきょうだいの学校や地域の催しものに彼を連れ歩いたおかげでか、その辺ですぐに

「あれ、たつくん大きくなつたねえ」

「たつくん、きょうはおにいちゃんと一緒にだね」（おじです。コイツの兄貴はまだ中一だ）

「琢己くん、ほら餅つきやって行きな」

などと声をかけられていた。琢己は気が向くとそちらを向き、気が向かねばふい、と顔をそむけてどこかに駆け出したりもしたが、特に気にする様子の人もおらず、カケルはほんの少しだけ肩の力を抜いて、それでも油断しないように彼を従えて歩いていった。

気忙しさはあつたものの、思いのほかお祭を楽しみながら二人はあちこちをさまよい歩く。

消防団の人たちが次々とヘリウムガスを詰めた風船を子どもに配っているのが見えて、カケルは琢己を誘ってそちらに近づいていた。気体を充填するときの音が琢己には辛いかな、といっしゅん心配したが、これもびっくりするほど喜んで見物していた。特に、色とりどりの風船が細い紐で繋がれて、ゆらゆらと宙を漂う様子に心を奪われているようだった。

同じ組に住む押切さんという団員が「お、タクミ、一個やるぞ、早くしないとなくなっちゃうぞ、来い」と手まねきしてくれた。琢己は吸い寄せられるように彼の元に行つて、黄色の鮮やかな風船をひとつ、手渡してもらった。

何とも自然に呼びかけに反応して近づいて行って欲しいものを受け取る、こんな単純なことでもここまで完璧に美しくできた事はなかなか無い。カケルの心も風船のようにわずかに浮き立つ。

「ありがとうございます」あいさつのできない彼に変わって、カケルが脇から頭を下げた。

押切さんがにやりと笑つて

「今日はケイゴにおごらせるよ、アイツ、昼過ぎにかなり出たらしいからよ」

と、パチンコの手つきをしてみせた。

3時を10分以上回ったところ、ようやく夏実が約束の場所に戻ってきた。

「なっちゃん、遅刻」カケルが目を尖らせても、頬を上気させて幸せそうに笑っている。

あたりを見回してみたが、アッコちゃんの母子はすでにどこかの人ごみに消えていた。ちゃんと御礼を言っただけでなかつたよ俺、とカケルが言うと夏実がませた口調で

「アタシがちゃんと言ったから、だいじょーぶ」そう言って、戦利品のスーパールールや射的の景品らしい銀色の髪飾りなどを持ち上げてみせた。

琢己は、というときすぐ足もと、植え込みに半分入り込むようにして縁石の上に座って、風船の糸をくい、くい、と少しずつ引っぱって縮めていっては、ぱつと10センチか15センチほど上に解放してやって、目の前に上下させてうつとりと見守る、それをずっと続けていた。このおかげで夏実の遅刻もお構いなしだったようだ。風船さままだ。

カケルは風船がびよこんと上がるたびに、上の松の枝に触って割れてしまわないかヒヤヒヤしながら、その間に手をかざしてやった。琢己は、「ういつ」とひと声鋭く叫び、その手を払いのける。割れたらパニックになるのはお前なのに、と、カケルは横目でにらんでやる。払われた瞬間に上の枝に手の甲が触れて、葉先がチクツとした。俺はこうやって身を挺してお前の風船くんを危機から守っているのに、全然気づいていないんだな、もうひと睨みしたが、琢己はすっかり黄色い風船との蜜月時代に入り込んでいた。まるで恋人でも眺めているような、甘い目をしている。夏実も赤い風船をひとつ持っているのに、そちらには全然目をやろうともしない。自分のそ

れだけが、唯一無二のものなのだろうか。

「そうにいい、かえろう！」

夏実がぴょん、と跳ねた。全然そちらを見ていなかったにも係わらず、つられるように琢己も立ち上がる。

小学校のグラウンドをにわかには区切った駐車場まで、10分以上は歩いただろうか、その間も琢己はずっと風船から目を放そうとしなかった。糸を操って細かく上げ下げさせながら、小刻みに首をふるように動く風船と、ずっと会話をしているかのように彼も首を動かし続けていた。お留守になった足もとは、カケルがかなり気をつけて導いていった。

ようやく車に乗り込んだ時にも、カケルが、ドアに挟んで割らないように、とその風船を両手で持とうとしたらまた、「ういっ」と払われた。

「はいはい、判ったよ」

カケルはもう怒る気力もなく、そのまま運転席にどさりと身を投げ出すように乗り込む。割れようが何しようが知るか。窓も大きく開けてあったが、あえて閉めようともせず彼は車を発進させた。

琢己は、風船を車の天井に上手にバウンドさせながら、ずっと小声で何かうなりながらその様子を見ている。助手席に乗った夏実は車が走り出した時には「あのねえ、アッコちゃんはけむりのめいろでまえがわかんなくなっちゃってさ、グルグルしっちゃってさ、それで」とずっと話していたかと思っただけで、静かになる。頭を窓枠に乗せて寄りかかり、カケルが気づいた時にはすでにぐっすり眠っていた。口の端にきな粉がまばらにこびりついている。

小さな指にひっかけて持っていたスーパーボールのビニル袋が傾いで、中の水が足もとにかなり零れていた。何で金魚でもないのに、

ボールを水に入れてよこすんだよ、俺も俺だよ、乗せた時に気づけ。カケルは鼻でため息をついて、信号で止まったわっかな隙に、そのビニルを彼女の手から外してハンドルの脇にひっかけた。

家についた時には、少しうすら寒くなっていた。風が強く吹き始め、季節は冬になるのを諦めたわけではないと大声で主張を始めていた。

「なっちゃん、着いたよ」

カケルがゆり起すと、夏実はいったん目を半分まで開いて、また、目を閉じた。

「なっちゃん、おうちだよ、車から降りよう」

琢己がひとりで車から降りかけているのをカケルは横目で確認する、家についたらもう、自分の役目は終わりだ、あとは夕飯にうまいビールでも貰おう、今夜はさすがに夕飯、一緒に喰わせて貰うぞ、圭吾さんのおごりで。

そんなことを考えながら見るともなく琢己の姿を追う。ちゃんと家に向かおうとしている。風に驚いたのか、「いいっ」と鋭い声を発する。風船が風にあおられてかくく、開け放した車の枠に当たってから柔らかく跳ねる。大事にしていたその風船を、今度こそ彼は抱くのだろうか、そう思ったしゅんかん、

琢己は、ぱつと糸を持つ手を放した。

風船は、風にあおられるようにさあつと斜め上空にかけ上っていた。

きゃあ、なのか、わあ、なのか、叫び声を上げたのは誰だったのか、カケルも呆然とそれを見送る。

風船はみるみるうちに昇っていった、そして、青い空高くに黄色い1つの点となって、やがて、姿がみえなくなった。

ういいういいう、と切り裂くような叫び。琢己は泣いているのだろつか。目に涙はない。しかし、そこまで切なげな表情は見たことがなく、カケルの胸がずきんと痛む。思わず

「何すんだよ！ バカだな！」

ぐい、とその腕を引っぱった。「どうして今更、手を放すんだよ！」

琢己は、ずっと青空のかなたを見つめていた。夏実も、カケルもまた目を空のかなたに移し、風船の消えていった方向をじっと見上げた。黄色い点がまだ、どこかに見えているような気がした。

琢己の叫びが、冷たくなった秋の空気をまた切り裂いた。ういいういいう、止めてくれ、カケルは心の中で叫ぶ。泣きわめいているよりも更に、自分には辛い声だった。

恵がサンダルをつっかけて庭に現れた。「おかえり。何の騒ぎ？」夏実が目を戻して、走って行って母に抱きついた。赤い風船が下がりが気味になりながらその後に従った。「たっくんがね、ふうせんをとばしちゃったの、すごくすきだったのに。てをはなしちゃったの、きいろかったのに」

ふうん、恵が非難めいた目を向けたのでカケルは口を尖らせて「手を放したのはタクミだぞ、俺はずっと気をつけて持ってこさせただんだ」

そう機先を制する。だが、恵はちらつと空に目を上げてから、ふう、と息をついて

「飛んじやったものは、還ってこないし」さあご飯よ、と夏実の手を引いて母屋に戻っていった。

カケルはついて行きかけて、ふとふり向いた。

琢己はまだ、青空を見上げていた。消えていったものの行方を探るように。

「イブ」

気づいたら、カケルの口から零れ落ちていたことばひとつ。

カケルは同じように青空を見上げる。抜けるような青、何もかも受け入れるようできて、しかしそれは何もものをも拒絶していた、イブの顔をそこに描こうとしてカケルはしばし、立ち止まっていたが細部が思い出せずやがて諦めて目を落とし、家に入っていた。

じゃれ合い

カケルが25になったばかりの、冬の始めのことだった。

ねえカケル、今日は狼は無しだよ、そう言っただけでイブがいつになく陽気な目をしてきた。それかかかってきた。

何だよ、オオカミなし、って。

無しは無し、だよ。そう言いながらカケルが口をつけようとしていたコーラをイブは横からかつさらい、挑戦的な、しかし笑いを隠しきれない目つきで彼の顔を睨みつけたまま飲み出した。口のはたを小さな泡が寄せ集まった液体が伝い落ちる。

「何で取るんだよ」

カケルが伸ばした手をうまくかわして、尖ったあごを突き出して更においしそうに口に運ぶ。

「返せよ」

もはや、カケルにも闘志はない。笑いながら手を伸ばす。「返せ、

喉乾いてんだから」

「いやだよ。室温もつと下げなよ、暑すぎなんだよ」

「違う、暖房のせいじゃないよ……返せ」

お互いにくすくす笑いながら返せ、いやだを繰り返して揉み合っている。

「よし」カケルは笑いながら「だったらいいかー、いくぞ」あれのをゆけ』……あれ」

バーカ、とほとんど空になったボトルでイブはカケルの胸元をつついた。

「さつき寝てる時に外しちゃったよ、ピアス」

「なぬっ!？」カケルは手を目の前に拡げて、続く腕までぐるりと見渡す。確かに、まだコトバを認識しているし姿は貧相なニンゲンのまま。

「チクシヨー、やりやがったな」悔しがる小学生みたいな声音になる。

「あのねえ」ようやく笑いの発作を収めて、妙に真面目な顔を作ってイブが答えた。

「畜生、ってドウブツのことなんだよ、だからそのまんまじゃん？アタシらが悪口いうんならそうだな……この、ムカイヤめ！」

エアコンが効いて温かかったはずなのに、カケルの両腕に一瞬、鳥肌がたった、がすぐに可笑しくなってきた、笑う。いったん笑いだしたら止まらない。腹を抱えたままイブの方に倒れ込み、ちょうど目の前に飛び込んできた形のよい乳房に舌をのばす。

「何すんの、このヘンタイ」

イブがコーラのボトルを振りまわす。中身が泡となって辺り一面に飛び散った。

「喉乾いてんだ、何か飲ませろ！」

「だから、やだって！ 前から来んな、このヘンタイオオカミ」

「のませろ」

「出る訳ないでしょ、やだっ！ 何考えてんだよもおっ」

カケルは舌を伸ばし、届く限りあたり構わずイブのすんなりとした身体を舐めまわした。これじゃあ、まるで犬だよな、思いながらも本当に目の前の身体すべてが愛おしく感じて、やみくもに舐めまくる。でっかい飴をもらった小さなガキだ、そんな絵が頭に浮かぶ。「くすぐりたい、あはははは」よーし、とイブは同じように舌を出して彼に迫る。

散々相手を舐めつくしたあとで、疲れ果てた二人はそのまま抱き合って眠った。

舐め合ってお互いを味わう、そんな幸せな時はそれから少しして終わった。

そこは山間部の廃校を改装した宿泊施設だった。

彼らは一番近いローカル線の駅まで車で向かい、そこからは狼に姿を変えて山を抜けてその地に駆けていった。

メスとオスは、後になり先になり崖沿いの県道を目的地めざす。時折通りかかる車に見られないように、エンジン音が近づくとびに山側に駆け上ったり、反対側の崖に潜んだり、それでも二時間もしないうちに、彼らの獲物が待つ場所へと到着した。

今回「逢ってくれ」と頼まれたのは14名。高校生のための何かの養成講座を泊りがけでやっている、引率の教員が1名、助手としてついている大学生が2名、残りの11名が高校1、2年生なのだという。

それを全員、というのはあまりにも酷いのではないだろうかとかケルはもちろん思わないではなかったが、やはり命令には逆らえない。今まで殺してきた人間たちのためにも今回だけは「人数が多いし若者だし何だか勉強のために集まっているらしいですよ」と放棄するわけにはいかないだろう。

狼になって走っている頃にはすでに、まったくためらいは感じてはいなかったが。

溪流の絶え間ない水音が切り立った崖にこだまして、カジカガエルの軽やかな歌が合間に転がるように鳴り響く。

潜む叢に虫の音はいったん止んだものの、再び短い生をはかなむような歌が立ち上がる。

二頭は、草で覆われたグラウンドと木造校舎との間にある並木の影に身を沈めた。

グラウンド側から、二階建ての木造校舎だった建物が全て見渡すことができた。一階の片隅、白っぽい灯りがはかなげに漏れる大きな教室がある。調理室なのだろう。白い大きめのテーブルが6台配置され、前側の出入り口に近いひとつに、三人座っているのが見えた。資料をテーブルいっぱいにはるげ、どこかの戸棚から出してきたのだろうか、御揃いの白いコーヒークップをすぐ脇に置いて何か熱心に話し込んでいる。明日の打ち合わせでもしているらしく、引率の教師らしい年配の男と大学生の男子が二人、それでもくつろいだ様子でお互いに向かい合っていた。時々控えめな笑い声も漏れる。高校生たちはすでに眠ってしまったのか、他の部屋は真っ暗だった。

メスが鼻づらを近づけた。

先生をやつつける。アンタは大きな方の男を
わかった

残りの小さい方は、早く済んだ方が
わかった

オスも同じように鼻づらで合図する。

相手は武装していない、それに今は夏休みだ。
そんな思いが油断を生んだ。

二頭は校舎の裏側に回りこんで、廊下側の窓に近づいた。一箇所だけ風を通すためか、網戸にしてあった。

オスは鼻面を網に押し付けそれをたわませようとするが、新しいせいもあってぴんと張り詰めている。そのくせ溝に食い込んで簡単には動こうとしない。破ったり落したりすると音がうるさいだろう、オスは鼻を押しつけたままそつと、戸を脇に滑らせてみた。

下から上に力をかけるようにした時、網戸は難なく横に動いた。そのまま鼻で中のガラス戸も滑らせる。

ぼつかりと開いた口からまずメスが、それからオスが校舎内に忍び込んだ。

「天気、もちそうですよね、上流まで行けるかなこれだったら」
そこまでのことばが廊下にまで漏れてくる。が、急に声が止まった。

虫の音。狼は完全に動作を止めた。

「阿久津先生、なにか」

少し高い声が能天気に響く。

「ん……」椅子が床にこすれて軋きんだ。「田中くん、何か今、音がしなかった？」

「いや、気がつかなかった。ミスキ、何か聞こえた？」能気な声に問われて、少し控えめな低い声がおいてから

「別に」

また少しの間、聞こえるのは虫の声だけ。狼は息をこらす。

「……誰かトイレにでも行ったのかも」

「いや、ぐっすりだと思うよ。今日はヘトヘトだっただろうね、み

んな」また感じのよい笑い声がひくく響く。

声の低いほうが、オスの分担当だった。匂いで判る。大柄なミスキという男、19歳。場所も分かった。オスは左に寄ってメスを回り込む。メスも気づいたらしくすつと身を除けてオスに左を空けて自分は右端についた。先生の所に一直線の位置。

風を通すために、前側のドアと窓がひとつ開いていた。ドアの影にメスが、窓のすぐ下にオスが寄る。

「採集キットを班長に渡す時に、注意してほしいことがある」

阿久津先生のことばがキューとなった。二つの影が黒い疾風となつて調理室になだれ込む。

「！」

オスの視界の端にメスの身体が一杯に伸び上がり、その影で半白髪の方が両手を挙げたのがちらりと映った。オスは目を戻し、一瞬で目の前の『ミスキ』を捕らえた。

二人で作業した一回目の時と、あまり変わりはない。

メスはふわりとのしかかり、軽く先生の首筋をくわえた。動作の軽さにも関わらず先生はいともあっけなく肉を食い破られた。赤い血しぶきが教壇の位置にあるステンの流し台とその前方のホワイトボードを勢いよく濡らした。先生は挙げた両手で狼の頭を丸抱えにしたがその手にすでに力はこもっていなかった。かけていた眼鏡が狼の牙に当たってツルがへし曲がった。ああ、あああとどこかですかな声、そう、もう1人残っている、あまり恐怖を与えてはいけない、オスは自分の唾えた喉首を一気に噛み砕く。狼の身体の下でがっちりした体がぶるぶると震えてズボンの下で固くなった局所が狼のわき腹に当たった。狼は何度も小刻みに顎を動かしてその震える身体を横にずらしていった。何回めかの時に赤黒くなった舌が獲物の口から飛び出しているのがみえた。それほど苦しかったのだろうか、まだ完全に息が止まっていないうだ、首が太いせいなのだろうか、いったん口を離そうか、そう思ったせつな、

「あああああああああああああああっっっ」絶叫とともに何か
が右後脚を束縛した。

ぱつと目を移すと、もう1人残っていた『田中』が引きつった笑い顔にもみえる口元のまま狼の足をしっかりと両腕で抱えていた。友人から獣を引き剥がそうと思ったのだろうか。出ている声はすでに言葉ではない、しかし、それは「離せ、はなせ」とも聞くことができた。

彼の肘の隙間にちかりと何かが銀色に光った。匂いは……鋼、包丁だった。

メスが気づいて先生の上からゆらりと身を起こした。先生の方はすでに動きを止めていた。

メスが低くうなると、オスの脚を抑えていた田中はひっ、と息のみ手を離す。そして、今度はメスに向って両手で包丁をかざしてみせた。女の子のようにひざを内側に入れて床にへたり込んで座っている。そのままの姿勢で後ずさりした時、落ちていた白いコーヒークップを蹴ってそれはくるりくるりとダンスのように床を滑って隣のテーブルの下に消えた。

「あああ、えええ」泣いているのか、笑っているのか、それでも彼はびしょびしょに濡れた顔をしっかりとメスに向けていた。包丁の柄を握る手の関節が白く浮き上がる。

「あああ」すでに廊下側の壁にまで追いつめられ、田中の声が途切れた。メスが低く頭を下げて田中に照準を合わせ、そして

「なにかあつたんですかあ、」

「何さっきのゼツキョー」

廊下から複数の足音が響いた。「先生らがうるさいんじゃ、眠れないよあ」

その声に今まで壊れた人形のようにくしゃくしゃの顔をして固まっていた田中が突如、叫び返した。

「来るな！ 狼が出た！ 逃げろおおっつっ」

オスはちょうど、出入り口のドアに二人の影をみた。女子高生が二人。どちらも髪が短く、日に焼けている、白いTシャツに黒いジヤージ、双子のように似ている、顔は人間的には違いがあるのかも知れないが、今の狼には同じことだった。日向で遊ぶひよこの匂い。そしてもう一人の顔が脇からのぞく。

「どしたの、みんな」その顔も先の二つと同じように、静かにこわばった。すぐには状況が把握できないらしい。「犬……？」

「ケーク、早くみんなに！ 逃げろっ」田中は年長者の威厳を最後に示そうとしているらしい、震えの激しい手で包丁の刃をメスに向けたまま、顔を動かさずに目線だけをありったけ彼女たちに向けてまた叫ぶ。「逃げろ！」

「せ、んせい？」

1人が長いながい悲鳴を発した。それを機にメスが少女たちに飛びかかる。すぐ近くにいた左側の子を軽くかみ伏せ、次に向う。

オスは座り込んでいる田中を大きく飛び越すように弧を描き、開いている窓から廊下に飛び出した。後足の先が田中の額をかすった。狼は後も見ずに暗がりには逃げる少女たちを追った。

階上からどすどすと足音が聞こえる。「なんだよ」「エミの声だった?」「ぎゃあ」「廊下の灯りどこだよ」声が輻輳する。その中でメスが次の1人を倒した。後から調理室を覗いた子のようにだった。声ひとつたてない。オスは脇の暗がり張り付くように立ち尽くしていた1人を前足でなぎ払い(後で降りてきた子のようにだった)、目の前に倒れたところを始末した。

二階から降りてきた連中に最初の生き残りだった1人が叫ぶ。「誰か、だれかだれかだれか」

「なんだよ、落ち着け」男子がひとり、進み出た。それをメスが一瞬で倒した時、同時に廊下の電気がついた。調理室から喉も裂けんばかりの怒号が彼らの耳に届く。

「逃げる! オオカミだ!!」

「まじかよ……」廊下はすでに血で光っていた。隅に倒れていたひとりの綺麗な指が天井を向いているのになぜかみんなの目が向いている。メスは声に反応してくるるときびすを返し、調理室に走る。とりあえずこの子たちはオスに任せるらしい。

オスは匂いを確認する。狼は数を数えない。数えられるのかどうかも考えたことはない。実際、残った生徒は7人のはずだがそれも計算ではなく、匂いで判断するしか今の自分には方法がなかった。倒した子どもはメスが3とオスが1、残った子どものオスが3、メスが4。

一瞬でついた判断で、狼は次の獲物に向かう。大きな跳躍で残った中の一番大きなオスの個体に襲いかかった。

そこからはほとんど考えることなく、狼は次々と獲物を倒した。携帯をかけようとしているものを優先的に襲い、次に非常口から外に逃げようとしていたふたりをまとめて押し倒し、流れ作業のごとくその喉に食いついて絶命させた。

子どもらは逃げるプロではなかったせいで、もしかしたら同時に逆方向に逃げたらひとりくらいは生き残ったかも知れない、しかしやはり、子どもは子どもだった。

最後のひとりは少しだけ知恵を使おうとトイレの個室に逃げ込んでいた。しかし、狼は仕切りの上に跳び上がってほとんど逆立ちせんばかりの姿勢で中に身をねじりこませた。

いぎやああああ、と小柄な少女は叫んでかけようとしていた携帯電話を取り落とした。ちようどこかにつながったらしく、表示が変わったがそれを必要としていた者はすでに狼に喉を咬み裂かれていた。

狼は狭い個室の便座に飛び乗って、そこからまた外に向かって跳躍した。

急に、残してきたメスのことを思い出し、狼は先ほどの調理室に急ぐ。

彼女は一糸まとわぬ姿で、片隅に倒れ伏していた。血が見えた、あまり多くなかった、だが、確かにそれはイブの血だった。

なぜこんなことに、なぜこんなことに。動悸と同じ速さでその問いが頭の中を駆け巡っている。カケルはイブが力なく垂らしたままの右手をずっと握り締めていた。白い陶器のような肌は更に血の気を失って透き通るような青みを帯びていた。がたん、と揺れるたびに座っているベンチから尻が浮き上がる。

「血圧みて」

「105 61」

「国道出ます」

「了解」

救急隊員の単語にも似たことばが彼の頭上で飛び交う。

カケルは半分眠ったようにそれらの声を聞いていた。

狼はイブの傷を見た。大きくはなかったが、右腰から太ももにかけてざっくりと切り裂かれ、出血はいつペンにはないものの、止まる様子がなかった。太ももの傷は切れ目にそって白い皮下脂肪が弾けたようにぐるりと反り返っていた。うう、うう、と彼女は声にならない声をあげる。田中は教室の片隅に身を投げ出すようにこと切れていた。包丁がちょうど、二人の中間地点に左矢印のように転がっていた。矢印は血にまみれている。タナカはオオカミをやっつけました、それがこちらです。みたいな説明にみえた。

狼はイブの傷口を舐めた。とにかく、舐めるのが一番だから。傷の様子もよくわかるし、これならば致命傷かそれほどでもないのか、どれだけ休めばいいか、感覚で分る。

しかし舐めているうちに急に本能が告げた。コノママデハダメ、カケルヲヨベ

舌を出したまま、イメージを頭に浮かべる。ニンゲンニナル、ア

カイいめーじ。

カケルに戻ったせつな、激しい後悔。やばい、俺、何の段取りもたててない。処分は全て済んだ、そこまではいい、でもそこから抜られないってことまで、考えたことあったか？

狼のままでは帰れないのはよく解っていた。イブは自力で動けない。意識さえ朦朧としているのに。かなり舐めたにも係わらず、血はダラダラとまだ流れている。このままでは死ぬ。

外には先生と大学生が乗ってきた車が停めてあったはずだ、ミニクーパーもあったので、キーさえ見つかればどれでもすぐ乗って帰れる。イブだって運べるはずだ。服は学生や生徒の着替えがどれかあるだろう。しかし、一番近くの病院はどこだ？ それに、何と云って入ればいい？

はっと気づいて、とりあえず手近な田中のポケットを漁る。持っていない、ではミズキは？

ミズキのポケットの中から財布。学生証と3万円弱の現金、そして、ありがたいことに反対側のポケットからは携帯電話。すばやく取り上げる。身につけたままだと、間もなくやってくる『片付け班』の蟲たちに全てを喰い攫われてしまう。とにかく外部に出られる手だてを素早く考えないと、それと、イブを助けないと。優先順位は何だ？ 車のキー？ 服？ それとも……

「イブ」軽く、その血の気の失せた頬をはたく。「イブ、しっかりしろ」

うつすらと彼女の目があった。長いまつ毛が痛々しく痙攣している。

「救急車呼んでやるから」すでに、背後ではさわさわとかすかな蠢きが耳朶に届き始めた。虫の音とは少し波長が違う、擦れるような風のざわめきにも似た音。シゴトの後で必ず聞く、その音。

蟲たちがすでに近くまでやってきていた。ざわめきは少しずつ音量を増して四方八方から押し寄せる。あたりが静かな上に、斃した獲物が多かったせいでいつもよりも目立つ音で校舎に押し寄せてくる。

イブが顔をしかめる。声はない。しかし、携帯のボタンを119と押して耳に当てようとした時、ようやく手を伸ばして、それをひっかけて取り上げようとした。

「ばか」カケルは少し伸びあがるように手をよける。

「死んでもいいのか？」

イブの目が少しだけまた開いた。「ばれたらどっちにしても終わりだよ」「そうつぶやいたように聞こえた。気のせいだったかもしれない、聞き直そうとして

「はい」相手が思いのほか早く電話に出て、彼はあわてて声を出す。「救急です。はい、けが人です。腰と足に切り傷。血が止まらなくて意識がもうろうと……はい、ええと」ぞつとしないことに気づく。蟲たちの消化作業にいったいどのくらいの時間がかかるのだろう、いつもならば感覚的に15分くらいか、と思っていたのだが今回は処理すべき数も多い、飛び散った血も半端な量や範囲ではない、蟲たちは確実に処理してくれるがそれでも時間はかかるだろう、救急車が来る前にそれらが片付いていなかったら、一体どうすれば。

場所を伝えると、少し時間がかかる、といったニュアンスのことを言われたので心の中でほっとしながら「何分くらいですか」と焦

つたように聞いてみる。1時間は待たせない、もし意識が無くなつたらこういう処置を、あと、止血はぎゅっと縛らないできれいなタオルを何枚も上から乗せて……などと具体的な話を聞く。

背後ではすでに、倒れた獲物たちが消化されゆくひそやかな音で満たされていた。カケルはできるだけ送話口を覆うようにして、早口で「待ってます」と言ってから電話を切った。

大急ぎで二階に走り、適当な服を拾いだしてくる。男子が一部屋しかなかったのでそこを見つけるのにすこし苦労した。それでも10分もしないうちに一揃いみつくるう事が出来た。

服を着ずにまた階下まで降りる。階段途中から下の廊下一面に、ヤツらが見えた。黒い鱗のようなものに覆われた艶やかな丸い背中、アルマジロによく似ている、それよりも巨大なダンゴムシだろうか、掴まえてみたことがないし、みようとも思ったことがないのでよく分らなかったが、殺戮現場を綺麗にすることには、格段に長けていた。「来た時よりも美しく」カケルの姿でこいつらを見かけるたびに、その標語が頭をよぎった。

後片付けを蟲に任せ、カケルはまたイブの元にかがみこんだ。四つん這いのまま、また狼となつてとにかく、舐めて、舐め続けた。

40分かそこら舐め続け、遠くからサイレンの音が聞こえてきた頃、ようやく彼は起き上がり、人間の姿となつて服をつけた。イブにも手早く下着と体操着を着せる。この歳になつて女子高生の体操服を着せるなんて、どこかひきつった笑いが浮かぶのを必死にこらえ、なんとか傷に触らない場所までハーフパンツをあげてやる。着衣でついた傷ではないのは明白だが、今はとにかく命が助かることしか考えられなかった。ふと、俺だけそのまま逃げればいいんだ、と気づいたがその時にはすでに「どこですか」大きな呼び声と白っぽい長衣が窓から近づくのが目に入り、

「ここです」と大声で答えていた。

イブが助かったのを確認できてから逃げよう、カケルは大きく息を吐いて、立ち上がった。

隊員には、カケルは引率の大学生のひとり、タカクラ・ミズキと名乗っていた（学生証が彼の尻ポケットの財布から見つかった）。イブのことは、高校2年のヤマザキ・エミさんです、確か、と伝えていた。はい、急に何人かのヤツらが襲ってきたようです、僕は殴られて気を失ったんであまりみてなかった、気づいたらエミさんがそばに倒れていて、え、刺されてる？ 他のみんなはどこに？

動揺している演技はさして必要とはされなかった。誰もがみな、イブを救おう、一刻も早く病院に運ぼうと懸命に働いている最中だったので、彼からはあとでゆっくり話を聞こうと思っただけ。家族に連絡をとれないの？ 主催団体の連絡先は？ 矢継ぎ早に聞かれた時には頭痛がひどくて答えられないフリをしたらとりあえずスルーしてもらった。

頭痛の演技もあまり過剰にならないうちに、救急車はようやく病院に滑り込んだ。この近辺では一番大きな総合病院なのだろう、残念ながら彼らが車を置いた駅からはかなり離れて、もっと海の近くに連れてこられていた。

ひやりとしたのが、一度隊員が彼女のピアスに手をかけた時だった。「あ」思わずカケルは中腰になる。

「それ、取らないでやってくれますか」そう言うカケルの耳を、隊員は興味深そうにみやった。同じピアスだ、ナンダコイツラ、デキテンノカ、穏やかで平凡そうな隊員の目に、ちよっとだけ意味深な光がはしる。「処置にジャマなら、とるかもしれないけど、いいね」「はい」隊員は手を離れた。とりあえずは処置には差しさわりがないらしい。

降ろす時に隊員に「キミから先に降りて、後ろから」そう声をかけられ、やっとイブの手を離す。その時、彼女の目が動いたのでは

つ、と見据えると

「びよういんに、けいさつ」ただそれだけ言って、また浅い呼吸に変わった。

それでも今さら、彼女だけ見捨てて逃げる訳にはいかない。カケルは降りる時、少し目を遠くにやってあたりを伺った。この車の赤色灯以外には赤く点滅するものは見えなかった、しかし、駐車場のやや端に近いあたり、闇に沈んだ中に白と黒とのツートンを見た気がして、心臓がひとつ跳ね上がった。

「きみ、頭をなぐられたんだっいたら一度見てもらった方が」後ろから急に声をかけられてまた飛び上がる。

「いえ……」待合室にずっといたら、それだけ早く警察に尋問されてしまうのではないか、急にそう気づいて

「あ、やっぱりお願いします、頭痛がひどくて、あと首も……」大げさに両手で後頭部を抱える。

うつむきながら、できるだけ周りにいる人間と目が合わないように救急外来へと入っていった。

イブはストレッチャーに乗せられ、先に処置室に運ばれていった。移動の際、彼女は大きな声で「痛いいたいいたい」と叫ぶ。初めて聞く声の調子に、急にカケルは誰についてきてしまったのだろう、と一瞬立ち止まる。だが、すぐに気を取り直して後を追おうとした。その時ちようど受付から「手続きを。保険証はありますか」と声をかけられた。

「合宿所に置いてきてしまいました、すみません」頭を抱えたまま声を絞り出す。

「なら、書けるところだけでも書いて受付してください」

渡された2枚の紙に、ヤマザキ・エミとタカクラ・ミズキの適当な生年月日と住所を埋めていく。電話番号はすぐに検められるとまづいので「今すぐにはわかりません、俺は下宿で、実家には今誰もいません」と紙を出しながらそう逃げる。

「どこか、学校とか主催団体の連絡先は？」

「……夜中だと、連絡がつかないと思います」

「引率の先生は」

そこで切なげに訴えてみる。「阿久津先生、気がついたらいなくなつてたんです」

受付は同情に満ちた目で彼を見た。カケルはたまらなくなつて下を向く。

「とりあえず、そこで座つてお待ち下さい」

背後に幾人かの会話が聴こえる。「付いてきたのが、だれだつて？」警察官の声だ。

ここにいても限界だろうか？ カケルは次の動作に移るべきか束の間、迷つて立ちかけた。

そこに処置室から大声が響いた。「どこにいった!？」

何だ？ 警官がプレーリードッグのような横顔でそちらを向く。

「何か」

「さつきの子」さすがに救急とはいえども人目のある外来だと気づいたらしい、看護師が口を押さえてからあわてて彼らのもとに駆けよつてきた。押し殺した声で訊ねる。

「ヤマザキ・エミさんについてきた方は？」

カケルは警官の脇を抜けて、前に進み出る。みんなの視線が痛い。何があつたんですか？ 警官が聞くが、看護師は答えずに、そこに居合わせた数人を順繰りにみた。誰に言つていいのか、という顔をしている。そこに担当者らしい医師が早足でやつてきた。

「ヤマザキ・エミさんの付き添いの方、ちよつと来てください」あなたは何？ と警官をいぶかしげな目でみる。

「田尻警察署のオンブチ、と申しますが」声が大きいのは地声なのだろうか。

「けが人が搬送されたと聞きましたので、状況をお聞きするために」オンブチと名乗つた警官は一旦カケルの方を鋭い目でみたが、医師が「なら一緒に」と手まねきしたのに合わせ、すつと目線を外し、中へと小走りに入つていく。カケルも後に続いた。

看護師が指し示した処置室の白いベッドはもぬけの殻だった。乱れたシーツにはおびただしい血の跡、そしてその素足で引きずったような赤い軌跡は床に伸び、更に、枕元の棚を汚して少し高い所についていた窓にまで続いていた。

普段あまり開けた事のなさそうな、薄汚れた窓は大きく開け放たれていた。

みな無言のまま、その様子を眺めている。カケルはゆっくりと窓際に歩み寄り、外を覗いた。

暗過ぎてよく見えなかったが、下の植え込み、ツツジだろうか、踏み荒らされたようにひしゃげ、少し離れたコンクリートの上に、体操着だったらしいぼろ布が闇にいくつか浮かんで見えていた。その辺りまで、血だるうか黒っぽい染みが大量に散っていた。

イブは、姿を消していた。

警察で事情を、ともちろんそういう話になって彼は大人しく「分りました」と答えたが聞きたいのは俺の方だよ、とずっと心の中で叫び続けていた。

車に乗り込むまで、さりげなくTシャツの下でジーンズの前ボタンを外してジッパーが引っかかるないように1センチほど下げている。いた。

パトカーに近づいた時、彼は思い切り脇に跳んだ。あっ、と声が上がる間もなく彼は植え込みの向う、段差になって落ち込んでいる道路へと身をひねるように落ちていく、落ちる瞬間にどうにか狼になつた。

ジーンズが足に絡んだのを後ろ脚で蹴るように跳ねのけ、その勢いそのまま病院の背後に迫る山へと駆けていった。Tシャツの最後の切れ端が藪にひっかかってはらりと落ちる。ジーンズは運よく蹴っ

た時に脱げてしまったらしい、トランクもそのうちに「みし」という音とともにスリットから裂け目が入り、しっぽを一振りした時にどこかの暗がりには飛ばされていった。

背後でずっと、誰かが何か叫んでいたがすでにその声は遠くなくなっていった。

血の匂いを辿れば、彼女は捜せるかもしれない。どこかでそれは感じていた。

それでも、別のどこかではずっと、狼は怯えていた。そして、昏くらい思いに囚われていた。

メスは逃げたのだ。血の跡をひきずりながら、ひとりきりで、彼を置いて。

それは死に場所を求めて。

合宿所からの集団失踪事件が大きく騒がれる中、数日後の夜7時頃にムカイヤからの電話を受けた。

カケルが訊ねる前に、あちらから教えてくれる。

「彼女はね、いなくなってしまったので」

もうシゴトをしませんから、これから一人になるけど、よろしくお願ひします、と仕事の引継ぎ以外の何物でもない内容だった。切れる前にあわてて彼は聞いた。

「こないだのあの……シゴトの件は」

これだけ騒ぎになってるのがやはり気になった。カケルらしい人物の似顔絵まで公開されていたし。電話の向こうに、少し沈黙があった。カケルが慌ててことばを足そうとすると、

「あれは、もう全て終わりましたので心配ありませんよ、ご苦労さまでした」

いつもより、何となく事務的な平板な口調でそう言って、ムカイヤは電話を切った。

のろのろと、彼は電話を戻す。確かに、駅に乗り捨てた車もムカイヤが人をやつてすぐ近所のスーパー駐車場まで届けてもらっていた。しばらくあの近辺を歩かない方が無難だろうが、とりあえずカケルのシゴトはひと段落ついたのだ。

事件は、連日連夜大きな騒動となってテレビのニュースを、そしてワイドショーを賑わせていた。当初は重要参考人として、カケルらしき似顔絵もさんざんテレビに登場していたが、なぜか引率の阿久津という教員に徐々に疑惑が集まっていた。彼の過去を根掘り葉掘り報じる番組も相次ぐようになった。

数週間後、報道がやや下火になった頃、カケルの預金通帳に入金

があった。

「800,000」が二口。合計160万円。

つまり、ひとりあたり10万円余のシゴトだったらしい。

いなくなったイブの口座にも同じ分だけ入っているのだろうか、それとも総額でこれだけなのかは確かめようがない。いつもより高いのか安いのかすらよく把握できない。

カケルは何度もその黒く印字された数字を見直す。そして全然別の事を思う。

きつちり、端数すらないんだ、そんなものなんだな。

あの人たちは苦しんだり、泣きわめいたり逃げまどったり……この世の終わりに遭遇した。

そして俺はその代償に、こうして端数がない丸まった金額を受け取るんだ。

自分の内側からも大きな分身をこっそりと削り取られて。

涙も出なかった。その部分も削り取られてしまったのだろうか。

走り出したら止まることのない諸々

俺はどちらの連中からも言われた。ムカイヤたちからも、群れからも、

「お前は狂っている」と。

そうだろうか？ 俺から言わせれば、雇い主も群れの連中も極端に常識から外れていたとしか思えない。

雇い主は俺には理解もできない理由で次々とヒトゴロシをさせて、それがお前の本能だからちようどいいだろう、お前も自分に忠実に生きていけるし、こちら都合がいい、といった顔で澄ましていた。俺はそれが当然のことだと思いついていたのだ、ムカイヤに会った時からずっと。何故なのだろう。

あの男、石鹼の残り香がする男に関わってから、俺の中で何かが大きく変わっていった。

もっと早く気づけばよかったのだろうか。
変わる時はいくらでもあったはずだ。
彼を殺す前を遡っていけば、いくらでも。

オヤジが死んだ晩か？ あり得ないような晩、自分がいつも無造作に奪う命を、救おうとする人たちを見ていた、あの時。

または、山の中であの若い男を逃がした時？ 死を避けたという行為であれだけ酷い罰をくらった初めての日。苦痛と屈辱を味わわされたのに、俺は罰は罰として受け止めてしまい、何の反抗心も抱かなかったのだ。あの時気づくべきだったのか？

それとも琢己が風船を飛ばした時か？ 愛するが故に手放してしまおう哀しみを知ったあの時……いつまでも愛するものを手元に置く

ことができないと悟った青い空の下で？

イブが消えた晩だろうか。高校生たちをたくさん殺してしまった夜……イブがいなくなった時に、俺もそのまま逃げてしまえばよかったのだろうか、元の場所に戻らずに。そしてそのままただの狼として暮らす、二度と人間に戻ることなく。殺すのは、食べる時、そして身を守る時だけ、みたいに。

ナミキ・シズエの顔を噛み割ってしまった時はどうだろうか？俺は実際、どう感じていたのだろうか、あの瞬間。悦んでいなかったとは言わない、しかし、本当に感じたのはそれだけか？

狼として他を殺すことについては後悔はない、ただ、人間に戻った時に激しく動揺してしまうのはどうしてなのだろうか？

殺すということに、どういう意味があるのだろうか。生きるとか生かすいうことは何なのか？ 命を生みおとしながらその命がすでに消えゆく時を思い、激しく後悔してしまった恵と、人間としては躊躇いながらも嬉々として殺し続ける俺と何が違うのか。

ひとの命を無作為に奪っていく『意思無き排除作業』がもし起こらなかったとしたら、俺は一生、生死について深く考えることなく流される人生に甘んじていただろう。

自慢じゃないが、俺は物ごころついた頃から徹底した事なかれ主義者だったと自負している。何ごととも穏便に済ませたいし、争いは極力起こしたくない。誰とも仲よく、しかし一定の距離をとりつつ静かに暮らしたい。

愛する者、愛する世界だけに囲まれて平和に。難しいことは考えず。

しかし、あれが起こったからこそ、俺はこんな形で生きることになったのだろうか、生きることを見事に考えられるようになったの

だと思っ。

皮肉なことだけれども。

すべては走りだしてしまったこと。そして、いったん走り出したらものごとは止まることを知らないのだろう。

『群れ』に出逢ってしまったのも必然だ。

ムカイヤたちと対立しているはずなのに、同族であるアイツらも別の意味で俺を縛りつけた。どちらも、俺に苦痛と屈辱を浴びせ、狂気の檻の中にがんじがらめにしようとした。

意思無き排除作業が人類の預かり知らぬところすでに何らかの必然性があったのだと言うのなら、ムカイヤたちも群れの存在も、人生についての問いに対する当然の答えだったと言える。

そう考えると、俺にとつて『意思無き排除活動』ですら、祝福でもあり、呪いでもあった。

ひとつの枷から解き放たれると同時に、次の枷につながれる。転売される牛のようなものか。所詮、人生とはそんなものだ、と俺のどこか頭の片隅に住む醒めた妖精はそうせせら笑っているけどな。

あれは、こういった意味があつてニンゲンが襲われていたのだろう。

時々、とりとめもなくそう感じる時があつた。

多分、俺だけじゃない。同じような事は、人類全体が次から次へとあぶくのごとき思いを煮えたたせる度に浮かべているのではなかっただろうか。

狼の俺が襲つたヤツらの大半も、感じていたはずだ。どうして自分が、つて。そして、これはいつたい何が原因なのか、と。

この疑念が生じるたびに、俺の頭には田園の光景がひとつ、浮か

んでくる。

もう少し普通に暮らしていたあの頃、ほんのつい最近のことには
違いないが、不可逆的なあの日々。

犬の散歩だった。田んぼ道を、俺はサンダル履きで歩いていた。

あの時、草地でごく平和に暮らしていた蛙たちは、いったいどう
感じたのだろうか、襲い来る相手が犬とすら気づいたのかどうか。

今になって浮かぶ光景としては、あれは全く、相応しい以外の何
物でもない。

犬にひっぱられて

ラブを散歩させながらカケルは、つらつらと思いを垂れ流して歩く。

自分というのはいつもこんな感じなのだろう。犬を連れ歩いていて、ソイツをしっかりと制御しながら道を歩いているつもりなのに、気がつくともソイツに操られながら惰性で進んでいる。進んでいるというのはまだ前向きな言い方だ、ただ、動いている、というだけ。

しかも、その犬の散歩ですら姉から『命じられた』作業だときている。

俺の主体性は、いったいどこの世界にあるのだろうか。カケルは思春期以降この三十過ぎになるまでの決して短くはない期間、幾度となくその問いを頭に浮かべて放り投げていた。

そして今も、それが心の中、漆黒の宇宙を慣性の法則に従ってゆるゆると飛んでいく様をいつものようにぼんやりと呆けたように眺めている。

それは普段、部屋で寝転んでいる時によくやっていたが、歩きながらでもできることだった。もちろん、犬を散歩させながらも。

急にリードがぴん、と反対方向に引っ張られて、カケルは草地でよろめいた。サンダルが脱げかかる。

「つんだよ」

右手に二巻きくらいリードを締め、犬を引っばって戻そうとする。「こっち来い、ラブ」

ラブは舌を長く出して、ちらりと上目に彼を見ながら丈の長い草の中から帰ってきた。

申し訳程度にしっぱを振ってみたものの、すぐに反対側の空き地に何か動くものを認めたらしい、急に軽い跳躍をみせてその中に飛

び込んでいった。

刈り取られて倒れた枯れ草を叩きながら、ラブは腰が抜けたかのような低い伏せの状態のままあちこちに飛びまわり、何かを懸命に抑え込もうとしている。

カケルが近づいてみると、黒い小さな蛙が数匹、犬の足もとに跳ね必死にどこか安全な場所へと逃げようとしているのが見えた。犬は口と前脚とを巧みに使ってリードの届く限りの範囲で、どたばたとそれらを捕まえようとしていた。

犬は狩りが上手ではないのか、蛙の動きに視線をなかなか追いつかせることができないようで、すぐに追いかけている獲物に逃げられていた。少し離れたところでぴよんぴよん跳んでいるものはすぐに目に入らないらしく、一旦追いかけはじめた獲物に、つい夢中になって深追いしては見失う、ということを繰り返している。

「ばかだなあ、ラブ」カケルはまたぐいとリードを引いた。

「そつちじゃない、左にいるじゃん、大きいのが」

犬は自分のすぐ左にいる大きな蛙には気づかず、たった今逃がした小物が跳んでいった先を恨めしげに眺めていた。そのチビでさえ、すでに犬の目をごまかしてしっぽの後ろへと向きを変え、草陰に潜んでしまっていた。

「オマエはほんと、鈍いよなあ」

カケルがため息とともにそのことばを吐き出したとたん、ラブがいきなり前方に大きく跳ねた。油断していたのもあって、カケルは「うあああつ」と引っぱられて前につんのめる。踏み出した左足の先が緩い泥の中にずぶりと沈み込む。

「何すんだよ、このアホ犬」

ラブはそんな罵倒には一向にお構いなしだった。そうだろう、かなり大きいヤツをどうにか掴まえることに成功していたから。目をキラキラさせて何度かあごを動かし、しっかとかくわえ直している。

蛙の白っぽい足先がぴくぴくと口の端から覗いていて、カケルは思わず顔をしかめた。

「おい……」ラブは蛙をしつかと啜えたまま数歩、先に進む。今では獲物を獲った方が主である、といった感じにあごを上げている。

「ラブ、それ離せよ」カケルが言うと、急にラブはそれを足もとに落とした。白い腹が上を向いた。と、次にラブはそのぐったりした蛙に口の端を近づけ、何度か自らの頬を当てた。それから、その遺体の上に横たわり、頬から肩口にかけて何度もなんども擦り付け始めた。目にはどこことなく恍惚の光を浮かべている。

「うっわ」顔をしかめたまま、カケルはリードも引くのを忘れ、それを見守っていた。

止めさせたほうがいいのかな？ それともこれはインディアンの儀式みたいなもので、やらせとくべきなのか？ 匂いに反応しているのか、それとも本能なのか、カケルも少し集中すれば匂いは嗅ぎとれたかもしれないが、鼻をつかう気にはどうしてもなれなかった。ピアスしてなくてよかった、しみじみ思いながら、ようやく正気づいてリードを強く引く。「やめろ、ラブ、やめろよ」

ちりりん、自転車のベルと軽い波のようなチェーンの音が近づいてきた。

「そう兄、何してんの」

夏実が真っ赤な顔に汗をぽつぽつ浮かべて帰ってきた。聞いたら、プールからの帰りだという。髪がひとかたまりにもつれたまま濡れ固まっている。白と水色の半袖ワンピースは、すでに夏ですが何か？ と開き直ったような明るさがあった。

見りゃ解るじゃん、という前半部分の科白は呑み込んで「ラブの散歩」とだけ応えると

「あ、ラブ、また蛙獲ってるでしょ」まるで恵みたいな口調になった。

「蛙はね、寄生虫がいっぱいだから食べさせちゃだめなんだって！」「食べさせてないよ」思わず気弱に言い訳している。

「ラブが勝手に獲ってるだけだし、食べないでその上を転げまわってるだけだし」

「うへええ」あんなにいつも可愛いかわいと犬に頬ずりしている夏実なのに、それを聞いたらとたんに可愛い顔をしかめてみせた。

「きもい、きもい、キーモイー」

「なっちゃん帰って来たんだっいたらあと散歩させてよ」さすがにむっとして、カケルがそうリードを持ち上げると

「今からアユナちゃんちに集まるんだ、またねー」

片手を振って自転車に向き直ると、鮮やかにそこから去っていった。

ぐい、とまたリードに圧を感じ、カケルは軽くよろめく。ラブはまた蛙を見つけたようだ。

「つき合ってらんねえ、もう帰るぞ」

低く犬を脅して、その後はいくら引かれようと知らん顔してどんどんと家に向かって歩き出す。

犬は最初のうちはフラフラしていたものの、そのうちに相手が本気だと悟ったらしく、急にしおらしく彼の脇について歩いていった。

あつという間に夏は終わった。

父が亡くなったのはまだ梅雨も始まったかどうかという頃だったから、そのひと夏はまるで、誰かがよく切れるハサミでくるくると切りぬいて、そのまま黙って持って行ってしまったかのように、彼らの家庭から奪い去られていった。

初盆にはしきたりどおりに火を焚いて、俄かに用意した新しい仏壇に見よう見まねの棚を作り、蓮やら柿やら、栗の枝をかけたり供え物を上げたりした。

坊さんがあわただしくバイクでやって来て、それでもよく通る声で朗々とお経をあげていった。家族はみな神妙に座り（琢己だけは居間でトムトジェリーを観ていた）、初盆見舞いの客が来るたびに、恵やその辺に行き合わせた家人がどたばたとお茶を用意して、それなりに会話をしたりしていた。

しかし、それらは別に夏の風物詩でも何でもなく、季節を味わう、という内容のものでもなかった。ただ、やらねばならない決まり事をひとつずつ片付けていくかのような。

それは父が亡くなった時にやった、救急措置から消防への通報、病院を経て死亡を確認した時のように、更に続いた葬儀や諸々の始末のように、ひと繋がり単なる行為にしか過ぎなかった。

急に、涼しい風が首筋を撫で、そのうちに風はだんだんと物寂しさを増し始め、空が抜けるように青くなってきた。

カケルは高い空を見上げ、何か影が見えないか目を凝らす。昔、琢己が風船を飛ばしたことがあった。こんな空の日は、それを思い

出す。風は時おりカケルの周りに渦をまくようにまとわりついたが、歩く度に聴こえていたピアスの歌もずつと聴かずに済んでいた。

ある日、カケルは唐突に小包を受け取った。追いかけるようにすぐに電話、ムカイヤだった。

「たいへんだったね、カケルくん」

挨拶の後、ムカイヤのねぎらう言葉が少し続いた。父が亡くなつて病院で彼に電話してから、実は一度、電話は受けていた。あの晩にやり残していた仕事は、他に頼んだからキャンセルということでお願ひします、資料はすでに捨ててあるよね、そういった電話だった。それから全然電話がなく、しばらくは休ませて貰えているのだろうか、と何となく相手の気遣いを感じていたところだったのに、また、この声を聞いてカケルは急に首筋と言わず、背中までに寒いものが駆けあがってきた。

小包もあつたばかりだったし、電話は予想してはいたのだが。

思いのほか大きな荷物。A4程度の大きさで、厚さはゆうに5センチは超えていた。これは、複数が相手の時にはたまにあることだ。

「どうにか、落ちついたかい」

「はあ、」つけたくはなかったが、習慣的に「おかげさまで」と言つてしまった。

今回、また近所になるけどお願いしたいんだ、ムカイヤの労わるような優しいげな声が続く。

詳しくは資料をみてくれないか、少し厚いけど、何、そんなに大した内容はない。なんせ、今度は官公庁絡みなんだね、仕事の後に少しだけ、注意して貰わなければならぬことがいくつあつて。いつもならば、後処理の人たちが何かと片付けたり掃除したりしてくれるんだが、今回はあまり、他人目につく人間たちを多くしたくなくてね。

電話を切つてから、カケルは離れに入つて包みを開いた。

まず名前を確認する前に、小さなプラバックに入っただまのハンカチが1枚落ちたので拾う。薄い、男物のハンカチだった。何だ、よくある柄だな。見たことあるような。拾い上げて袋から出して軽く鼻に当てる、ふと、気になることがあってもう一度鼻にもっていく。

手を洗うための石鹸、2種類が混ざっている。1つはよくある緑のやつ。シャボネットだったっけ？ しかもこりゃ、業務用だ。もう1つは、少し特徴がある、でもどこかで自分も使ったことがある。そしてこの拭いた手の香り。

茶封筒に入ったレポート用紙に、名前があった。たった1人だった、しかしカケルはそれを見て凍りつく。

<ホンゴウチ・ユキヒコ>

匂いが記憶につながる。

病院で会った、あの若い刑事だった。

あまり急がなくていいからできるだけ慎重に、確実にお願いします、とのことだったのでカケルはとりあえず、彼の様子を見に出かけてみた。

住んでいるのは官舎らしく、長屋のように隣とひと続きになった簡素な平屋にホンゴウチは寝起きしていた。独身らしく、つき合っている女性も今はいないようだった。

何だか、俺と似てるな。土手沿いの車道、大きな桜の木の下に車を停めて、いかにも携帯で会話しているかのように耳に当てながらカケルはその住処を見おろしてしばらく佇んでいた。

いつもいつも車では疑われるだろう、とバスに乗って近くを歩いてみたこともあったし、わざわざ車を少し離れた河原の空き地に停めてそこからジヨギングのふりをして土手を行ったりきたりもした。夜半にも2回程覗きに行った。

夜は、一回目には11時過ぎに明かりがついて家の脇に黒いバイクが停めてあったのだが、次の時には、同じ時間でも真っ暗で、バイクもなかった。多分、警察署に泊まり込みになる時があるのだろう。勤務表が手に入れば少しはシゴトの役に立つのかも知れない。そのような追加調査は、ムカイヤに頼んでもいいいらしかった。しかし、そこまですることはめったにない、とりあえず、あるだけのデータで対処してみようか、と思い始めていた。とにかく、あまり面倒なことをしたくなかった。

ホンゴウチは刑事と言っても私服警官というわけではなく、刑事課に所属するというだけで、田舎町の警察署で普通に勤務する警察官というイメージだ。

ムカイヤたちからどうして処分の依頼があつたのだろうか、6回目の下見となつた時、運転席に座つたままかけているフリをしていた携帯を置いて、カケルは座席に深く座り直す。

殺す理由なぞ、そう言えば今まで深く考えたこともなかった。

細かい下調べが面倒くさいのと実は同じところに根があるのでは、と頭の中をよぎる。

怖いのだろうか。殺す者たちを詳しく知ってしまうのが。これ以上ここに来てはいけない、漠然とそう感じていた。

事がつながってどこでその連鎖を止めればいいのか判らなくなる。連鎖が止められない、何だかとてもなく莫迦げた事態なのではないか、そこに踏み込んでいくのを止めた方がいいのではないか、と思ったのが、まさにその時だった。

カケルはたった一人、暗いトイレの個室内に座っている。暗い、もちろん、灯りはつけていない。

前に一度だけここに来た。真夜中、死んでしまった父と、医者と看護師と。

総合病院の地下一階、霊安室近くにあるトイレ内。一糸まとわぬ姿で、彼は個室の便座に腰掛けて、そして、待っていた。

すべては偶然と、とっさの判断との結果だった。

その日の午後一番に、カケルはまた、ムカイヤからの電話を受けた。

ホンゴウチの件を急ぐように、との催促だと思い込んでいたので、「はい」やや控えめに電話に出た彼は、ムカイヤの意外なことばに「えっ」と再度聞き直す。

ムカイヤの優しい声はいつものことだが、その中にいくばくかのためらいを感じとる。

「あの件とは別に、少し急ぎでお願いしたいことがあって」「オーダーが重なったのは初めてだった。

「あちらはもちろん、慎重にやってほしいので当分手をつけなくても大丈夫だよ、でもね、申し訳ない、もう1つの方をできれば今週中にお願ひしたいのだけれども」

こちらも、ほどほどに近所の部類だった。かなりの高齢者で、一

人暮らし。身の回りのことはたいがい独りでやっているらしい。いつも決まった時間に犬を散歩させるために外出しており、散歩のコースも時間も決まっているので「会う」ならばその時　　早朝か夕方がいいだろう、とムカイヤは言った。

山に近い細めの市道と、少し大きな川沿いの土手とが老人の散歩コースだとのことで、夕方近く、カケルは車でその場所を見に行つた。

もし何ならばついでに、と思ってピアスをつけて出かけてみる。あまりたくさんのシゴトをいっぺんに抱えるのは気が重かったから。しかし、その老人が犬を散歩させている様子を観察して、やはりやるならば早朝が良いのかもしれない、とそのまま家に引き返した。

黒縁眼鏡の、痩せた後姿をこれまた毛のぼさぼさしたような痩せた中型犬がとぼとぼとついて歩いていった。犬の色もよく判らないくらいくたびれた感じの色合い、その一人と一匹とだけ、周りとは違うセピア色の補正がかかっているかのようだった。

明朝、また来てみよう、とカケルはピアスを外さずにその晩を迎えていた。

その晩、太一が高熱を出した。夕方から何となくはしゃぎ過ぎだとは思っていたのだが、夕飯の席で盛大にもどし、その後急にぐったりと床に座っている。

「救急に連れていかなくちや」

啓吾が反射的にそっぽを向いた。すでに彼は2缶目のビールに口をつけていた。ちなみに、幼い息子がおもいつきりゲロを吐いても、彼は顔こそしかめなかつたものの、立ち上がるうともせず、少し顔をそむけながらビールを呑んでいた。恵がやや荒い動作で床を拭きとっている時にも、邪魔になるかな？ とは思ったらしく自分の座る椅子をわずかに後ろに引いたくらい。

冷酒のグラスをちょうど持ち上げたカケルに、恵はすぐるような目を向けた。

「そうちゃん、お願いできる？」

「ええええ」そのままグラスを口に運んでしまおうか、ちょっとだけ意地悪な気持ちも芽生えたが、どたばたと次の雑巾を持って走っていく夏実と、床にバレーの何かの型のようにぺったりと折れまがつている太一を見て、仕方なくグラスを置く。

「今からすぐ行くの？」

「ううん、まず病院に電話しとく。そうちゃん、悪いけど車、玄関の所まで出しといてくれる？」

「いいよ、の返事も待たずに、恵は早速、病院の救急窓口で電話を入れていた。」

冷酒、呑みますか？ と啓吾の方にグラスを滑らせると、いや、悪いねえ、と彼はカケルの目を見ないまま気まずそうな笑みを浮かべた。オレハシゴトツカレデウゴケナイシナ、という笑みにとれてそれはヒガミだと十分認識していたにもかかわらず、カケルはわずかに眉根を寄せる。

そう言う時はお願いします、だろ？ ちよつと心の中で突っ込みながら、カケルはキーを取りに離れへと戻っていった。

救急窓口で手続きが終わると、恵はぐったりとした太一を抱いて手近なソファに座った。

「そうちゃん」空いた方の手をひねるような形のままバッグに突っ込んで、ようやく小さな小銭入れを出す。

「帰りは遅くなると思うわ、ごめん。どっかで休憩していてくれていいから。これで珈琲でも飲んでて」

「いいよ、金持ってるし」

「いいよ、この中にもあんまり、入ってないけどね」

押し付けるように恵が渡した財布を、カケルはシャツの胸ポケットに入れた。

ぼんやりとあたりを見渡すと、この夏の始めにここに来た時のことと急に昨日のことのように蘇ってきた。そうだ、俺もこのソファに最初座った。子連れ夫婦、奥さんが高熱を出して来てたな、あそこに座っていた。

今夜はやや人が少ないらしく、訪れている人も今のところ3組ほどしか見えなかったし、窓口からも人の声はしてこなかった。

ふと、救急車用駐車スペースに二つの影がみえた。警官らしい水色のシャツ、カケルは思わず目を反らし、それからさりげなく、またそちらに目をやった。

一人は初めてみる顔だったが、もう一人は確かにホンゴウチ・ユキヒコだった。

彼らがドアをくぐってきた。大きく開け放たれた両開きのガラスドアから、少し冷たくなってきた夜気がざあつと院内になだれ込み、それに乗ってかすかな匂いが、カケルの鼻に届いた。

この匂い、今まさに追い求めているもの。

カケルはピアスのついたほうの耳を覆いかくす形でさりげなく手
をやって、いかにも何か考え事があるかのような顔をしたまま壁を
向いて立つ。

ホンゴウチともう一人の警官が、出てきた看護師と共に廊下の奥
へと進んでいく。連中がすぐ脇を通り抜けようという時、カケルは
強い匂いを嗅いだ。どうしてこういう時にピアスをしたままだった
んだろう、いったん覚え込んだ匂いは、あまりにも強く本能を刺激
する。それに、向うが顔を覚えていたらどうしよう？ 自宅にも来
ているはずだから、恵が先に気づいて、声をかけてしまつかも知れ
ない。それがヤツの方で先に声をかけてくるか？

ちらつと恵に目を走らせると、彼女はほんやりしたまま、ちょう
ど太一の額を拭くためにバッグからタオルハンカチを出そうと下を
向いていた。そこをホンゴウチともう一人が何か小声で話しながら
早足で去って行く。

どちらも気づいていないようだった。カケルはゆっくりと溜めて
いた息を吐いた。

その間にも、廊下を遠ざかる彼らの話声がまだ、わずかに聴こえ
てきた。

時間がかかりそうですね、今夜

「ねえ、」恵に声をかけた時には、カケルはすでに彼らの消えた方
角をじっと見据えていた。

「俺、ちよつと珈琲飲んで、どっかで休んでいい？」

「いいよ、終わったら携帯で呼ぶからお願いね」

「ああ」

目覚めかけていた狼は漠然と感じていた。うまくやれるかもしれ
ない、と。

トイレの用具入れに畳んだ服と持ち物を隠すように重ね、最初は
その中に立ったまま待っていた。しかし、脚がつりそうになったの
で、2つずつ並んだ個室の左側奥にそつと滑り込み、そこで座って
待った。

狼の姿で待つと、どうしても伏せたくなる。そうなると前足の先
が戸口から外に突き出してしまっただろう。便座に乗るのも不安定で
怖い。元々、便所は狼向きではないのだ。

仕方なく、カケルは人間のまま中に座っている。一応鍵は閉めて
あるが、こんな姿を誰かに見られたら、危機一髪、というよりは『
かなり恥ずかしい』という方が合っているだろう。

それでも、狼は自信に満ちた唸り声をカケルにだけ聞かせていた。

ダイジョウブ、ヤツハココデツカマエル。

先に他の誰かが入ってきたらどうすればいいんだろう？ 例えば
医師とか、亡くなった人の身内とかホンゴウチの連れとか。それも
狼は自信たっぷり口の端を引き上げる、カケルの頭の中で。

ヤツラハココニ、ハイライナイ、アノオトコイガイハ。

身内は、男が1人で女が2人。男は車いすに乗っていたので、ト
イレは障害者用を使う。階下に来た時にも、妙に朗らかな「車いす
用トイレ、ありますよね」という彼の声が響いていたのでそれは大
丈夫だろう。

カケルはトイレに籠るまでに、人びとが揃うギリギリの時間まで
辺りの匂いをあらかた拾っておいた。個室に入って鍵をしてからも
いったんインプットした匂いについてはずっと途切れることなく辿たど

ることができた。

医師はずっと忙しく動き回り、トイレに行きたいとも思わないようだった。ホンゴウチの連れと検死官も、どことなく怯えたような空気をまとっていて、トイレはともかく、余分な所には出来るだけ足を踏み入れたくないといった匂いを発していた。ホンゴウチ自身はあまりそういうことには頓着しないようだった。

一時間はゆうに経った。カケルが、脚のしびれを直そうといったん立ち上がり、何度目かの伸びをした時、

彼が入ってきたのが判った。やはり灯りを点けず。

心臓の鼓動が大きく乱れ、カケルはよろめいて手の先を便座につく。危ない、音を立てるところだった。心臓の音が外にも聴こえてしまいそんな気がして、胸を押さえた。

外の男がたてる、威勢のよい水音が長々と響く。暗闇の中に、小便のほろ苦いような生温かい匂いに混ざって、よく知っている香りが更に強くなった。確かにヤツだ、いつ出よう、まだか？ まだだ、せめて、済んでからにしよう。カケルはドアに体重をかけるようにしながらそつと掛金を外し、両手を胸の前でぎゅっと握り合わせたまま、戸口の向うに全神経を集中させていた。

やがて、水を流す音が響き、次に一拍おいてから躊躇いがちな水道の音がした。今だ。

「あれのをゆけ」

小声で唱えたたとたん、ドアが前にはじけ飛んだ。はっ、とホンゴウチらしき影がふり返る。さすが警官らしい、機敏な身のこなし。だが、彼は見た物に対応できず、凍りついた。

獣がふわりとその身にのしかかり、獲物の喉笛にくらいつこうと頭を伸ばす、何の抵抗もなくそのまま後ろにホンゴウチは倒れた、だが、その瞬間

掃除用具入れの中から、規則正しいバイブ音が漏れてきた。カケ

ルの携帯電話だった。

はっ、とその事実気づいたのはホンゴウチが先だった。

「オマエ」

こんな風に狼にのしかかられた者はたいがい、恐怖と信じられな
いという思いで表情が凍りついたままになる、だが

彼はあきらかに、怯えてはいたものなぜか目に、かすかな戸惑
いを浮かべていた。

そしてその視線は、狼の顔からすつと軽く左耳の脇に流れる。

狼は急に、下の男のウールと綿の肌触りを感じ、獲物の胸元を押
さえた手を上げた。

そう、人間に戻ってしまった手を。

「前に……ここで」

疑惑の匂いが強くなる。そうだオマエとは会ったことが。そのピ
アス、そしてぼさぼさの髪、しかし何故、全裸で？

完全に、狼は解けていた。

カケルはそのままの姿で倒れたホンゴウチの上にまたがっている。
さっきまですぐ近くにあった喉首が急に遠くなった。そして抑えつ
けている下の男が、重量を増したように思えた。膝に拳銃のホルダ
ーが当たっている。

「あの、あの」

何と言っているのか、カケルは完全に混乱していた。何故？ 何
が起こったんだ？

再び、バイブ音がしんとしたトイレ内に響く。恵からだろうか、どうしたらいいのか。

答えはもう、一つしかない。カケルは動悸の激しい胸元を押さえるようにしながら、やっとのことで口ばを口まで運び上げた。

「あれのをゆけ」

ホンゴウチが銃に手をやる一瞬前に、狼は彼の喉首にくらいついた。

あまりにも焦り過ぎたのか、がりっ、と食い破った歯と歯とが嫌な音をたてる。ごぼ、と排水が鳴るような濁った音がして、下の男が身をのけぞらせた。えへ、えへ、と空咳なのか嗚咽なのか何度もかすかな声にならない音を発しながら下の男は全身を硬直させて抵抗した。鈍い音をたてて腰回りの装備が床に当たる。しつこいほどの振動、脚が狼の後脚の下で激しいキックを繰り返していた。バイク乗りらしく、かなり力強いバネ、腕にも胸や腹の筋肉にも、のしかかっている魔物を蹴散らしてやろうとする激しい意志を感じる。

しかし、それはだんだんと力を失いやがて、小刻みな痙攣となつてやがて少しも動かなくなった。代わりに、さらつとした血が砂漠に現れた川のようにあたり一面、白いタイル張りの床を濡らしていた。

ホンゴウチの大きく見開かれた目にも、赤い涙が溜まっていた。鼻の穴からも口の端からもやはり赤い体液が漏れている。苦しかったのだろう、狼のあごを外そうと鞭のように宙に落ちていた手も、今では全く動かず、床の上に長くのびている。かすかにゴロゴロと鳴っていた喉が、ようやく静かになった。

狼はその変わり果てた姿からそつと身を離し、まだ汚れていない奥側の床に跳んだ。

かなり汚してしまったが、すぐに、片付けはやってくるだろう。

カケルに戻ってから、彼は灯りをつけないまま手早く手と顔、そして胸元を水道で洗う。狼の時にかなり念入りに毛づくろいするのだが、時間も限られているということもあり、こうして人間に戻ると案外汚れがとれていないことが多い。しかも今夜はすぐにも人が来ないかとそわそわしながらの作業だったので、余計に手がかかる気がした。

用具入れから服を出し、慌てて着る時に携帯を確認する。やはり、2回とも恵からだった。画面を確認している時に、トイレの床にざわざわと音のない何か蠢いているのを感じとっていた。よかった、いつもの『掃除屋』はこんな場所でもちゃんと嗅ぎつけてくるんだ。カケルが廊下の様子を伺いながら外に出て行った時には、ホンゴウチはすでに大部分が『処分』されていた。硬い拳銃の一部らしい銃口らしい形がまだ彼らの重なる軀の隙間から見え隠れしていたが、それも間もなく、消化されそうだった。もちろん、床に拡がる血だまりはあつという間に彼らに呑み尽されて、床は暗がりの中ですら判るくらい、磨きあげたように艶やかに光っていた。

急に、強く石鹸が香った。前に受け取ったハンカチについていた、この病院の液体石鹸の香り。

ヤツの手はまだ濡れていたな、今日も石鹸を使ったんだろう、でもハンカチは使わなかったんだな。

カケルは足を引きずりながら、非常階段に向かった。

そうちゃん、どこ行ってたのよ。恵はまだぐったりしている太一を抱っこしたまま、救急窓口脇に座っていた。

やっと、終わった。会計も済んだし……呼んだの、聞こえなかったの？

うんごめん、とカケルは投げやりに答える。こっちもちよっと、とり込んでてさ。

「へえ何」

太一は急性の大腸炎と言われたらしく、とりあえずは薬を出してもらったらしい。説明を聞いたことで恵も少しは落ち着いたらしかった。いつものように皮肉っぽい口もとで笑う。

「アンタでもとり込んでることあるんだ。で、どんなタイソウな御用だったのかしら」

「ちよつとね……」恵がじっと見つめていたので、カケルは仕方なく答える。

「DB出たくなつてあんまり人の行かないトイレに行つて入つたら、鍵開かなくなつてしかも外から電気消された」

「何よでーびー、つて」

張りつめた思いから解放されたせいだろうか、ついつまらないうつとを言つてしまった、そんな後悔でつい早口になる。

「ダイ・ベンの略だよ、こんな所で突つ込んでくんよ」

腹を抱えて笑う恵から、むっとしたままの顔で太一を受け取りよっこいしょと担いで、カケルは病院を後にした。

つながってしまったことだ、もうやつてしまったこと。何度も自分にそう言い聞かせる。

それでも、やはり何かが間違っているのだろうか、その思いは日に日に強くなる一方だった。

群を見る

初めて群を見かけたのは、ホンゴウチを始末してしばらく経ってからの、ある月夜の晩のことだった。

真夜中の国道は、県境の山間部を抜ける場所ということもあって車通りはほとんど途絶えていた。

時おり、高速道を外して料金を節約しようとするのか長距離トラックが轟音をたてて通り過ぎるくらい、それも、たいして多くはない。

カケルは少し離れた場所に車を置いていた、そこからは『狼』として出向いたその帰り。

車の近くまでは狼のまま、ひとりひたひたと小走りに帰路についていた。月の影が体の下に黒々と落ちていた。

唐突に、風上からほんの一すじ、特徴のある匂いがうねりながら鼻に届いた。一瞬のことだったが、間違いようがない。狼としてはじゅうぶんな量だった。

オスは足をとめ、鼻面を上げてもう一度その匂いを探した。

イブの時からここまでではつきりしたものは嗅いだ事がなかった、しかも、これは群れだ。

オスは全速力で駆けだした。

直前で、オスは立ち止り崖上からその様子を窺った。

予想とは全く違う光景が、月明かりの中浮かび上がっている。

オスは低く伏せて、匂いからその状況を読みとろうとした。しかし、さっぱり訳が分からない。

採石場の跡地なのか、荒涼たる白い空き地にばらばらと群れていたのは、人間どもだった。

しかし、ぶんぶんとうづのは狼。

1人が何ごとか叫び、他の者が併せて雄たけびを上げる。シユプレヒコールが延々と、月明かりの中で繰り広げられている。オスは把握を諦め、後をカケルに任せることにした。

急に人間に戻った時に、まずカケルはくしゃみの発作を必死に押さえる。

既に10月も下旬、素肌に夜風はあまりにも冷たく滲みた。

鼻をつまんだまま、彼は崖つぶちぎりぎりまで寄って、下の様子を窺い見た。

「なんなんだ……アレ」

我々は断固拒否する

ワレワレワア、ダンコオ、キヨヒスルウウ

理性の名を被せた殺人を許すな

リセイノオ、ナヲオ、カブセタア、サツジンヲオ、ユルスナアア

倫理委員会の弾圧に屈するな

リンリイ、イインカイノオ、ダンアツニイ、クツスルナアアア

本能に回帰せよ、誇り高く生きよ、狼として

ホンノオニイ、カイキセヨ……

それはさながら、遠吠えだった。

カケルの耳にはあまり意味をなさない遠吠え。しかし、その叫びじたいはきりきりと胸を刺す。

群れは全部で10人ほどだった。

どれもこれも、裸だった、カケルと同じく。

たぶんこの場所まで狼として駆けてきたのだろう。

「すげえ……」素直に感心する。

それにしても、分からない単語が多すぎる。リンリイインカイ、とは何の話だろう。

理性の名を被せた殺人、それはうつつすらと意味が取れたような気がした。

今、帰ってきたばかりの自分がやってきたことを指すのだろうか。

一瞬、裸の群れに飛び込んで行きたい衝動に駆られたものの、カケルはじつとその場を動かず、やがて彼らがそのままだれ込むように絡み合う様をただ呆然と眺めていた。

乱交というには、もう少し決まりごとに忠実な睦みあい。同性どうしはお互いに背後にまわり局所の匂いを嗅ぎ合い、または激しく両腕で殴り合い、噛みあいになっている。

異性どうしも基本的に変わらないが、匂いで同意した者たちはさっそく、その場で交合を行っていた。

低い唸りすら耳に響いてくる。

感覚としてはよく分ったものの、カケルはそつと、密やかな喧騒から離れて行った。

月は真上に来ていた。足もとの影は更に黒々と、夜の闇を凝縮させていた。

離れに彼らが訪ねてきた時には、母を含め、幸か不幸か母屋には誰もいなかった。

「ヤマナシ・カケルさんですか」

母屋を最初に訪ねたらしいが、鍵もかかっけていて留守だったので、あの外の車はアナタのですか？ と明るいい声でその小柄で小太りな男が言った。すぐ斜め後ろに、陰気な感じの痩せた男が立っている。すぐに悟った。警察官だ。後ろで、ラブがおんおんと吼えているのがBGMになっっている。疲れもあって、ヘッドホンをしたままぐっすり眠っていたので音には何も気づかなかった。背筋に冷たい汗が流れ、口の中が急に干上がったように感じられた。

「はあ……」

「三田警察署の苦米とまへ、といます、こっちは中野」

ナカノ、と紹介された方は固い表情のまま

「外の軽、あんたの？」先ほどのトマベと同じ問いを口にした。

「はあ、そうです」

「ちよつと、いいかなあ」ナカノの口調はややぞんざいだった。2人で言い方を変えよう、と示し合わせた訳でもないだろうが。自然な役割分担なのだろうか。

いいも何もない。それでも一応、「本当に警察？」と聞くと、なぜかトマベが苦笑を浮かべながらポケットの手帳を出してみせた。続いて後ろのナカノもしぶしぶといった感じで手帳を掲げる。トマベの顔写真は妙に堅苦しく、逆にナカノのほうはどこにでもいる若者といった感じで映っていた。コンビニの店員が胸につける写真に、こんな顔がついていそうだった。

カケルは踏み込まれたくない一心でサンダルをつっかけ、彼らについて出た。頭を掻きながら、できるだけ無関心を装ってみせる。いや、ここでは少し不安げなほうがいいのだろうか、色々と頭に渦巻

いていて、本当にどうしていいのか判らなかつた。顔色に出てなければいいが、と少しだけうつむいてみる。庭に出してあつた自分の車の後ろ、退路を断つかのように白いセダンが止められていた。

間の悪い事に、恵が帰ってきたのがみえた。シルバーのマーチが垣根の角をいつものように曲がるうとして、屋敷内にもう一台車が入っているのを認め、そこに停まる。運転席から顔だけ覗かせて、「そうちゃん」アンタの連れ？　みたいな目を三人に同時に向けた。

「ああ」カケルは思わず、警察官と顔を見合わせる。

「何か？」どう聞いていいか判らず、とりあえずそう聞いてみた。

自分では思い当たることが多すぎる。手放して泣きたい気もあるし、彼らをかみ殺してどこまでも逃げたくもあつた。

ようやくここにたどり着いたか、という安堵に似た思いも。

それでも、できれば家族には悟らせたくない。

恵は車から降りずに待っている。白いセダンが邪魔になつて、奥の車庫までは進めない。明らかに二人をカケルの連れだと勘違いしているようで、いつになつたら気がついて車をどかすのかしら、という顔をして澄ましていた。

「あの、「トマベと名乗つた方が、急にくだけた感じに下からカケルを覗いて言った。」

「ここじゃ、何でしょうから一緒に来ていただけませんか」

「なぜですか」

「お話を聞かせていただきたいことが、あるんですよ」

そこに「そうちゃん！」イラついたような恵の声が届く。

「ちよつと来て」

皆がみんな、自分に気があるんだな、つまらない茶々が頭の中に響き、カケルは「はい？」むやみに大声で返す。「待っててよ、少し」

「また出かけるのよ、お客さんの車、一旦出てもらつて」

「とりあえず車に」すでにナカノは手錠でもかけたそんな目をして

いる。

「あちらは」なんとなくあごで恵の声の方を指して、トマベがゴキゲンをうかがうような声を出した。

「ご家族の方？」

独身なのは既に知っているだろうが、彼らがどこまで何を知っているのが分からない。

「姉です」

「そうちゃん、というのは」

「俺のことです、あだ名が」

「カケルさんなの？」

「はあ」全てが軌道を外れて自分の上に落ちかかってくるような、そんな崩壊感だな、そう思いながらも、見た目はずいぶん冷静なんだろうな、と自分をどこか遠くからも眺めている。

「カケルという字が……まあいいですとにかく」

「そのまま来れるよね」

ナカノが手を差し出した、その時トマベが背広の上から胸を押さえた。

ちっ、と舌打ちしてトマベがシャツの胸ポケットから携帯を出した。舌うちの仕方から今までの温和な態度がかき消されて、本来のトマベが持つらしい獰猛な性格が垣間見えた。

トマベが隅に寄った。「はい、はい……そうです今、はい……えっ」

元々小さい目をいっばいに見開いて、カケルではなく何故かナカノの方を見た。

ナカノは中途半端に手を伸ばしたままトマベを不審そうに眺めていたが、「車に」そう言われて慌てて車に戻り、ダッシュボード近くの何かを取り上げ、やはり耳に当てて少し話していた。無線なのだろうか？ ナカノの受け答えはあっさりしたものだったが、カケルのところにまでざらついた相手の声が切れ切れに届いてきた。もちろん会話の内容は全然分らない。

すぐに通話を終えたナカノは、俺はやっぱり実はコンビニの店員でした、みたいな素のままの表情で戻ってきた。トマベは電話を受けた時からずつと厳しい顔を崩していない。ナカノが戻るとすぐカケルに目を移し、

「すぐ済みますんで」と言った。あとはカケルそっちのけで片隅に寄ってふたりで話している。ね、信じられないでしょう？ と何度かナカノが声を上げ、そのたびにトマベが怖い目をしてカケルの方を中途半端に向く。

ますます何かまずいことが起こったらしいが、カケルには直接関係ないのか、視線が遠い。そこにまた、「そうちゃん！」恵の声。「すみません」トマベが手の甲で額の汗を拭きながらカケルに近づいてきた。また温和な目に戻っている、だが一旦みせた鋭さをぬぐい切れるほどの説得力はなかった。

しかも、今度はあきらかに何か他の問題で一杯のようだ。

「ちょっと別件で急用ができてましてね……明日でいいので早めにごに電話ください」

「はあ」

トマベがさらさらと書いたメモを何となく受け取る。

『三田警察署 *** 0110 刑事課 苦米、中野』と書いてあった。

「すみません」そこにプッポー、と間の抜けたクラクションの音。恵はどうしても車から降りずに客をどかせたいらしい。

「明日、お願いしますね、」トマベはすでに心あらずといった感じで、ナカノを引っぱって車に向かった。ナカノはもつと抵抗するかと思っただが、先ほどの連絡がよほどショックだったのか、素直に脇について行く。

ようやく白い車がバックして敷地から出て行った。

「すみません奥さん」少し離れたところで叫ぶトマベの声に応える声はなく、恵の車は悠々と敷地に滑り込んできた。

そのまま庭に停めて母屋に入るかと思いきや、恵は車から降りてまずまっ先に離れの彼の元にやってきた。

カケルはまだ玄関先でぼんやりと白い車の消えた先を見守っていた。

一連の出来事に心と頭が追いついていない。

「そうちゃん」

恵の声は静かだった。「何か面倒なこと？」

カケルはいつたん口を開き、恵の目をみた。その目を見た途端、今、目の前で繰り広げられた何もかもが波のように足元に追いついた。

刑事が来た。しかも地元ではなかった。三田？ どこなのか分からない、俺を捕まえて連れて行きたがっていた、獲物を捕まえる時の目だった……連絡が来るまでは。車には確かに無線がついていたようだが、最初にあの中年が受けたのは普通の電話のようだった、ぜんぜん『らしく』ない、ドラマではあんな風ではない、どれが本

当かなんて分かる訳はないがそれにしてもあまりにも……あまりにも現実的だ。

どんな理由で置いて行かれたのかさっぱり理解できないままだったが、置き去りになったという部分も含めて逆に、自分が追いつめられたという事実がひしひしと押し掛かってくる。

「あの」黙っついていようと一瞬思ったが、

「そうちゃん」恵がまた声をかける、その言い方に急に心が萎えた。幼い頃に戻ってしまったような、シャツの中で体が泳いでしまっているような頼りなさ。

「うん……俺、やばいかも知らない」

何も説明していなかったにも係わらず、恵がつぶやいた。

「刑事さんでしょう」

「うん」

カケルはその場に座り込む。力が抜けて、それ以上姿勢を保つていられなかった。

「やばいことに巻き込まれたの？ ユキチくんのこと？」

「違うんじゃない？ わかんない……何も言われなかったし」両手で顔を覆う。なぜだろう、姉の口調がとても優しく心に沁みる。人間としての自分はそれが辛い。

「他に覚えがあるの？」

彼は黙って顔を覆ったままうなずいた。

姉はそれ以上聞いてこなかった。ただ、そつと彼の肩を抱いて一度軽く力を入れてから、またそつとその手を放した。

「どんなことがあっても、アンタの味方だから、アタシらは」

去っていく姉の気配をうなじのあたりに感じながら、カケルはそのままずっと座り込んでいた。

トマベたちが訪ねてきた日の晩、カケルはムカイヤの携帯に電話をした。

繋がらない。呼び出し音が延々と鳴っていた。留守電にすらなっていない。

せめて、何の件で呼ばれたのか、ヒントだけでも知りたかった。そして、彼らが急に帰ってしまった理由も。

ムカイヤがそこまで掴んでいるのかは不明だし、声を聞くのも嫌だったが、少なくとも今、頼りになるのは彼だけだった。

結局、電話には誰も出なかった。カケルは直接事務所に向いた。訊ねて行くのは、イブと出かけて初めてムカイヤに会った時以来だった。よく考えると本人に会うのもその時以来だ。何度も会った気がしていたのに。電話は何度もやり取りした。しかし、それから実際に彼を見たことはなかった。

訪ねて行ったのは10年以上も前なのに、街並み自体ほとんど変わりが無い。カケルは迷うことなく、駅からの道を急ぐ。

とうに夜半は過ぎて、田舎じみた街なかのビルにはほとんど灯りが残っていない。しかし、なぜか確信があった。

ヤツは必ず、事務所にいる。あの場所に。

やがて見覚えのある一角に、見覚えのある建物が浮かび上がって見えた。暗がりの中、一角のフロアに白い灯りがぼんやりと滲んでいた。灯りが見えるのに、どこか廃墟の風情を漂わせている、しかも控えめにこじんまりと。カケルは入り口で立ち止まり、そっと左の耳たぶに触れる。ピアスはして行こうかどうしようか迷って、結局外してきた。耳に何もついていないのが、これほどまで心細く感じたことはなかった。

彼はひっそりと息を整え、かろうじて白と言える階段を上がった。

ていった。

来るのは予め分かっていた、という顔をしてムカイヤは戸口を向いて奥の窓際に寄りかかって立っていた。

既に荷物はあらかた出してあったようで、古びたフロアにはほとんど何も残されていない。

積み上げてあった書類や壁に貼られた地元イベントのポスターも全て取りのけられている。初めてこの事務所に入った時も、どういう業種を装っていたのか判然としないものがあつた、かえって今のほうが、このがらんとした感じの方が彼らの実際にしていることに近いような気がした。ムカイヤの澄ました声がこう言い出しそうだった。

そう、私たちはすべてを整理して順に片付けていくのです、と。

刑事たちでしょう、この事務所にも来ましたが、とごく事務的な口調でムカイヤは言った。

どこからバレたのかは、ちょっと分かりませんがね、とそうも言う。少なくともカケルが疑われていたわけではないのに、ほんの少しだけ安堵してカケルは溜めていた息を気づかれないように吐いた。

「それでも、取り返しのつかないことをしたわけですから」

ムカイヤは、まだ残っていたパイプ椅子を二つ出してきて、ひとつを彼に勧める。

「暫らくは大人しくしている方がいいでしょうね、キミは」

自分は大丈夫だと思っているのだろうか？ カケルはかすかに目をすかめた。

10年以上見なかったはずなのに、ムカイヤも全然変わっていない。

着ているシャツのピンストライプすら、同じ色合いに思えた。

「急に刑事が帰ったのはどうしたんでしょうか」

俺は変わったようにみえるだろうか、とカケルは少しだけ血管の浮いた手の甲をもつ片手で押さえるように膝に戻した。

「さあ……何か他に事件があったのでは？」それでなくても近頃色んなことが急激に起こり過ぎですからね、意思無き襲撃でしたか？あれもじきに大騒ぎになるらしい、と。

そんな噂はワイドショーのネタだろう、とずっと思っていたカケルはびくんと背筋を伸ばす。

この男が『意思無き襲撃』と口にした時、周りの空気が一気に数度下がったようでカケルは更に身ぶるいした。

「それはどこで聞いたんですか」

「ヤマナシくん」急にムカイヤが背筋を伸ばす。質問には答えず唐突にこう告げた。「キミも逃げた方がいい、たくさん殺しているんだし」

えっ、とカケルは目を見開いた。

「殺している？ それは、あなたたちが殺せ、と」

「いや」急に、ムカイヤが相好をくずす。

殺せ、と言っているわけではない、と彼は爽やかに言い切った。

「じゃあ、何をしろ、と言っんですか」

ムカイヤは、どことなく困った目をしている。

「狼になって、その人……そのターゲットに会う、そうして向き合ったら、そりゃあ、やることは1つでしょうか」

そうさ俺たちや、やるこた1つ。歌になりそうだ。オマエとオレとふわふわのベッド、それだけあればやるこた1つ、オマエの匂いをかぎ分けて、オレはがぶりと噛みつこう

「そうせざるを得ないのだったら。あなた方の本能なんですからね、所詮狼というのは狂っている、それが本能ですからね、自分に忠実に生きていけるのが一番良いのではないんですか？」

まるで全ての責任がカケルにあるような言い方だ。

「だったら、それはそれで仕方ない」と

「だったら何だよ」カケルは立ち上がる。弾みで折りたたみ椅子が

ぐちん、と安っぽい音を立てて後ろに倒れた。

「そりゃ、どういう意味だ？ アンタら、処理班まで用意して証拠隠滅までしている、逃がした時には懲罰チームまで。それってさ、コロセって言うてるのと同じだろ？ テメエらは手を汚さずに俺らに全部、一番汚いシゴトをやらせているんじゃないか」

気がついたら、「や、やめろ」ムカイヤの首を両手で掴んでいた。自分の親指が醜く折れ曲がってムカイヤのむっちりした首に食い込んでいるのが真っ赤な視界の中に見えた。掴んでいる感覚はなかった。ただ、目に映っているだけ。前脚を使って殺すんだ、ソナコトモデキルンダ、狼がわらった。じんじんと視界が脈打っている。むいーんと、音とは言えないものが鼻の奥から耳にまで伝わり何かの圧力がぐんぐんと上がっているのが自分でも判った。どこか聴覚の範囲外でようやくぐえっと前の男が喉を鳴らしているのを拾う。そいつの前脚がじたばたと自分を打つ。狼がまた笑う。

殺せるのか？ ニンゲンよ。

急にムカイヤが視界から消えた。

カケルは手を放していた。

足もとにはうずくまるムカイヤ。いや、今では単なる哀れな中年男でしかない。自分の首を押さえて、高い音を立ててその哀れな肺の中にかむしゃらに新しい空気を取り込んでいる。

目の前にかざした自分の手をみる。そんな発作的な怒りを表出されたのは、物ごころついでから初めてのことだったかもしれない。

自分にはそういうものがないとずっと思っていた、思いこんでいた。

カケルが部屋の外に出ようとドアに手をかけた時、ようやくムカイヤが声を絞り出した。

寝転んだまま、切なげに息を喘がせたまま。いつもの丁寧な口調はなかった。

「そのままでは済まないぞ」

「ああ……」カケルはものうげな目線を向ける。いつも使わない筋肉を使ったのか、体中が痛む。特に両手の親指つけ根がズキズキした。

「悪いけど、会話は録音したから」我ながら詰まらないことを言ってるな、と少し思う。

「オマエもタダじゃ、済まないんだぞ」ムカイヤは精一杯ドスをきかせているのだろうか、やはり寝転んだままで息を切らせているとあまり効果はなかった。

「分かってるよ。一緒に地獄に堕ちるんだから」

「地獄か」

ムカイヤは手をぱたんと床に払げて大の字になった。はあはあ息を切らせているのは、もしかしたら笑っているのだろうか。

「俺は地獄に堕ちるかも知れん……だがなヤマナシくん」

寝たまま首を少しだけひねり、血走った目をカケルに向けた。

「君はそこにすら着けない。ずっとずっと、永遠に這いずることになるんだ……曠野を」

それがどんな酷いことか、君には分かるか？

問いかけには答えず、カケルは静かに告げる。

「今日はこのまま帰ってやる、もし今度オマエが何かしでかそうとしたら、今度こそ殺す」

「できるのか？」性格的な弱さからの問いだったら、それはかなり手厳しいニュアンスを含んでいただろうが、カケルは敢えて別の意味にとつて答えた。

「狼は鼻が利く、いったんしっかり捕えた匂いならば、地の果てまでも追いかけてやる」

ムカイヤは起きようとせず、ただ天井をみていた。

カケルはそれ以上待たずに、部屋の外に出ていった。ドアを静かに開けた時には、ムカイヤはまだその場から動かず、床に汚物のように這いつくばったままだった。

だが、ドアを閉めようとした時、ことばが背後から耳に飛び込んだ。

「イブが」

そのまま、カケルは凍りつく。思ってもみなかった名前、どうしてここで。

「どこにいるか、知りたいでしょう」

急に、今までずっと聞いていた声音に戻っていた。カケルはふり向けない。

「鼻が利くのならば、すでに見つけているかも知れませんがね」

「……イブは死んだ」言いながらも、病院の霊安室前で電話を受けた時の様子が鮮やかに蘇ってきた。

「なぜそう思ったんでしょう、どうして探さなかったんですか？」

「アンタが」そうだ、ムカイヤは一言もいっていなかった、死んだとは。

自分が勝手に思い込んでいただけだ、メスは死に場所を求めてどこかに逃げて行った、そしてそのまま斃れてしまったのだと。

ゆるゆるとふり返る彼を、ムカイヤは寝転んだまま横目で眺めていた。濁った白眼が血走って黄ばみ、それに目をとめたカケルはそのまま床に流れ出してしまえばいいのに、呪いをこめて強く念じる。そんな子どもじみた罵りごときで奴が悶え苦しむなんてことある訳がない、それも分かってはいるのに。

「私はもちろん、一言も死んだとは言ってません、仕事ができなくなっただけでしたが」

「どこにいるんだ、イブは」

気弱さがにじみ出てしまっただろうか、すっかり会話は向うのペースになっている。

「殺そうとした人間から訊くんですか」

「どこにいる」カケルは一步大きく近づいた。

「話さなければ本当に殺すぞ」

「そうなる、もう一生見つけられなくなるのに」

「匂いは覚えている」

そんなことが何の助けになる、という笑った目だった。泥濁りの目。

一向に起きる気配はない、しかしいつしか、形勢は逆転していた、ムカイヤにのしかかられて首根っこを押さえられている。まん丸いように先の尖った膝がしらが肩甲骨の間に突き刺さっている感触まで覚え、息が浅くなる。

気づくと、よるめくようにムカイヤの脇まで寄っていた。

「そう、おいで」優しげな声、そして匂い。以前見た七色の光が、寝転んでいる男から複雑な芳香となつてカケルの鼻をくすぐる。この匂いは、そう、何というか、まるであまりにも

「教えてやってもいいですよ、条件がありますよ」

「どんな」

「膝について」

声のペースにはまり、すっかり膝下の力が抜けてしまった。カケルは言う通りにした。

「そう、いい子だ、そう」

ゆっくりと節をつけるように何度もそう言いながらムカイヤは右手を差し出した。むっちりとした手に嫌悪感しか湧いてこないにも関わらず、カケルはその手をとろうと、腕を伸ばした。

突然、心臓を鷲掴みにされたようなショック、細かい振動が左胸を刺してカケルは飛び退るようにムカイヤから大きく離れた。床についていた膝がバウンドして骨を打った。

膝がしらの痛みで、急に目覚めたかのように意識が戻る。

今、何をしようとしていたのか？

ムカイヤはまだ寝転がったままあやふやに片手を伸ばしている。

こちらも呆然とした表情だ、釣り上げたはずの大物を逃しました、と顔に書いてあるな、心臓の上あたりをぎゅっと押さえながらカケルは後ずさる。

携帯のバイブだ、しかし、ポケットを漁るまでもなくすぐ気づく。携帯は部屋に忘れてきていたのに。

恵が呼んでいる、携帯を鳴らしている。鼓動が激しく、冷や汗まです出てきた。それでもなぜか、幻の携帯着信のおかげで目の前の罠

が閉まる寸前に助かったのだ、それだけは解った。

「明日……明日こちらから連絡を入れる」

ようやくカケルはそう声に出し、後の返事を待たずにドアを閉めた。ムカイヤが追ってくる様子は全くなく、建物は元のこじんまりと廃墟じみた貌なりに戻っていた。

駅近くまで来た時には、心臓がせり出しそうになっていた怯えはだいぶ下火になっていた。自販機の並びに公衆電話をみつけ、小銭を数枚スリットにねじ込んで覚えていた恵の携帯番号を押す。すんなりとその数列を思い出してためらいもなくプッシュした。0と8と2しかない珍しい番号で、契約してきた啓吾がかなり自慢げだったという覚えがある。恵は最初「そんな目立つ番号はイヤよ」と目を尖らせていたが、周りからびつくりされたり、子どもたちから「母さんの番号はすぐ覚えられるよね」とちやほやされるうちに、気にならなくなったらしい。こんな時にまさか、カケルのためにもなるとは思いもしなかったが。

待たされることなく恵の声。「今どこ」怒っているような声だが、急にカケルは泣きたいくらいの安ど感に包まれる。

「近くだよ、今から帰る」

「電話は」

「部屋に忘れて来たんだって、何か用？」

「そのまま出て行っちゃったかと思った、車で出て行くのが見えて追いかけたんだけど」

恵は泣いていたのだろうか。

「ちょっと用事があったただだよ、特に用事じゃあ無いんだよね？
すぐ帰るからさ」

駅のアナウンスが耳に届く。

「あんたどこにいるの？」

「近くだって。もうお金無くなる、切るよ」

切る直前に思った、ありがとうと言うのを忘れていた。

狼の群れを見かけたことについて、ムカイヤに伝えるのを忘れていた。

電車からもより駅に降り停めてあった車に乗り込む時に、ふと思い出す。

どうしても伝えなければ、と思っていたにも関わらず、電話をする気分にもなれずあれからずいぶん経ってしまっていた。

ムカイヤには言わなくてよかったんだ、そう無理やり己を納得させながら車のドアを開ける前に空を見上げる。

雲が厚く空を覆い、月はどこにも見ることはできなかった。

いつかの晩のようだった、恵はまた離れの前に突っ立っていた。

ヘッドライトの中にそのすらりとした全身が白く流れ、最後に照らされた顔は不自然な光源のせいか隈どりされた仮面のようにこちらを向いていた。

「ただいま」

車を降りてから間が持たず、カケルはうつむきがちに黙ったままの恵に声をかけた。そのまま離れの部屋に入ろうとしたところ、

「そうちゃん」

恵はそう言ったきり、黙っている。

部屋に入るに入れず、カケルはふり返った。「なに」

「出て行こうと、思っているの」

「いずれはね」

「本当はすぐにでも、逃げたいと思っているの」

「いや……」どこに逃げても同じようなのではないかと感じている、それを姉にはうまく説明できないだろう。

「俺みたいなのでも居ないよりは居た方が便利だろ？ 何かと」

皮肉に取られるかもしれないが、わざと明るくそう言ってみた。

「だから迷惑じゃなかったら、もう少し」いきなり抱きつかれ、その後のことばを失った。

「そうちゃん」胸元に顔を埋め、恵は言った。声は呪文のごとく抑揚がなかった。

「迷惑をかけているのはこっちよ、そうちゃんが居てくれなかったら私、どうしたらいいかわからない、けいちゃんはもちろんダンナだし頼りにしてる、でもね、アンタがどこか見えないところに行ってしまうかも……そう思っただけでも私」

声はだんだんと哀調を帯びてその後は嗚咽に変わっていた。カケルは、恵の背中に手をまわし、そっと抱きしめた。この人、こんなにキヤシヤだったかな、もっと大柄でいつものしかかるように威圧的だったのに。

「泣くなよ」カケルは、恵の背を軽く叩きながら言う。「しばらくは一緒にいるから」

曖昧な言い方だ、しかも口約束。これはいつまで持つのか分からない薄っぺらい紙の護符だな、カケルはそれでも、腕の中の人を優しく抱きとめていた。

「そうちゃんにはずっと迷惑かけるけど」「うん、迷惑だけど」顔を埋めながら恵がかすかに笑ったようだった。

「俺もうんと迷惑かける。お互い様だし」
恵がようやく身を離す。きまり悪いのか、目をこすりながら下を向いていた。カケルはそこに続けた。

「それに今夜は、電話くれて助かった、ありがとう」
ようやく礼が言えた。もちろん、恵には何のことか分からないだろう。

魔物に頭から取って食われる段になって、電話の生霊に助けて頂いたのです。

本当にありがとうございました。

それでも恵は問い返すこともせず、下を向いたままスモックの大きなポケットから何か白っぽい封筒を出した。

「これ」カケルに差し出した封筒は、わずかに厚みがある。触るまでもなく、すぐに気づいた。

「100万しかないけど」

恵が顔を上げた。

「もし警察とかどうしても嫌なら、どこかに隠れたいのならばそれはそれで仕方ない、私らができる手助けはこんなことくらいしか」「待てよ」金なら困っていない、そう言おうとしたが正しい理由は説明できない、それにとりあえず預かっておいて、これを恵たち家族のために使っていけばいいのでは？

押しつけられた封筒を、少しためらってからカケルは受け取った。

「ありがとう」

そして、胸に当てる。ポケットのぬくもりが残っていた。

「とりあえず預かっておく、でもいいのかな」

姉はひっそりとうなずいて、足音も控えめに母屋へと帰っていった。

部屋に入ってすぐ、結局カケルは荷物をまとめ出した。姉を裏切ることになるのは重々承知だった、しかし、やはり自分のしてきたことは裏切りよりも重い。

メグは泣くだろうか、カケルは部屋中を見回して、残されて不都合なものがないかチェックしていった。荷物は人間の姿ならば持ち運べるだろう、あまり大きなものには出来ないが、それでも最低限ニンゲンであることは忘れたくない。大好きだった本も3冊ほど選んでリュックの底に詰めた。どれも、海の世界を思い出せるようなものだった、自分には一番関係の無い世界を。

朝ごはんは一緒にして、その後ハローワークに行くふりをして出て行く、そう決めた。

荷づくりは、ある意味で役にたったとも言えるし、全くの無駄だったとも言えた。

翌日の朝7時、同報無線の広報が鳴り響き、登録されている自治体一斉メールが彼の元にも届いた。

『日本国政府は災害対策基本法に基づき、以下の地区を避難指示区域とし、住民の速やかなる退避を勧告します。今後の情報に十分ご注意ください。避難の時期、方法については各自治体の指示に従ってください』

ずらりと並んだ地区名は、どこもカケルには馴染みの場所ばかりだった。

同時に、朝のニュースでは突如『消滅』した場所についての速報を立て続けに流していた。

「地図上で、一定のパターンを描いています。これによると……」アナウンサーはあくまでも冷静な口調を崩さずに淡々と地図を指し示す、しかしその手が小刻みに震えているのは誰の目からも明らかだった。

意思無き襲撃がついに、確固たる目標を決めて彼らの元に襲いかかった。

皮肉にも、恵の下ろしてきた100万円がすぐに役に立つことになった。朝一番からほぼすべての窓口は機能停止したからだ。

もともと大地震発生に備え、近辺のATM入口には『大地震警戒宣言発令時に閉鎖します』というステッカーが貼られていた。そこが全て、ロククされてしまったのだ。

当然、急激に狭まった各種金融窓口には預貯金を下ろそうとする殺気立った連中が押し寄せた。量販店、ドラッグストア、スーパーはごった返し、ガソリンスタンドには長蛇の列……退避勧告の出た地域と近隣の市町は大混乱に陥った。

突然地震が襲ってきたのならばもう少し見た目でも分かりやすいのだが、かなり局地的で少し離れてしまえば全く見えない『災害』が、次に自分のところを襲う可能性がある、と言われても人びとはとまどうばかりだった。それに、一定のパターンを描いているという被害状況が本当に次に規則正しいものなのか、意思無き排除が予想された箇所を確実に襲うのか、具体的にどのような被害が考えられるのか、規模はどうなるのか、予測が外れて、または規模が予想より大き過ぎて万が一でも他の場所が被害に遭うことはないのか、テレビは次々と速報を流し、分かりませんが、とかその点は不明ですが、という言葉ばかりを発しながらいたずらに不安をかきたてていた。

カケルがそつと返した白封筒を、恵は気まり悪げにうなずいてそれでもまたスモックのポケットにしまった。それから

「どうなるか分からないけど、着替えとか用意しなきゃね」

誰に言うともなくそうつぶやき、どこか明るい目をして裏の物置へと去っていった。

晴樹は電話の前に張り付いて、遠くの親戚との電話対応に追われていた。時おり、古い出来事や人の話で訳が分からなくなると傍ら

の籐椅子に縮こまる祖母に電話を代わってもらっていた。

圭吾とカケルは、できるだけだけのものを買い揃え、先の見えない避難に備えることになった。

「ヤマワキ石油に行ってみる、俺」

買ったばかりの20リットルの金属缶を抱えるようにカケルが外に出ようとすると、圭吾が止めた。

「カケルくん、セルフじゃあ自分で缶に入れられない、今日みたいな日だとスタップもドタバタしてるし事故が怖い、JAに行ってみてくれない？」

「分かった」いつもはダラダラしているようにしか見えないが、さすがこういう時には頼りがいがある。

「俺はもう一度、ヨシミホームセンター行って来る、カセットコンロとか燃料とか買ってくるわ、それと」

「母さん！ ばあちゃんが来てって」ハルキが家の中から叫ぶ。

「母さん、どこ？」何度か呼ぶうちに、裏手から恵がプラケースを引っ提げてよるめきながら出てきた。

「何？」

「ばあちゃんが呼んでる」

「何だって」

「河原崎のオバサンから電話」

「だったらバアチャンに任せなさい、どうせあんなウチには避難なんてしないから」

「ぜひ寄るように、って、メグちゃんに替わってくれってさ」

「外出してるって言って」

「ばあちゃんが『居る』って答えちゃったよ」

アノクソババア、確かに恵は口を動かさずにそう吐き捨てカケルの方を見た。

カケルはあわてて赤い缶を持ち上げる。「すぐ行かなきゃ」

圭吾はすでに姿を消している、それは仕方ない。河原崎にいる叔母は、彼にとつてはあかの他人だ。その上、圭吾は義母とその親族に対して微妙な距離を保っている。

叔母は姉であるカケルたちの母とも仲が悪い。実の姉妹なのに会えば必ず最後は口論となる。恵だつて会うたびに辟易しているだろう。「アンタは可哀そうな子だ、母親の面倒を押しつけられて、子だくさんの上に可哀そうな子どもまで産んで」とどこまで本気が分からない同情心のアンコにまみれた話を延々と聞かされるから。

カケルさえ攻撃的になりかねない。二言目には「男の子なのにねえ」ともしかしたら本当は笑いたいのだろうかという上目で彼の顔を覗き込む。その近さが幼い頃から煩わしかった。彼女からはいつも、早くに亡くなった夫を悼むためなのか、湿ったような線香の匂いがした。それに口が臭かった。

恵は、放置しても状況は良くならないというのはわきまえていたのだろう、悪態をつきながら母屋に乗り込んでいって、結局は電話に出たようだ。その後のことはカケルにはあまり興味なかった、というかゴタゴタに巻き込まれるのもごめんだったので、彼は缶を持ち直し、急いで車へと向かった。

夕方遅く、と言うかすでにこの季節ではとつぷりと暮れている頃に、圭吾とカケルはほぼ同時に家に着いた。恵が玄関に立っていた、サンダルを引つ掛けるのも忘れている。

「けいちゃん、よかった、間に合った。7時から公民館で防災担当の人が説明会やるから出て、って、タケダさんももう行ったと思う」「えー」そう言いながらも彼はすでに玄関のキーボックスから自転車の鍵を取り上げていた。

「ハルキ、ハルキいるか？」圭吾が二階に向かって大声を出す。その声に反応したのか居間から琢己が飛びだしてきた。自分の名前を

呼ばれてもふり向きもしないのに、こういう時には反応が速い。父親である圭吾は不思議とこの子に対して特別な構えがない。

「タク、オマエでもいいや」鍵で琢己を指しながらしゃべっている。車の中から買ったもの出しといて、ヨシミの袋が3つあるから「琢己はまるつきりそっぽを向いていたが、「ヨシミ、みつっ」はつきりそう復唱し、圭吾が外に出て行くのについて行くとした。カケルがあわてて

「義兄さん、俺が運んどくよ」と言っつて琢己を止めようとしたが、「いいよ」圭吾は既に夜の闇にまぎれていた。声だけが届く。声だけ聞くと、本当に頼りがいのある男に思える。恵が「カラオケルームでナンパされてさあ」と以前ノロケていたのをふっと思いついた。「カケルくん、先に飲んで風呂入っておきなよ、今日は動き回って疲れたしょ？ 明日も似たようなもんだからさ、きつと。早く休んで」

あ、どうも、と答えた時にはもう彼は裏手の自転車置き場に着いていたようで、スタンドを外す音がかすかに聴こえた。気づいたら琢己がちゃんと圭吾の車から袋を持ち出していた。かなり重そうなので、カケルは脇から手をだすが、案の定強く払われる。

まあいいや、とカケルは積んだままのガソリン缶を取りに車に戻った。

いつの間にか、夏実が玄関からのぞいていた。琢己を手伝おうとしたらしい。琢己は、夏実にも袋を渡さず中に入る。夏実はそれを見送つて「いーだ」と顔をしかめてからカケルを見ると

「なんか、旅行みたいだね」と言っつて、中に入っつていった。

確かに旅支度のようにだ、カケルも中に入りながら思う。

家族旅行を、少し前にしたばかりだった。この家族にしては珍しく。

あの時の雰囲気にとことなく似ている気がした。

当初はカケルがひとり、留守番の予定だった、それなのに圭吾が急に出社となったため、カケルが繰り上げ参加となってしまった。一泊しただけで、少しも落ちついた旅気分になれなかったが、あれはたぶん、家族としての初めての……最初で最後の旅行だったかもしれない。

あの時にも、何らかの覚悟が無かつただろうか？

もしかしたら、帰って来られないかもしれないという。

あまりにも大げさだろうか、カケルは母屋の洗面台でよく手を洗ってから鏡を見た。

あの時も多分、同じ思いに囚われたのだ。

俺はピアスをして旅に出よう。そして最後まで、それを外すことはないだろう。

ゆっくりとまばたきをしてから、彼は胸ポケットにずっとしまいきこんでいたピアスを取り出し、耳につけた。

それからの数日間は誰にとっても24時間というくくりのない雑然とした混乱が続いていた。

積み重なった諸問題がことの大小関わり無くフィールドに散乱し、人びとがその隙間を縫うように小走りに行き来している、空には常にヘリコプターの羽音が轟いて生活のBGMとなっており、そして太陽と月とが太古の昔から見せる情け容赦の無さで、そのはるか上をのんびりと横切っていた。

カケルは三田警察署へ電話を入れなかった。

あちらではしびれを切らしすぐに誰かが駆けつけて来るだろう、と始めのうちは緊張して辺りを気にしながら暮らしていたがそのうち、自分がとんだ有名人きどりなのではないかと思ったりとたん、可笑しくなったりたまにいた太一を放るようには抱き上げ、びっくりさせて泣かせてしまった。

ごめんごめん、と謝りながら、俺って真剣に謝ってることが多いけど、実際、本気で謝ってることあるのかな？ とつまらないことを思ったりした。つまらないことが次々と頭に浮かぶのはそれほど不快な感覚ではなかった。

学校も幼稚園も休み、高校は授業があつたので行けばそれなりに過ごせたようだが、交通機関がマヒして事故も多発していたので恵は晴樹に学校を休んで家を手伝うよう告げていた。もとより学校は嫌いではないが面倒臭い以外の何物でもないと言いはばかになかった晴樹は反論するはずもなく嬉々として言いつけに従った。それでも、積極的に何かを手伝うというよりは常に自室にこもり、スマホで友人らと何らかのやりとりで没頭しているようだった、何度か呼ぶとようやく不機嫌に部屋から出てきて、言われたことをち

よこちよことやって、また部屋に戻る。

そのうちに「なんかさあ……二ユー スとか噂とか……ワケ分かんねえ」と慄然とした表情で階段を降りてきたと思うと、今度はあまり口もきかずに、恵について歩いては重いものを持ちたり荷造りを手伝ったり、極端なくらい忠実に働き始めた。スマホを覗くことも家族の前ではほとんどなくなっていた。

カケルもたまにPCを開いた時に晴樹の混乱の理由に気づいた。次々と情報が絡み合って、逆に肝心な所が見えなくなってきたような印象だった、意図的なものかどうか、探るには避難すべき自分たちにはあまりにも時間が無さ過ぎる、すぐにオンラインに頼るのを止めてしまった。

日中は買い出し、荷づくり、親戚や近所との連絡など、動ける人が動けるところに回り、夜になると圭吾が近所の公民館に出かけては目まぐるしく変わる状況説明を聞きに行った。

圭吾は遠慮するな、と言ってくれたがカケルはいざという時のために晩酌を止めた。代わりに会合から帰ってきた後の圭吾の酒量はやや増えたようだった。

忙しいのにどうしてこう毎晚会合があるんだ、しかも昨日と言っていること違うし、結局俺らは勝手に逃げた方がいいんか、地区でまとめて出たほうがいいんか、誰か迎えに来んのかさっぱり掴めねえ、圭吾は帰ってきてはそうブツブツ言いながらビールを飲む。それでもまた次の晩になると、隣から声をかけられる前にそそくさと表に出て行く。近所も似たようなもので、夜も忙しいと言いながらもみな公民館に集まっていくのが、カケルのいる離れからも窺うことができた。

不安を紛らわせるために、少しでも固まっていたいのだろうか、毎回、出席率はことの他高いらしい。

それでもようやく、集団避難の方針が決まった。と言ってもそれ

そのの自家用車で家族単位での移動となったが、できるだけ相乗り
でお願いします、ということ、白っぽい作業着の担当が丁寧
ヘルメットまでかぶった姿で何かの台帳を持って各戸回って歩いた。
カケルがその日3回目の買い出しから帰ってみると恵が玄関先で
2名の職員から話を聞いていた。職員は件数も多いのか、かなりの
早口だった。

ヤマナシさんのところは2台、避難される方は全部で7名です
ね、ああそうですか息子さんが1人、同居されてますよね、だから
8名。第一次避難所の地図は必要ですか？ 到着は必ずこの期間に
お願いします、時間帯も決まっていますので。到着後は必ず窓口
に寄って申請書類を出して下さい、持ち物などについて細かいお話
は昨晩の市の説明会でもしましたが（圭吾が小声で「その前の晩と言
うこと違ってたし」と吐き捨てるが担当には聞こえていなかったよ
うだ）、ご不明な点はこちらのフリーダイヤルに、はい、医療的な
点に対してはこちら、福祉関係に関してはこちら……
説明している方の職員は、早口であればあるほど真実を塗りつ
ぶして覆いかくせるのだと信じている熱心さで先を続けていた。恵
は黙ってその早口を聞いていたが、何も質問を返さずにただ眉間の皺
を深くしていった。

すっかり夜も更けてようやく家族が揃った夕餉どき。

次にいつ、ここに帰ってこられるかわからない、と聞いた時夏実
が叫んだ。

「ラブはどうするの？」

もちろん、連れていけるはずはない。いつもはきつい言葉を吐く
恵でさえも下を向いた。

「ねえ、ラブはどうすればいいの」

「置いていくしか、ないでしょうに」

母親がつっけんどんに言った。夏実、きつとなって

「おばあちゃん、自分が置いてかれたらどう思う？」

これには圭吾が鋭く反応した。

「ばか、人間と犬とは違うんだよ」

夏実は俯く。

肩を震わせているのをみると、黙って泣いているようだった。

カケルは、何も口を挟めずに塩辛い瓜もみを少しづつつついでいた。

翌々日の早朝には、荷物をまとめて彼らは家を出て行った。

圭吾のバンに家族7人が乗りこみ、カケルの軽に家族の荷物で積み切れなかった分と、カケル自身が乗る事になった。

最初は母親がこちらに乗る予定だったが、土壇場で母が

「カケルの車は狭いしね、足がむくんじゃうよ」

拗ねたような物言いになった。恵が「何今さら……」大声を張り上げようとして、圭吾に無言で止められ、ぴたりと口を閉ざした。

「義母さん、じゃあ助手席の後ろでいいよね、前みたい」

圭吾は優しく言いながら、義母の車椅子をカケルの車から下ろして自分の車に積み直した。それからカケルに向き直る。

「じゃあカケルくん、第一次避難所で合流ね」

気を付けて来いよ、圭吾がカケルの肩を軽く掴んだ。さりげなく言っただつものようだったが、この世の終わりのような目をしていった。

確かに、この世の終わりだけどね、カケルのどこかでそんな茶々が聞こえる。

どの避難所に行っても、状況は同じだ。ただ、ここが国内でも最も危険な場所の一つになってしまったというだけで。同じ状況に陥る場所はこれからいくらでも増えていくだろう。あるいは、もっと悪い状態になることも。

悪意の介在しない人類への排除作業が、ここまで無作為で徹底しているとは、誰も想像すらしていなかった。

俺たちは永遠にさまようことになるのだろうか、最後の一人が倒れるまで。

カケルは、圭吾の運転する車がずっと私道を出て広い道に出るまで見送っていた。

ラブの小屋に戻る。

犬は、家族みんなが、大人たちは悲壮な表情で、子どもたちはどこかうわの空といったふうに荷物をたくさん抱えて車に乗り込むのを興奮したように鎖を鳴らしながら見守っていた。しかし、彼らが出ていってからはずっと、小屋の中に戻ってふて寝とも言える顔つきで腹ばいになっていた。

「ラブ」

ラブは上目でカケルを見た。出ておいで、という素直に小屋から出て、一度大きく伸びをしてみせた。餌はできるだけふんだんにやって行こう、と恵が小山ほどドッグフードを積み上げてあって、最初のうちはそれを喜んで食べていたのだが今ではすっかり腹も一杯になり、残りの山は蹴散らしたようにあたりに拡がっている。

とても捨てられてしまったようには、見えなかった。

それでも認めたくないのは、犬はしつかりと鎖に繋がれているという事実。自治体の指導で、飼い犬については野生化の恐れがあるため、外飼いの場合は必ず鎖につないだまま避難を行うように、という通達が届いていた。鎖から放しておき、それがどこかで巡視員に発見された場合には、即その場で射殺、もしくは毒殺と決められていた。その代わりに、繋いである犬等については、順次見回りの職員が回収し、しかるべき場所で飼育保管する、との取り決めになっていた。

そんな嘘っぱち、誰も信じるわけがない。いくらお人よしのカケルでも、そのくらいの嘘は見分けることができる。飼育保管なぞ、場所も人員も確保できていないのは公然の秘密だった。見回りすら、今後いるのかどうか。みな、自分が逃げ出すのに忙しいのに。

ラブは、自らの運命なぞ知る由もなく、鎖に繋がれたまま呑気に自分のしっぽなぞ舐めようとしている。

「ねえ、ラブはどうしたい？」聞いてみた、だが答えは当然のようになかった。

カケルは、少しだけ考えて、息をついてからラブの首輪に手をや

った。そして、金具を外す。

急に首回りが軽くなったらしく、ラブはブルブルと頭を振りたかった。急に呪縛がなくなると気づき、だっと走り出したものの、嬉しさのあまりなのか、また急にターンしてカケルのもとに戻り、そしてまた反対方向へとダッシュ。そしてまた戻ってくる。

「ラブ、おいで」

手まねきに引き寄せられ、ラブは彼の前に座り込んだ。

「ねえ、ラブ」

カケルは犬の顔を両手で挟みこんだ。そのまま目をのぞきこむ。

「あとは自由にどこへでも行けよ、あれのをゆけ。分かったか？」

分かる様子もなく、ラブは彼の手を舐めた。

走り去る車に、しばらく犬はついてきた。「ばか、轆くぞ」窓を開けてこぶしを振り上げて脅したら少しだけ後ろに下がったが、それでも走って追いかけてくる。

それでも、一キロもいかないうちに犬の足は遅れがちになった。

カケルは車のバックミラー越しに、小さくなっていく犬の姿を時々認めては、その度に「ばか」とつぶやいた。そのうちに、犬の姿は見えなくなった。曠野でも何でも、好きな場所を思い切り駆けまわってくれたらいいのに、せっかく自由になれたのに、どうしてどこまでもついて来ようとしたんだ、本当にバカな犬だ。

しかし、ずっと行ってからもなお、気になっていた。小さくなっていった、あの姿。白っぽい、巻き毛の少しはみ出した、柴犬と言えないこともないような、何となく情けない表情のあの姿。途方にくれた目の。

カケルは前をみながらつくづく思い知る。

あの犬は自由を求めていたのではない。家族の愛を、仲間との絆を求めていたのだ、と。

言い出したのはアナグマ？

あの時の家族旅行も、出かけるまでにはすったもんだがあった。

『家族旅行』というには、恵にしては抵抗があったようだ。思い出して話をするたびに

「ちょっと出かけてきた」

という言い方をしていたのは、多分、圭吾に対する遠慮の気持ちがあったからだろう。

家族でどっか出かけてこようか、と唐突に言い出したのは圭吾だった。

「ちようど会社のツレに、下田に知り合いが宿始めたから行ってやってくれないか、ってサービスク券もらった。子どもからお年寄りまで泊まれるって、写真みてくれよ、ほらこれ」

珍しく圭吾が乗り気だったせいで、話は最初のうちはほとんど拍子に進んでいた。

しかし、琢己が学校で暴れて怪我をしてきたり、母親が急に「アタシは行かないから、どうせ足が悪いと宿には泊まれない」とゴネ出したり（結局、車椅子でも入れる宿だと納得させてようやく機嫌を直した）、太一が原因の分からない湿疹と微熱でぐずついたり、父は父でずっと黄昏な状態が続いていたり、旅行なんて無理でしょうという空気の漂うなか、それでもあとは当日を迎えるだけ、という時になって、今度は圭吾に急な仕事が入った。

奈良で工事が入っちゃった、2週間だって、部長が取って来た仕事だから断れないらしい、納期も切られてるしさあ。

ぼつりぼつりとビールを飲みながら言ってから圭吾は「チクシヨー」と小声で毒づいた。たまたま耳に入ったカケルが目を上げると、圭吾は珍しく本気で悔しそうに見えた、横顔がテレビの青を映して

いる。

母親がそんな時に遠慮のない言い方をする。「だったらカケルが運転していけばいい、車は圭吾さんのがあるんだからさ」

だったら、という言い方が圭吾を少なからず傷つけたのではないか、カケルは急いで彼から視線を外して目の前の煮豆をつまむのに集中した。流しから戻ってきた恵が母親の前に刺身の皿をやや乱暴に置いた。はずみで端に載せた大根のつまがまとめて皿からはみ出したがもつれ合っていたのでテーブルには落ちずに済んだ。

「母さん、元々はケイちゃんが決めたことなんだからケイちゃんがだめなら中止でいいのよ。それに車だつて仕事で使うし」

「えええ、行かないの？」まっ先に不満の叫びを上げたのは夏実だった。

「あすかちゃんたちに言っちゃった、今度旅行行くつて」

母親も似たような口調で重ねる。近ごろ家からあまり出なかつたし、実は楽しみにしていたのだろうか？

「車は、会社まで乗っていただけだろ？ 圭吾さんだつて奈良に行くんだろ」

カケルが圭吾の代わりに反論する。

「奈良は仕事だから仕方ないじゃんか、車だつて通勤には必要だしさ」

「いや」急に切り替えができたのか、圭吾が明るい声を出す。

「どうせ2週間会社の駐車場に置きっ放しは嫌だから、メグの車借りる」

カケルに向き直つた時にはいつものものんびりしたムコドノの顔に戻っていた。

「カケルくん、俺の代わりに行ってやってくんない？」ここで目いっぱい心遣いをみせる。

「ごめんな、何かと用事に使っちゃつて」

構わないっすよ、ちょうどその辺空いてるし、カケルも明るく圭吾の口調にあわせてみた。

「逆に大変かも知れないしな……」カケルだけに聞こえるように、圭吾が父親と母親、琢己の方にさらっと目をやってから共犯者の口調でそう囁いた。

実は行けなくなってほっとしたのかも知れない。急にそう気づいて、カケルはその口調ににやりと応えた。

さっきの『チクショー』もどこまで本気だったのだろう、カケルはまた圭吾の横顔を見ながら細かく箸を動かし続けた。彼のことをどこまで知っているのだろうか、青い光がちらつくたびに、その表情はくるくると変わって見えて、どうにも掴みどころがないような気がしてきた。

もしかして、彼だって狼かも知れない、それが、全く違う種類でカモシカとかムササビとかそれか

「ムジナだわ、そりゃあ」

今まで黙っていた父親が急にはっきりとそう声に出し、カケルは挟んでいた豆をぼろりと取りこぼした。あまりにも思考を拾われたのかというタイミングに目が泳いでしまう。

「なに？ ムジナって」

やはり夏実が真っ先に反応した。「おじいちゃん、ムジナって何？」

「タヌキみたいなもんだよ」何でも口を出したい母親がもっともらしく答える。

「学校じゃあ習わないのかい。ムジナが人を化かすって」

「アナグマのことだって聞いたことがあるけど」恵も口を出す。「でもアナグマって何」

日本の野生動物談義になったので、カケルはそそくさと食事を済ませ、

「ごちそうさま」

茶碗と小皿を流しに運びながら、またちらりと圭吾を盗み見る。

ムジナ、いや、圭吾は相変わらずのほほんとした顔をテレビに向けていた。

まさか本当にそんなことはないだろう。もし父親がまともに対応のできる状態ならば、ドキドキしているカケルに向かって

「というのは冗談だ」

と言いそうな気がした。正気だった頃は全然冗談なぞ言う人間ではなかったが。

それでも、その時は何となく羨ましさが抜けなかった。

俺も海の生き物でなければ、アナグマになりたかったな……できれば。

アルバムを棄てる

なぜだろうか、写真のフレームの中に最後に飛び込んできたのはラブ。

ラブが写っていた、一緒に。太一の脇に寄り添いいつになく従順なオスワリの姿勢で。

どうして旅先までついて来たんだ？ 父が真面目に問い直す。うちにつないできたはずなのに。一緒には来られないはずなのに。

ラブも伊豆が好きなんだよ、きつと。琢己がそう答えた。晴樹ではなかった、声もつと透き通っていて、跳ねるような軽やかさ。いつも跳んでいるように、話すことができるんだ、俺はどこかでそう納得する。

ねえ早くシャッター押してよ、誰の声だろう、メグだろうか？ なっちゃん？ 焦れたようなことなく楽しんでいるような、イブの声？

母はまだ若く、白いワンピースのすそを翻し車椅子から立ちあがる。私もうこんな年寄りのフリは疲れたわ、早く旅に出たい。もう来てるじゃないか、旅に、そうたしなめる晴樹はどこか圭吾さんのように落ちつき払っている。そして白い服の彼女をエスコートしようとして右手を優雅に差し出す。結婚式にこんなグレイの燕尾服を着ていたのは圭吾さん、だから相手はメグのはずだが。女性はすでに若い頃の母でもなくメグでもない、でもどこか懐かしい表情だ、それをはっきり見せないように彼女はくるりくるりと回りながら崖に近づく、危ない、と叫びたかった俺を、すっかり成長した太一が優しく押しとどめる。

「だいじょうぶ、落ちることはない、時は決して僕たちに追いつけないのだから」

誰もがその人自身ではないようだ、だから俺も、自分ではないのだろう。ラブがとことことこちらに走ってきた。ざらついた舌で俺

を舐める、俺の鼻先を。

とがった鼻先を。

俺は狼だった。そして目の前にいたのはラブではなかった。いつの間にか、メス狼に代わっていた。イブだろうか、匂いがはっきりしない、そうか

これは夢だからか。

放っておけばいいさ、琢己が弾むような口調で語りかけてくる。

夢は覚めるまで、放っておけばいい、いつか自然に手を離す時が分かるから。

俺は目覚めて気づく、少し泣いていたようだ。風が冷たい。

あの時の写真はほとんど、残してあった、一次避難の時に未整理のミニアルバムをリュックに入れていたはずだ。写真は全て俺がカメラマンを務め、メグにせっつかれて現像も一通りしてあったのだが、まだ家族そろってゆっくり見たことがなかった、どこかで直せばいいと思って、どこかで。

次第に記憶が蘇ってくる。

そうだ、伊豆に行った時の写真は捨てたんだった、全部……いや、1枚だけ残して。

ラブを置いて行った日、しばらく行って最初に休憩したコンビニで、俺はA5サイズのアルバムを取り出した。コンビニはすでに避難対象地域ではなかったが店内にも駐車場にも、更に遠くに逃げようとする人々がごった返していた。

俺はあること無いこと声高に噂を飛ばしている連中を押し除けるようにアルバムを手にしてゴミ箱に近づいた。「燃やせる」ゴミはあふれんばかりだった、奥にねじこむように棄てたアルバムはプラの弾力に負けて少し手前に戻ってきたが、そこをまた押し込んだ。

ゴミの隙間から折れまがったページがみえた、青い空と海の写真が三角に覗いている。

仕切りに整理せずただ挟みこんでいただけの写真がまとめて外に

飛び出し、足もとに散らばっていた。メグに言われて撮った民宿の外観、景色……その中に子どもだけ4人、記念になるからおしゃれな玄関先に揃った写真が混じっていた。

それだけじつと見直し、胸ポケットにしまう、あとの4、5枚はまとめてぎゅっと折り縮め、またゴミの中に戻した。プラごみの隙間を通り抜けたのか、今度はすんなりと奥まで落ちていった。

俺は、夢をひとつ手放したんだ。ひりひりするような痛みの中でそれを思う。

もう持つてはいけないと悟ってしまったから。

喪失は予感した時にもっとも大きく、実感した時にはもうすでに何も残されていない、感じることにすら。だからもう恐れる理由もない、ただ淡々と受け入れるしかないはず……そう信じていたのに、不思議なことに涙は出るものだ、樹が風で葉をそよがせるように、雨が水たまりに波紋を描くように、淋しさは心を自然と震わせる。

今も出ているのかな？ 涙が。

アルバムを棄てる（後書き）

全3部中、第2部の最後となる予定です。

無関係なものは何ひとつ

この世の中の事がらに無関係なものなど、何ひとつない。

昔、そう言ったのはイブだった。

全てのものは繋がり合っている、と。

ものごともしうだし、人と人もそう。急激な感情の移り変わりすらそれぞれが突発的に湧きおこっては消えていくようにみえて、実はどれもが深い所でひとつの根に繋がっているのだと、イブは続けた。

その論でいけば、過去に起こった事全て、現在起こっていること、更には未来に起こりうることすら全ては繋がり合っている、何もかもが1つのもつれ合った塊であって切り離すことはできない。

運命はすでに絡まり合った巨大な塊の中に存在しているの、イブはこれ以上なく真面目な顔をして言った。

だったら、運命はもう既に決まっているということなのか？

そう尋ねた俺の顔は相変わらずどこか間が抜けていただろう。その晩はふたりでふざけて舐め合って夜を明かし、すっかり身体中気だるい満足感に浸されていたから。

そうだよ。と同じ顔のまま、イブは言った。

あまりにも真面目な表情はかえってふざけてみえる。そう言うてやりたいくらい彼女の目は真剣だった。俺は笑いながら言った、その時。「マジかよ、ありえねえ」

俺は言っちゃった。

「何かヤなことあって、嫌だなあとと思えばそれを避ければいいだろ？ つき合いきれねえと思ったヤツとはもう会わないように避けて

歩きやいいし、避けられることはとにかく避ければいいと思うけどな。事故だつて何だつてそこに行きあたるのは偶然だよ、急に笑ったり腹が立ったりなんてのは、だから」

彼女は何も答えない。

キスして、と初めて言った音楽室で「だめですか」と聞いてきた時の目と一緒にだった。

音楽室での光景が目には浮かんだ瞬間、急に頭の中で何か繋がる音がした、メトロノームが一度だけ左に振れた。そんな音。

納得してしまつたんだ。

運命は既に最初から決められている。

彼女がその目をして言うからには、それは真実なのだ、俺が信じる信じないに関わらず。

父が亡くなったあの夜に何故イブから着信があつたのか、ヤツから知らされた時に俺は吼えた。

相手に飛びかかりながら、しかし、悦びしか湧かなかつた。ようやく止めがさせる、という黒い昏い悦び。

飛びかかる直前、人間であつた最後の一瞬まで、俺の中には激しい憤りしか無かつたはずなのに。急激に胸の中に満たされていく憎悪と憤怒の気体、あの男を目の前に言葉を唱える間もなく俺は変わった。しかし、高く跳ぼうとして狼の後肢が硬い地面を蹴りつけたそのとたん、憎悪は脊椎を貫く歓喜にとって代わつた。

運命なのか？　すでに決められていたのか？

あの狂おしい程の悦びまでが。

それからもたて続けに起こつた全てのこと。俺自身が陥つたこと、俺の預かり知らぬ所で翻弄された全ての命と魂との軌跡、俺が生まれるずっと昔から、死んでからずっと続くだろうこの世界、それら

が実は裏ですべて絡まり合い『大いなる意思無き意思』に管理されている。

最後にムカイヤからボウフラの話をされた時には、その情景も見えた。

『a11』とでっかく書かれた水槽の上から、覗いているのは『無』。

奴の声がまだ耳にこびりついている。

「彼らは、身を潜めてじっとしているのです。それがどうにもならない事と知りながら」

俺は信じない、信じない。運命が既に定められたものなどとは。全てが1つに絡み合っているなどとは。

俺たちがどうにもならないと知りながら身を潜めてじっとやり過ぎすしか方法がないなんて。

信じてもないことを納得するのは止めた、イブとほんとうのさよならをした時に。

運命という甘いことばの呪縛から解き放たれた時にも、ほんのわずかには未練は感じていたのだが。

愛だけは、繋がっている。そう信じてもいいだろうか。

カールの本当の名前は何

あれ、ヤマちゃん？

急に声をかけられてカケルは反射的にふり向いた。

ごたついたロビーの中、到着したばかりで視線の定まらない家族の群、合い間をすり抜けて急ぎ足で出入りする先住民、まとめているのかどうか自分でも分からないという途方にくれた表情の係員、そんな雑多なかたまりの中で、5メートルくらい向うからこちらにまっすぐ、丸い顔が向いていた。

「ヤマちゃん、だよなやつぱ」丸顔をほころばせて、小柄な男が近づいて来る。

「あ……」

カケルも相好をくずす。「オマエ」

懐かしい顔だった、しかしどうしたわけか名前が思い出せない。

高校の同級生、同じクラスで気のおけないヤツだった。

ひょうきんで誰からも好かれ、体育が得意でバスケット部で活躍していた、授業中は居眠りばかりだったが。

確か、カールと呼ばれていたんだ……でもカールって何だっけ？フルネームが頭からすっ飛んでいる。

「か……」呼ぼうとしてついたためらう。あだ名で呼んではいけない気がした。

カールは草色にも白にも見える作業着の上下に首からスタッフカードを下げていた、一応ここでは何かの仕事をしているらしい。カケル咳払いして何とかでかかった言葉を濁す。

「かなり会ってねえよなあ。何今日は。仕事？」

「そうなんだよ、俺、ここの役場で働いてるからさあ、ヤマちゃん変わらねえなあ」

「おまえだって」

「頭薄くなつたよ、それよりヤマちゃんどうしたんだよこんなところぞ」

「え、ああ？」

「だって実家にいたんだろ？ 上白かみしろのアパートから実家に移つたつて聞いたぜ。実家だつたらまだ被害とかなかつたら？」

カケルの個人的なことにもそれなりに詳しい、どこから聞いたのか気にもなつたがあまりゆっくり話をしているヒマがない。恵から窓口に行つて要支援対象者の申請書類をもらつてきてくれ、と頼まれていたのだ。もう4時をまわっているので、今からすぐ窓口の長い行列に並んでいないと今日中には書類は手に入らないだろう。

「石川町とかあの辺全域避難指示がでた、一家そろつて出てきたんだよ」

「そうだったのか、大変だったな、どここの避難所だ？」

「最初の所は追い出されて、ここを紹介された、まだ来たばかりだけだ」

あまりつつけんどんな対応でも得にはならないだろう。相手はなんせ、お役所関係でどこと何かしら関係はありそうだ。当初割りあてになっていた避難所は役所側の手違いが重なつてすでに満杯だった。殺到する抗議の渦の中、それでもカケルは案外早く次を紹介してもらい、混乱の中から一抜けすることができた。しかし、最初の避難所ですら家から50キロは離れていた上、さらに40キロも実家の地区から遠ざかつてしまい、周りには知り合いどころか知つた顔ひとつなかつた。家族単位とは言え、孤立無援の場所に引越してきた不安はかなりのものだった。独り者で身軽なカケルですら、配給や配布物を受け取りに行くのにはかなりのストレスを感じていた……正直、もう生業しごいをせずに済むというのは本当に嬉しかったのだが。特にムカイヤの下で。

しかし、家族単位で考えれば母親はじめ、圭吾と恵の一家がいかに不快なトラブル無く過ごせるか、そこは頭の痛い問題だった。

この男に何かと便宜を図ってもらえないだろうか、あからさまに

ならないように名札の文字を確認しようとするが、こんな時に限って裏返っている。せめて苗字だけでもわかれば、この丸顔から『カール』の三文字は払しょくされるはずなのだが。

「あのさ」向うから言ってくれた。

「オレ、もう行かなくちゃなんないから、そうだな……今夜呑まないか？ 一緒に」

「えっ、」カケルは素直にびっくりする。

「飲み屋なんてやってるの？ 近くで」

「あるよう、そりゃ、あんまりハデには出してないけどね、でも行きつけのトコでこっそり」

「出られるかなあ」恵の顔をちらつと頭に浮かべる。体育館の隅にすったもんだの末にスペースを確保して『臨時月見里・桐島家』を再スタートさせてからすでに2週間、ようやく一日の行動パターンがみえてきて、だいたいの家族が夜も少しはまとまった時間眠れるようになっていた。母は常に眠れないと訴えていたが、琢己に振り回されている恵の方が多分睡眠は少ないと傍から見ている誰もが感じていた。それでも、恵ですらようやく眉間の皺が常に寄った状態ではなくなってきた。先日は、地元自治会の招待券で近所の大浴場に日帰りで行ってきて、ずいぶんさっぱりした顔で帰ってきたこともあった。

俺も少しくらいならいいだろうか？ 息抜き、という訳ではない、当然、これは大事な情報収集業務なんだ。

「無理なら」相手が一旦遠くをみてからそう言いかけたのを

「いいよ、行けると思う」すぐに遮る。「何時に？」

「ここに、そうだな……7時でも？」

「俺は何時でもいいよ」イヤミっぽく聞こえていないだろうか、少し気になったが相手は全然こだわった様子もなくにつ、と笑って

「オツケー、じゃ、7時にまたここで」

軽く手を挙げて、小走りにどこかに去っていった。

雑踏の中にすぐに消えてしまった姿を、頭を振って追い払い、力

ケルも目的の場所に小走りに向かう。

窓口は相変わらずの行列だった。着いた当初は何列も横に広がり、前にいる弱っているヤツをすぐに蹴落としてやるうというまがまがしい空気に満ちていた場所も、今日はカーキ色の制服をつけた何かの係員数名に見張られながら、一列にある程度お行儀よく連なっていた。それでも、かなりの長さにはなっていたが。

列につきながら、カケルはずっと考えていた。何て名前だったっけ？

帰ってから卒業アルバムを見よう、と漠然と思っていたがふと、その卒業アルバムはすでに100キロくらい彼方に置き去りになっていて、もう見ることはないかもしれない、と今更ながら気づいた。

全く、ヒントなしじゃねえか。参ったな。

カール、カール……カールって本当は、何て名前だったっけ？

その店は第十二小学校の避難所から歩いて20分近くのところにあった。

カケルは案内されるままにだらだらとついでに行く。

駅の方に降りてきて家並みが混んできたあたり、それでも住宅地かと思われる場所の細い路地の中ほどという場所に、何となく存在していた。コンクリートが平らに敷かれた導入路のすぐ先に、ギリギリ民家とも見える和風の入口。のれんも看板も掲げておらず、もちろん、店の名前もどこにも書いてなかった。

飴色の木で組まれた格子模様の引き戸を開けたところに、カウンターが奥に続いているのが見えた。カウンターの右奥、酒瓶に隠れたあたりから「いやっしやっ」と何語が解らない挨拶が耳に飛び込む。カケルは、友人に続いておそるおそる中に足を踏み入れた。

中の匂いはまぎれもなく居酒屋、しかも揚げ油の香ばしい匂いが控えめに鼻に届き、カケルは少しほっとする。連れは慣れたもので、ずんずんと狭い店の奥へと踏み込み、「今日は上がるか」と付きあたり左のテーブル席に進んだ。

テーブル席はカウンターと並ぶように縦に2つしかなく、手前には渋い表情の2人組が額を突き合わせるように呑みに入っていた。背中を向けていた方が彼らをふり向き、最初にカケルに目を留めて眉を寄せたがすぐにカールの姿を認め、軽く手を上げてまた連れと何やら小声で話し始めた。カールも軽く首を動かしたが、あとは知らん顔のままカケルに奥の席を勧めた。

そうして、それからすでに1時間近く呑んでいる。最初のお通しはエビせんだった、カールではなく。エビの匂いは我慢できたので何とかつまみにはなった。カケルは談笑の合間に久々のジョッキ生を流しこみ、エビせんをつまみ、ようやく相手の顔を真正面からしっかりと捉える。カールではなく、仁田にいたというその同級生を。

やっぱりあだ名で呼びかけなくてよかった、カケルは密かに胸をなでおろしながら彼の話を聞き、また、聞かれたことにぼつりぼつりと答えていく。

カールというのは、仁田の前髪に由来していた。高校時代、仁田の髪は濃い上にごわつており、梅雨時や湿気の多い時期にはよく額に不思議なウェーブが出来てしまっていた。脇や後ろは短くきつちりと刈り込まれているのに、前髪だけハテナマークの頭を並べたような、まばらな髪の束が乗っていた。本人も気にして短くしてみたりわざと長くしてみたり、横に分けてみたりと工夫はしていたのだがどうしても、気がつくともまた額に丸まった髪の束が並んでしま

う。

そこからきたあだ名で、男子は特に面白がって彼のことをそう呼んでいた。カケルも多分、そう呼んでいたのだろう。そう呼ばれた時の彼の表情はいつも困ったような笑顔だった。あからさまに嫌そうな態度は示した記憶がない、それでもあまりいい気もちはしなかったのではないか、今更になってカケルはそこまで思い至った。

仁田という苗字が出てきたのは母親のおかげだった。夕方遅くなって目当ての書類を手によく避難所のスペースに戻った時、カケルはまっ先に母親に聞いてみた。ねえ、高校時代にさ、俺っちクラスにカールってヤツいたの、知らねえよな？ 母親は意外にも即答した。ああ、前髪がヘンなふうにかールしてるって、オマエ言ってたよね、からかうのは止めなさい、って言ったっけ、確か。みんなにそう呼ばれて可哀そうに……仁田くんだろ？ ニッタ・ユウトくん、お母さんが化粧品のセールスやってた人だわ、一度うちにも来たっけ。

母親のどうでもいい記憶力にカケルは舌をまく、どうでもいいとこの場合失礼だろう、それは重々承知だった。母のことはで当時関連したことがいくつか思い出され、カケルは更に安堵した。カールがいくらお人よしのひょうきん者でも、今さらそのあだ名は聞きたくもないだろう。「頭も薄くなった」と言った時一瞬みせた

自虐的笑いの意味にようやく気付いた。オマエら、前髪カールして
るってよく言ってたよな、残念、もうそのカールも全て抜け落ちた
ってワケでさ。

カケルの妄想はとどまることがなかったが、目の前の仁田は前髪
の事も何も気にしていないように、鷹揚な笑みをみせながら話の合
間に次に来た枝豆なぞつまんでいる。

避難所ではどんな仕事をしているのか、という話から、仁田がた
またまあのに第十二小に回ったということを知った。いつもはも
っと東地区の緊急支援物資受付窓口にいるのだそうだが、たまたま支
援物資の件であそこに立ち寄り、カケルをぐうぜん見つけたらしい。
今後なかなか会えそうもないけど、よかったよ、よかった、これを
機にまた飲もうぜ、そう言って朗らかに笑っている。いつもあてに
はできなさそうだが、それでも、近隣のどこでもあまり並ばずに飲み
水が手に入るかとか、営業店舗の最新情報とか、避難所窓口が比較
的広く日時とか、そういうったことを色々と伝授してくれてありがた
かった。カケルは感心しながら相槌を打っている。

やはりコイツと飲みに来たのは正解だった。そこに仁田が言った。
「ところでさ、オマエ諭吉と仲良かったよな」

急に諭吉の話に飛んで、カケルは枝豆をつまんでいた手を宙に浮かせたまま彼をみた。

「ああ、まあな」まだ仁田がこちらを見ていたので「中学も一緒だったしな、部活でも」

そう答えたら、はあ、と息をついて急にしんみりした声になる。

「アレにやられたんだって？ 行方不明って言っても、もう死んじまっつてんだろっな」

「ああ」意思無き襲撃、という語彙は一般的にはなっていたものの、誰もがなぜかはつきりとは口にせず、『アレ』とか『ソレ』とか呼んでいた。『コレ』では決してないところが、せめて自分とはあまり縁のないものだと思っていたからだろう、とカケルは漠然と思っていた。

「その日に、会ったんだ」

カケルがそう言った時、ちょうど、店内が一斉に静まり返った。揚げ油の音さえ。仁田はぎよっとした顔でカケルを凝視する。のほほんとした同級生の影は消え、急に目の前に全然見ず知らずの中年の男が現れた。

意味が伝わらなかつたのかと思ひ、カケルは付け足す。まだ静かなままだったので少しだけ声を落とす

「諭吉だろ？ その日、つつか俺らその時ファミレスにいたんだ一緒に、そしたら」

そこまで言うのと仁田が小刻みに首を横に振った。横目で後ろ、薄い仕切りごしにいた知り合いに今の声が届いていなかったか、気にしているようだった。

「なに？」

明らかに、仁田の様子が変わった。硬い声で

「その話はよそでしない方がいい、特に近くでそれを見た、という

のは」

あまり口を開けずに言う。

その時またからりと戸が開いて「いやっしやっ」の呪文が響いた。誰か入ってきて、カウンターの一番入口に近いあたりに座ったようだ。若いカップルのようだった。

それを目の端で捉えてからまた仁田を見る。なぜ？ と目が訊いたのか、また仁田が答えた。さりげなさを装っていたが、慎重きわまりない。後ろの連中はまた自分たちの話に戻っていた。それをしばらくやり過ごしてから彼が答える。声はまだ小さなままだった。

「聞いてるだろ？ アレを近くでくらった時に、たまに後遺症が出る場合がある……ってさ、被害に遭わなかったはずの周りの連中が原因不明の病気で死んだりとか」

「でもオレはピンピンしてるけどな」

ややムツとした言い方になってから、カケルはすぐに笑って次の枝豆に手を伸ばす。声が少し大きかったのか、カウンターについた2人組の、女の子の方がこちらに目を向けた。さらりとした髪を斜め上でひとつに縛り、なかなか可愛い目鼻立ちだった。カケルはあわてて声のポリウムを下げる。

「そりゃ、諭吉は可哀そうだったけどさ」

「目の前で消えたのか」

仁田は目を自分の手元からあげずに訊いてきた。そこで簡単にその日の状況を話して聞かせる。仁田は硬い表情を崩そうとしない。カケルはあえて軽く語ってみせた。

「とまあ……だから奴だってファミレスの店内にいたらもしかしたら助かって」

「オマエ、店内にいたのか？」抑え気味だった仁田の声が一オクタブ上がる。

「……まあな、テーブルの下に入ってさ、地震かと思ってたし」

何も答えない仁田に言い訳じみた言葉を付け足す。

「あの時には何にも知らなかったんだぜ、他にどうしようがある？」

突然のことだったし」

「オマエ……あの店にいた連中の記事見たことなかったのか？」

「へっ？」我ながら、情けない声が出てしまった。手から枝豆が滑る。

「何だよ記事って」

「ツイッタ で流れたけどさ」ここは更に声が小さくなる。「すぐ削除された」

どうせロクな内容ではない、と思っていたものの、つい「何て流れてた？」と訊いてしまう。

「熱が出てさ、内臓とか、筋肉とか、身体の中からただれて溶けてく病気……何て言っただけ？」

「知らねえ」急に胃が焼けた。枝豆を落としてしまう。

「店長も、スタッフも、客の何人かもそれで死んだって。それから店長の家族も。家で感染したらしいけどさ」

「初耳だよ、だってさ」もう説得力もない。それでもカケルは無理に笑って繰り返す。

「俺も店にいたよ、でももうずっと前の話だろ？俺はピンピンしてるけどな」

「でも言うなよ、なるべく」

絶対だ、という目をして仁田が言った。

「……わかった」

一拍おいて、仁田が腰を浮かせる。

「ごめんオレ明日早く用事入ってたんだった、帰らなきゃだわ」見え透いた嘘だが、引き留める手立てがない。

「ああ……そうか、じゃあオレも」

「いいよ」強い口調で片手を出す。

「遠慮しないで飲んでいけよ、たまのホネヤスメだろ？」

何か答えようと思ったカケルを仁田はあわてて制した。

「もう焼き鳥とか唐揚げとか頼んじゃったし、ほんとごめんオレも帰るけどゆっくりしてって」

さつきは元気よく色んなものを注文していた仁田は、急におおらかな人格をこじんまりと畳んでしまったかのように堅苦しい表情で片手を上げた。

「せめて俺におごらせてくれ、ほんとすまないヤマちゃん、わるいな」

「オレ、肉とか食べねえからせめて持って帰ってくれよ、今、食糧どこも貴重だろ」

「だいじょうぶだよ」怒っているのだろうか？ いや、

「オマエ、持って帰ってやればいいよ、同居してるんだろ実家の人たちと。じゃあな」

これは、怯えだ。カケルのところにまで匂ってきてきそうな怯え。で

きるだけカケルから遠ざかろうとしている、少しでも早く、少しでも遠くに。

急にむらむらと腹が立つてきた。「いいよオレも帰るから」

そう立ち上がった所に仁田が鋭い声を出す。「座ってる、いいから」

「おい、ちよつと待てよカールその言い方」

口に出してから、はっと気づく。相手もどこか呆然としている。

「……ごめん」カケルはすとん、と薄い座布団の上に腰を落とす。

「ご馳走になるよ」

「オレこそすまん」仁田から『カール』に戻った男は面を伏せて、ぼそぼそと口の中でそうつぶやき、「ごめん」またそう言うとは一度もカケルの方を見ずに出て行った。

カケルが枝豆の殻を眺めている間に遠ざかる声が耳に届く。

「勘定オレにつけといて、あの人、お客さんだから何でも注文聞いてやってね」

ういつす、みたいな返事が奥から聞こえた。ふと目を上げると、隣のテーブル客、こちらを向いている方がまじまじとカケルを見つめていた、が、カケルと目が合うと急いで目を自分の小皿に戻した。入口近くのカッパルは特に気にする様子もなく2人きりの世界に入っているようだ。

カケルは残った生を一気にのどに流し込み、やや乱暴にジョッキをテーブルに戻した。

そして腕組みしたまま、じつと小皿に残された枝豆をみる。

何がどう悪いわけではない、なのにいつも、どこかで何かがかかるっていく。

「……第一、カールって何だよ最後の最後に」

カールの片りんすら残されていない元同級生に浴びせるには、もつともダメージの大きなことばだっただろうか。それでも聞いたことが次から次へと頭の中をぐるぐる駆け廻り、カケルは思わず額を押さえてテーブルに突っ伏したくなる。ふと唐突に、そう言えば

クラスにもう1人、謂われの分からないヘンなあだ名のヤツがいたな、と思い出した。

「すみません、」カウンターの奥に向かって声を上げる。

「生もう一杯、それと、焼き鳥と唐揚げ、持って帰りたいんだけどいいかな」

ちゅいーっす、と聞こえてからしばらくして、白い前掛けをした年配の店員が端から覗き

「お持ち帰りは、さっき注文した分を、ですね」

やけにはつきりとした日本語でそう聞いたので、一瞬自分のほうが「あ、あいーっす」と訳の分からない返事をしてしまった。店員は、目もとにかすかな憐憫を浮かべてまた奥に消えていった。

店の名前も分からないままだった。割りばしの袋にも、店内にもヒントはない。それもイライラする原因かもしれない。今の店員に聞いてみればよかったのだ。そしてまた1人、名前の分からない同級生……カケルは額から手を外し、また固く腕を組む。

もう一人のあだ名、確か……ウータンだ。名前は、ウータンとは似ても似つかないような気がしていた。何だっただけ。唐揚げができるまでに思い出そう。思い出せ。思い出せば……

何だというのだろうか？

それでも、今は他に考えたいことがない、いや、正直に言えば……他の全ての思いを締め出したいだけかも知れなかった。

少し酔いがまわった今、カケルは次なる本名不明者・ウータンの本当の名前を必死で手繰り寄せるべく、じつと空ジョッキを見つめていた。

持ち帰りのプラバッグを人差し指にひっかけて引き戸に手をかけると、

「あざっしたー」の音が背中当たった。押されるようにカケルは店の外に出る。

小路に出るところで敷き石のわずかな段差に大げさによるめく。久々に飲んだせいかわ、思ったより酔いが回っていたようだ。

街灯がかなりの数絞られているらしく、あたりは真っ暗だった。

持ってきた懐中電灯を出そうと上着のポケットに手を入れようとしたが、うまく手が届かずに何度かやり直していた、その時、

「それとも、一緒に来る？」

よく通る透き通った声が少し離れた暗がりから飛んできた。

唐突なことばに

「はあ？」

腑抜けた声を吐きだしてしまってから、カケルはおそろおそろ前をうかがう。

「アナタさ」

隠れるところなど何も無い、単なる路地のまん中、カケルがようやく点けた灯りのその中に、白いサンダルの足先が伸びてきた。

赤いペティキュアをつま先はちんまりとして、その上に続く脚は華奢なのに美しい一揃いのラインを描いてすらりと伸びていた。これ以上は短くできないというジーンズを断ち切ったホットパンツはふちがほつれ、フリンジのように色気のない太ももにかかっている。まだそれほど暖かい季節ではないのに、黒い半そでのＴシャツ一枚という軽装、上着はジージャンを、人差し指で肩にひっかけて背負っていた。

顔立ちは幼く、特に可愛いかきれいだとか言う訳ではない、どんぐり眼の上の眉は濃く、どちらかと言うと聞かん気の強い少年風

だ、それでも、脇の少し上で1つに縛った髪の毛の先が軽く肩に触れているのがどことなくなまめかしい。中学生か？ 一瞬そう思ったが、ふと、先ほどの店にいた客の1人だと気づいた。

確か、男の連れがいたはずだ、今は独りなのだろうか？

「アナタ、どこに住んでるの」

「今？」

あつたりまえじゃん、と彼女はつぶやくように地面に言ってからまた顔を上げる。髪の毛が跳ねた。

どうしてこんなに高飛車なんだ？ 女ってみんなこんな感じなんだろうか？

それでも無視するほど嫌な感じでもない、カケルは口を尖らせて答える。

「十二小学校の体育館だけど」

「避難してきたの」

「まあね」急に風向きが変わり、彼女の方からかすかに湿った風が来た。ふと、鼻をかすめる匂い、カケルは気づいてはっと目を凝らす。

酔いが急に醒めたのが分かった。

「君さ……」この近くに住んでいるのか？ どうして自分に声をかけた？ 一緒に来るかってどういうこと？ さっきの男は連れじゃあなかったのか、色々と聞いてやりたいことの前に大きなはつきりとした疑問文が立ちふさがる。

「君、狼？」

「そうだけど？」

少女はあっさり答えた。

でなければアナタなんか声なぞかけないよ、といった口調だった。

「そうなんだ……」

急に気だるさに襲われ、カケルはだらんと手を降ろす。

狼とはもう関わりなく暮らしたい、実はそう思っていたのではな

かったのか？

なのに、どうして家を出てからずっと、ピアスを外さなかったんだらう？

「アナタ、名前は？」少女が近くに来ると、確かに狼が匂った。

「カケル、君は」

それには答えず、少女がすぐ近くに寄った。カケルの顔を覗くように見上げる。

「鼻が悪いの？ カケル」

いきなり呼び捨てだった。カケルは詰め寄られて一歩下がる。

「何でだよ」

「店にいた時から、気づかなかったの？ こっちに」

「別に」

「鼻があまり利かないんだね」

「そうかな」あの店で、揚げ油にゴマ油を少し入れているのには気づいた、それはまあ、言われれば誰でも気づくことだらうが。

それと思い出したのは、小学4年の頃ずいぶん長く耳鼻科に通っていたことがあった。

副鼻腔炎、だったか？ 確かに鼻はあまり良くなかったかも。

しかしそれをいちいち彼女に説明する気にもなれない。

「アタシはすぐに分かったよ、だから声かけたんだし」

「さっきの男、狼だったのか？」

えっ？ 彼女は目を丸くしてバランスを崩したようによたよたと後ろに下がった。カケルを覗きこむために背伸びをしていたらしい。

「さっきの男？ 見たの？」

「俺より先に店出てたのは知らなかったけど、男がいただろ？ 彼も狼なのか？」

「ははああ？」サンダルをカタカタと鳴らして、少女が笑う。

「見てたんだね、店に入ったのは。でもさ、なんだか、カケルさあ、もう恋人みたいなこと言ってるう」

「何だそりゃあ」

カケルは呆けたようにそうつぶやいて彼女の笑いこける姿を見ていた。

「おかしいね、カケル、ふふふ」

「別に」急に早く帰りたくなって、カケルは手に提げた包みを持ち上げる。

「それよか、急ぐんで。じゃあな」

「待ってよ、まだ」

「急ぐんだよ、悪いね」

「アタシはすゞ」

急に真顔になってすゞが言った。

「石川県珠洲市のすゞ。でもふつうはひらがなで書いてね。でさ、書く時には『す』の後、『く』の反対向きに点々を入れてね」

「はあ？ そんなん書かねえよ、どこに書くんた、心のダイアリーにか？ カケル、心の中で突っ込んだ。」

「すゞは身をよじるようにぴっちり腰に張り付いているホットパンツのポケットから小さな平たいケースを出し、中から薄いカードを出した。ピンクの上質紙を名刺に作ったものようだった。それをカケルの手に無理やり握らせる。」

彼は懐中電灯をちらつと紙面に向ける。可愛らしい体裁だが、ワンプロで打ったものようだ。

「アタシに逢いたくなったらいつでもここに連絡して。でさ、質問には答えるけどさっきの人も狼だよ、」カケルは一瞬びくんと身体が反応した、が、すゞはお構いなしに続ける。

「でもあの人は流れ者だって、初めて見たし、もうすぐここから出て行ってくつて、それに」

カケルの手首を軽く上から握った。

「匂いが合わなくて、今夜は諦めた、したらちようどぴったりの匂

いのヒトが来たからびつくりだよ」

「ちょ、ちよつと待てよ何」

誘惑されている、と遅まきながら気づき、カケルはあたふたと手を振り回す。

まるで、イブに初めて音楽室でキスされた時のようだ、全然成長していないではないか、この中年男、とつつあん坊や、老けたぼっちヤロウめ、カケルの内部の第三者委員会がやし立てる。

「ま、待てよキミ」

「すゞだよ、だから」すゞがもたれかかってくる。「ここでもいいの？ じゃあ」

すっかりひっかけていたはずの唐揚げの包みが情けない音を立てて地面に落ち、ちよつとそこを踏んでしまう。ずるりと滑って、カケルは焦って態勢を立て直す。

「すゞ、さん、あのお」

近くで見ると、狼というより滑らかな身体の線と身のこなしがどこか

「人魚……？」

そうだ、海の中での出逢いのようだ。どこかで見た感じだと思っただが、昔みた映画に出てきた可憐なマーメイドに似ている。彼女が更に迫り、息が苦しくなった。腰がずしんと熱く重みを増した。

もしかしたら、彼女は、凄く好みかもしれない。急激な心境の変化に自分でもついて行けていない。息が上がる。と、そこに

ケータイが震えた。2人の動きが止まる。

「ごめん」カケルのケータイが発光して震えていた。何と云うこと、またもや、メグからだ。

「悪いけど、今夜は帰るわ」電話は鳴らしっ放しにしたまま、すゞにそう伝えると、うん、と言って案外あっさりすゞは離れた。両腕をぶんぶんと前後に振っている。

「急ぐんだよね、今夜は」

「まあね」

カケルは一応包みを拾い上げて、中を確認もせず、少しだけ揺すって形を整え、片手を軽く上げて彼女の脇をすり抜けた。

「じゃあ、またねー」

「こだわりもなく、すゞは明るく言って手を振る。」

少し離れてから、カケルは我慢できなくなつてふり向いた。すゞはまだ見送っているようだった。今度は匂いで分かった。カケル、訊いてみる。

「さっきさ」

「うん？」

「『それとも一緒に来る？』の『それとも』、の前は何て言ったんだ？」

「ああ？ あれね『ここですか？』って聞いたんだよー」

あまりにもあつけらかんと大きな声でそう言つと、すゞはぶんぶん手を振つた。

「でもまた今度でいいからねー」

真っ赤になつたのを見られないように、カケルはずんずんと大股で（しかし、やや内股気味で）仮のねぐらへと帰つていった。ひしやげた包みをむやみやたら振り回しながら。

身体のほてりも少し醒めた頃、ようやく避難先の小学校についた。正門近く、残っていた大きな街灯の下でカケルは包みを検めた。

焼き鳥の串が入っていたのをすっかり忘れていた。袋が下で破れ、尖つた串が飛びだし、更に念には念を入れてその先からタレが滴り落ちている。

唐揚げも形が残っていなかった。

はあ、とため息をついてカケルは校庭にあつたダストボックスにその包みをそのまま突っ込んだ。

ラブがいれば、洗つてからくれてやるんだけどな。ふと思ひ出して、カケルは星ひとつない暗い空を見上げる。

ケータイがまた震えて、先ほどの不在着信にも応えていなかった

のを思い出す。

メグはカンカンだろう、もう目と鼻の先にいるだろう激怒り姉の顔を思い浮かべ、なぜか可笑しくなる。

ダメな時にはどんだん駄目になっていくなあ、俺。そう思って更に可笑しくなった。

酔いは完全にさめたようだ、それでも身体の芯に、何となくぬくもりが残っている。カケルは胸ポケットの名刺を上からそっと押さえて、はあ、と息を吐いてから体育館に戻っていった。

結婚してもいいですか 01

出て行くよ、ここを。結婚したいんだ。

すゞと知り合ってから約1ヶ月、それからようやく勇気を出して連絡を入れ、つき合い始めてもう6週間になる。恵にそう告げるのはいつにしようか、カケルはずっとタイミングを狙っていた。

ムカイヤのところを抜けるよりももっと、精神的にはキツイ。

あちらは涙を流しながら

「本当に今までお世話になりましただよ、旦那」

と、へいこらお辞儀をして何ならばヤツのぶっくりした手の甲に何度もキスして円満に去っていくチャンスだったのに、つい襲いかかって殺そうとしてしまった。おかげで何かの呪いをかけられるところだった。

『電話の生き霊』に救われなければかなり危ない所だったと後から改めて気づいたし、別れ方としてはマイナス点に限りなく近い感じもしていたが、それでもお互い憎み合って別れた方が断然気は楽だ。一つだけずっと心残りだったのが、偉そうな口がきけなくなるくらい、ムカイヤを叩きのめしてやればよかったこと、そのくらい爽やかとも言える憤りを抱いていた。

何か忘れてやしないか、俺？ ひらめいたのはほんの一瞬。

誰かの顔が浮かんだ気がした、しかし、輪郭すら定かではない、男か女かさえ。

思い出せないことがある、ということとは自分でも気づいてはいた。いつからかなのかも分っている、この避難所にしばらく住めそうだという話が出た頃からだ。

大事なことなのだろうか？ カケルは立ち止まって、いったんス

テージの方を眺める。

何に関係したことなのか、せめてヒントがどこかに転がっていないかゆっくりと目をさまよわせた、しかし一瞬でも浮かんだ人物はすでにどこにも姿がなかった。

思い出せないくらいだから、そうたいしたことではない、カケルは自分に言い聞かせる。

もちろん警察に追われている件は忘れる訳がない。棘となって心に深く刺さったままだ。

しかし人を殺したことは、カケルの表層には直接響いてこない。今までずっとそうだった。警官を見かけても、身がすぐむということもない。

刑事たちが避難所に突然押し掛けてきたら、と想像したこともある。ただ、迷惑だろうな、母親は、圭吾さんや夏実はどんなにショックを受けるか、と思っただくらいだった。

幸か不幸か、棘はささったままでも忘れることはできる……それが血流に乗っていつか心臓に刺さって死ぬというのも迷信だ。放っておけばいい、ただ、ずっと人には明かせない痛みを抱えていなければならぬのだが。

それよりも今一番気になっているのは、ずっとの新しい暮らしのことばかりだった。

結婚してもいいですか 02

恵に言えば、反対されることはないだろう、母親の方が駄目だと
言いそうだと。

家族として、というより自由に動き回れる安価なヘルパーという
位置づけなのではないか、とよく感じていた。それに、結婚なんて
このご時世に何を考えているんだ、甘すぎる、と思われるに違いな
い、とも。

家族から使えるヤツが1人減る、そういう認識だけなら気は楽だ。
今なら、はつきりと「あまりアテにしないでくれ」と言えそうな
気もする。自分はもう、独立するのだから、と。

警察に踏み込まれるかもという恐れも、直接見られなければあま
り気にすることもない。

しかし本当に反論できるのだろうか。カケルには全く自信がなか
った。

恵は口では反対しなくても、あの目で何か訴えてくるに違いない。
別れにはお互いの痛みが伴うだろう。

避難が決まる前の晩、恵がカケルを抱いて全身で「離れないで」
と訴えた時のぬくもりは今でもカケルの胸に残っている。あの晩も
裏切る寸前だった、皮肉にも避難指示がなければあれが家族で過ご
す最後の晩になっていたはずだ。

『家』に着いたのは、まだ早朝と言ってもいい時間だった。朝帰
りのカケルは足音を忍ばせて体育館に熱く充滿する混沌の匂いの中
を渡り、片隅にひっそりと沈む家の塊に戻った。

段ボールでできた囲いの中、家族はぐっすりと眠っていた。

圭吾と晴樹の姿はなかった。すでに何かの用事で出かけたようだ。
カケルは琢己用の『朝食』をそっと、一番手前に寝ていた恵の枕
元に置いた。プラ袋がかすかな音をたて、恵がほんのわずかに身じ

ろぎして向きを変える。形の良い鼻の線が暗がりにも白く浮かんでいった。カケルはその様子を目の端に収める。

「メグ」何となく、小声で呼びかけたが反応はなかった。カケルは囁き声で続ける。

「結婚したいんだけど、いいかな」

「うん」

やけにはつきりした返事に、カケルはぎよっとして身を引いた。

恵は全然目覚めた様子はない、ぐっすりと眠りこんでいる。上になった方の口角がかすかに持ちあがる。いい夢をみているようだった。

本当は他に聞きたいことがあった。

カケルは声には出さず、彼女の寝顔に問いかける。

ねえ、メグ、どうしていつも肝心な時に携帯で呼んだりするの？

ホンゴウチの時と、ムカイヤを絞め殺そうとした時、そしてずっと誘われた時。

これからも俺が何かしでかそうとすると、メグは俺に電話をかけてよこすのかな？

それって……呪い？ それとも、意識下での愛情？

母親が急に大きないきをかき始めた。恵は眠ったまま顔をしかめ、少しだけ脚を曲げ、脇にくっついて熟睡する太一を抱え込むように腕を巻き付けた。

愛情も呪詛も、人を留め置こうとする点ではあまり違いはないのだからか、カケルは住居スペースをざっと見渡してから足音を忍ばせ、また体育館の外へと向かった。

圭吾は昨日もらい損ねた申請をとりに行列に並びに行ったのだから。

晴樹は近ごろ、仲間に入れてもらったこの第2区の『青年会』に入ったようだった。週に一度か二度くらい、「お世話になっている避難地周辺の清掃活動に参加している。今朝もまだ暗いうちから、片手に火ばさみ、片手にゴミ袋を下げてトボトボと歩いている数人を見かけていた。

体育館の外に出ようとした時、警官が2人、すれ違いざま体育館の中に入っていった。

彼らが脇をすり抜けた時に風が巻き起こり、カケルの髪をそよがせる。新しい制服の匂い、ウールだろうか、カケルは彼らをぼんやりと見送ってその場に佇んでいた。と、

「おはよう、カケルくん」

まだどこか目覚め切らない薄闇の中、朝には無遠慮とも言えそうな快活な声がした。

カケルがふり向くと、体育館の中、ステージの方から半白髪で長身の男が影をひいて現れた。

第2地区長の竹中だ。父親の古い友人でもあった。カケルは、ああ、と片手を上げてやはりくだけ過ぎかなと思いきや軽く頭を下げる。

「何？ 警官が珍しいのかい」

竹中は目を丸くしてそう問いかけてから、すぐににやりと笑ってみせた。カケルもつい笑い出す。

「今からお出かけかね？」

「帰ってきたところですよ」その返事に竹中はへえ？ と眉を上げた。

元々縁のないこの地区に居場所が確保できたのは、後にも先にも彼のおかげだった。

全く馴染みのない土地の見知らぬ小学校の校庭に佇んでいた彼らは、途方に暮れてごたくく群衆の中、何とか離れ離れにならないようにくつつきあっていた。そんな時、遠くから手を振りながら近づいてきた彼に、まっ先に気づいたのは母親だった。

「竹中さん？ 竹中さんだよね！」

意外にも、圭吾も大声をあげて彼に駆け寄った。「わあ、なんでここに」

竹中は恵たちの結婚披露宴にも出席していた。おおらかな性格どうし、圭吾ともなぜか気が合ったらしい。

家にも時々遊びに来ていた。特に目立つ感じではなく、のっぼでひょうきん、それでいて温和な印象だった。昔からやや気難しい父親が、彼が訪ねてくると妙に陽気になってニコニコしていたのが少しだけ意外に思ったくらいだった。

そんな竹中だが、父が亡くなった時には所在が分からず呼ぶことができなかった。

まさかこんな所で会えるとはねえ、と最初の数日間、母は思い出したようにそう言っては脇に積み重ねたバッグの一番上に目をやった。バッグの上にはまだ紙箱に収めたままの父親の位牌があった。

今日の竹中も、特に変わった様子はなく和やかな目をしている。

「今帰ってきたのかい？」

責める口調ではない、のんびりしたごく普通の日常会話風のしゃべり方だった。目は穏やかに笑っている。左の人差し指と中指が途中から欠損しているが、すでに傷口は綺麗に治っているようだ。

「はい」カケルは正直に話す。

「外に住もうかと思って、アパートを借りたんですがその」
竹中の表情が一瞬消えた。

目には何も映っていない、怒りでも哀しみでも無くただ平淡な、

記号としての顔、まるで動力が途切れてしまったかのような。

「竹中さん？」

相手はすぐに我に返った。「ああごめん、ここがね」胸を軽くたたく。

「ちよいと持病があつて、急に息が詰まることがあるんだ」

別に苦しげではなかったが、カケルは一応聞いてみた。

「だいじょうぶですか」

「ああ、もう平気だよ」先ほどのように楽しそうに笑っている。

「ところでさ……1人で出ようと思ったのかい？ ご家族に話は？」

「まだしてません、友だちと共同で住もうかと思ってるんですが」

「共同で？ 友だちができたの？ ここで」

なぜか竹中にはすんなりと語ってしまう。

「はあ……女の子の」

竹中の眉が、今度は悪戯っぽくはね上がった。

「ははあ。素敵じゃないか。同棲だね」

「いえ……」カケルは急に照れくさくなって下を向いた。ドウセイ、という言い方に時代めいたものを感じながら、すゞの顔がちらりと目の前を横切り、ついニヤついてしまう。

「ここから近いの？」

「はい、歩いて15分はかかりませんが、駅の近くです」先回りしてこんなことを言う。

「家族がどこかに落ち着くまで毎日様子は見に来るつもりですが、いずれ結婚しようかな、と」

「それはいいことだね」

竹中は何度もいいことだね、と繰り返し、カケルの肩をぽんぽんと軽く叩いた。

「また住所を教えてください、結婚しても別にいなくなるわけじゃなし。ボクも何かとまだ手伝ってほしいこともあるし、御家族のところにもちよくちよく顔をみせてやってくれよ」

「そのつもりです」妙に鼻息荒く、カケルは顔を上げて答えた。

今までも時おり、頼まれると竹中の補佐をすることがあった。地区への配布物受け渡しを手伝ったり、代表者会議に同行したり、それほど負担の大きな仕事ではなかったし、誰かに頼られている、という安ど感があつてカケルはいつも喜んで彼の手助けをしていた。

彼の頼みごとを聞いてささやかな期待に応える、それが何故なの

か、家族に頼まれた仕事を引き受けるのよりもずっと張り合いがあつてやる気が出る。

カケルが張り切つて答える様子を面白そうに見ていた竹中が、急にあらたまつた口調になつた。

「ところでさ、今日の夕方時間空くかな、1時間くらいだけど」

「だいじょうぶだと思いますが、何か」聞いてみると事務局へ代理で出かけて書類を受け取つてほしいとのことだ

「いいですよ」そう答えると竹中はほつとしたように笑みを浮かべた。

父がどんないきさつで彼と友人になつたのかそう言えばカケルは聞いていなかったが、生真面目ながらも穏やかで柔軟なイメージが、カタブツの父にもやはりどこか心地よかつたのかも知れない、とふと思う。

元々2区の住民ではなかつた彼ら大所帯を、どういつツテか分らないがさつさと2区からの避難民として登録してくれた。それから、体育館後ろ片隅に物資の段ボールがうず高く積みまわっていたのを

「ちょうどここ片付けようと思つてたんだ、カケルくん、手伝つて、それとお兄ちゃんも」

とときばきと指示を出し、一家族がゆうに割りこめるだけのスペースを作つてくれた。

パーテーションに用いる段ボール一式、ニコニコしながら手配し、てきて言つた。

「これ、モニター募集中だつて、よかつたら使つてみてまたアンケートに答えてよ」

とにかく、彼らに全然押しつけがましいことを言わないのが氣遣いに溢れていた。

あまり人をほめない恵でさえ、ふと「竹中さんがついていてくれたら安心ね」と漏らしたことがあつた。

ありがとう、ではまた夕方頼んだよ、4時過ぎに電話するから、そしたらボクの『うち』まで来てくれ、じゃあね、とたて続けにし

やべってから竹中はうれしそうに手を振ってまた体育館に入っていた。

竹中の『うち』は、分かりやすい場所、ステージのすぐ前にあった。もともと独りものだし慎重で深い性格なのか居住スペースは一般的な独り暮らしよりもさらに狭い。それでも「どうせ夜、寝に帰るだけだからね」と笑っている。

チャンスさえあれば他人より有利な場所に眠り、他人より少しでも多く食糧を得たい、そんな人たちが明日よりも今日という状態で無数にひしめいている中で、やはり彼のような人間はかなり特殊とも言えた。

あまり欲のないカケルですら、竹中の域にはとうてい達することができない。

「つつか、どうして無表情になるのが気になるな」

すゞと散々絡み合ってから、カケルはふと、そうつぶやいた。

「なーにが？ ムヒョウジョウ？ なに？」

ふざけた口調でさらにからんでくるすゞを押しつけるようにしてカケルは笑う。

「カンケーねえよ、別にさ」

どこかで、関係しているのかも知れない、と思った時胸が妙にざわついて、カケルは不安を紛らわせるためにまた、すゞに抱きついた。

今は。

今は、考えたくない。

あれ？

いまでもうして水の中にいるのだろうか？ 暑い日だった、夏はとつくに終わったというのとにかく暑かった、でも水に浸かっているのは涼もうと思ったわけじゃない。

顔を精一杯拳げる。口から、鼻から水が入らないように、そして飛んでくる石に気をつけて、ほら、襲ってくる。襲ってくるのは誰？ そして言ったのは？

「ボウフラは」ボウフラが何だって？ その声は他の所でも聞いていた。

「キミも逃げた方がいい、たくさん殺しているんだし」その声はボス。いや、地区長だったか……待てよ、ボスって誰だ、それに地区長、って何？ チクチヨウというあの声、そして笑顔に一瞬の無表情。「罪の意識はあるのだろうか」表情もなく静かに問いかけてきたのは彼だ、そう、竹中さん。タケナカさんは『ついていてくれたら安心ね』と、そう、安心できる人。その人は言った。いつの話だったかは……覚えていない。

「意思のない存在が我々を滅ぼそうとしても、それは人間からは罪に問えない、その存在に悪意というものが介在しない、というか我々にはそれらの意図が永遠には見えてこない。ただ単に彼らが歩く道に我々がいただけ、目にも入っていないかったかもしれない……路傍のピクニックという話を君は知っているかい？」

いえ、知りません、と俺は答えただけだ。その時には知らなかった、昔のSF映画だったか、その原作だったかにそんな題名のものがあったのだ、と。竹中さんは意味を教えてください、俺はなるほどとは思ったが一番の疑問は残った。

しかしどうしてこの水はこんなに濁って、いつまでたっても俺は

そこから出て行けないんだ、縛られているから？ かるうじて口と鼻は外に出ている、水は濁り、目の前を赤いもやのような流れが横切る。血だろつか。肩が痛む。疑問はひとつ、意図が決して読みとれない攻撃に我々はどう対抗すればいいんだ？ 竹中さん、俺にも分らない、あなたたち普通の人間にとって俺のような存在も「意思無き排除」と同じようなものか？

「狼はかみ殺すことが仕事ではない」忍耐強く、彼はそう言い聞かせる、俺に。だからいつの話？ 俺の中で時はすっかりもつれ合っている。畜生。

「君たちが噛み殺そうとするのは、間違った主従関係から生じたいときの誤解が原因だ」

「いつときの誤解が10年以上も続いてしまった」俺は涙を流していたか？

「俺は自分がやりたいと思ったから、続けていたのかと」

「それは私には解らない」竹中さんは淋しそうにそう言った。

「狼の本質なんて、人間には真に理解できるものではない。狼に限らず、他の生き物の主体的な行動は人間からすればすべて正しい本能から導かれる、意図されたものだと考えられている、でも本当は、そんなことは人間のエゴから生じる勝手な言い分だよ」

「俺たちは誰の通り道の上でもピクニックなんかする気はなかったんだ」

俺は倒れたまま声に出している。「対する人間は、それじゃあどうすれば？」

「ひとつしかないだろう、死にたくなければ身を守るしかない」

竹中さんはそう言って銃を向けた、俺に。

「意図なぞ読んでいる暇はない、とにかく相手を斃すしか自分が助かる途はない」

「俺はあんたを殺そうなんて思っていない」

ムカイヤが投げた石が肩口に当たり、俺は溺れる。竹中さんの指が引き金にかかる。

殉教者のイコンをどこかで見たことがあった。

画面は縦横いくつかの升目に分れている。まん中には聖者の立ち姿が、そしてその周りにはコマ割りにはまる漫画のように、彼がどのような人生を経て幾多もの迫害を受け迷い、苦悩し、それでもなお最後には信仰に目覚めて至高の境地に達したかというひとつの人生の物語が刻まれていた。

人はすべてこの絵の主人公だ。自らの立ち姿をそれぞれの苦難がぐるりと取り巻いている。

水に浸されて石つぶてをぶつけられ、倒れたところに銃を向けられ、他にも俺の受難はコマ割りをはみ出すようにこまごまと描かれているだろう、どれが最初だったかどんな順番だったかは、覚えていない。痛みで辿るしかない。左手の人差し指と中指との間はずっとズキズキする赤黒い傷が見えて、これは舐めても治らない、治療は受けたがその後、医者に行く暇も無かった。溺れたのはその後だ、最近。肩の傷と頭の切り傷はその時のものだろう、ライトセーバーで打たれた傷はもつとずっと昔。たぶんもう痕も残っていない、心の中には今でも深い傷跡が残っているだろうが。

心の中は傷だらけだろう、ひとつひとつの傷穴から何かが流れ落ちていくのを感じる。砂時計の砂よりももつと速く、失っていくものは闇に吸い込まれていく。何を失っていったのか、思い出せない、思い出すのすら怖い。

しかしそのために、生きることにしがみついていたのでは？ 最後のひとつを手放さないように、もがいていたのではなかったんだろうか？

反対に、もがく相手に傷つけられたこともあった、彼は何かを守ろうとしていたのだろうか。相手は俺の目をシャープペンで刺そうとした、違う、刺されそうになったのは自分ではない、狼だった。狼？

溺れているのは狼なのか？ あれは夏の終わり、いや冬のはじめ、いつだったのか？ 夏はプールに行く暇もなかった、なぜって俺はずっとラブの散歩をしていたから、蛙を獲らないように気をつけながら。でも冬に水に入ったりするのかな？ 縛られていたから？ そんなばかな。待てよ、

俺は今、水の中ではないようだ。縛られてもいない。

なのにどうして、倒れたまま起き上がれないのだろう。

殺せ、ころせ、遠くで声が聞こえる。一人やふたりではない。もっと大勢の怒号。俺は地面に這いつくばってその嵐に晒されていた。胸がむかつく、呑み過ぎたときのようだ、口を大きく開けて少しの間を置いてから吐いた。血がかたまりとなって地面にこぼれ落ちた。何だよ、この血。急に氷水の中に落ちたような極端な寒さに襲われる。

あの水は暖かかった、まだ。今は水の中ではない、地面の上だ。でもごつごつと尖り、しかもぬかるんでいた。硬い上に柔らかく、どちらも不快な感触だ。何故こんな所にうつ伏せに寝ているのかが全然思い出せない。

気持ち悪い、そして、寒い、ものすごく寒い。また気持ち悪くなって口を押さえようと手を出した。

血にまみれ、泥に汚れたその手は「人間の手だ」。俺は安堵する。何だ、よかった。

口を押さえようとした手を踏みつける足。そして

目の前の銃口。

いろんなことを急に思い出す。コマ割りの中の絵が1つずつ目の前に展開されて

俺はすゞに言った。2人きりの時、アパートの一室で。

「狼になって、たくさんの人をかみ殺したんだ」

すゞは目を丸くして聞いていた。

とっかかりが見えた、そこから時を辿れそうだが、俺が告白した時から。

「狼になって、たくさんの人をかみ殺したんだ」
すゞは目を丸くして聞いていた。

すゞはこう訊いたのだ。だらだらした愛撫とお終いだけ少し急いだセックスの後で。

「カケルさあ、カケルがいた『群れ』どんな感じだった？」

急にそう聞かれ、「いや」カケルは何となく答えた。

「群には入って無かったよ、ずっとひとりだったけど」

「人間の姿で？」

「人間になつたり、狼になつたり」

「狼の時には、何してたの？ たったひとりで」

答える前に、ためらいはあった。

気だるい充足感の後の、まん中が抜け落ちてしまったような虚脱感、その空しさを何とか埋めたいと思ったのだろうか、すゞがいつも何かの折りに他愛ない『打ちあけ話』をしてくれるのを何となく聞き流して、「たまにはカケルの話も聞かせて」とねだられたのを済まないと思っていたのか、どういう理由があったのかはつきりしないままではあったが、カケルはいつになく、正直に語るうとしてすゞの目の前に座りなおしていた。

「かみ殺す？」

すゞが聞き直す。カケルはうなずいた。

「それを聞きたかったのか？ つまり」

沈黙の中に朝刊を配るバイクの音が響く。新聞はまだ発刊されていた。ほとんどが政府の公式発表やそれに基づくコメントで埋め尽くされていたが、とにかく様々な『情報』は以前と同じ量で紙面を埋めてはいた、それを配る人びと、読む人びとが内容をどれだけ信

じているかはまた、別であったが。

「狼になって、何をしてたか？　そういうことなんだろう？」

すゞは答えない。ただ目を見開いて、じっと、カケルと自分との間の空気の層に目を止めている。

「狼になって、他に何をするんだ？」

新聞配達のパイクは、こまめに路地を巡っている。遠くなり、近くなり、スロットルを控えめに捻りかえ、チェンジペダルを踏む度に響く乾いた音に続き、駆動音が軽やかに変化していく。

その音を耳で追いながらも、カケルはすゞの返事を待っていた。

「……すゞは違うのか？」

いつもの弾むような口調は影を潜め、すゞは息を吐き出しながら静かに答える。

「人間をかみ殺すのは、掟に反するんだよ」

「掟？　何の」

「群の。カケルさあ」

すゞは、尻をぺたりと床に落としたまま、手をつかって少し後ずさった。

「狼は人間を殺さないよ？　ただ群で集まって、お互いの匂いを嗅いであちこち走り回って、たまには牛とか他の動物を襲っちゃうけど。どうして人間を殺すの？」

どうして？　それはなぜだろう？　どこでそう思っていたのだろうか。

カケルはすゞから目を離し、床を見ながら思い出そうとする。

「たくさん、ってどれだけ殺したの？」

「たくさんは……たくさんだよ」

「その話をもっと聞かせて」すゞはカケルの目を覗きこんだ。聞きたくないという嫌悪感が眉のあたりに漂っている反面、それでも聞いてみたい、という思いが口の端を引きしめていた。そのアンバランスさにカケルは息を呑み、美しい、と素直に感じた。

人魚の女神は、汝の物語を所望しておられる。

お告げの声？ カケルはその声に押されて告白を開始した。

目は壁にかかったカレンダーに据えて。文字と数字とが機能的に並んだ、シンプルなものだったが、先月からめくられずにそのままになっている。あれを次の月に替えないとな、そう思いながら、あまり話の内容に夢中にならないように、淡々と声に出して行く。

最初の1人は、他の狼と一緒に襲った気がする、そう言うときは更に何か訊きたそうに口を半開きにした、だが、すぐに口をつぐんで次を促す。

カケルは次の殺しを思い出して語った。

女の人だった。名前は……

次は男、次は年老いた女性とその娘、その次は女で漫画を描いていた人、それから……

合宿所でたくさん的高校生たちを襲った話をした時、すゞは息を呑んだ。

「その話……ニュースで見た。アタシも高校に入ったばかりだったから、ママに言われたの、合宿なんかに参加しちゃだめだよ、ヘンな宗教にさらわれるから、って。

カケルがひとりでやったんだね、それ」

「うん」

1人で？ 違う気がするがそこがはっきりしなくて、カケルはそのまま肯定する。

「人間を殺したんだね」

すゞはそうつぶやいたきり、また黙って聞いている。

次々と殺した人の名前を思い出し語りしていくうちに、すっかり窓の外は明るくなっていった。

雀の鳴き交わす声が爽やかな風をかき混ぜるように窓から飛び込んでくる。

すゞがあまりにも静かに聞いているので、眠ってしまったのかとカケルはすゞの顔を見た。

何故？ とは聞かれていないのにカケルはどうしようもなくなっ
てこつ付け足す。

「どうして殺そうと思ったか、って？ 思ったわけじゃない、そう
言われたからだ。

『その人に会ってください』と。

命じられたままに、俺たちは動く。そう信じていたから」

俺たち？ 俺たち、とは誰とだれのことを言うんだ？

急にカケルは黙り込んだ。

最初の時に一緒に出かけていたのは誰だった？

合宿所でたくさん的高校生と、大学生2人と先生を襲った、しかし先生の味は、なぜか全然思いつけない。小柄な学生の血の味も、なぜか舌に残っていなかった。しかし「やつつけた」という手ごたえだけは確かにあった。

何か大切なことを忘れている。

「何なんだろう」

「カケル」

何度か呼んでいたらしい、やっと気づいて、彼はすぐに目を戻した。

「ごめん、今日はもう帰って」

いつの間にかすゞはすでに下着をつけていた。白いレースのキャミソールから小柄な肩がのぞいている、そこにもう一度吸いつきたいとカケルは頭を寄せるが、すゞは軽くそれを避けた。

「ごめん、アタシ、少し出かけるトコがあるから」

「じゃあいつもみたいにもた8時過ぎに」

「今夜はいいよ、悪いけどアタシはちょっと遠出するから帰ってこないと思う」

「別に1人で居てもいいだろう？ カギもあるし」

契約したのは俺だしな、帰って何だよ、と軽く口を尖らせる。

カケルはトランクスを穿いてシャツをかぶってからカレンダーの9月をめくった。まっさらな10月が顔を出した。

「もう何日経ってるんだ？ カレンダーの役に立ってないじゃんか」
ぶつぶつ呟いてそれを壁にかけ直し、ふとめくり上げて11月のページを覗き見る。

11月1日のところに、すゞの字で小さく「入籍」とあった。こじんまりした体にお似合いの、可愛らしいちんまりした文字だ。

「別にいいけど、今夜泊まるつもりなら一応メールちょうだい」
すゞは向うを向いたまま、すっかり伸びた髪を梳いている。いつ

もの声の調子に戻っていた。

「いいけど？ だったら早く帰ってくるのか？」

「かもねー」くるりとふり向いた時にはいつもの屈託ない笑顔だった。横に縛ったポニーテールがぴょんと跳ねる。

「出る時ゴミ出してってね」

「もう集めてないじゃん、すげーぞあそこの収集場所」

角の収集場所は既に機能が停止しているらしく、ゴミ袋がうず高く積みまれ、更に鴉や野犬に襲われて中身が散乱していた。

「ちっちゃくまとめたから、コンビニにお願い、それか避難所か」

頼むねー、とすゞはぼん、とカケルの頭を叩くと軽快なステップでサンダルをつっかけ、外に出て行った。

通りの向こうにすゞが消えるまで、カケルは窓から見送っていた。行ってしまってから気づいたが、人間をかみ殺すことについて、結局彼女がどう思っていたのか聞くのを忘れた。

彼女は何とも言わなかった。酷い、とも、素晴らしいね、とも。

この時にもつとちゃんと腹を割って話し合っておくべきだった、とカケルは後になって何度も何度も後悔した。

すゞがどう感じたのか、自分にどうして欲しいのかをどうしてあそこでしっかり問い質しておかなかったのか。

出かけるの、待てよ、どうしてそう彼女の手首を掴まなかったのか。そしてなぜ言わなかったのか。

「ゴミなんてどうでもいいよ、とにかく、そこに座れ」

もちろん、答えは分っていた。怖かったのだ。崩れていこうとしているものに、敢えて手を出して崩壊を早めようとするのが。

そしてもう一つ……激しく後悔した時ですら、これだけは確かに言えた。

彼女の思いを確かめ、自己弁護を繰り返し、お互いを理解し合う

ことに最善を尽くしたところで、いったん目の前に現れた深く暗い裂け目が埋められることはやはり得ない、と。

『群れ』と称する彼らに責め苛まれている間、朦朧とした中でカケルは、他人と交わした会話や出来事の記憶がかなり以前から飛んでいるのに気づき始めていた。

群れのリーダーと名乗ったミナミシンイチという男は、ふだんは隣町の社員寮に住んでいるらしい、人間の暮らしがいかに悩み多いか、そこにカケルのような面倒事を抱えた『一匹狼』が紛れ込み群れの統率をメチャクチャにした上に、狼の血統としても許し難い罪を犯したことについていかに憤怒の思いをたぎらせているかを早口でまくしたて、「ってどういう解るかオマエに、えっ？」と問い糺す度にカケルの髪を掴んだ手を激しく揺さぶった。

頭を激しく揺すられるせいか、その声がいっしかよく聞く声と重なってくる。

恵は言った。太一を預ける場所が見つからないのよ、なっちゃんも夏休みに入るってこともあつて、えっ？ 転校の手続きが止まつてるし、晴樹なんて復学できるかも分んない、分かる？ えっ？ まあ、あの子はなんとか隊つてのに入つたからしばらくはやること一杯ありそうだけどね、聞いている？ えっ？

困つたのは琢己よ、こんな避難所じゃ、落ちついて暮らせないのよ、えっ？ いくら竹中さんでも、校舎の一室を世話してもらえないに元々の地区の人ですら許可が出ていないって言つてたし。えっ？ えっ？ 療育はA判定なのに、重度医療の申請も通つてるのに、要支援としてこの地区ではまだ申請えっ？ が通つてないから、どうがんばつても個室に入れないのよ、えっ？ 体育館でいくらい場所を充ててもらえたからつて、やっぱり夜中に騒ぐと回りが迷惑そうな顔してるの、分かるわよ、私だつてそこまで鈍感じゃあない

しね。解ったかこのクソやろう、えっ？

「分りました、すみません」カケルはようやく人間の声で詫びを入れる。発声がうまくできない、その前にさんざん腹を殴られたり背中を踏まれたりしたせいだろうか。それともいつの間にか、狼に変わってしまったのだろうか、カケルは何度もつばを飲み込む。

「狼になったらいいか、途中で」ミナミが最初に、彼を捕まえたその時に「尋問はちゃんのことばで答える、途中で狼になったらいいか、えっ？（一発腹を殴る、それが記念すべき一打目だった）そうしたらすゞを殺すぞ」ぎらつく目でそう言ったのだ。

ミナミシンイチなのか恵なのか分らない声は続けた。

お母さん、せいぜいしてるの気がついた？ えっ？ かなり調子悪いわね、あれ。でも今、どこも受け入れ先がないし、困ったわ。えっ？ いっそのこと倒れたままさあ……

「くたばれ、死ね、オレのいうことが解るか、えっ？」

……ごめん、アタシ多分かなり疲れてんのよ。

「はい、よく分ってます、すみません」

カケルは腫れあがった目の隙間からぼやけた痩せぎすの輪郭に向かい、何度も謝った。

すでに呂律は回っていない、実は今、オレは狼の姿なのかも、と漠然と感じる。

どこか遠くで「やめて、しんちゃん、止めてよお」と泣き声がする。すゞの声だ。

そうだ、すゞにも殴られたぞ。あんな高い声で半泣きだったな。いつだったかな。

すゞにしこたまバッグで殴られた様子が切れ切れに浮かんだ。

イブも怒った時にはかなり怖かったけどさ……コイツも怖い。オンナ、こわ！

心でそう叫びながら、カケルは飛んでくるバググや拳をよけながら後ずさりを続けていた。

「ばかつ！ カケルのばかつ！ 信じらんない！！！」

他の女の子を抱いたんだね、しかも人間？ 信じらんない、アタシとゆうーかわいいカノジヨがいんのに。

ニンゲンなんかとセックスして、どーゆうーことなの！？ アンタ、変態???

「せつ、せつくすなんてしてねえよ」

泣き言に聞こえるだろうな、カケルは頭を守りながら少し顔を上げる。途端にバググの金具が眉間を直撃、火花が散ってカケルは「ぎゃあ」と叫んだ。

「この変態ヘンタイヘンタイヘンタイ」

たまたまずぐが出かけていた時、淋しくなつて外で飲んだ、カウンターで見たことない女性と隣どうしになった、名前すら覚えていない、少し歳が近いな、と思つて気になつて声をかけたら思いの外話がはずんでしまった。

その後、外で少しだけイチヤイチャした、かも。

「それ、ニンゲンだったんだね、もうっ！ 何かんがえてんの？

汚い！ やらしい！」

その時、眉間に当たった金具の痕がしばらく残っていた。青黒いあざが赤くなつて黄色くなつて消えた頃には、すでにすゞとの関係は修復されていた。

ふたりはこだわりなく舐め合い、吸い合い、愛し合った。そしてカケルは告白したのだ。

「狼になって、たくさん人間をかみ殺した」

告白の後、すゞは夜には帰ってこないかも、と言っていたが何となく淋しくなって、カケルは避難所に帰ってからまた夜になるとひとりでアパートに戻った。

避難所を出て行く時、恵は背中を向けたまま洗濯物を畳んでいた。すでにあきらめたような目で見送ることもしなくなっていた。夜間のバイトを見つけたから、と言いついて、うんうん、とうなずいていたにも関わらず、たぶん、弟の下手な嘘はすっかり見抜いていたのだろう。

「危ないことだけは、しないよね」

その晩もそう言っただけだった。

アパートに戻った時、玄関の前に生ごみが散乱していた。何日も経ったものようだった。誰かがイヤガラセで運んできたのだろうか、カップルが楽しげに暮らしているのを面白く思わないヤツでもいるのだろうか、朝になってもう少し乾燥したら他に持っていこうとカケルは鼻をつまんで大きく袋をまたいでドアの鍵を開けた。

ドアを開けて中に一歩踏み込んだとたん、暗がりから数人が飛びかかってきた。

粘着テープで口と手足とをグルグル巻きに縛られ、麻袋をかぶせられて連れてこられてからすでに何時間経ったのかは、そしてここがどこなのかはさっぱり見当がつかなかった。

生ゴミは複数の匂いを消すためだと、コンクリートの床に落とされた時初めて気づいた。

なぜか母親の一件がはつきりと蘇ってきた。全然見ず知らずの中年の女性が、おそろおそろカケルに声をかけてきたのだ。パーティーションの中で、泣きぐずる太一をあやしている最中に。

「ねえ、トイレの脇で倒れてるの……お宅のおばあちゃんじゃない？」

倒れたまま、母親は幸か不幸か救急搬送されて病院に収容された。慢性的な間質性肺炎を患っていたところに、寒暖の差が激しい体育館暮らしで風邪をひいたのが引き金となつて急性肺炎を併発したらしい。その後、転院をうながされて入つた場所は、かなり競争率のはげしい施設だった、と後で知つた。その後は養護施設に入つてく
ださい、と言われ、受け入れ先を探すというのも恵を悩ませていた。

「くたばる前に、全部罪を吐くんだ、この裏切り者、汚え裏切り者、オマエのことだよな、えっ？」

そのまま死ななくて、本当によかつたと思うよ、カケルはうわごとのようにそうつぶやき、またミナミに殴られた。殴られて椅子ごと倒れ、細い椅子の足がミナミの脛にしたたかぶつかつたらしい。悲鳴のような高い声でとっさにミナミが叫ぶ。

「危ないじゃねえか！ この野郎」

危ないことだけはしないでね、と言われていたかな、俺。

赤黒く脈動の中、暗い紫の同心円が湧きおこり膨張しては消え、次の紫が湧きおこる闇の中で、カケルはかすかに口だけで晒つた。

ちよつとした騒ぎの話を 01

八月の半ば頃、避難所でちよつとした騒ぎがあった。

カケルがすゞにその話をしたのは、こんな会話がきっかけだった。

「たまには群れに会ってみない？ 集会にでるんだよ、人間の姿でもいいけどたまに狼になって集まることもあるよ、そしたらアタシも会わせたい人たちがいるし……」

「会わせたい人たち、というのが少し気になったがカケルは群れには会いたいと思わない、別にオマエとふたりで十分じゃね？ と軽くないしていた。」

「それに狼になるのも嫌だなあ、もう」

「そこですゞにこう訊かれた。」

「もう、つてさ。近ごろ狼になったこと、あるの？ カケルは」

「カケルは少しだけためらい、それでも正直に話しておこうと口を開いた。」

「……ちよつとした事件は、あった。その少し前にさ、噂が流れて……」

その少し前、『意思無き排除』が想定外の地域に飛び火した、という噂が流れた。

ちよつどカケルたちがいる避難所の近く、3キロも離れていない場所だった。白い霧のような鈍い光が降り注ぎ、数人が消えた。物損はほとんど認められなかった、ただ、人が消えた、黒いタール状の染みを残しただけで。

専門家は、今までのパターンから考えてもこの地域へのこれ以上の被害はほとんど考えられない、もし万が一あったとしても、ほん

の小規模な突発性のもので、近隣への被害拡大はほばないと言つていいだろう、もちろん、近くから有毒な物質も検出されなかったし、放射線量も通常値の範囲内だった、被害はほんの一過性のものだと言いつけた。

そんな中、続けざまにすぐ脇の地域に被害が出た。

いつものような『エリア溶解』の一種、一瞬の光のうちに、数メートル範囲の場所に存在したものが煮融けたように消滅したのだ。周辺にも甚大な被害が出て、住民はパニックになって外へ外へと逃げ出した。自治体の把握が追いつかない急激な動きだった。

統制のとれない群衆が一部暴徒化したという噂もとび、国が今回の『災害』に対応すべく新しく組織した『特別応急処理』隊が初めて出動したというニュースが流れた。

避難所の中も、よると触るとその噂でもちきりだった。

「そこはもういい、オマエが狼になった時の話をしろ」

「もう、すゞには話した」

カケルは半分夢うつつの中でリーダーのミナミに答えたがまた椅子ごとふっ飛ばされた。

誰かが親切に起こしてくれた。「椅子を柱に縛りつけた方がいいぜリーダー」

他にも数人姿が見えたが、自己紹介もないし誰が誰だか分りようもない、知りたくもなかったが。

すゞだけはずっと気になっていた。リーダーから殺す、と言われているにせいかずっとグズグズ泣いている。

「ここでしろ、最初から」ミナミの顔が迫る。「また塩水かけるぞ」カケルは喉に詰まった痰を浅い咳でようやく取り除き、話を話し出した。

寝ぐずっていた太一がようやくぐったりと手足を弛緩させ、夢の国に入ってしまった時、カケルはそっと彼を降ろし、大きくのびをし

た。

夏実が第1区と第2区の子どもらに混じって、近所の公共施設見学ミニツアーに出かけていた。引率の先生が、第2地区長である竹中から事情を聞いてわざわざ彼らのところに声をかけにきてくれたらしい、それでなくてもヒマをもてあまし気味だった夏実は大喜びで出かけていった。そろそろ戻ってくる時間だ。表で待っていてやるうか、と腰を浮かす。

その時、校庭の方から何か叫びが聞こえた、怒号のようだ。

カケルは、太一に目を走らせた。よく眠っているのを確かめて、急いで表に出た。

体育館の玄関先には既に2、3人、半身を物陰から覗かせるようにして校庭に目をやっている。その視線の先をカケルも追う。

資材やらプレハブやらに端から占領されながらもようやくグラウンドの面影が残されているただ中に、男がひとり立っていた。

黒っぽい開襟の半袖をだらしくひっかけ、前身ごろは全く風もないのにゆらりとはためいた。酒でも飲んでいいのか立ち姿がよるめいている、そのせいだと遅れて気づいた。

黒っぽいズボンの裾と黒いサンダルは乾いた泥らしい白い汚れが遠くからでも目立つ。黒い髪はぼさぼさで、その隙間から目だけを光らせて佇んでいる。

そして、右手に握っているのは、どうみても包丁のようだった。

「どえつごおやおぼるおつつ」

だみ声が乾いた空気に投げつけられる。先ほどから聞こえていたのはこれだったらしい。

校舎に入っていた数人が気づいて窓からもの珍しげに覗いていた。「どえつごおやおぼるおおつつんだ」

怒号はほとんど同じフレーズで時々繰り返される。ちよつどカケルが見た時には、叫びとともに唾が糸をひいて飛ぶのが見えた。

「なんだあれ、いつからあそこに」

カケルの前にいた1人が隣に聞くと

「他所から入り込んだらしいな」

と連れが訳知り顔に答える。他所から入り込んだ、と避難民が言うのは何だか不思議な感じがしてカケルは少し喉がムズムズしたがまた校庭に注意を向けた。

「地面から湧いたみたいだったな」

答えた方がつぶやく。

「警察呼べ、警察」

そう言いながら慌てたように奥から走り出て来た男が、先の2人を見て手を上げる。1区の地区長、確か名前を小木曾と言った。オギソは

「不審者だって？」

1人が指さした方を眺めてなぜかほつとした表情を浮かべる。

「なんだ、『アレ』じゃなくてホンモノの人間か」

「どつちも怖いけどよお」まぜつかえすように最初の男が言ったが、連れもオギソも特に反応せずじつと校庭に目をやっていたので、軽く咳払いしてから今度はカケルの方にふり向いた。

「あれ、包丁だよな？」

カケルはあいまいにうなずく、と、そこへ

「まずいな」

オギソが身を乗り出す。「子どもらが帰ってきたぞ」

ちょうど、立ち尽くす男の後方、プレハブ倉庫の影から黄色い帽子がひよこりと姿を現した、続けてもう1つ、そして無帽の、やや大きめの子が続けて1人、そしてまた小柄な子が1人、グラウンドを横切つて体育館まで帰つて来ようとしていたらしい、そこまで出てきたところで行列はふいに足を止めた。「止まって！」大声で誰かが叫ぶ、5番目の男の子が小柄な子の背中に軽くぶつかつた。

男がゆらりとふり返る。最初に見えた黄色い帽子のふたりは小学一年生くらいか、帰りの行列でずいぶん話はずんでいたらしい、まだ顔には満足げな笑みを浮かべたままだつた。小さい子たちのすぐ後ろだつた子は小柄な子の方を向いた、こう言うのがカケルの耳にも入つた。

「夏実ちゃん、『止まって』って言った？ なに？」

止まれと言つたのは4番目にいた子、よく見るとやはり夏実だつた、夏実はかすかに首を動かして、立っていた男を前の子に指し示した。

その子はゆっくりと前に目をやった。

男はまっすぐにその子を見据えた。包丁を胸元に持ち上げる。逆手に持ちかえ、重心をやや下げた。

「逃げろ！」「止まれ！」「子どもが！」「あああ」

叫び声が輻輳する、その瞬間カケルは地を蹴つて前に飛び出した。

男は低く包丁を構え、子どもたちに迫る。おぼつかない足取り、
と思ったのは一瞬だった、すぐに速度を増す。

カケルはそれを追って走る、追いつく訳がないと思った時すでに
靴は脱げていた、体中に力が蘇り、地面がぐいとせり上がる、筋肉
が張りつめて何かが裂ける音が耳に突き刺さる、視界は前に向いて
のみ鋭く尖り、急に全ての匂いを一瞬で把握する。

そう、匂いは語る。砂埃の中、汗と尿の匂いの塊、狂喜する獣が
血を求めて前を行くのを、若くて怯えた血を求めて。
それを止めなければ。

「バカな奴」

リーダーの後ろにいた男がため息をつく。

「人間の中にいるのに変身しちゃうなんて、ほんとバカ」

「バカより悪い、それだけで万死に値する背反行為だコイツ」

分ってんのか？ えっ？ また足蹴りが脛に飛ぶ。

悲鳴が漏れないように、カケルは歯を食いしばる、そこにミナミの容赦のない声。

「続きを話せ、早く」

狼は大きく跳んで男の背中にのしかかった。両手を広げた姿で男は、子どもらのすぐ目の前にうつ伏せの状態であつて飛ばされる。しかし包丁はがっちり掴んで離さない、狼はその肘から手首にかけて顔を傾けるように啞え、一気にねじ切った。

包丁が子どもらの方に届かないように、それだけが精一杯だった。血しぶきが弧を描いて飛んだ。ホースの先が向いて水が派手に飛ぶように緩やかな線を描き、一番前にいた子の足を濡らす、黄色い帽子のうちの1人、女の子だった。

隣に立っていた男の子を、後ろの上級生が慌てて抱きとめる。夏実は、あんぐりと口を開けたまま狼と倒れた男を見つめていた。後ろの男子が数人叫んだ。

狼の下敷きになった男が「おおおおお」と呻き、その声に合わせるように血に汚れた女の子がけたたましい悲鳴をあげた、悲鳴はあつという間に子どもらに伝染した。

悲鳴の渦の中、狼は頭を振りあげて今度は男の首を後ろから大きく啞え、口先を突っ込むようにしながら男の頭を捻じ曲げた、体はしっかりと押さえつけていたので四肢が狼の下でのたうちまわっている、狂った動きに獣の体も浮きがちだった。狼は焦って、首だけ

は離さないように牙をがっちり噛み合わせた。

そこにどやどやと集団が帰ってきた。子どもらの行列の後ろから次々と質問を浴びせる声、満足に答えられるものは大人も子どもも1人もいない、そんな中、集団の中から1人が前に飛び出した。作業服にゴム長、スコップを提げたまま「夏実！」大声で呼ぶと夏実はびくんと反応してそちらを向いた。相手の姿を見てこわばった表情が歪む。

「あ、あ」

「だいじょうぶ？　だいじょうぶか？　何？　何だよ！」

声をかけたのは集団作業から帰ってきた晴樹だった。晴樹は目の前に起きている光景が全然呑み込めていないようだった。「犬？」

夏実が叫ぶ。

「はる兄！　そう兄が……そう兄がオオカミに……！」

その声と狼が男の首を噛み切ったのは同時だった。子どもらと引率の教諭、後から帰ってきた男たちは凍りついた立ち姿のままその様子を目に収め、一拍おいて揃って悲鳴を上げた。

狼は頭を左右に振り、そのたびに血まみれの首が激しく地面にたたきつけられた。晴樹は妹の叫びを完全に誤解したのか

「こ、こ……のおおおつっ」

目を一杯に見開き、スコップを大上段に振りかぶり狼に向かう。

「離せ！！　そう兄を離せ！」

最初の一撃が狼の鼻面に当たり、狼は思わず口を離す。

「離せ！　は、はな……離せ……！」

恐怖のあまり腰がひけてはいたが、晴樹は驚くべき勇敢さを見せ、スコップを振り回した。夏実が叫んでいるのも耳に入っていないようだ、夏実は違う、ちがうと叫んでいたがそれは晴樹だけでなく、誰にも聴こえていないようだった。誰もが自分の恐怖のためにその場に凍りつき、それでも身を守ろうとするのに精一杯だった。やっとのことで大人がひとり、羽交い締めにするように夏実を後ろから抱きとめ、敷地外へと引きずり出そうとした、続いて気づいた大人

たちが次々と子どもを抱えたり引つ張ったり、あわててその場から退避する。誰かが叫ぶ。「桐島くん！！ 離れる！」晴樹はやみくもにスコップを振り回していた。

ようやく狼は男から離れた、すでに死体となったその不審者からただ、晴樹にはやはりまだ状況は全くみえていない、血だらけで倒れ伏す男の方をカケルだと信じて疑わないうだった。蒼白になった顔を半分そむけて更に狼に向かう。

「この、このケダモノ！」

狼は大きく後ろに飛び下がった。死体を挟んで、大きな獣はスコップを構えたままの晴樹と対峙する。

「この……この、この」

晴樹の振りあげた両腕はがくがくと震えていた。

狼は、さつとその姿に目を走らせてから、頭を下げ、そしてくるりと向きを変えた。

人びとの悲鳴が高く低く近くの山に跳ね返ってまた戻っている、サイレンの音が近づき、体育館入口と校舎からは人が鈴なりに様子を窺っている、何人かが「子どもが刺された」「アレが出たんだ」と遠くで叫んでいる。そんな中を、狼は後も見ずに走って逃げた。

「まあ……百歩譲って身内を護るためだった、と言えなくもないな、だつてさ」

すゞの脇にいたのは、しゃべり方は固かったが確かに女性のようだった。カケルは腫れあがったまぶたの隙間から声の主をさぐる。

「バカか、オマエも」ミナミの一喝でその声もびたりと止んだ。

「コイツの罪はそれだけじゃないんだぞ、オマエらも直接聴け、コイツの薄汚い話を」

誰かが椅子を柱に留め付けようとして舌うちした。

「このワイヤじゃ細すぎたな、切れちまう」短くなつた針金をミナミに手渡す、その時、先が手の甲に当たつたらしく、ミナミがきやつ、と悲鳴を上げた。「ごめん、なさいリーダー」おたおたと詫びを入れる相手をミナミはしこたま殴りつけた。「バカ野郎」

きやつという悲鳴とバカ野郎という声があまりにも女々しくて、カケルはつい声をたてた。

「今、笑つたな」

ミナミが針金の切れ端を持って、カケルの前に立ちはだかる。「どこに刺してほしい」

答える間もなく、ミナミは針金を突き出し、肘かけに固定されたカケルの左手に当てた。人差し指と中指との間のくぼみに、尖つた先をそつと押しあてて、彼の顔を覗き込む。その目はどこか慈しみの光に満ちている。

「やめろ」カケルの声が裏返つた。「ちゃんと話してるだろう？」

「これはお仕置きだ、笑いやがつて」

針金がゆつくりと刺し込まれる間、カケルは大声でわめいて壊れるほど椅子を揺すつたが、後から縛りつけたロープでちゃんと椅子が固定されたらしく、今度は倒れることはなかった。

気が狂わんばかりの痛みの中、眠っていた狼が囁いた。オレニカ

ワレバイイノニ。

駄目だ、すゞが殺される。カケルは叫び返す、すゞが死んでしま
う、狼になったら。

元はと言えば、すゞに正直に何でも話してしまつたから、こんな
目に遭っているのだというのは重々承知だつた、それに、とぎれと
ぎれに感じる匂いから、このミナミという男はすゞを殺すことはま
ずないだろう、と感じてはいた。コイツは、すゞの兄貴だ、兄が妹
を殺すだろうか？

気が変になつていれば、殺すかもしれない、人間としての彼のど
こか片隅がそう怯えたように囁く。

彼女は狼じゃない、人魚なんだよ、兄貴がそれに気づいたら殺し
ちゃうかも知れないじゃないか、ダメだよダメだ、痛い、痛い痛い
痛いいたいこの痛みをそれより何とかしてくれ。ああ殺される、と
いうかも殺してくれ、痛いのはもう嫌だ。腕が腫れあがる、痛い、
イタイイタイイタイああああああああああああああああああ

「続きを話せ。その続きを。逃げた先で何があつた」

話せるはずがないと思つた、声も出ない、と。

針金を抜いてくれ、そうしたら話す、とそれはようやく声に出す。

ミナミは言つた。「先に話せ、そうしたら抜いてやる」

カケルは泣きながら続きを語つた。

来た事もない場所だつた、もちろん、カケルでさえも。避難所か
らかなり遠ざかつた小さな公園、敷地はこのところ管理する者も
いないせいか、枯れたような丈の高い雑草に覆い尽されている。遊
具も既に錆びつき、遊んでいる子どもは皆無のようだつた。

滑り台の影に狼はうずくまっていた。傷はたいしたことはない、
鼻先はシヨックは大きかつただけで切れてはいなかつた、やみくも
に振り回されたスコップの切っ先が前脚を軽くかすめ、切り傷のよ
うになつて血が滲んでいる、狼はしつこく何度も傷口を舐めていた。

血が止まったらすぐに、人間にもどるつもりでいた、だがなかなかふつきれない。

そのうちに、近くで人の声がするのに気づいた。風下の、山陰になつたあたりだつた。

歌っているのか、泣いているのか、それとも笑っているのだろうか？ 抑揚のついたかほそい音だつた。狼はそつと立ち上がり、声の方に向かう。

古びたブルーシートが枝と枝とに張り渡されたロープにさがって、テントのように端が左右に開いていた。テントの向こうから細い煙が立ち上っている。

不思議な歌のような声は火の近辺から聞こえていた。

狼は、テントのこちら側に洗濯物を見つけ、その場に立ち止まった。

カケルの声をする。人間になったら、あの服が欲しいな。

狼はふん、と鼻を吹いてまた動き出す。

覗いてみると、大人が2人とまだ幼い女の子が1人、火の近くにいた。匂いからして、両親とその子どものもようだった。大人は2人とも、ひどい病気を患っており、うずくまるように座る男の方は目が完全に潰れていた。火を起こしていた女は気が変になっているのか、火をいじりながらずっと細い声で楽しげに歌を歌っていた。歌詞もメロディーもでたらめで、さつきから届いていたのはその歌声らしかった。

3人とも裸の上からシーツをまとっていた。手足も顔も煤けたように黒ずみ、どこかから焼け出されたかのように小さく縮こまって見える。得体の知れない不吉な匂いに包まれ、この一画ごと、すでにこの世界からは棄て去られてしまったように見えた。

女の子が狼に気づき、声をあげた。

「わんちゃんだ」

男が、はっと顔を上げる。

「プリンが？ 助かったのか、プリンも」

女の子が手を差し出す。「わんちゃん、おいで」

「プリンなのか？ のんちゃん」男が重ねて聞く。女は高く細く笑った。

「ぷりんじゃないよ、おつきなわんちゃん」

のんちゃんと呼ばれた女の子が近づいてきた。肩までの髪はずつととかしていなかったのか、すっかりもつれて垢だらけの首を覆っていた。

「おつきなわんちゃん、こんにちは」

狼はのんちゃんの手にも顔を近づけた。前に一度だけ嗅いだ匂いがかすかに漂う。

カケルが諭吉に会った日、地震かと思われた後に店から出た時に嗅いだ、あの不快な匂い、駐車場に溜まっていた黒い油だまりから匂った、あの腐臭……かなり薄まっていたが、間違えようがなかった。

彼らは『アレ』に遭遇したのだ。

「よせ、のんちゃん、野犬だぞ」男が立ち上がるうとする、近くにあった杖を取り上げたが、方向が分らなくてためらっている。

「まり子、」今度は母親らしい女に鋭く声をかける、だが女は一向に構った様子はなく、細い棒で焚火をつついて歌っている。男は今度は優しい声を出した。

「のんちゃん、いい子だからわんちゃんから離れなさい」

吐く息から死の芳香が流れ、狼のところにもまで届く。

「えー」のんちゃんは明らかに不服そうに頬を膨らめた。

「すっごくいいこだよー、このわんちゃん」

お腹が空いているのかな？ ほら、わんちゃんおやつあげる、のんちゃんのパン少しわけてあげるね。

そう言いながら、のんちゃんは片手に持っていたパンを袋から出し、半分ちぎって狼の前に差し出した。コンビニでよく売っているなんとかデニッシュという類だった。

パンからは嫌な匂いがしなかった。

狼は用心深く口を開けて、牙が触らないようにその手からパンを受け取って食べた。

一旦遠くに離れてから、狼はまた彼らのキャンプに戻って、カケルの姿になった。

やましい気持ちを抱えながらも、干してある服を取ろうと手を伸ばす。多分目の見えない父親が娘に手伝わせて苦勞しいしい干したのだろう、皺が伸びず、干し方もデタラメだった。男もののハーフパンツとTシャツを、音のしないように外してそつと鼻を近づける。匂いはかなり薄まっていたがまだわずかに感じられる。

それでも他に着られるものがない。生乾きなどところにも目をつぶり、カケルはおっかなびっくり手を通した。

戻ったら戻ったで、夏実たちに何と言いつくすればいいのだろう、目撃していた大人たちは、どこまで見ていたのか、気になることばかりだった。

考えれば考えるほど気分が落ち込む。しかも

「……ここ、どこだ？」

立ち止まってあたりを見回す。本当にどこなのか、全く分らない。それでも歩かねばならない。

カケルはとにかく、前に進んだ。か細い歌声はしつこくどこまでも耳にこびりついていた。

夜がかなりふけた頃ではあったが無事、避難所にたどり着いた。

そこまでは、すぐには話していたがまさか彼らもそこから先はもういいだろう、そう思っていたがやはりミナミは最後まで話をしろと迫った。

「避難所に着いてから、どうだったんだ？ 誰かに狼の話をしたのか？ 誰かから狼の話聞いたか？ どうなんだ、えっ？」

「抜いてくれ、先に抜いてくれ、手が痛い、痛いんだ頼むお願いします」

ミナミはせせら笑う。

「先に、話せ」

すでに肘から先は百倍には腫れあがったような気がしている、気がついた時には痛みよりも熱さの方が激しくなっていた。体全体は寒くて寒くてたまらないのに、左手の肘から先は炎を上げて燃え盛っているようだった。脈動がじかに頭に響く。

そのまま死んでしまおう、そう心に決めてカケルは呪文を唱えるように続きを話した。

びっくりするくらい、避難所はいつも通りだった。非日常の暮らしの中では何でもあり得ないことではないのだろうか。不審者が校庭にいつの間にか入り込んで包丁を振り回したことも、これもまた『いつの間にか入り込んだ』『大きな野犬』が不審者を襲って逃げたことも、単なるニュースのひとつとなっていた。

あれは狼かもしれない、とまことしゃかに語る声もあった。俺はけっこう最近どこかで狼を見た、あれは確かに狼だった、そう語る声はかすかにあったものの、カケルが帰ってきた時に不審げにみられている様子はまるでなかったのでカケルは少しだけほっとして眉間から力を抜いた。避難所でいかに自分の認知度が低いか、皮肉に

も思い知らされる結果となった。

晴樹も夏実も含め、子どもらは既に眠っていた。圭吾はまだ帰っていない。恵は、ちらと彼を見上げ

「今日大変だったのよ、どこ行つてたの」

責めるような目で言つてから、今日のニュースをいくつか彼に伝えた。

その中のひとつが、まさか弟に関係することだとはつゆとも思っていないようだった。夏実も、後になってあまりにも非現実的なことだと思ひ直したのだろうか。母親には、カケルが狼に云々とは話をしていなかったらしい。

何その服、と言われないうちにカケルはさっさと自分のねぐらに潜り込んだ。

指の間に刺さつた針金が全ての痛覚をかき乱している。心臓に直接届いたような痛みに耐えきれず、戒めから身を引きはがそうと彼は更に身をよじつた。体液の全てがよじられながらほとばしる。臭くなければ、まるでそれはレモンだ、どこかで冷静な声が響いた。笑いたくないのに、笑えてしまう。笑いながら泣く、それも今なら簡単にできた。

「それで全部か？」

はい、はい全部です助けてください、

「本当にそれで全部か？」

うなずいているのが見えないのか？ アホかオマエは

「今また笑つたか」

笑っておりません、助けてください、抜いてくださいお願いします
「オマエの方がずいぶん笑えるんだよ、狂つた野郎め。いい歳こいて泣きわめきやがつて」

「避難所に無事に着いて、寢床に入りました。お終い」

アパートですゞに語り終えた時、彼女はそこまで聞くと、ほっとしたようにこうコメントした。

「終わりよければ、全てよし、だね」

よかねえよ、全く。泣き叫びながら、もしかして大笑いもしながらカケルはずっとすみませんと助けてとお願いしますとを繰り返していた。

痛みも苦しみもピークを越えて空が白み始めた頃に、次にミナミはカケルの殺してきた人たちの名前を聞いた、最初からひとりずつ。夜中の尋問とは打って変わった丁寧な口調だった。

「分りました、で、次は」

ひいひいと息継ぎを入れながらも、カケルは1人ずつの名前を伝えていく。

メモを取らないようにムカイヤから言われていたにも関わらず、すんなりと全ての名前が出る。

「シンジヨウ・タケヒロさん、はい」ミナミは穏やかとも言える笑みを浮かべて促す。

「分りました、で、次は」

すっかり明るくなった時、告白は全て終了した。

ミナミは群れの連中に命じて情報も感情も液体も全てを吐きだした男を椅子から解き放った。

倒れたままの身体をまたいで、ミナミは窓に近づき外を覗く。またぐ時わざと傷つけた手を踏みつけたが、すでに半眼のまま意識を失くしていた男の反応はなかった。

「いい天気になりそうだな」

ミナミは徹夜で重労働をしたとは思えない爽やかさな顔つきで言い放つ。

「コイツの処刑は今日の午後、河原で行う。全員参加だ」

居並ぶ連中を見回してから、倒れたままの男に優しい目を向けた。
「その前に丸洗いしてやれ、あまりにも汚いからな、そのままじゃあな」

誰も、何も言い返さなかった。

さあ、歩け、と引きずられて狼は四肢をふんばり低く唸る、だが、センサーがその唸りを音と捕え、かすかな電波の針をその喉元に突きつけた。

狼にはそれだけで十分だった、ひっ、と息をのみ、脚の力をつい緩めてしまっ、そこをミナミは容赦なく曳いて行く。

「オレを莫迦にするなよ、えっ？」

ミナミが狼の方を見ないまま楽しそうに言った、J・POPの歌詞を呟いたような気軽さだった。

掴まっつてから繋がれたままニンゲンの姿で散々責め苛まれたにも関わらず、狼はじつと『その時』を待っていた。

殴られ蹴られ続けた時も、前あし指の間に針金を刺された時も悲鳴ひとつあげずじつと耐えた。狼の外に出ていたニンゲンがずつと叫んでいるのはきんきんと響いていた。何すんだ、やめろ、同胞なかまなんだろう？ どうして俺を、頼む止めてくれお願いします、お願い、助けてくれ。最後は泣き喚くのみで言葉にはならなかった、それでも狼は沈黙を守った。

処刑の前に体を洗われてから、首輪につながれた。

群れの中に電子工学科の学生がいるらしい、特殊な加工をした首輪で、音に反応するセンサーがついていると彼らは説明した。まだニンゲンのままだったが説明はよく分らなかった、声を出してはいけない、ということしか。

しかしその直後、ミナミがニンゲンの耳をピアスの上から掴んで「言え」と迫った。

「オマエのことは言うんだ、狼になることはを」

最期は狼で迎えるんだ、ミナミは厳かな口調で告げた。理由は簡単だった。いくら人けのない河原に連れていくとは言え、人間を鎖

につないで引きずっていくわけにはいかないから。それはよく理解できてそんなにお前らの都合通りしてやるものか、ともちろん思ったのだろうが、痛みに耐えかねていたニンゲンは少しでも楽になりたくてすぐさまことばを唱え、狼に変わった。案の定、すぐに電撃で喉を刺された。狼は激しく咳き込み、しばらくは前脚の痛みも忘れた。

それからずっと、彼らに曳かれていくまで口輪の隙間から前脚の傷を舐め続けた。

曳かれていく今、人間に変われば何か変わるだろうか、それすら分からない。

事態は良くなるのか悪くなるのか、手が使えればリードや無駄吠え防止センサー付きの首輪などはすぐに外せるのだろうが、そうなれば素っ裸のニンゲンは今度あまりにも無力過ぎて反対にもっと凄惨なリンチを受けるだろう。

それに、今の狼にはいくら考えてもどうしてもニンゲンになる方法が思いつかなかった。何かそれに近いことを思おうとするたびに、チリチリとした電流を首筋に感じて集中力は霧散してしまう。

今のままで、どうにかするしかなかった。

少し離れた所ですゞが同じように黙って歩いているのを感じた。

よろめくように歩きながらずっと右手の親指つけ根辺りを噛んで、何かに耐えているように自分を見ているのが分った。

狼はこれから河原に引き出され、杭に繋がれて動きを封じられ、その後同胞の手によって処刑される、とミナミは淡々と群れに説明していた。

誰かが

「俺らが人間の姿で、そんで狼のままのヤツを殺るのか」

と聞き、ミナミはそうだと答えたが、その誰かは明らかに何か物言いたげだった。ミナミが怖い顔でそいつを見つめると、ようやく「あまりにも、何つうか多勢に無勢みたいでイヤだな」

それだけつぶやいた。

「ではどうしたらいい」ミナミは挑戦的に訊ねる。「他に方法があれば聞く」

いかにも、この群が民主的な繋がりにあるようなイメージを持たせたいようだ。

だがしかし狼だけでなく、すゞも、質問したヤツ（多分名前をタンバかタンゴと言った）も、他に彼らを取り巻いている4人も多分リーダーのミナミさえも誰もが気づいていただろう、この群は絶対君主制を基本としている、と。

それでも質問した男は勇気を振り絞ったのを悟られたくないといったさりげなさで

「逆もあるんじゃないか？ ヤツをニンゲンに戻して、俺らが狼になつて喉を切り裂く、とか」

どうにか言葉を選びながらそう言つと、ミナミはふん、と鼻先で一蹴した。

「それこそ弱いもの虐めだ」

先ほどまで率先して残虐性を誇示してきたミナミはそう言って腰に手をやった。それで弱っていた狼はぐいと引っぱられて年寄りのシエパードのようによろめいた。

「強いものを弱い者たちが処罰する、それが理想だ。この世界でも同じことだ」

「ソイツ、もう結構弱ってるけど」

すゞの他にもう1頭だけいるメスのカツラギが髪を後ろでひとつに縛りながら言った。

「しかし狼は狼だ」

ミナミは譲らない。カツラギも別に口論をふっかけている訳ではない、というように後ろ手に髪を縛りながら肩をすくめてみせた。そして彼らはぞろぞろと狼を引きずりながら河原へと向かった。

リードは力のありそうなオスがニンゲンのまま何人かで持っていたが、河原はごつごつと荒れ果てていてニンゲンにとっても歩くのは一苦労のようだ。

冷たい風が急に強くなる、この秋はいつになく早く冬を迎えたが、つているようだった。

狼はあちらに引っぱられたかと思うとこちらに寄せられ、何度となくよるめく。

身体中の軋むような疼痛もさることながら、左前脚の先をズキズキと刺し貫く激痛で、時おり狂ったように身を震わせる、しかし、曳かれていく力にはとうていかなわなかった。

いいか聴いてくれ、とミナミは曳きながら声を張り上げる。

いいかこの狼は全ての人類を象徴しているんだ、彼は言った。

姿は気高き狼、我らが同胞を気取っているものの、コイツのやったことを考える。

あれが誇りある種族の所業か？

「その場その場でテメエの欲望をむき出しに行動する、己の利益しか考えず、種族の利益や幸福は二の次だ、いや、種族や群がどうなるかとヤツには全く構いはしない、テメエのジヤマになればさっさと仲間も裏切るだろう。好きなメスと好きなようにつがい、更に愉

しみのためだけにニンゲンのメスとも寝る。正に節操もないニンゲンの生態そのものだ」

狼のずっと離れた目線の隅ですぐが目をそらした。泣き出しそうに口を歪めている。

「しかもヤツは卑劣な『奉仕者』だった、ニンゲンの欲望にまかせた殺害に手を貸し続けた、10年以上も。自らの種の誇りを放棄してその場限りの打算で誇りを金に換え続けた。今までずっと薄汚いニンゲンの命令で散々ニンゲンどもを殺していた、それが今さら…」

「ミナミはリードを手にしていたオスたちに離れる、と身振りで命じた。」

「がら、と石を鳴らして最後の一人が退くと、ミナミはリードをだらりとムチのように垂らして仁王立ちになった。」

そして声をさらにはり上げる。

「最後の最後にどうだ？ コイツはニンゲンの中に立ち交じって、狼の姿をむやみとニンゲンに晒し、俺たち狼全てのプライドを踏みにじりやがった。しかも」

「ミナミの顔が醜くゆがんで、灰色の空をバツクに白くつばが飛ぶのがみえた。」

「ソイツらの手から与えられたエサを喰った。万死に値する行為だ」

狼は全てを聞いていた。

横倒しになるかどうかというギリギリの姿勢で、それでも足はまだ踏ん張っている。狼はニンゲンのミナミが語る言葉の意味はさっぱり理解できなかったものの、それが自分に向けられた激しい憎悪であることは匂いで把握していた。

そして、その抑揚の変化を。どこがピークで、どこが間隙なのか。「コイツが許せるか？ 狂っている上にすっかり腐りきっているコイツを。俺たちの今までの種としての矜持を全て否定して、このオトコはそれをせせら笑っているんだぞ、俺たちなんてみんな野たれ

死んでしまえばいいと嗤っている、そしてテメエさえ生き残ればいい、あとはテメエに餌とカラダをくれる若いメスさえいれば」

狼は跳んだ。

低く、しかしずっと狙っていた方向を違えずにまっすぐ矢のように。

他に考えられないという軌跡がたった一つ、それは先ほどからちらちらと陽炎のようにゆらぐ獣の意識の中に時おりくつきりと焦点を結び、また揺らぎの中に溶け込もうと輪郭をぼやけさせ、を繰り返していた。

狼は点としてのその時を逃さなかった。

弱っていた狼がそこまで力を残していたというのに、慢心に満ちたミナミは不幸にも気づいていなかった、そして、その跳躍する身体がまっすぐ自分に向いていなかったのも彼にとっては不運だった。気の迷いで逃げようとした、彼はそう捉え両手にたわめていたりリードを引こうと構えなおす、しかし、流れるような動作はやはり獣の方が秀でていた。

狼はたん、と少し固い地面を蹴りすぐにぐるりとミナミの体を回り込むように向きを変えて跳び、瞬間の着地をみせてまた元の位置に跳び戻る。

一連の動きの意味をミナミと群れの連中が知ったのは、

「はう」

ミナミが両手を自らののど首にもっていった時が初めてだった。

狼は、くん、と身を後方にひねる、ワイヤー製のリードが完全にミナミの首に巻き付き、気づいてミナミが手に絡めていたリードを放そうとした時にはすでに、そのやせ細った首をぎっしりと捉えていた。外れないという確信が生まれたのか狼が更に動く。今度は一気に、更に巻くように大きく跳んだ。メスだけでなく、見守る群のほとんどから悲鳴が上がる。ミナミの目が飛び出し、喉の奥から音が漏れた。ワイヤーは狼を曳くには細すぎる、とその前に誰かが言

つていたが、首に巻かれるのにも無情な細さだった。狼の勢いでミナミはどおつと横倒しになった、どちらに倒ればワイヤーが緩むかもしれない、という思慮も何もなく、ただ重力に任せるままの転倒は更に彼の首を絞めた。げえつと空えずきの音を連続で発し、それでも急に気づいたのか彼は何度か身を回して首に絡んだ死のリードを緩めようとした、だがすでに時は遅く、狼は土手の上に向かつて出せる限りの全力で駆け上がる、誰も止めようとする者はいなかった。耳障りな甲高い叫びをいつとき上げたミナミの体が頭から目の前の大きな石に激突した、すぐ近くに立っていたカツラギがひつと息をのんで目をそらしたが湿った激突音は確実に耳に入れてしまったようだ、彼女は耳を押さえてがくつと膝をついた。わざわざ嫌がらせのように彼女の肩口に飛び散った血ともう少し粘度の高い何かが降り注いだ。カツラギは狼にあるまじき高い悲鳴を発し、それはとどまることなくひやりとした川辺のモノクロの空気を引き裂いた。

ミナミの四肢がびくびくと痙攣を繰り返す中、狼はようやく軛を解いた。

土手の上、四つん這いのまま彼はカケルに戻る。彼は顔を上げずにその姿勢で口輪をまずむしり取り、地面に何度かつばを吐いた。

勝利は苦く、爽快な気分は一滴もわき出してこない。

首輪を取ろうとして人差指と中指との根元付近に黒いとげのようなものが飛び出しているのに気づき、前歯でそっと啜え、ぎりぎりと引き抜いた。

銅線の酸っぱいような味を舌先に覚え、同時に心臓にまで届きそうなる痛みに飛び上がりそうになる。

線は思いのほか長く引きずり出され、いったんくわえ直そうかそれとも諦めようかと挟む力を緩める間際、急にずる、と先端まで姿を現した。普通の縫い針くらの長さはある、どう入っていたのか想像したくもなかった。赤黒く変色した傷口がズキズキと脈うっている。

カケルは傷を啜えるように口に含み、その目を改めて眼下の河原に向けた。

涙目なのか、景色が灰色に滲んでいる。

滲みの中に悄然とした人影がぼつりぼつりと浮かんでみえた。顔がすべてこちらを向いている。どれも表情はなかった。

自分の真下に倒れている男だけは、顔を下に向けて頭が半分前の岩にめり込んでいた。

その男と一本の長い紐で繋がっているのに気づき、カケルはまだ手にしていた首輪のついた先端を投げつけるように足下に捨てた。

お前ら、と声に出そうとして急にくしゃみが出た。脇腹が裂けるかという痛みで悲鳴を呑み込む。くしゃみは立て続けに出て、カケルは痛くない方の手で脇をぎゅっと押さえた。

身をよじるようにくしゃみをしている彼を、河原の彼らは黙ってじっと見守っていた。

もう害を加えようという気はないのか、少しも動く様子がなかった。

「おい」

ようやくのことでカケルは声に出す。

水のような涙が何の抵抗もなく垂れているのを感じて、つい痛い方の手で拭いてしまい、また飛び上がりそうになる。

「何がいけないんだ、」

ようやく、普通に声が出た。

「主義主張が違っただけで、どうしてそう人を憎める？ どうしてその相手を傷つける必要があるんだ。おかしいと思わないのか？ どうして同じ場所で互いに棲み分けができないんだ」

素っ裸だというのに、ようやく誰かが気づいたように間の抜けた問いかけをする。

「服が要るのか」

あたりまえだ、とカケルは怒鳴る。怒鳴った拍子にまったくしゃみが止まらなくなった。

タンゴだかタンバが、あわてて自分の着ていたジャケットを脱いだ。軍用のカーキ色をしたごつい上着で、今では意味もなくなった襟章や肩章がごちゃごちゃとついていた。その下に薄手のセーターを着ており、歩いている途中でかなり汗をかいていたのはカケルも見えていたが、それを脱いだとたんに急に風が吹き抜けたのか、彼はうつつと唸り声を上げて固く腕を組んだ。それでも腕を組んだまま上着を持って土手を上げてこようとしたりした。

「ズボンも要るんだろう」

そう言っつて、彼は倒れていたミナミに近づいていった。

がちがちと歯を鳴らして立ち尽くすカケルと押し黙った連中との間で、彼は苦心してミナミのスニーカーとGをパンを脱がせていった。

スニーカーはごつい灰色のもので、パンツは黒いデニムの、かなり細みのものだった。

続けて下着を剥ごうとしていたので、カケルは急いで「それはいい」と口を挟んだ。

「下着は要らないから、それはあまり」

あまりにも可哀そうだ、と言おうとしたのかあまり清潔ではないから、と言おうとしたのか自分でも判らなくなつて彼は口をつぐんだ。

タンバかタンゴが目の前に上着とジーンズと靴とを儀式のごとく捧げ持って上がってきたのを、カケルもやはり無言で受け取る。

まずジーンズを穿くのに立っていることができなくて脇に立つ男の肩を借りながらようやく足を通す。痛む手の傷をずっと口でかばい、片手でどうにか前を留める。

殴られた腹から背中からズキズキ脈打っていて、かつて警備員のような男に何度も殴られた時のことを嫌でも思い出してしまった。

靴はまだ中が湿っているような暖かさでサイズはぴったりだったが何となく誰かの体内に取り込まれてしまったような不快感がつきまとった。上着は羽織ろうとしたが、目の前の男が汗の引いてきた顔に細かく鳥肌を浮かべているのを見て、またその男につき返す。

「着てください」男は急に丁寧な口調になっていた。

カケルは目で下に倒れたミナミを指した。タンバかタンゴかはそちらに目をやってから

「あれは血がかなり」そう言って目を伏せた。

カケルはその言葉でようやく、ああ、自分はここでもひとり、殺してしまっただと納得しながら大きいため息をついて、また上着を受け取って結局袖を通した。

素肌に当たるジャケットとジーンズはごわごわと身を包み、オマエとはできるだけふれ合いたくないのだが、と彼の肌を拒否していた。それでも、ようやく体中の震えは収まってきた。

「あの」目の前の男はまだ目を伏せていたが、それでも口は滑らかに動くようになったようで、カケルに話しかけた。

「この群はもう、アナタには関わりにならないと思う、リーダーもどつなるか」

分かつている、とカケルはジャケットを体に合わせるように引っぱってから言った。

「でも気をつけてください、アンタみたいな個体を排除しようとする群はいくらでもあるから。群になじまない、ひとりきりで動こうとする狼を。それにかつて『奉仕者』だというだけで」

それも分かったから、とカケルは短く答えた。口をききたい気分では全然なかった。実際、身体中が痛くて、特に先ほど抜いたワイヤーの傷あたりがまだえぐられるようだった。

それでもカケルは息を浅くつきながらも彼らの顔を一人ひとり見直し、もう見るべきものが何もなくなると向きを変えて土手を反対側に降りていった。

すゞが何か叫んだが、その声も心にまで届くことはなかった。

「送りましたか」

全然動こうとしない声が土手の上から風によって届いた。

カケルはふり向きもせず一言も発せず、そしてどんどんと彼らから遠ざかっていった。

「そうたん、なんかおはなちちて」

包帯のある手の方、脇の下からくぐもった声がした。

「何のお話がいい？」

「あかじゅきんたん」

打てば響くような太一の答え。

「そっか……じゃあ、あかじゅきんたん」

カケルもその口調をマネしてそう宣言する。

三人は、体育館の壁にもたれかかって座っていた。

寒くなってきたと思っただらまた気温が上がり、11月に入ったと
いうのに熱中症の患者が続出した。

異常気象は意思無き排除と関係しているらしい、と一部では噂も
飛んでいた。

噂ばかりが先行する。マスコミは次第に政府の管理が強まり、発
言権を狭められていた。

晴樹は『家』の中で仲間うちでの噂話に花を咲かせているらしく、
ずっとスマホの画面を見続けて指を動かしていた。

時々、接続が途切れるようになって、それがだんだん酷くなるん
だ、しかも削除される記事が多いし、そう言いながらも晴樹は集団
作業の間、家で起きている間も何かに取りつかれたように狭い画
面と向き合っていた。

案外ナーバスなところのある晴樹は、スコップを振りあげた後、
よほどシヨックだったのか2日ほど熱を出して寝込んだ、しかし熱
が冷めた頃には記憶があいまいになったらしく、当時の様子を笑っ
て話せるようにまでなっていた。それでも、この暮らしは本来呑気
な彼でもかなりストレスが溜まるらしく、イライラしている様子が
目立つようになってきた。

今夜も、晴樹が太一をどなりつけたのだった。

うるさい、外に出てろ、オマエのせいでまた接続切れたじゃねえかよ、出てけ。

泣きわめく太一を抱えて、カケルと夏実は困いの外に出た。

群れにやられた傷が癒えるのは、狼でいるうちは早かった。ただ、指の間の刺し傷はなかなか回復しなかった。

狼でいる間、パンをくれた少女がどうなったかどうしても気になり、荒れた公園まで出かけてみた。

青いブルーシートは千切れて風になびき、丸まったようにロープにかかる洗濯物は相変わらずだったがかなり低い位置に下がっていた。あれでは永遠に乾かないだろう。煙はもう上がっておらず、歌も聞こえない。

狼は鼻をひくつかせ、そこに虚無を嗅ぎ取りそのままシートの向うはのぞかずにその場を立ち去った。

1週間近く野外で暮らしてみたらいよいよどうしようもなくなつて、人間に戻ったカケルは恵たちの元に帰ってきた。それがつい昨晚のことだった。

抗生物質が効くのは速く、ゆつくりと一晩眠っただけで手の腫れはかなりひいていた。

カケルを挟んで左側には太一、右側には夏実、太一は嵌り込むようにカケルの脇に頭を埋め、指をしゃぶっている。肘から下の包帯が大げさに白く膨らんでいて、太一の頭が腕全体を押し上げている。肩がたるくなりそうだったので、カケルは少しだけ腕をずらして太一の肩を抱くように手をまわした。

夏実はさすがに緊張した面持ちのまま混みあつた館内に目をやって、それでもぴったりとカケルに身を寄せていた。

避難民、特に未成年者は日没後には体育館の外に1人で出ないように、そういう通達があつたばかりだった。日中でも単独行動を控

えるように、地区の回覧も回っていた。太一や夏実のような子どもにはますます、暮らしにくい場所になっただろう、カケルは姪の垢じみた頭にふと目をやった。

もうお年頃って言うてもいいんだろうな、小学5年になるのか、この春で。カケルは太一の頭を抱えながら、彼の膝をそつと掴んでいた夏実の手先に右腕を伸ばし、包んでやった。

そろそろ色気も出るんだろうな、友達とドラマやマンガや流行りの歌なんかの話に花を咲かせたり、カッコイイ男子の話題で盛り上がったりたい頃だ。それとも全然色気なんてお構いなしに男女構わずボールのぶつけ合いとか探検ごつことかUNOとか、子どもらしくはしゃぎまくるのが本領なのか。ああ、今の時代は3DSとかだらうか。

どちらにせよ、こんなしょぼいオジサンとこんな所にくすぶっているなんて……胸に不安を一杯に抱えて。包んだ手はまだまだ小さくて頼りなげだった。

家族や親戚、知人の安否情報を問う白い紙片が体育館出入り口に収まりきらず、彼らのもたれかかる壁の一部にも鱗のように貼り付けられている。風はないはずなのに、何となくその紙の鱗は震えているようにみえた。

不審者が野犬に襲われた話は次々と起こる「ちょっとした騒ぎ」に上書きされ、どんどんと人の記憶からかき消されていった。

ちょっとした騒ぎはかなりの数に上る、それはまるで安否情報の紙のようにいつまでも解決することなく次から次へと上に被せられ分厚い層となって人びとの空間を埋め続けていた。

カケルは語り始めた。

「むかしむかし、女の子がいました。いつも赤いずきんをかぶっていたのであかずきんと呼ばれていました」

「じゅきんてなに」

「ぼっしだよ」

「へええ」

太一は納得していない。以前はひっかからなかった部分なので分かって聞いているのだろう、と気にしたことはなかった。今は絵本がないので、ほらこれ、と見せられないので想像力で補ってもらうしかない。多分、太一は広島東洋カープみたいのを想像しているだろうが、そこに夏実が

「幼稚園で椅子に敷くでしょ、あれがずきん。あの赤いのがあかずきん」

そう補足してくれた。

太一は知ってるさ、そんなこと、みたいな目で包帯の影から姉をちらっと見た。

カケルはひとつ、咳払い。

「まあいいや、つづき。ある日、あかずきんはお母さんにおつかいを頼まりました。ねえあかずきんや、森の向うに住んでいるおばあちゃんのところ、このお菓子をどけておくれ。そのお菓子というのは……」

時間をもたせるために、妙に細部にまで踏み込んでいく。おいしいそんな表現だと逆効果、今は食糧すらふんだんに支給されるわけではない、幼い子どもを紛らわせるために話をしているのだから、リアルに美味そうな菓子など、必要はない。

「小麦粉と塩と砂糖とうんことしつことナメクジと」

太一が可笑しそうにけけけと笑う。この子の話の中には必ず「うんことしつこ」という言葉が必須となる。母親の恵にでも聞かれたらカケルが怒られるだろうが、あいにく、というか幸いというか、恵と圭吾の夫婦は、母親と琢己の預け先を俄かに設置されたという

出張行政機関に相談すべく、貴重なガソリンを使って出かけている最中だった。

「うんことしっこ」太一が祈りのように復唱する。そしてまたけらけらと笑う。

今度は、ばかだなあとという目をしたのは夏実のほうだった。それでも同じように耳をすませている。気を紛らわせたいのは少し大きい子どもだって同じ、それに、大人だって。

カケルは行ったり来たり、思いつくままにお話を続ける。うる覚えでも、適当に。

長い長い虚構に彩られたお話を終えて、ふうつとため息をついた後、体育館の喧騒が再び3人を包んだ。

その中で、ふつと夏実がつぶやく。

「狼って、可哀そうだよね」

えっ、思わずカケルは身を起こす。脇に挟まれたまま、少しうとうとしていた太一がびくん、と身体を突っ張らせた。

「そうかな、なんで」

太一の背中を撫でながらカケルは聞く。先日ことはまだ直接問われていなかった。カケルもあえて訊ねなかった、あの時、何か変なもの見たの？ 俺が走ってるの、見たの？ それとも……

あまりの衝撃で夏実は忘れてしまっているのかも、と感じ始めていたところだった。

「『石をおなかいっぱい詰められて、目がさめた狼はああ、のどが渴いた、』なんて。だってさ、狼はもともと人を食べるのが当たり前だもの」

夏実の表情は屈託がない。人を食べる狼を見た、という様子ではなく、ただ単に一般教養的なイカサマを真に受けているという口調だった。

「……そうなのかなあ」カケルにも、自信がない。

本当に、『狼の当たり前』って何なのだろうか。

「なんか、アタシは狼に同情しちゃう。猟師がやな奴、って思っち

「やうよ」

「たいちも、たいちもオオカミしゅき」

「そうか」

自分のことを言われている訳ではないのに、カケルはなんとなくじんとしてしまう。両脇の二人をぎゅっと抱きしめたい気分だった。

「狼、好きか」

「ま、犬系はたいがい何でもね」急に恵のような口調で夏実が続ける。

「タヌキとか、狐も」

はあ、タヌキか、やっぱりぎゅっと抱きしめなくてよかった。オマエの父さんもアナグマなんだぞ、多分。そう心の中で突っ込みつつ、それでもカケルは優しい目線を姪に送る。

「犬系、いいよな、俺も好きだ」

「そう兄、他に何が好き？」

「俺？ そうだな……」

すぐに浮かんだのは海の生き物たち。水族館でも見られるような魚たち、タコ、イカ、クラゲ、イソギンチャクですら。水獣も好きだ。あの青い光を通して見える世界は、永遠の憧れともいえる。

それに人魚も。カケルの胸を鋭い痛みが刺す、そう、人魚も好きだった、とても。

哀しみが零れ落ちないように、カケルは声を弾ませて続けた。

「タコとかイカとか、マグロやイワシも好きだよもちろん」

「そう語るカケルに向かい、夏実は笑っている。

「そう兄、なんか寿司ネタの話みたい」

「でも俺はかつぱ巻きくらいしか食わないし」

「だよね、」夏実はひとしきり笑ってから、はあ、と息をついた。

また眠ってしまったかと思われた太一が急に会話に加わる。

「たいちもね、しゅきだよ、ええとね」

一生懸命考えているのか、それとも情性なのかが判然としないまま、カケルと夏実は続きを待つ。

「うさぎとか、きりんとか、てんとーむちとか、ちくわ
カケルと夏実は、顔を見合わせて、ふふ、と笑う。

他愛ない会話、今一番好きなのはたぶんそんなところだろう。

体育館の片隅、『家』の外の壁際にカケルは太一をゆっくりと降ろした。

太一はぐっすり眠っていたので、カケルは自分の上着をそっとかけてやってまた、足音を忍ばせるように静かにその場を後にした。少し前に群の奴らから渡されたミリタリージャケット、いくら小柄な太一でも脛から先が服の裾から飛び出してはいたが少しは暖かいのだろう、彼は足を縮めてその服の中に巣籠もるかのように身体を丸め、片手を口もとに持っていつてさらに夢の国へと沈んでいく。カケルは薄い笑いを唇の端に浮かべ、体育館の奥へと進んだ。

晴樹が荒れることが多くなった。

そんな夜はカケルは太一や夏実を引き連れて『家』の外へと出ていつて、パーティーションの外のどこかでしばらく過ごした。

恵は最初のうちはまともにもやり合っていたが、そこまでの気力が無くなると琢己を連れて体育館の外へと出て行った。晴樹の爆発は太一か琢己の言動がきっかけとなる場合がほとんどだったので、彼らが外に出ていさえすれば、しばらく経って落ちついた頃には帰って言うてももう特に罵声を浴びせたり物を投げつけたりすることもなかった。

圭吾は大概において晴樹より疲れ切って帰ってくるので、とっておきのランチユーハイを一気に空けて、そのまま片隅に寄って寝てしまう。そんな父親には晴樹は特に興味を示さなかった。

その晩も、ずいぶん前から恵は琢己を連れて、というより逆に琢己を追いかけるように体育館の外に出てしまっていた。

「そうちゃん、太一と居てやって」そう言い残すのが精いっぱいのようにだった。何時になっても帰って来る様子はない。

今夜は、竹中から頼まれて一緒に地区長会議に出てみてくれないか、と言われていた日だった。

夏実がパーテーションの中から出てきた。「ハルキのばーろー、ばーか」目じりのあたりに何かぶつけられたらしく、手のひらで押さえながらぶんぶんしている。出かけようとするカケルをみつけ「今、お家に入らないほうがいいよ、あのバカ兄貴がまたゴリラつてるから」

そう言ったのでカケルが答えた。

「ゴリラって平和的な動物らしいよ、ニンゲンよりは」

へえそう、と気の抜けたような返事をして夏実が近寄ってきた。

眠ってしまった太一についてもらうよう頼み、

「ちよっと出かけてくる」

と告げると

「遠くに行くの」

急に不安げな目をしたので、うつんステージのところ、すぐ帰るから、と答えたら目もとがふわっと緩んで「いつてらっしやい」と笑った。

あの目もとはやっぱりメグと同じだな、カケルは一度ふり返って夏実に手を振ってからステージの方に急いだ。

ステージ上にはすでに地区長が6人集まり、立ったまま何ごとか話しこんでいた。

話しこんでいる、というより1人が懸命に何かを語っており、あとの連中は渋い顔をしてそれを聞いている、といった感じだった。聞き手のうち4人は固く腕を組んでいる。あと1人はたまたま両手に荷物を持っていただけだった。

語り手の姿をちらっと見かけてカケルはいったん足を止めた。勝す呂くろという大男、苦手な人間だった。勝呂は話の中心になってホワイトボードに丸をいくつか書いて何か懸命に説明している。

「ヤマナシくん」

腕を組んでいたうちの1人が気づいて、彼をステージに招き上げた。第2区長の竹中だ。のほほんとしたいつもの表情はすっかり影を潜めていた。

「よかった、近ごろ見なかったんで忘れたかと思った。どこにいたんだ？ どうした？ 大丈夫か」

顔のあざが変色してきたらしい、恐ろしげに顔を見ているのでカケルは一瞬どこまで嘘をつこうか迷ったが、

「ちょっと……こないだ遠出したらへんな連中に絡まれて」

と、まんざら嘘とは言えない内容を大したことではなかったような軽い口調に包んでからかすかに笑ってみせた。

まだ包帯が完全に取れていない左手をさりげなく背中に回す。

「どこで」

相手は思いのほか警戒している。他の地区長もこちらをみた。

カケルは息をためてから少しずつ吐き出す要領でさりげなさを装う。

「西中野の向うですけど……奴らはもっと北に移動したみたいです、もういけませんよ」

「よかったな」へんな連中というのが少しでも自分たちから遠ざかったことに対して、なのだと思うが彼は大きくうなずきながらやや表情を和らげた。

「どこにもおかしなヤツらは増えてきている」

さっきまで説明を行っていた勝呂第4地区長が鋭い目線でカケルを一瞬捉え、また脇のホワイトボードに目を移した。他の連中もすでにカケルからは興味が殺がれたようでホワイトボードに向いた。

「本題に戻る」勝呂の声が響く中、竹中が一步左に寄ってカケルの場所を空けてくれたので、仕方なく一步前に出て同じように話を聞く。

「移動のタイムスケジュールについてはまだはつきりとは決まっていないが、2週間以内だろう」

勝呂が全体を見回してそう告げる。

この男は以前防衛関連の官庁にいたとの噂で、政府や行政機関にもずけずけと物言いをつけて、その意見がたいがいにおいては通っている、そしてどこかから相談事を受けるとやや上から目線ではあったがそれなりに動いてくれると評判がたっていた。

地区長としても、ここに避難してきた6地区の代表区長としてもこのような非常事態時には周りから何かと頼りにされ、いつしか避難者連絡会の会長にも祭り上げられていた。

「……やはり納得できないな、1と2だけがまた移動するのは、だつてよ」

荷物を両手に提げたままの第1地区長の小木曾が休めの姿勢のままそうよく響く声をあげた。

「元々この一番近隣が第1地区なんだし、年寄り子どもも多いんだよねうちら」

「実際に数、数えたわけじゃないでしょ、割合的に」

3区の地区長、安井が腕を組んだままそうつぶやき、先ほどカケルを上にした竹中は、そちらを厳しい目で睨んだ。一番の年長者である安井は、何となく気弱なうりざね顔をすくめるようにその視線を避ける。

竹中は鋭い口調で言った。

「数の問題じゃない、そんなのはどこかで調べてもらえば台帳ですぐ分るだろうが……そう言うことを言っただけじゃない、なぜ、1区と2区って勝手に決められたんだか、そこが納得いかない、って言うてんだ」

「人数の問題だ、あくまでもな」

説明をしていた勝呂が額の汗を手の甲で拭いている。

「人数的に少ない順に2地区、選ばせてもらったんだ、1と2とで両方あわせて300人弱でね、あとはどこも1地区で200以上はいるんだ」

「6区はどうなんだ？ ミヤベさんとこは」最近避難してきたばかりの地区だった。6区長の宮辺は年配の小柄な人物だったがステージの一番端の方、5区の長に隠れるように立っていた。急に名前を呼ばれ、おどおどとした目で一步だけ前が出る。口を開いたと思ったらすぐに5区長の神城かみしろがそれを遮る。

「隣地区どうしということ、合併することになってね」

「いつ」「聞いてないぞ」1区と2区との長がそれぞれ目を見開いて喰ってかかる。宮辺は更に怯えたようにあたりに落ち着きのない目をやってから、この場をとりまとめていた勝呂に目で助けを求めた。

勝呂の顔に一瞬不遜な表情が浮かんだのをカケルは見逃さなかった。

「別に勝手に決めたわけじゃない、災害対策委員会の方から避難者連絡会に通達があったんだ」

嘘だ、カケルは竹中と顔を見合わせる。

さつき「選ばせてもらった」と言っただばかりじゃないか、勝呂は目と目でそう会話する。1区長の小木曾も二人を見た。完全に勝呂を疑っている目だった。

宮辺は5区長の神城と代表地区長の勝呂にわいろを持って行ったに違いない。そして逆に、避難者連絡会から委員会に合併の話を申し入れたのだろう。

勝呂たちの表情をうかがうに、合併についてはすでに本決まりになっっているといった雰囲気だった。

この避難地が手狭になってきているというのは以前からずっと問題にはなっていた。

特に6区の避難民が120名近く一挙に移ってきた頃からトラブ

ルが多発し始めた。配給品の問題もそうだったが、トイレや水場の施設が避難者の人数に比べて圧倒的に数が足りない。毎日、どこかで何らかの小競り合いは発生している。大きな衝突になるのは時間の問題だった。

「元々、6区さんもこの学区だしね、地元と言えるでしょう」「宮辺をかばっていた神城は急に饒舌になった。

「1区は近いといっても、市町をまたいでるしね、元々ここにいるべきじゃないんだ。それにあとは単純に人数の問題……」

「それじゃあヨソモノだから追い払って、2区はその巻き添えになるってことか？」

小木曾が大声を出し、ステージの下にいた数人の住民がぎょっとしたように目を上げた。

「ちよつと、小木曾くん……」安井が弱り切ったように片手をあげる。

「みんなに聞こえるからさ」

「聞いてもらった方がいいだろう、みんなの問題だ」

小木曾は完全に怒っている。両手に荷物を下げたままなので、何かの罰ゲームのようにもみえた。

「この体育館にいるのはほとんど2区の人たちだしな、ここにいる竹中さんとか、ヤマナシくんとか」また地区長たちが一斉にカケルを見た。特に宮辺とと神城とは、なぜ地区長でもないオマエがここにいる、という目で彼をジロジロと見ていた。

竹中は、ちよつとした会合にカケルをよく連れて行った。カケルたちの一家は地区外の人間なのに、古くからの知り合いということでも体育館の中でもいい場所を確保して貰っている、その代わりにというわけでもないのだが、カケルはしょっちゅう竹中の仕事を手伝っていた。

竹中の話では、急に喘息の発作に襲われることがあるらしい。若輩ものではあるし地区代表としては半人前だから、話し合いなどの席にもう一人頼りになる人間を付けていいか、と他のメンバーに訊ねて一通りは了承を得ていたらしい。その割に、カケルが参加した時に竹中が咳込んで苦しむ場面というのは一度も見ることがなかった。

普段の地区長会議ではここまで意識されたことはなかったが、やはり問題があまりにも大き過ぎるせいか、カケルの存在はやはりかなり異質に映るようだ。すぐにでもステージから降りたい気持ちで一杯だったが、問題が問題だけに、逆に引っこみのつかない状況だった。

カケルはわずかに体を後ろにずらし、それでも耳だけはしっかりと会話に向ける。

「2区を追いだして、他の奴らがここに住みたいだけなんじゃないのか？」

小木曾がついに両手に提げていた重そうな紙袋を床に置いた。置いたというより、投げ捨てたという感じだった。中に束になって詰まっていた『第3小隊ふるさとの歌コンサート』の粗末なチラシが流れるように飛び出してトランプを並べたような長い軌跡をひいた。

使えるトイレが近くに多い、災害対策本部にも隣接、配給車や給水車の到着地点からも最も近いということから体育館に住む2区の避難民は他地区からも羨望の眼差しを受けていた。

それは体育館と脇の校舎内に分れて住む1区避難民に対しても同じことだった。たまたま早く到着していただけで良い場所を占有している、そんな不平不満があちこちから漏れているのも確かだった。これはつまらない派閥争いだ、カケルは地区長たちの言い争う声を耳に入れながらも目は体育館の隅に眠る太一の方へ戻っていた。しかしつまらない争いだと言っても、実際にとばつちりを喰らって住処を追われるのは下の連中だ。

年寄りも子どもも障害のあるなしも区別なく、彼ら大衆は王侯貴族の小競り合いに振り回されて生死の境をさまようことになる。

「とにかく、移動の連絡が来たら動いてもらいますから」

勝呂の言い方はやはり、決定事項を伝える投げやりな調子だった。待てよ、病人は？ 年寄り子どもも一斉になのか？

竹中の声が裏返る。小木曾も少し声のトーンを落としたものの、怒りは収まっていなかった。

「すでに個室に自閉症者の家族を割り当てを始めてる、もちろん他地区の障害者や要支援者にも優先的に校舎を使ってもらってるぞ、その人たちも1区や2区の間人ならば出て行けって言っただけか？」

「それは上が決める」

急に、勝呂の目がすっと冷たく細められた。声の温度まで下がる。その云いように何か言いかけた小木曾はうっとうしさを詰まらせた。

「いいか」勝呂は静かに続けた。

「元々ここに避難してくれ、と言っただけは俺でもない、君らでもない、全部、国とか行政機関とか上からの指示なんだ。彼らがそうしると言ったら、我々は従うしかない」

「……私らには、決定権はないって言うんだな、アンタは」

竹中がやはり、硬い口ぶりで問い詰めると、勝呂は同じように冷たい目をそちらに向けた。

カケルには覚えがあった。

あの目は、ムカイヤと同じだ。モノを見据える観察者としての。

「竹中さん、今はね、非常時なんですよ」

ステージの上に沈黙がおりた。

「ふざけてる、全く、ふざけているとしか……」
体育館を出て、喫煙コーナーになっている北側の木陰にずんずんと歩いていく間にも、竹中は鼻息も荒くひとり、悪態をついていた。

「あの勝呂は一体、何さまのつもりなんだ、俺ら300弱って、それでも300には近いんだ、しかも障害者割合も高い、「ちらつとカケルを見て、琢己のことを思い出したらしく「すまん」と申し訳なさげに軽く視線を下げる。だが、また彼の顔を見て訊ねてきた。」
「どう思う、カケルくん」
「というか……」

カケルは竹中が差し出す煙草を何となく受け取ってから「あ」とまた彼にそのまま返す。

「俺、煙草やめたんです」

竹中は自動的にまた煙草を受け取り、気ぜわしげにそれに火をつけて、大きく一度吸いこんだ。

「竹中さん」

カケルの呼びかけに、竹中はふうふう、とまた大きく煙を吐き出してから何？ という目で彼をみた。

「どうして会議に俺を呼んだんですか」

携帯のメールにはただ、『××日 20時からステージ上で会合、参加頼む』としか書いて無かった。

ああ、と竹中は煙草をかざしたままかすかに笑う。

「いつもすまん、忙しいのに」

嫌味なのかも一瞬勘ぐったが、竹中はしごくまじめな顔に戻っていた。そのままの顔で続ける。

「俺ね、シーオーピーデーなんだよ」

「シーオー？」

「元々は煙草の吸いすぎらしい、病気の名前さ、COPD、慢性閉塞性肺疾患」

その割に美味しそうに煙草をふかしている。

「今度酷い症状がでたら、また入院しなけりゃならん、と言っても」

前回入院して出てきてからもう2年にはなるから、案外うまいこと死神を騙してきたような気がするよ」

何となく繋がりが分かってきて、カケルは少し顔をしかめる。

「避難所ってのはストレスかかるよな、せつかく禁煙したのにまたこうして吸ってるし」

「はあ」どうやって今では貴重な煙草を手に入れているか、聞いた気もあつたがとりあえず黙っておいた。

「次の第2地区長に推薦したかった、君を、あの場でね」

今度はまつすぐ、カケルをみつめている。

「まさかあんな話になるとは思わなかったしな、云い出しそびれてしまったんだが」

避難所移動の話が落ちつくまでは頑張るが、新しい場所に落ちついたらぜひ考えてほしい、と彼の肩を叩く。カケルはふとその手をよけるように身を引いて言った。

「できませんよ、俺……しかも他に知り合いはいないし」

「俺もあそこにはたまたま住んでいたただけだ」竹中はまた煙草をくわえた。

「お母さんにはもう話をさせて頂いている」

えっ、とカケルは思わず声をあげる。

「いつですか、それ」

「先週、いや先々週だったかな。病院に見舞いに行つたんだよ」

しょっちゅう病院に行く恵からも、一言もそんな話があつたとは聞いていなかった。母ともかなりの期間会っていない。

「できませんよ」

「逆に知らないから、できるということもあるし」

竹中の言い方は妙に明るかった。彼は吸殻を灰皿の中に無造作に落とし、その手で彼の肩を軽く叩いた。

「何となく、君には感じるんだ」

「何をですか」カケルの腕に軽く鳥肌がたつ。

かつて、5区長のカミシロに影でこっそり聞かれたことがあつた。

おい、ヤマナシ君、だつたよね、キミ、聞いたことあるか？ その、あの竹中君だけど結婚しないのはどうもちよいとあつちのケがあるとかないとか……カミシロはヒソヒソ声で聞いておいてから慌てて自分で「いや、そんなことを君に聞くのは何、その」あたふたとことばを迷わせて後はまともに目も合わせず笑いながら「まあ、ここだけの話で」と、きよとんとしたままのカケルを残して去つていったのだが、ふと、実はそのうわさは間違つてはいなかったのかも、とカケルは今さらながら腕にかすかな鳥肌をたてた。

カケルは更に一步後にさがったが、竹中は煙草のパッケージを胸ポケットにしまつのに気をとられていて、全然お構いなしのようだった。それでも真面目な口調のまま、

「キミは、普段は物静かで優しいけど、やる時にはちゃんとやれる、と」

やる、という言い方が「殺す」の意味にも取れるな、カケルは、曖昧な口もとで「はあ」と間の抜けた声を出す。それが迷いとれたのだろう、

「移動の件は受けざるを得ないだろう、一応もう少し粘ってみるが無理だったら……とりあえずまだ少し間があるから、考えておいてくれ」

すでにそれも決まったかのような言い方で、ぱん、と乾いた音で手を打ち鳴らす。

一つ問題が解決すると、すぐに次の憂慮すべき事態が発生する、それは今までの経験で十分知りつくしているはずだった、なのに。

どう断るか思いつかず、カケルはまた泥沼に足を踏み入れたような暗然とした気分を抱えたまま、体育館に戻ろうとする竹中の後ろ姿を見送っていた。

「あ、そうだカケル君」暗がりでは彼がふり向いたのが見えた。

口調が普段通りの朗らかな感じに戻っていたので、

「何でしょう」

特に用心もせず、カケルは彼の方に数歩寄った。表情が見えるところまで近づいた時、竹中が軽い口調のまま言った。

「覚えてる？ あのことは」

「はい？」

竹中が右手を目の前にかざしている。カケルはそれをじっと見た。このポーズはどこかで見た気がする。一度だけ。

4月だったか？ 竹中と初めてここで会った頃、パーティーションを運ぶ時だったか彼は一緒に倉庫まで行ってその時他に誰もいなくなり竹中は急にこちらを向いた。そしてこうして指を立てて何か言った。

何だつたらう？

カケルは指先に目を据える。

「覚えてるか？ イブのことは」

何を訊かれているのか、全然理解できない。しかし、疑念も湧かなかった。

「いいえ」

ごく普通に口から答えが出た。「何ですかそれは」

「いや」竹中が目を外す。「ごめん、別にいいんだ。おやすみ」

竹中が暗がりには消えると、最後の会話はすっかりとカケルの中から抜け落ちていた。

それよか、地区長候補か？ 弱ったな、俺は上に立てるタイプじゃないのに、そればかりくよくよと考えていた。

しかしその危惧は、更なる深刻な事態にそのまま呑み込まれることとなった。

翌日に委員会より通達がきた。

第1区と第2区の避難民は来週月曜、つまりあと4日後にグラウンド……資材倉庫の合間のちよっとしたスペースで、そこに集まるように指示されていた。

荷物を全てまとめて、そして、どうしても動かせない病人を除く全員を対象に。

耳には聴こえない響きがずっと、グラウンド西半分、プレハブ倉庫に囲まれた側の空き地に出て行く人びとの腹を底から震わせ、耳の奥に不快な疼きを与え続けている。

ほとんどの対象者が出てきた頃を見計らったのか、グラウンドの中に、次から次へと軍用車のごときいかつい車両が入り込んできた。コの字に並ぶプレハブに囲まれた人びとの群れは、不安げにその車列を見守っている。

災害復旧作業などでさんざん世話になっているせいで、普段その辺で見かけても何ら警戒感を覚えなくなっているはずなのに、それでも群のいくらかはかすかに何かの予兆を嗅ぎ取るうとするかのように首を伸ばし、必死にそれらの動きを追っていた。

カケルはようやく動きをとめた琢己を自分の右側にさりげなくとどめ置き、風邪をひき始めているのか涙をぐずぐずと鳴らしている太一を左肩の上に抱き上げるようにして、できるだけ人びとの後ろの目立たない場所に立って、事の成り行きを見守っていた。

彼も、人びとの数人と同じように風の匂いをかくように首をのばした。

匂いの中から何とかこれから起こることを予想しようとしてみたが、腹の底にどんとんと黒い渦が湧いてくるようなどうにも嫌な気分は全く晴れる様子がない。

ふと左側、高いフェンスの向こう、敷地外の県道沿いにもカーキ色のトラックが何台も縦列で並んでいるのが見えた。

先ほどから身体の芯に響いていた重低音はこちらの車両からのものだったらしい。

それぞれの車から明らかに軍か警察のような制服姿が2人ずつ降り、てきぱきとした動作で1人が車の後ろに、もう一人が脇につく。全ての車でほぼ同時に同じような動きがみられた。

どの車でも同じように人が動いたことに何となく寒気を覚え、カケルは太一を抱く腕に少し力を入れた。

晴樹が走ってきた。午後遅く作業から帰ってきてから着替えたと思っていたらまた汚れた作業着に身を包んでいる。慌てて着たのか、前のボタンが1つずれていた。

「ハル、太一を頼む」そう言おうとしたところに、晴樹はどもりながら早口で言った。

「あ、集まってく、さ、作業班全部、俺行かなきゃ」
「どこに」

「分んねえ、とりあえず西校舎の裏に来て。またメールしてそう兄、ねえこれ何なの」

急に歳よりも幼くなってしまったようだ。目ですがりついてくる。「何なの？　こここれ、あ、集まってく何？」

こんな時に妙に落ち着いた感のある圭吾はあいにく、外出中だった。恵も一緒に、夏実だけ連れて三人で母親の転院先を相談すべく、車で50キロは離れた介護相談センターに出かけていた。

カケルは集まってきた群衆を眺め渡し、かすかに地を揺るがす鈍い響きにしぼし耳を傾けてから、まだ不安げな色を浮かべている晴樹に言った。

「どうする？　一緒に逃げるか？」
「えっ」

明らかに意外な言葉だったのだろう、目をまん丸にしている。

「逃げる？」右、そして左を見渡してからもう一度カケルをみた。

「逃げるってなんでだよ？　どこへ？」

「ここはもう……」

そこにスマホが可愛い音をたてた。晴樹は「俺だ」と飛び上がり、画面を確認する。

「ごめんそう兄、呼び出しがかかってる、すぐ来いって」

終わってからまたこっち来るから、そう叫んで彼は校舎の裏手へ走って行った。

何か手からすり抜けていく感覚は、もはや止めようがない、カケルはどこかに竹中が見えないか首を伸ばした、だがどこにもそれらしい姿はない。移動を最後まで反対していた、今も本部にかけ合っているのだろうか。

いつの間にか人びとの前に、ジープが2台、小型の幌つきトラックが1台、白いバンが1台続々と登場して、車体を横にして止まった、まるで彼らの出口を塞ぐかのように。

その後ろからも何台か大きな車が来たようだったが並んで停められた車列のせいで何も見えず、少し後ろ側、グラウンド残り半分側から何かの掛け声と、車のドアがぱたんと閉じられる音、がちやがちやと資材を下ろすような音が入り混じって耳に届いてきた。

プレハブで囲まれたグラウンド半分程度の空間に散らばった人びとは、いつの間にか一ヶ所に固まりつつあった。

急に拡声器を通した、割れたような高い声が響く。最初に甲高いハウリングが耳をつんざいて数人が思わず耳を押さえた。

「えー、政府特別災害対策部から派遣されてきました、緊急避難誘導班です。北部第1区と2区のみなさん、大きな荷物は所定の場所に置いて頂けていますね、荷物札もついていきますか？ ああ、いいです確認の時間はあとからまたとりますので今は動かないで。

今から名簿との照合作業を行いますので、手荷物と貴重品だけ持って、前の係員の所まで、はい、今手を上げている4人の前、向かって左に1区2列、右に2区の人2列で並んでください、前から順番に、押さないで」

そのことばが引き金になったかのように、人びとはわれ先にと荷物を抱えて前に詰め掛ける、拡声器が慌てて叫ぶ。

「急がないでください、ゆっくり、押さないで、2列ずつです」

「家族は誰か1人でいいのか？」後ろの方で誰か叫ぶ。「家族は、

代表だけでいいののか？」

拡声器が答えた。「全ての方、御家族も個人も関係なく全てお並びください、あの」拡声器の声を遮って今度は誰かが悲鳴のような声を上げた。「おばあちゃんが具合悪くて、後ろの救護室にまだ」
「ここに出てこれられない方については」拡声器の声がかぶる。「他のご家族の方が申告してください、はい、並んで」

後で聞いた話だが、この場に出て来られなかった老人、寝たきりになっていた人などはこの避難所にあと4人、カケルの母のように他の施設に入っていたのが13人、ケイゴやメグミたちのように外出から帰ってなかったり所在が不明だったのが11人、そして今、2列ずつに並ぼうとしていたのが全部で250人は超えていた。パニックに近い騒ぎがいったんは起こりかけたものの、いつの間にか群衆を取り囲むようにカーキ色の連中が並んで少しだけ距離を縮めていたせいで、驚くほど早く混乱は収まりつつあった。

前に出ていった地区長の声かけで、1区、2区とも次々に人が並びつつある。家族どうしが離れても、名簿で確認するので問題はないですよと地区長たちは何度も説明していた。

カケルは、琢己が進もうとしないのでいつまでも前に出ていけなかった。

琢己は周りがかあまりにも騒がしいせいでいつになく落ちつかない様子をして、自分の耳を両手で固く押さえ、奇声をあげて高く跳び続けている、それを少し下がった所についた隊員がまじまじと見つめていた。

カケルはきつい目で彼を一瞥し、それでも思い直して少し丁寧なことばで彼に聞く。

「この子は、騒がしいのが苦手なんですけどどこか」静かな場所で休ませてもいいですか、と聞く前に、彼ではなく離れた所にいた上司らしい男が

「手続き、手続きを先にして」

せつついたように腕を振って、彼らを前へと招いた。

カケルはむっとしながらも、琢己を引き寄せるように前へと進んだ。

だが、数歩行くと琢己はぴたりと足を止めてしまった。

いつもならばもつと小刻みに動き回るはずの琢己が、なぜかわずかな動きもみせず、ただ耳を固く押さえたまま地面を見つめている。

押してもびくともしないので、しばらくは大丈夫だろうと判断してカケルは先に太一を連れて前に向かった。

ふり向きふり向き、琢己を見るに、彼はうなだれたまま、腕の位置すら微動だにさせずその場に彫像のように突っ立っている。どこかでみた『カレーの市民』を思い起こさせるシルエットだった。

竹中がいた。手続きのテーブル脇に普通の表情をして立っている。とても昨日まで移動に猛抗議していた人物には見えない、しかしどこことなく全身から緊張感が漂っている。

近づいて来るカケルに気づき、琢己の方に目を泳がせてから気をきかせて、次に手続きしようとしていた年配の女性に

「悪い、この人先にして」

と片手で詫びを入れ、前に通してくれた。いつもの竹中らしい配慮にカケルは少しだけ息を吐いて、軽く頭を下げた。

「はい次」

と声のかかる方には、2人の隊員がいた。1人が首から下げたボードに白い紙の名簿を持って待っている。

脇の男が「誰」というように首をかしげてカケルをみたので「ヤマナシ・ミツエ 町××1245番地」と告げると、名簿を持っていた男がずっと人差し指で住所のところをたどっていく。

「ヤマナシ・ミツエ、あつた」

ご家族は、ミツエさん78、カケルさん32とありますが？ と言ってから太一の方を怪訝そうな目でみるので事情を説明する。

「ああー、このキリシマさん、キリシマケイゴさん46という方はどちらに？」

そこで、キリシマケイゴ、メグミ、ナツミの3人はヤマナシ・ミツエのお見舞いをかねて各種手続きをするために外出中であることを告げた。行き先の名前と所在地とを聞かれて、思い出せる限りを伝える。

「キリシマ・ハルキつてのは今、避難所の青年隊に入っていて」

そこまで言うと隊員が「はいじゃあここにしているのは？」と軽く応じる。組織つてすげえなあ、と感じながらカケルは続ける。

「ここにしているのが、ヤマナシ・カケル……僕と、キリシマ・タイチ、

この子。それと後ろに」

話しながらのその間、おかしなことに気づいた。前の男たちが持つ名簿、それぞれ元住所、名前の後ろにもう1枠、何かの記号と番号がつけられている。

手続きにきた連中は、名前と元の住所、同居の家族について一通り聞かれた後、その記号番号を伝えられて他の係員が誘導する方へと進んでいる。

群衆がいる側ではなく、止められたジープの向う側、少し空いたスペースにいつの間にかパーテーションで区切られた二つのエリアへと。校舎側と出入口側に分けられ、これも手際のよい隊員たちの連係プレイによって、まん中に工事用のバリケードが綺麗に並べられつつあった。注視していなかったのでカケルは気づかなかったが、先ほどがちゃがちゃと鳴り響いていたのはこれを組み立てる音だったようだ。空いているグラウンドを利用したスペースなので、周囲には特にバリケードもフェンスも並べてはいなかったのだが、校舎側、グラウンドを見降ろす応援席代わりの段差部分に、さりげなく数人の隊員が小走りで向かい、等間隔で配置についた。外の道に接した方は元々高いフェンスがあるので隊員は特に立っていない、しかし全体の様子から、何となく逃げ場のない閉そく感が漂っていた。そんなスペースに、申告の済んだ250人余りの人々が次から次へと振り分けられて送られていく。

出入口に近い方には、なぜか成人、しかも青年から壮年までの姿が多い。

そして奥側には小学生くらいから下の子ども、老人、成人でもどこかひ弱な感じの人間や身体に明らかに障害のある者たちが目立つ。その中に教員のようなスーツ姿の男女が各一名、それと黄色いトレーナー姿の若い女性が数名、こんな状況の中では不自然とも言える笑みを浮かべて、入って来る子どもらに目をやっていた。

彼らはパーテーションの中に入ってきた赤ん坊や子どもをまとめる係らしかった。

一組の親子がパーティーションの入り口で隊員から引き離される所がカケルの目にとまった。

離された小さな女の子をその隊員が中に連れて行く、だが、その子はずつとふり返ったままで大声で泣いていた。ちょうど太一と同じくらいの年齢らしかった。

それでも隊員たちは掴んでいる手を緩めようとしなかった。母親は半狂乱になりながらその姿を追うが「後から、目的地で会えますから」と他の隊員に止められている。

泣きわめいたはずみに隊員の手が緩み、少女はだつ、と出口に向かって走った、すぐに追いついた隊員がその腕をぐいと掴んで引きもどした。

はずみで転んだ子どもは、更に泣きわめく。

すでに腕を離れたものの、隊員は倒れたままの子どもを見降ろすように黙って立っていた。ヘルメットの影になつてはつきりとはうかがい知れないが、少なくとも口もとは何の感情も浮かんでいない。ただ、観察しているかのような立ち姿に逆上したような母親の叫びが覆いかぶさる。それがたまたま静かになったグラウンドに響き、裏の山にこだまして跳ね返ってきた。

「何すんの！ みよしに何すんのよ！ 返して、子どもを返して！」

「なんで分かれる必要があるんだ」

近くにいた年配の男が拡声器を持ったままの目の前の係員にくっ
てかかる。ちょうど1人の隊員がカケルが抱いた太一を受け取るう
と両手を伸ばしたところだった。ちなみにカケルは入り口側のエリ
アB、太一はSに移動するよう指示されていたので、奥のパーテー
ションはAということだったが、スーツと黄色いトレーナーの女性
たちが担当するのがSというくりりしかつた。

太一は親戚から預かっているだけなので離れることができないと
彼らに説明しようとしていた矢先だった。

「あのですね」

拡声器の係員は疲れたような目を年配の男に向け、ちらつと脇の
カケルに目をやったが、周りからも「そうだそうだ」「説明してよ」
と非難の声が上がりつつあったのを機に、拡声器を取り上げてスイ
ッチを入れ、話し出した。目つきの割にソフトな、そして営業的と
もいえる優しくもよどみない語り口だった。

「我々は危機管理センターの委託で、皆様方をより安全、かつより
快適な居住空間にすみやかに移動していただけるよう活動中です。
比較的体力のない赤ちゃん、小学生までのお子様、ご高齢の方、身
体の不自由な方など要支援と自治体にて判定されている方々につき
ましては、更に早急に快適な避難所に優先的に送りすべく、この
ような区分けをしております。また、今回の非常事態において発生
しました微量の化学物質による汚染が、年齢や体力といったもの
にも密接に関係しておることが判明しまして、このような社会的弱者
の方々に特別な検査と段階的医療ケアを一刻も早く行う必要がござ
います。どうぞ落ちついて我々の判断に従って頂きますようお願いま
す」

「なぜ俺たちだけ分れてんだよ、ここに残るヤツらはどうなるんだ」

そうだそうだ、の声に呼応するようにまた拡声器がしゃべりだす。カケルに伸びていた他の隊員の手はいったん引っ込められたので、カケルは太一を胸元に固く抱え直し、あからさまにならないよう気をつけながらも身をよじってその手から子どもの身体が届かない位置に退いた。一瞬、太一を竹中に頼もうかと思っただけだったが、先ほどまで立っていた場所に竹中はもういなかった。

「ここに残る方々も後日、名簿確認と検査・医療ケアなどを行います。今回は移動に際しまして先に対処させて頂きますので」

先ほどの少女の泣き声はまだ寒々とした外気を切り裂くように流れていた。母親は近くの隊員に喰ってかかっている、だが、その声は聞こえない。

カケルは改めて、自分のところの状況を説明しようと名簿を持った隊員に口を開きかけたが彼はもうすでに次の人の確認作業で目も上げようとしなかった。手を伸ばしてきた隊員も気づいたら他に移動している。

とりあえずパーテーションの前にもう一人偉そうな人物が見えたのでそちらに交渉しよう、と彼は前に進んだ。

ちょうど先ほどの母親が隊員と話を終えたところのようだった。隊員が言う。

「じゃあ、エリアのAに入ってもらって、左側の、そう、黄色いトレーナーの人たちと離れた方にお子さんと待機してください、御一緒に移動して頂けるよう手続きしますから」

女性は眉間の皺をぱつとのはし、晴れやかな目で我が子を見た。

よかった、みよしといられるんですね、よかった。言うかわないかのうちに中に走り込み、「みよし！」まだ倒れたままの子どもをすくい上げるように抱き起こす。その際、子どもの腕を掴んで転ばせた隊員にはざざりと鋭い視線を浴びせた。

だが、隊員は全く動じた様子もなく次の業務に戻っていった。

女性は子どもを連れて出口に戻ろうとしたが、先ほど話をしていった隊員が大声で

「その場に来てください、そちらで登録しますから」
そう呼びかけるとまるで電池が切れたかのようにぴたりと動きを
とめた。

それに気をとられていたカケルは、また、自分の所に伸びた腕に最初気づかなかった。

「そっくにい！」

太一がぎゅっとしがみつき、初めて、パーティーション入口に配備されていたさつきとは別の隊員が太一を受け取るうとしていたのに気づく。手の伸ばし方が先ほどと同じようで、なぜかロボットのような無機質なものを覚えた。

「あの」

カケルは太一を抱え直してその腕に向かって言った。

「この子は自分の子どもではないんです、親戚で母親が今いなくて相手は伸ばした手をそのままにしていたが、返事もせずにもた手を伸ばして太一を掴もうとする。やはりアンドロイドやロボットのような反応だ、顔かたちもそっくりに見える。

そして受け取るうとするのも人間ではなく荷物か何かだと思っ
ているような雰囲気を感じさせている。そのあまりにも不躰な動きに
「やめろ！」

カケルもつい大声をあげた。「待てよ、今の話聞いてた？」

パーティーションの所に見張っていた責任者らしい人物が大股で近づいてきた。

「何か問題でも？」カケルにはなく、腕を伸ばしていた隊員に聞いている。

「この子を連れて行くってんだけど」

カケルはついぞんざいな口調になる、ヤツらがこちらを人間として扱わないのならば、こつちだつていくらでも無礼になつてやる。

「コイツが何も言わずに急に」

責任者はいつときその隊員の貌をみたが、すぐにカケルに目を移すと、ごく事務的な調子でこう告げた。

「そのお子さんを渡して、速やかに移動してください」

「なぜ？」

「後がつかえてますから」

あまりにも理不尽な答えだ、と喰ってかかろうとしたがその責任者の顔には全くと言っていいほど冗談を言っている様子は見られなかった。どこか疲れ、どこか……

怯えている？

「説明はさっき聞きましたよね？ 坊ちゃんとはまた会えるんですから」

その途端、ずっと感じていた違和感の正体に気づいた、そう、その匂いから。

その男からかすかに漂うのは、『死』。

いったんその匂いに気づいてしまうと、驚くほどやすやすと関連した匂いが鼻にひっかかってきた。

彼らは死を運んできた。

彼らは嘘にまみれている。

彼らは命令され、そして、脅されている。

それすら気づかれないように脅迫を受け、自らをさえ欺いて業務を遂行しているのだ。

彼らの最終目的はただ一つ。この団体をせん滅させること。

いつきよに目の前に光景が広がる。出入口のエリアBは、生かして労働力として備蓄しておく集団、しかし、命令には絶対服従させ、反抗した場合には容赦なく処罰する。奥のエリアのうち、黄色いトレーナーの連中は児童養護施設の名を借りた、早期再教育機関の連中だ。まだ刷り込みの少ない乳幼児をしかるべく機関に預け、国家のために役立つ人材として育成する。もちろん中途脱落者には容赦ない。

そして奥のエリアの残りの人員、いったん人材養成のエリアから弾かれてしまったみよしとその母を含め、要支援と位置付けられた人びと、お年寄り、ハンデイのある人たち、彼らは

「……あの人たちは、どうなるんだ」

気づかないうちに、カケルは目の前の男に問いかけていた。

かすれ声は辺りの喧騒にまぎれその男に届かないようだった。

「なんだって？」

責任者がぐいと背を伸ばした。

声は届かなかったにせよ、カケルが何を問いかけてきたかは理解したようだ、眉を寄せ、ちらりと抱き合う親子を一瞥してからまたカケルに向き直る。

「何か？」吐く息と共に匂った、ディーゼルの鼻の奥にひっかかる匂い、強い消毒薬の刺激臭、鉄錆のすっぱい匂い、そして更に強く、死が。

カケルが区分けされたのは、Bだった。そして太一はS、しかし琢己は……？

「タクミはどうなる？ あの人たちは？」

カケルはあごでパーテーションの中で抱き合う親子を指した。彼らは再び会えることのない運命だったにも関わらず、別れを拒否してまた一緒になった。そしてそれが、2人の生きるチャンスを奪ってしまったのだ。

責任者はもうカケルしか見ていない、そう、この男は知っていたんだ、とカケルは確信する。

彼らがどこに送られるのか、そしてどう処分されるのかまで。匂いが全てを語っていた。

棄てられた犬や猫をそのように殺処分するのは話に聞いたことはあったが、実際にそれがなされている様子を、この男は見ていたのだ、しかも、人間を。

ここよりもさらに狭く密閉された囲みの中に、この男はすでに数百人、いや数千人単位の間人を追いこんでいた。彼らがただ単に「役に立たない」とみなされているだけで。

「なぜ殺す」

カケルのその言葉に、責任者は完全なる無表情となった。理解すらしていないという、無表情。底しれぬほどの怯えがすべての感情に分厚いコーティングを施していた。

「何でなんだよ。誰がそう決めた」

カケルが掴みかかろうとした時、急にあちら側が騒がしくなった。カケルも目の前の係官も、周りの人間も一瞬、騒ぎの元に目をやる。

先ほど振り分け作業を行っていた場所で、ばらばらと数人が走っているのが見えた。けたたましい叫びが空気を切り裂く。琢己の声だった。それにかぶさるように数人の怒号。

「逃げるぞ」「山側に行け」

プレハブの隙間を抜けたらしい、琢己のすらりとした体躯が校舎側の斜面を山に駆け上がって行くのがちらりと目に入った、瞬間、カケルは太一を投げ出すように地面に下ろし、

「何を!？」

それ以上ことばを繋げずに腕だけで止めようとした責任者を突き飛ばして、その後を追った。

数人の隊員が琢己を追っている、更にその後を懸命にカケルは追いかけた。自分呼びとめようとする喚き声が背中から聞こえていたが、すでにそのことばはことばとして彼の耳には届いていなかった。「曠野をゆけ」いつの間にか、つぶやいていた、そしてはじけるように衣服は千切れて雑木林の中に飛び散り、

そこには銀灰色の毛を波打たせた狼が、ひたすら斜面を駆け上っていた。

その時実際に発砲があつたかどうか、公式には何の発表もなかつた。

だが、雑木林を駆け上つて彼らを追いかけた狼は、まず硝煙の臭いに気づいて瞬間低く伏せた。

音が先のはずだったが、遅れて数発響いたのが耳に入っただけだった。

人が短く命令を発する叫びと、誰かの息づかい、

そしてカケルが、そして狼が恐れていた、琢己の鋭い叫び。まだまだ手の届く位置にいるとは思えないほど遠い。冷たい外気を切り裂くその長い叫び声は鳥を思わせた。追いかける側の警告、そして枝をふみしだく音と更に

銃声。

その中に混じる、がち、と鉄の当たる音に狼は本能的に耳を伏せる。だが、すぐに細い灌木の合間をすり抜けて、尾根に近い山道へと躍り出た。

背中を見せて樹の影に潜む隊員がふり返つた時には、狼のあごは彼のあごから首全体をまとめて捉えていた。一撃で噛み伏せ、がろがろとうがいするような音をたてるその喉に更に牙を喰い込ませるヘルメットのストッパーが割れて舌を刺した、だが、そんなものよりもやはり甘く温かい血の奔流が狼を夢中にさせた。

長い叫びがまた響き、獣は我に返る、隊員の1人が何か叫んだが、それは「あぶない」と聞こえた。こんな時に危なくないものはあるのか、どこかでカケルの皮肉交じりの声が響く、だが狼は後ろ脚で固い岩を蹴つて、大きく前に跳ぶ。

二人の隊員が両手を拡げるように、これも背中をこちらに向けて立っていた。狼には気づかず、ただ目の前の様子に心を奪われていた。尾根の崖つぶちに立ち、今ちようど足を滑らせて落ちようとし

ているその少年の様子に。

少年はこちらに目をやってくわえた指を離し、ゆっくりと仰向けに倒れた。

撃たれた様子はない、実際、向き合う二人の隊員は銃を手にしていなかった。ただ、両手を広げ彼を止めようと、いや、困いこもうとしていたのだろうか、だが、それは逆に追い落とそうとしているようにも見えた。

まるで手品で消してしまったかのように、琢己の姿が消える。

崖の向うに重なる山並みが霞む、すがすがしい程のパノラマスケープが広がっていた。

狼は彼ら隊員の間を大きく弧を描いて飛び越し、琢己の後を追って崖から跳んだ。

激流となった景色の一点に足場を見つけ、狼は左下方の岩場に跳び移る、そして右下、勢いがつき過ぎて前脚が衝撃を受け切れていない、しかし、今はスピードだけが頼りだった。

琢己が彼の姿を認め、閉じかけていた目を一瞬大きく見開く、しかし、そのすぐ真下の岩場にまず、右肩がひっかかり彼の身体は大きくバランスを崩す、次に脚、そして頭が地面に叩きつけられ、全身がぼろ布で縫われた人形が巨人に振りたくらわれているかのようにその身体はパーツごとにおかしな揺れをみせながら回転して落ちていった。

狼は最後に大きく跳んで、ようやくその身体に追いついた。

脇から体当たりするように滑り込み、体ぜんたいで琢己を止める、砂利が足の下で大量に流れ、焼けるような熱さと尖った石の喰い込む感触。何メートルほどいっしょに滑り落ちただろうか、一度大きな岩に足をかけて踏みとどまろうとしたが背中の琢己だけまた勢いで下に、そのジャケットの背中を狼は大きなあごで攫む、間に合わない、また落ちてゆくその軀、狼はそのぐにやりとした落下物を目の端に捉え、狼のままおもう。

あいつらを

あいつらをかみころしておけばよかった、

あのうえのやつらを、さきにかみころしておけばよかったのだ

どつせまにあわなかったのならば

解放される魂

琢己は横たわったまま、目をつぶって浅い息をついている。

はたから見れば、まるで普通の少年のようにみえる。寝たまま時々手先をヒラヒラさせるのが、唯一普通と違う感じだが、この期に及んでそんな所まで気づく者はいないだろう。

それに、見ているのはカケルただ一人だった、ただひとり。

タクミは息を引き取ろうとしている。

カケルは側にぴったりと寄り添い、ただ、そのひらつく手を時おり引き戻しては自分の胸に引き寄せていた。

「タク」

小さな声で呼びかける、何度目かの時に、琢己はうつすらと目を開けた。

「う……あ」

何か言いたそうだ。そう兄、と言いたいのか。

太一ですらそうにい、とかそうたん、と呼ぶのに琢己からは一度も名前を呼ばれたことはない。しかし今は、何かを言おうとしているのがカケルにも分かった。

「タク、どうした？」

琢己は血まみれの手を伸ばし、カケルの顔に触れた。

頬を通り越し、耳たぶの、金のピアスにそつと触れる。

「う……あれ」

カケルは、目を見開いたまま琢己の口の動きを読む。え、コイツ、なにかしゃべろうとしている。ことばがひとつずつ、唇の上に形をつくっていく。

「あれ、の、お、」

ゆけ、と読みとってカケルは心臓を鷲掴みにされたようなショックを受ける。

琢己は、分かっていたんだ。

俺が狼だつてことを。

そして

「う……あれ」

琢己が手を戻し、自分の耳たぶに触れる。カケルはようやく気づく。

「お前……お前も狼だつたのか」

琢己はませた青年の笑みを浮かべ、そのまま意識を失った。

「タク、タクミ！」カケルは彼の身体を思い切り揺さぶる。

「返事しろ、タク、お前もそうだつたのか？」

琢己の頭ががくがくと揺れる。カケルははっと気づいて、「あれのをゆけ」鋭く唱える。

狼は琢己の傷を舐めた。舐めて、舐めてなめまくる。しかし、遅かった。

琢己の魂はすでに、はるか遠くに旅立っていた。

カケルはいつの間にかまた人間に戻っていた。自分が涙も鼻水も出ているのにも気づかなかつた。

琢己、分かつた、傷を舐めた時によやく分かつたんだ、同じ匂いだ、狼の匂いだ、って。

お前だつたら、どんな狼に変わっていただろうか。

人間としては何かと不自由な点は多かつたが、もしかしたら、狼としては一流だつたかもしれない。

発作的にびよんびよんと縦飛びをすることが、たまにあった。その跳躍の高さに、カケルもよく感心したものだつた。

恵ですらこう言った。

「コイツがマサイ族だつたら、かなり出世したかもね」
狼でもよかつたんだ。

カケルは泣きじゃくりながらその骸を抱きしめる。

お前が狼だつたら、さぞや凄い跳躍をみせてくれただろうに。
一緒に走りたかつた、カケルは声を上げて泣いた。

いつまでも、泣いていたかった。しかし

カケルは立ち上がった。まだやらねばならないことがある、しかもすぐに。

彼は狼だ

いつでも飛び出せる、木陰に低く身を伏せて、狼はタイミングをはかっていた。

カーキ色の制服に囲まれた晴樹の顔いろは、着ている作業服よりも青白い、口をぎゅっと引き結んではいるが、緊張した全身はこう叫んでいた。

何？ 俺が何かしたのか？ 助けてくれ！

晴樹は両肘をそれぞれ掴まれ、汚い色の幌がかかったトラックの方へと引きずられようとしている。単に、何かの指示が出ていないという手続き上の理由で、まだその場に立ち止まっているようだった。晴樹と同じ作業服に身を包んだ数人は、怯えたように遠巻きに彼らを見つめていた。

誰かが切々と訴えている。晴樹たちの一団よりもさらに狼に近いあたり、聞いたことのある声だ。

「何だ、彼が何をした？ 弟は障害があっただ、パニックになって逃げただけじゃないか、それに追いかけていったのは彼らの叔父だ、あの子が落ち着けばすぐに戻ってくるだろうし、あの家族は私が預かっているんだ、手を出さなくてくれ」

竹中が喰ってかかっているのは、勝呂だった。あまりまわりに聞かれたくないのか、竹中は声を押し殺している、しかし狼の耳にはがんと響くようだった。

意味が取れない、狼はカケルを呼んだ。ハナシダケ、キケ、スグニ、オレガカワルカラ

カケルは唐突に肉体に引き戻され、草の上にさらに這いつくばる。草が固くて不快きわまりない、それでも何とか会話の内容を読みとるうと耳を澄ます。

「預かっている？ ただ監視していただけなんじゃない？ 竹中さん」

勝呂はじつと晴樹に目をやっただま冷たい声で応じていた。

「竹中さん、あの家族をどういう経緯で近くに置くに至ったかは知らんが、今さら自分の子飼いを取られたからって、うるさいんだよ」
勝呂はぴらぴらと手を振る。

カケルは少しだけ頭を浮かせる。どういふことなんだ？ コガイ？

「あの青年はちゃんと本部の調査室で取り調べますよ、竹中さん、アンタがどんな小細工で本部に取り入ろうとしていたか、そこまで全て話してもらふことになるでしょうがね」

「あの子は本当に何も知らないんだ、話を聞くなならあの叔父にしろ、今に帰ってくるから」

そうだ、もう帰って来ているがな、カケルはまた頭を沈める、だが、次の言葉に身をこわばらせた。

「彼は狼なんだ、勝呂さん、」

勝呂の肩がかすかに動いたのが見えた。

「しかも、私はちゃんと餌付けしてある」

餌付けの意味が分らなかつたが、相手に逆らえない何かを感じ、カケルはまたわずかに頭を上げた。顔を歪め、匂いを嗅ぐように彼らの会話からニュアンスの全てを嗅ぎ取るうとする。

「彼が連れて行かれれば、狼はここに残った連中全てを襲うぞ……餌付けしてない人間以外は」

「竹中さん」

勝呂は笑ってみせた。

「脅迫するつもりか？ アンタが狼をけしかけるのか？」

その時、わあああつと叫び声が上がった。竹中も勝呂も、もちろん隠れていたカケルも声の方向を一齐に見た。

晴樹が手を振り切って走り出していた。

当然、狼も飛び出した。勝呂はもちろん、竹中も驚愕に固まっている。狼の話をしていたところに突如、本物が飛び出せばこんな驚き方ができるんだ、飛び出した狼はほんのいつときそう感じたが立ち止まることなく晴樹の元へまっしぐらに向かう。

「撃て！」

どこかで、誰かがそう叫んだ。

アパートに着いた時には、用心も忘れるくらいカケルは疲れ果てていた。

どちらにせよ、人影はまったくくない。非常階段の影から全裸で現れ、部屋に入って行く男など、目に留める者は誰もいなかった。

玄関先の生ごみはとくに綺麗に片づけられていた。

何年前の出来事だったのか思い出せないくらい時が経っている気がする。鍵が替えられていないか心配したが郵便受けの内側に貼り付けてあった鍵でまだドアを開けることができた。

真つ暗な部屋の、とってつけたようなりビング、小さなテーブルの向う側に竹中が腰かけていた。気配はまったくなかった。

2人は黙ったまま向き合う。

ようやく、竹中が言った。「晴樹くんは、残念だった」

カケルはわずかに視線を外す。

壁にぼつんと下がったカレンダーが目に入った。まだ十月のままの。堪えていた涙が出そう何度かまばたきした。さっきまで狼だったせい、何も感じないというのが当たり前の気がしていたのに、やっぱり胸が苦しい。口を開いたが、ことばが思い浮かばなかった。「怪我はしなかったか？ 撃たれてはいなかったんだな、君は」

のろのろとうなずく。

「何か着るといい」
竹中に言われてようやく、自分がまず第一に服を取りに来たのを思い出した。それから、1人で思い切り泣こうと。

晴樹が目の前で撃たれ、自分の方にぶっ飛ばされた様子が繰り返

し再生される、途方にくれたような目がこちらを向き、狼の姿だったのに晴樹は今度はすぐに分かったのか「ああよかった」と口だけでそう言った。手を伸ばし自分の頭を抱こうともつれた足で二歩前へ、そしてまた、弾が当たって腰から下が吹き飛び、振り切った腕が狼の横つつらを薙ぎ払う。撃たれた故の力に違いないが、狼ですら気の遠くなりそうな一撃だった。

その後のことはカケルにはよく覚えていない、火薬のいやな匂い、ちらつく視界に飛び散った血、自分はまた、人を殺したのだろうか、誰かの銃を持ったままの腕を啜えている情景がふと目の前をよぎった、しかし、また晴樹の途方にくれた目がみえて、シーンは元に戻る。

洗面台脇の引き出しから下着を取り出して身につける間も、その光景は何度もなんどもカケルの脳内によみがえる。琢己を救えなかったのもシヨツクが大きかったはずなのに、晴樹が撃たれてからもう数日経っており、その間も太一や恵らがどこに行ってしまったのか空しく探しまわり頭の中は懸案事項で一杯だったはずなのに、今、浮かんでくるのは晴樹の最期ばかりだった。

竹中は同じ場所に座っていた。冷蔵庫とテーブルとの間、すゞの場所だった。

すゞは一度も帰ってきていなかったようだ、テーブルにはうつすらと埃がみえた。竹中はそこに肘をのせ、両手を軽く組んでいた。

「そこに座りなさい、カケルくん」

カケルは返事もせず彼の目の前に立つ。竹中が見上げて言った。

「聞きたいことが、あるんだろう?」

「あり過ぎだ」

カケルが押し殺した声でようやく言った。

「なぜイブの記憶を俺から隠した」

「思い出したのか」

「晴樹に殴られて思い出した」

自然と涙が落ちる。竹中は静かにみつめてから言った。

「まず一服してもいいかい？」

言いながら胸ポケットから煙草の箱を出す。「匂いをさせないために我慢してたんだ」

「ここは禁煙だ」

「そうか」

竹中は特に残念そうでもなく、また煙草をポケットにしまう。

「時間がないからまず先に言っておくが、君は狼だ」

「そんなことは自分で判ってる」

「男子は半々の確立だ、恵くんは確実に遺伝子をもってるからその子どもも男子なら半々の確立で狼が出る」

最後にはカケルにも判った、琢己は狼で、晴樹はそうではなかった、しかし今さらそんな情報が何になるというのだろうか。竹中が何を言いたいのか、さっぱり掴めない。

「なぜ俺ら家族のことを知っている」

「お父さん……月見里さんと一緒に研究していたから」

初耳だった。何かの会社を辞めてから、ずっと高校教師をしていたという覚えしかない。

「……狼の？」

「意思無き排除の研究だ、ずいぶん昔からあれは存在していた、今みたいに激しくなるずっと前から」

狼になるばかりではない、変身する人間は、意思無き排除と大きく関係している。そう竹中は説明した。

「月見里さんは極東で排除活動の現象を実際に観察していた、その頃は頻度も規模もたいいたものではなかったからね、それでもスポットと呼ばれる所があつて、私らはその研究をしていたんだ、しかし私が立てた予測が大きくずれて、彼は現象をまともに喰らつてしまった、非常に微々たるものだったので命には別条はなかったが……次世代に影響が出た」

月見里は研究職を辞して引退後地元高校の教諭となり、竹中はそのまま政府が極秘で進める『現象対策班』に入った。

「私がたまにお宅を訪ねていったのは、君たち子どもを見守るためだった」

「見守る？」カケルの口調に棘が混じる。「見張る、のではなく？」

「もちろん見張るためもあった」

「遅かったよ」カケルは言ったが、声に力はなかった。

「狼になって、何人も殺してしまった。竹中さん、それを止めようとしたのか？」

「そうだ」竹中は暗い目で壁を見やる。

「君が中学の頃、恵くんの結婚式に出た帰りに、私は襲われた、ほら」

失くなった指を上げてみせる。

「使われていた狼にやられた、その時崖から落ちて、しばらく意識が戻らなかった。意識が戻った時には記憶が無くなっていた」

「使われていた狼？」

「そう、ムカイヤたちの組織にね」

「その頃からムカイヤを？」

「もちろん知っていたよ、元々は同じ研究をしていたのだから、意思無き排除の」

ただ、彼らはそれを『絶対的神の御技』として崇めたてまつることにした、そして我々と決裂したのだ、と竹中は言いながらまた煙草の箱を出したが、カケルが睨んでいたのでしぶしぶまたポケットに戻した。

「君が覚醒したことも知らなかった、月見里さんのことも思い出せなかったのだから」

「オヤジはずっと……知っていたってことか？ お袋もか？」

「月見里さんはご家族にも内緒にしていたと思うよ、君がもし人を襲うようになってしまったら、それはそれで仕方ない、と淋しそうに笑っておっしゃったことがある。その時には自分がカケルを始末するしか、とも。しかしやはり、そこまでは出来なかったのだろうね」

急に床が沈むような倦怠感が襲う、カケルは椅子にへたりこんだ。竹中が立ちあがり、カケルの元に寄った。

と、竹中が覆いかぶさる、肩に瘦せた腕が巻き付き、頭を抱えられた。カケルは

「なっ」

抵抗しようと身を引いた、だが動けない。竹中が、カケルの耳の後ろに顔を埋めた。

「や、めろ……」

手足から力が抜ける。竹中の息が首筋を駆け下りた、熱く、乾いた煙草の匂い。

「離せよ、ちよっと……やめ」

急に竹中が身を引き離し、カケルは無様によるめいた。

「何するんだ」声が震えているのが自分でもよく分った、

「聞いたことあるぞ、た、竹中さんそ、そそそういう気があるから
気をつける、って」

「ホモだつて？ 違うよ」

ようやく竹中が薄く笑った。

「私は耳の裏で匂いを確かめる、君がごく小さい頃こうやったんだ」
「えっ」

「餌付けもその時ね、やらせてもらったよ。ヨーグルトを食べさせ
た」

竹中は真顔のまま、そこには無いヨーグルトカップから持っていないスプーンを差し出して「はい、あーん」のマネをしてみせた。

「餌付け……本当に餌付けしたんだな、何だよそれ」

別に恥ずべきことではないのだからカケルは顔を赤くする。

「普通の人間が狼を懐かせるには、手を舐めさせる、または手ずから何か食べさせるのがセオリーだ、君はだからご両親や恵くんには逆らえないだろう？」

「それが……」カケルはつぶやく。「そんな簡単なことが原因だったのか？」

「何のことだ？」

「何でもない」急に、大切なことを思い出して立ちあがった。

「まず、探しに行かなきゃ」

「誰を」

「全部だよ、いなくなった全部」カケルは竹中に迫った。

「恵と圭吾さんとなつちゃんに連絡が取れない、避難所に戻ってきたら大変だ、圭吾さんの御両親の所に逃げるよう早く伝えないと。それに太一が連れて行かれた先が全然判らない、あと、アンタがなぜか忘れさせようとしてたけど、イブを探す、それと」

「忙しそうだね」

「バカにしてんのか？」つい声を荒げた。

そんなカケルを竹中は片手を上げて制する。

「恵くんたちについては今は大丈夫だ」

そう言う竹中の表情が気になってカケルは問い詰める。

「大丈夫、ってどういう意味だ？」

「これ以上危険な目には遇わないよ」

「アンタは信じられない」

コイツの「あーんして」で食べてしまう前の過去に戻りたいくらいだった、だめだカケル、それは喰うな。

「太一くんの行き先は判っている」

カケルは眉を上げた。「どこだ」

「ここもしばらくは大丈夫、児童養護施設だ。命の危険はないよ…」

…とりあえずはね」

「信用できない、でも」カケルは拳をテーブルに叩きつけた。

「他に頼るところがないんだ、畜生！」

他にも色々聞きたいことはあった、やらねばならないことも多すぎる、何から片付けるべきだろう、カケルは束の間目をさまよわせ、すぐに心を決めた。

「分かっているんだろ？ イブとムカイヤはどこにいるか教えて」

竹中は口をつぐんでいる。

「知ってるんだろ？ えっ？」

口のきき方が気づかないうちにミナミをなぞっていた、カケルは更に詰め寄る。

「咬まれないからって良い気になるな、いくらでも傷めつける方法は」

「なぜイブのことを忘れさせたか、聞きたいか」

竹中は全く動じていない、もう一度訊ねた。「やっぱり煙草を吸っていいか」

「だめだ」答えるカケルの声に力はない。「なぜなんだ」

「君はムカイヤという男を過小評価している、奴は君を狙っている。彼女をダシに使って君をおびき寄せるつもりだ。最初の避難所に住めないようにしたのはそこが奴にマークされていたからだよ」

「あんたが手をまわしたのか」

「お世話になった家族の方々だから、できるだけ便宜を図りたいと思っただしね」

「……待てよ」カケルは額を押さえて考えをまとめる。

「アンタ、記憶がなかったんだらう？」

「君のおかげだよ、カケルくん」

竹中がまた薄く笑った。いつとき、いつも見る陽気で優しい人の顔が戻る。

「君は以前、殺そうとした男を助けた。彼の報告で後から現場を見に行った、そこで気づいた、嗅いでね……君たちに関する記憶が蘇ったんだよ」

頭が追いつかない、カケルは全てをつなげようと何度か最初から会話を思い出そうとしたが、鼻が全て見極められないように、見つめれば見つめるほど、焦点がぼやけていくのを感じていた。彼は頭をぶるんと振って、今、一番知りたいことに照準を合わせた。

「過去の話はもういい。どこにいるのか教える、すぐ探しに行く」

「どちらを？ ムカイヤ？ イブ？」

即答だった。「イブを」

竹中は言った。「愛を優先させるんだね」
場所をひとつ告げる。そして、静かに続けた。

君は愛するものを手放さねばならない。愛は常に憎しみを引き連れて
れている。

何かを愛すれば愛するほど、それにまつわる厄介な憎しみや苦痛
といったものをも引きずって曠野を彷徨うことになるんだ。

君は狼だ、しかもとても優しい心を忘れずにいる。

しかし、心の優しい狼だといつても、殺す本能からは逃れられ
ない。

優しいだけに愛に対しても人一倍敏感だ、大切なものだと解つて
いながら手放すタイミングをいつも逃している、引き際を知らな
ざる。優しすぎて、つい共感のあまりのめり込み過ぎるんだ。そ
して共倒れになる。

いつまでもそんなふうならば、人間としても、狼としても生きて
いくことはできないんだ、それが解るかい？

それでも愛するということとは棄てられない、俺はイブを探しに行
く、とカケルは答えた。

ならば仕方がない。

心優しき狼よ、そのまま曠野を行け。

そう言うと、竹中は煙草を出した、だがカケルはもう止めずにそ
の場を後にした。

イブを目指して。

来ないでと呼ぶ声 01

たどり着いたのは街なかからやや遠い、標高はあまり高くはないがその割に深い山の中、杉林の合間にぽっかりと切り拓かれた場所だった。

コンクリートの土台がすでにあちこち崩れ、いじけた雑草がもつれるように隙間に挟まっている。

k k r

聞こえたような気がした。

はつきりとしたことばではない、思念に近いひとつのシラブル。

林道からその空き地に入る。

田舎の学校の運動場くらいはあるその場所は、山の中では貴重な陽だまりとなっている。

背の高い草に隠れるように、山を背にしたバラックが現れた。

横に長い外壁をこちらに晒している。かつては鶏舎だったのか、トタンらしい屋根も横壁も黒ずんで、影がそのまま実体化したかのようだった。

k · k r

また、聞こえた。木々の枝が風で擦れあつのを、聞き間違えたのか。いや

カケルは足をはやめる。あれは、

かける

呼び声だ。

ムカイヤが立っていた、黒いバラックの前に。
「たどり着くのが遅かったですね」

以前と同じ口調だった。こちら黒い影が地面から湧いたようにみえた。

着ているものは以前と全く違う、黒っぽいジャージの上下、まるで『らしく』ない、それに髪はボサボサだし無精ひげも見られる、それなのに

口調だけは、全く変わらない。カケルの腕にぞわつと鳥肌がたった。

竹中に嵌められた、まっ先に思ったのはそれだった、だが、よく思い返すに、竹中はイブのいる場所は教えてくれたのだが、そこにムカイヤがいないとは一言も口にしていなかった。

「イブはどこだ」

カケルの問いに答えず、ムカイヤはひっそりと笑った。

「イブをどこにやった」

また聴こえた、頭のどこか端の方、匂いを感じるとどこか隅の方に、確かにその声が。

かける

「イブ！」カケルは叫ぶ。「どこにいる!？」

コナイデ

声は確かに聴こえた、ムカイヤの後ろ、バラックの中から。

声に応じるように、ムカイヤが脇に大きく退く。カケルを招く、その目線。手にはいつの間にか、ピンクの携帯を掲げていた、かつ

てイブが使っていた、今となつては旧式のもの。

コナイデ

その声に逆に招かれるように、カケルは前に進む。

ムカイヤに阻まれる、そう思った時に彼は地面に目を落とし、大きく後ろに一歩、退いた。手をだらんと下げ、低い声で「そこまで言うなら」そう告げた。

まるで彼らしくない神妙な言い方に、カケルは目を見開いてその姿を凝視する。

ムカイヤは全く笑っていなかった。どこか、祭壇の前で裁きを待つ者の態度にみえた。身体のだこにも緊張はない。急に襲ってくるつもりもなさそうだった。ただ、待つのみの態勢。

カケルはそれでも、彼からあまり目をそらさぬよう、壊れそうな平屋の建物に向かった。

中はがらんとして、白い地面がむき出しになっていた。屋根に空いたいくつもの穴から初冬とも思えない柔らかな日差しが差し込み、カケルを招く。

左端にいかつい檻が地面にそのまま置いてあった。

中には狼がいた。

メスの、狼。横倒しになった姿は毛が固まりあい、車通りの多い大通り脇に廃棄された毛布を思わせた。

カケルが檻に触れた時にも、その頭は少しも上がることはなかった。脂のせいで目はあらかた塞がり、口は半開きになったまま。口のはたは黄ばんだ硫黄のような滓で縁取られていた。

もつれた毛もところどころ抜け落ち、皮膚病におかされた肌の下に肋骨が浮き上がって、それがかすかに上下に動いているのが、唯一の生きている証拠のようだった。

匂いについて、カケルは鼻を覆う。床に染みた黒い水たまりからするののか、すっかり萎えた下半身から飛び出した妙になまなましい肉の塊からするのか、嗅ぎわけることもできず彼は息を止めたまま檻の入口を探す。

「繁殖に、ずいぶん貢献してくれた」

ムカイヤが後ろに立っていた。気づいたら近くにいた感じだった。ムカイヤのしゃべり方、昔よく聞いた声の出し方だ。カケルは身をこわばらせる。

「この6年間ここでたくさんの子どもを産んでくれました、この子は……もちろん、狼のね」

「どづいことだ」

「君をつがわせるのは簡単だったが、まだ高校生だったしね」

若かったよね、ムカイヤは軽く笑った。

「じゃあ……イブは」

「君のいる高校に入れたんですよ、餌付けしたメスを」

孤児だった彼女を育てたのは私です、ムカイヤはかすかにあごを上げた。それだけで十分自慢げに聞こえる。

「電話を一度、よこしたよな……」カケルは低い声で言った。

「オヤジが亡くなった晩、あれは」

「そろそろ仕事を引退して、種付けに来て貰おうかと思ったんです
が」

ムカイヤは爽やかに言い放つ。

「メスが弱ってきていたのでね、君との相性は良かったらし」

カケルの目の前が真っ赤に染まった。

「曠野を行け」つぶやくと同時に狼が跳んだ。何か口にしかけたムカイヤを押し倒す。

オマエには餌付けされていないぞ、俺は。目で告げた狼はムカイヤの喉元をがちりとあごで捉えていた、まだ牙はたてていない。

ムカイヤの声。「私を殺せないよ」

彼は携帯電話を狼の顔に押し当てる。同時に何かを押しした。

七色の光か、音か、それともどちらも一緒になのか狼には判らなかつたが、確かに見えないはずの色が見え、急激に世界が縮んだ。

床に投げ出されたのは、カケルだった。

覆いかぶさる影は、落ちつき払った動作で黒い箱状のものを出し、彼の腹に当てた。

体中に走る激痛、筋肉がこわばり悲鳴すら上げられない、一瞬意識がとんだ、何をしていたのか思い出せない、その時身体のどこか遠くでちくりと何かに刺された痛み。

カケルは手を伸ばす、だが何かを掴む前に世界は暗転した。

ボウフラ狩り 01

ボウフラは知ってますか？ 唐突にムカイヤはそう尋ねた。

カケルは答えない。

もともと答えなど全く期待していなかったのだろう、ムカイヤは後ろ手を組んだままわずかにそっくり返って、前に出した片方のかかとをとんとんと地面に当てる弾む感触を楽しんでいるようにそこに目を落としていた。とんとん、とんとん、左右に軽く振っているのによく見ると、歩いている蟻たちを端から潰していた。

「私は、ボウフラを獲るのが好きでね」

あまり聞いたことがない。水の中にプカプカ浮いている、蚊の幼生だというのはさすがにカケルも知ってはいたが、それを『トル』というのがどういうことなのか。水を棄ててしまつとか薬剤を撒くとか『退治する』ことを言っているのだろうか、急がずこまめに、話のついでに蟻を潰している様子から、薄ぼんやりとそうではないのだろうと知れた。

「水に立ったように浮いているのが、ちょうど茶柱か何かのようですね、何も攻撃を受けたことのない連中は、私たちが覗いてもあまり動揺した様子もなく、呑気に浮いている。水面に浮かんで、身体をくねらせてまつすぐ沈んでいく、それからまたしばらくすると同じように身をくねらせて浮かび上がるんです。君の入っている水の中にも少しいるでしょうか」

黒っぽい土まじりの水はようやく上の方が透けてみえるだけで、あごのすぐ近くにも腐葉土の欠片が漂っていた。ボウフラがいるのかどうかまでは分からなかった。水の中は思ったより冷たくなく、さつきムカイヤともう一人、手伝いらしい男に放り込まれた時には心臓が止まるかと思つたものの、ずっと居続けるうちにあまり冷た

さや水への不快さは感じなくなってきた。

ただ、「終わるまで車で待つてます」という助手のことばを耳にしてからはずつと吐きそうにはなっていたが。

「ある意味滑稽でもありません、動きがね。それを見てうちの息子が驚いた拍子にカケルの周りで水が跳ねあがる。ロープで縛られた手足のずつと下、重りになったコンクリートの塊が鈍く持ちあがった感触があった。

「子ども？」ムカイヤに息子がいたのか？カケルの目が問い詰めたのか、彼はわずかに気まり悪そうに口の端を歪めた。「ああ、その時はまだ5つかそこらでしたかね、息子が言ったんです、ねえ、このむし、なんだか人間みたいだね、ってね」

ねえこのむしなんだかにんげんみたいだね……とムカイヤは懐かしむように繰り返す。

「子どもが蚊に悩まされるのは嫌だし、かと言って用水に薬剤を入れるのもやはり子どももいるので心配だ、ならばどうしたらいいだろうか、そう考えて私は」

「……それ、いつ頃の話」

よつやく声が出る。唇のすぐ下に水がきているので、あまり口を動かさず囁くような言い方だった、それでもムカイヤにははっきりとその問いは届いたようだ。彼は、足を止めてカケルをみた。淋しそうに笑う。

「昔、むかしの話ですよ」

昔むかし、ムカイヤという中年にさしかかるうかという男がおりました。ちなみに、今よりずっと痩せていたそうです。それはともかく、彼は幼い息子が蚊に刺されないように、家の脇にあるコンクリート防火水槽のボウフラを退治することに決めました。

最初はその中に金魚を放そうとしたのですが、いくら家の脇にあるからと言っても、一応共同の施設です。なので、仕方なく金物屋で取っ手つきの小さな網を買ってきて、それで少しずつ、ボウフラを掬い取ることにしました。

何とバカらしい仕事だろう、ムカイヤは思いました。いくら子どものためとは言え、大のオトナが炎天下、汗を流しながら小さなおもちゃのような網で虫を掬っている……あまり乗り気にはなれない中、彼は無造作に水の中に網を突っ込みました、ところが

「ところが」

ムカイヤの語りに半分、気を失いそうになっていたカケルは、急に変わった声の調子にはっと目を覚ます。鼻先が水についていたらしく、あごをあげた瞬間水を吸い込んでいた、彼は激しく咳き込み周りの水が更に細かい不定期な波を巻き起こした。ムカイヤは彼の咳が収まってなおかつ水に沈まなかったことを確認してから、続きを語り出した。

「最初網を上げた時、びっくりするほど捕れたのですよ、奴らが」
これ以上楽しいことはあるだろうか、という目で彼は笑った。

「直径10センチもないような、天ぷらの時にあげ玉を掬うような網の上に、黒いボウフラがそうですね、20匹はいたでしょうか、どれもこれも身体をうねらせながら、今までの安寧を突如破られて何が起きたか分からないまま呆然と外気に晒されている……」

次々と、網を入れるたびにこの莫迦な虫は引っかかっけきました。どいつもこいつも無残に身をくねらせ、何が起きたか全く理解でき

ないまま、炎天下に焼かれたコンクリートの地面に振り落されてあつという間に乾いてしまふ、次々と。

急に、私の中で何かのスイッチが入ったんです。そう、これは義務でもヒマツブシでもない、きわめて大きな『快樂を伴う仕事』である、と。そう、仕事なんです、大事な。子どもが蚊に襲われないためにも、ここでその元になる虫を退治することは大事な仕事、しかもとてもその、何と言うのですか

気持ちいいんですよ。

相手が命を持つものだという感覚が更に、快樂に拍車をかけました。そのままずっと同じように網にかかっていたらあまりそう感じなかったのだと思いますが、あんな奴らでも徐々に学習するのですよ、小一時間も網を入れてみると、全体数も少なくなってきたせいもあります。明らか、逃げ方が巧妙になってきたのが分かるんです、一度に掬える数は多くても2匹とか。

わずかに生き残った連中はどうしているかって？ そう、ソイツらはひっそりと片隅に身を寄せて……身を潜めているのです、いつか襲撃が収まるのをじっと祈りながら。

私と言えばあまりに夢中になりすぎて、用水の中は下の泥まで巻きあがって濁ってしまふんですね、それでも少し経てばまた上から透き通ってくる、するとまだまだ、ボウフラが死角に入ろうと底の方で身をよじらせながら逃げ回っているのが見えるんです、特に頭のいい奴は小石や水槽のちよつとしたくぼみになったところ、網が届かない場所にうまく逃げ込んでいて、それでも、少し水を動かせばすぐに水圧で他所に飛ばされてしまふ、そこをまた、追いかけるのですよ、肘まで汚い水に浸けて」

昼前からずっと、ムカイヤは肩口近くまで水を浴びながらボウフラを獲り続け、気づいたらすぐ脇に、幼稚園帰りの息子が立っていた。

「ねえ、そんなに楽しいの？ ニンゲンムシをとるの」

「その時、私の中で何かのスイッチが入ったのです。子どものその一言が」

いつの頃からか密かに持ち続けていたに違いない何か、そのスイッチを入れたのは皮肉にも、ずっと守ろうとしてきた我が子であった。カケルはもうろうとする頭の中、そのナレーションを低い声で入れる。

「私は彼に金網を手渡し、すっかり水を浴びたようになった姿で家まで帰り、スーツに着替えて家を出ました。道を歩いていると、頭の中に声が聞こえました、気づいた者は祝福されるべし、命を狩る者に幸あれ、気づきありし我々と共に、この世の牧場まきはを管理せよ、庭木を大いなるの御意志のままに刈り込め、この地はひとつの命なり、命を統べよそして、世界を我らの形に整えよ。声に導かれるまま、私は行き先を見出し、そのまま従う道を選んだのです」

カケルはあごをあげたまま、ようやく口を動かす。「アンタさ」ボウフラから急に、ニンゲンを狩るに飛躍する心理が全く理解できない、どうにかそう言っつてやるとムカイヤは口を閉ざしてうつむいた。

しばらく黙っていたのだが、急に動き出す。くるりと彼に背を向け、ぎざぎざ、と鈍い靴音を引きずりながら少し離れた敷地の端まで行って、避けて小山になっていたコンクリートブロックのかなり大きな欠片を両手で拾い上げる。そして、それを肩のあたりに捧

げ持つようにして、また、さず、さず、と戻ってきた。体重にブロック半分くらいの重みがかかった音になっている。水槽の低い縁を越えてカケルの顔が出ている水面にまで砂煙が漂ってきた。彼はできるだけ顔をそむけてその煙をやり過ぎした。次におこることが容易に予想できた。カケルは待つしかない。ムカイヤはカケルの浸かっている水辺の縁まで来ると、そのコンクリート片を足もとに置いた。近寄ってきたムカイヤの右腕、肘までまくりあげたあたりに大きな傷があるのがみえた。古い傷は白く引き攣れている。あの傷は今この行動と何か関係があるのだろうか、案外筋肉質なんだなコイツ、事務所で首を絞めてやった時にはもつとムツチリしていたのに、そんなことを思いながらカケルはただ待つしかない。ムカイヤは、また足を引きずるように先ほどの小山まで戻って行って、同じくらいの大きさの欠片を拾い上げ、同じように肩のあたりまで持ち上げて運んできた。さず、さず、靴音が何度か往復し、やがてカケルの目の前に小さな山が出来上がってきた。

支度ができると、ムカイヤは改めてカケルの前に立った。黒いジヤージは白っぽいほこりにまみれ、見上げた顔はめずらしく汗が浮いて口が半開きになっている。息を切らしているのか身体が軽く上下に動いていた。

何も言わずに、ムカイヤはブロックを一つ拾い上げ、また肩に載せるようにして水槽の縁まで来た。そして、おもむろにそれをカケルめがけて放りなげる。

もちろんそう来ると思った、カケルは息を詰め、できるだけ身をよじって塊を避けた。それは彼の鼻先20センチくらい前方に着水、激しい飛沫を彼の顔面に浴びせて沈んでいった。辺りが激しく波立ち、カケルの身体も翻弄される。顔にも何度か規模の小さな津波が押し寄せいつまでたっても息継ぎができない。ちよつとした隙によやく、深く息をつくことができカケルは目を瞬かせ、次のムカイヤの動向を注視する。すでに彼は次の石を拾い上げていた、肩に載せ、近づき、また放る、今度は全然見当違いだった。カケルは首を

反対に捻る、巻き起こる波は相変わらずだが、今度は息がつけた。
ただいたぶるつもりでやっているのではないのは、₃投目で思い
知った。

思い切り身を捻ったつもりだったのに、それは水没していた左肩を直撃した。それほど勢いが無かったとは言え、一瞬目から火花が飛んだ。叫んだ拍子に水をかなり呑んだ。皮肉にも、肩に当たったせいで波はあまり起きず、溺れずには済んだ、しかし水を呑んだことで急にパニックが襲う。濁った水中に赤い花が咲いてもわっとした拡がり水面にまで広がる、カケルは赤い色を見て更に身を激しくよじる。続けて4投目が反対側の肩近くをかする。あの痛みはもう喰らいたくない、カケルは手首の縄を外そうと後ろ手に縛られた両腕を持ち上げようとしたが、どういつ縛り方なのかひじから先ががっちり背中中に張り付いている、引つ張れば引つ張るほど、結び目は固くなっているようだ。身体が冷えたのか急に背中が 뜨り、痛みはふくらはぎにまで達した。肩の痛みと相まって正気でいられない、際限なく叫ばないよう彼は歯を食いしばった。叫ぶ余裕もない、これ以上水を呑んだらもう後はない。5投目がまっすぐ頭を狙っている、それに気づいた瞬間、彼は身体中の筋肉が軋みを上げる中ぐつと息を溜めて水中に身を縮めた。

カケルは息を止めて沈む、ぼすん、と音がして細かいソーダの泡が側頭部をちくちくとくすぐり、乾いたコンクリートの欠片が近くを通り抜けていったのを感じる。欠片はわずかに胸の皮膚に触れてそこをかすっていく。しばらくはだいじょうぶ、我慢できる。浮きあがる、口は、まだ水の中、水位が一瞬下がる時、鼻が空気をとらえ、思い切り吸い込む。

ムカイヤが次の石を持ち上げてこちらに放る。カケルはまた沈む、すぐ息を止めてまたやり過ぎ、次の時を待つ、浮き上がる時を。

水から出たのは目だけ、鼻は一瞬、間に合わず思い切り水を吸い込んでしまう、つい耐えきれず口を開ける、黒く濁った流れが勢い

よく流れ込み呑みたくないというためらいと逆らうなという声とが同時に耳に飛び込み、彼は結局空気の代わりにそれを吸い込む。

黒い泥と鉄錆びの匂い、いったん間違えるとあとは混乱しかない、カケルは溺れる。

鼻に水が詰まる、痛みが鼻から頭蓋を貫き、胸はまさに張り裂けそう。そこに、石がついに頭を打った。深さは20センチもなかっただろう、衝撃は半端なく残りの全ての息が身体から押し出され遂に

チエックメイト。

死にたくない、しにたくない、しにたくないだれか誰かダレカダレカ

「アタシ、しぬの？」

あの時の聞こえなかつたはずの叫びが急に耳を貫く。ナミキシズエのインクの染みた指先、水は容赦なく胃に、気管になだれ込み彼は手足を突っ張る。『溺水』の黒い文字が目の前にちらつく、あの長い夜に見た文字、目を反らそうと仰向いた先には揺れる大気。

命につながる空は文字通り目と鼻の先、ごく近い場所で水の揺らめきを映して彼を誘う。

帰っておいで、お前はやはりそこでは生きられないのだから。

帰れないのかい……もう無理だと？ なぜ。

水の中の世界はお前のあこがれだから？ 帰りたくないのかい？ 元の世界に。

ならば、あんなにもあこがれていた世界はどうだ？ 今、お前に優しくしてくれているか？

別の声。言い聞かせるような優しさを装ったあの声が遠くなっていく意識のどこかで聞こえる。

「そう、身を潜めているのです。水の片隅で」

それからムカイヤとの対話。あれはとても昔、実際に交わしたこ

とばのように思えて、それでいて今、リアルに話しているのかとも思えて自然に口がそう動いていた。

カケルの内も外もすでにすっかり水に浸されている。もう少しすれば内も外も同じ濃度の血に浸されることになりそうだったが。そんな中で半分眠ったように彼はつぶやく。

ボウフラとニンゲンとどう同じなのだ？

ムカイヤが答えた。夢の入り口で。

「ではボウフラとニンゲンと、どう違うところなのでしょう？」

カケル、こっちにおいで。

そう、いいよベッドに腰掛けてもいいよ、どうせ誰も寄りや、しないんだから。

見つかったの？ メグミらは。……そうかい。

ケイゴさんの親ごさんに何て言ったらいいんだろう、こないだもわざわざ連絡をくれたしね、この病院に。

看護婦ったら最初は取りついでくれなくてさ、規則ですから、って……千円渡したらやっとさ、電話を貸してくれて、腹の立つ。オマエの所にも何度も電話したんだよ、聞こうと思って、電話を無くした？ 何やってんだいオマエは、こんな大事な時に。ハルくんも乗ってたのかい？ 本当に事故が？

晴樹も乗っていたことにしてしまった。母親は、バイパスで事故があつたらしい、とこのスタッフが話しているのを耳に入れてしまったのだ。

その前の晩に夢をみたよ、ハルくんが来てね、ばあちゃん風邪ひくなよ、じゃあな、って言ったんだけどもしかして何かあつたのかい？ 事故でおばあちゃんもお気の毒に、って廊下で話してたんだよ、カケル、聞いてるかい？ とすがりついてきた。

昔から、初孫ということもあつて晴樹はとりわけ可愛いらしく、何かあるたびにハルくんハルくん、と名前が出たものだった。

確かに事故だつたらしい、オレも竹中さんから聞いた、と答え、誰が乗っていたんだい、と母親から重ねて訊かれたので4人の名前を告げた。

看護婦は何にもちゃんと教えてくれないんだよ、とすっかり小さくなった身体で母親はつぶやく。

本当は病院ではない、医療行為は行われていない、ただの施設だ。それでもカケルは否定もせず黙って聴いている。

それよりアンタ、その怪我はどうしたんだい？ アタシより包帯だらけじゃないか。

ここに来てごらん、なんだいその右手の、グローブみたいな。

一番触れられたくない傷に触れられて、カケルは包帯を抱えるようにして顔をそむける。

イブに、というよりメス狼に咬まれた傷を。

助けられてすぐバラックに走って戻り、イブを檻から出して、固く抱きしめた。

しかし、ここに閉じ込められている間ずっと狼の姿だったらしく、カケルがどんなに声をかけても人間に戻ることはなかった。

何度も呼びかけたがメスはずっと低く唸り続けていた。カケルの心に聴こえる人間の声は単語としてもそう多くなかった。

狼になって、傷を舐めようと思った時いきなりメスは右手に喰いついた。ためらいも容赦もない、狼としての攻撃、とっさにカケルは狼に変わる。

そして次の瞬間に、メスの喉首に深く噛みついていった。

ぎしりと牙が噛み合わされ、酸っぱい膿と熱い大量の血があごに落ちた。

メスは全身を激しく痙攣させて、間もなく息絶えた。

ずっと、ずっとすきだったんだよ

その声はもう、どこにも聴こえなかった。

バラック小屋の外で待っていた竹中は、ムカイヤたちを撃った銃に寄りかかるように立っていた。顔色が悪く、かなり調子が悪そうだった。

「まだ狼のままだよ、カケルくん」

意味はとれないものの、その穏やかな語りかけに狼はすぐに反応して獣の姿を解いた。

「どうだった」

竹中が訊く。

「持つて行けないので、手放しました」

カケルはただ、そう答え竹中は少し黙ったままその顔を見てから「行く」

止めを刺すために踏んでいたムカイヤをまたいで、車に向かった。血の海に横たわるムカイヤは、多分、カケルが今まで見た中で一番安らかで実直な寝顔を空に向けていた。

「次はもう助けられないかもしれない、君を」

喘ぐような息の中から、何とか声を絞り出していた。

「竹中さんもヒトゴロシにしてみましたね」

カケルが言うと、竹中は顔をかすかにしかめて咳を押さえながら「最後に誰か殺さねばならないのならば、ムカイヤかとは思っていたが」

そう吐き捨てた。

もう1人、助手も撃ってしまったことを気にかけていたようだった。

しかし、すぐに目を鋭くさせてカケルを見た。

「本部から、狼をすべて駆除するよう命令が出た、人を襲う襲わないに関わらず」

竹中が放ってよこした黒いジャージはムカイヤから剥いだものだった。着たくはなかったが急げ、とせかされ仕方なく袖を通す。

「人間の姿でもか、それって」カケルの問いに既に車を発進させた竹中が

「一回でも覚醒した者は、見極めるツールが開発された……元々は私らが開発したんだがね」

そう言っただけでまた激しく咳き込む。カケルは横からハンドルを支える。

「ありがとう……カケルくん、絶対に人里に出るな、もっと奥で降りてやるから」

「いいや」

脇からブレーキに足を突っ込むと車は急停止した。カケルは竹中の目を見る。

「あぶ！ 何だって」

「最後に逢いたい……おふくろに」

竹中が息をのむ。

しかし、カケルが言い出したらきかないことはもう、分かっているようだった。

道中で、竹中から恵たちのことを聞かされた。

恵たちの車は病院に行く途中、バイパスで排除に遭遇し、他の車数台と共に消滅してしまったと言う。車体はそのまま、彼らは地震かと思って車外に飛び出したようだ、他の車の人々もほぼ同様だったらしく、道路や車は無傷だったが、その周囲に黒い染みが点々と残されていたという話だった。

「圭吾さんの車の前に、染みが残っていた、くつつきあっていたが1人分ではなかったらしい」

もう涙は出ない、と思っていたのに、カケルは少し泣いた。

竹中は咳き込みたいのか、泣きたいのか判らない顔で荒れた路面に注意を向けるのに精いっぱい風の装っていた。

この施設まで送ってもらった時には、もう面会時間はとくに過ぎていた。

収容されている人びとはどうなるかとあまりお構いなしなのか、部屋に行くまでスタッフの誰にも会うことはなかった。

少し落ちついた頃、母親が言った。

これでうちの子が残ったのは、アンタだけになっちまったね。

「違うよ、俺だけじゃないよ、まだ」カケルは答えた。

え？ タイチ？ そうだねタイチもいるし、そうだ、タクミもね。

でもタクミはもう数に入れられないよ、何の助けにもならないだろ？

「そんなことはないよ、タクミはすごく、助けになってる」本心からのことばだった。

琢己が亡くなったのはなぜか言えなかった。

タイチはね、でも……圭吾さんのご両親のところにお返ししようかと思っただ。それも相談したかったんだよ、実はね。

あの子ももう5歳になるだろう？ アタシもこんなで面倒みられないし、アンタだっけいくら身内と言っても独身でこの先どうなるか、分からないしね。

ケイゴさんち……桐島さんち、確かお孫さんは外に1人いるだけだったよね。

あの辺りはまだ、それでも落ちついてるらしいし、こないだね、電話を頂いた時も何となくナツミとかタイチのことを気にしてたしね、学校や幼稚園は行けてるんでしょうか、って。

きつとイヤとは言わないと思うよ。どうだろう、カケル？

「少し考えさせてほしい」

いつまで？ と母の目が問う。1週間くらいで、どうだろう、おれおれとそう答えると、母はふうつと息を吐いて天井をみた。適当なことを言っているのがお見通しなのか、返答に満足していないのは何となく分かった。

アンタがそう言うなら……いいよ、でもなるべく早くね。あの子が5歳になる前に、うちから遠くにやりたいんだ。

急におかしなことを言い出す。もしかして、以前聞いた話が関係しているのだろうか。

もう1人いたという、姉の話が。

聞いてみた、本当は聞きたいのかも分からなかったが。

そう。前にもちらっと話したかもしれないけど、恵めぐみとアンタの間にはもう1人、女の子がいてね。

実みのりという名前だった。

メグミとアンタとは8歳が離れているけど、ちょうどそのまん中くらい、アンタが生まれた時には4歳だった。

アンタが生まれるって分かった時にはメグミもミノリもすごく喜んでね、生まれたら男の子だろ、二人とも小さなお母さん気持ち良さ。

走かける、って名前は父さんが決めたのよ。漢字でどう書くかって話になつてね、アタシが『翔』が「かける」と読むからその字にしましように、って言ったらあの父さんだから言いそうなこと分かるだろ？
「ヒツジに羽が生えるなど、非常識だ」だって。

別に動物のヒツジって訳じゃあないのにねえ。それじゃあ『駆ける』とか『駈ける』にすれば良かったんだけど、やっぱり

「ウマなんて入れられるか、名前に」って、頑として受け付けなかった。

それでよりによって、『走る』でいい、ってさ。メグミは反対したよ、それじゃあ、友達から『はしるくん』って呼ばれちゃう、っ

て。

それでも父さんが決めたことなんだから、仕方ないね、そう決まったものは決まった。

そしたら今度は、ミノリがブーブー言い出した。

「たてゆ、いやだ」って。そう、タイチみたいに舌が回らなくてさ、あの子の場合、力行とラ行が全然うまく言えなくて、その頃ことばの教室にも通いだしたばかりだったんだよ。それまではあんまり気にしてなかったんだけどさ、ことばの教室で指摘されたら急に、恥ずかしくなっちゃったみたいだね。

だから『か』『け』『る』なんてうまく言えないことばばかり続いて、名前を呼びたくないってゴネ出した。最後には、大泣きでね。

メグミがそんな時、助けただよ。

「ミーちゃん、それじゃ、赤ちゃんのこと、『そうちゃん』って呼んだらいい」

きょんとしているミノリに、メグミが説明してやった。はしる、って字は『そう』とも読むんだよ、だから、そうちゃん、って呼べば？

ミノリは大喜びしてね。

それからずっと、アンタのことを『そうちゃん』って呼んでいた……その秋に事故で亡くなるまで……五歳になったばかりの時に。

メグミはね、それまではちゃんと『かける』って呼んでたんだよ、あの子は案外あれで几帳面な所があるしね。

ミノリが亡くなってからしばらくした頃から、メグミもあんなのことを『そうちゃん』って呼ぶようになった。何故かは知らないけどね。

カケルには、何となく分かった。

姉に伝えたい、二人の姉に。

その呼び名は、大好きだった、と。

施設を去るにあたって、カケルは母の手を上からそっと包んだ、
包帯がジャマだったせいで

「どこでそんなケガを」

とまた聞かれた。

「つき指だよ」

軽く答えてから、母の目がいつになく澄んでいるのをみて、意を
決して聞いてみる。

「母さん……父さんは昔」

「父さんかい？」

母の目が優しく下がる。照れているようだ。

「父さん、昔はあれでもけっこういい男だったよ、アンタも恵も父
さんに似てよかった」

「俺のこと……何か言ってた？」

「心配ばかりしてたよ」

「えっ」カケルはつい素に戻った声で手を離す。

「運動神経がいいようで、ずっとけてばかりだったしねえ。アイツ
は不器用だなあ、それにやんちゃなようで案外いつまでもクヨクヨ
してるし、何やらせても不器用だ、心配だ、って」

「……そう」

「俺の小さい頃そっくりだ、だから心配だなあって」

「そうなんだ」

父の笑った時の顔を少しだけ思い出した。いい顔だったな、と今
さら思った。

もう訊くことは何もない、カケルは最後に母の手を握って、じゃ
あおやすみ、と言っただけで部屋を後にした。

ショートメールがひとつ

意外なことに、竹中の車がまだ駐車場にあった。

小声で呼ぶと、後ろの木立から照れたような笑いとかすかな紫煙とをひいて戻ってきた。

医者せんせいに隠れて吸っているんでね、と言ってまた咳き込む。

明日は大事な会合がある、いないと疑われるしね、と言っていたのでとつくに避難所に向かっていたかと思っていたが

「すっかり忘れていた、すまん、返さなきゃならないものがあつた」
そう言つて、黒いスマートフォンを彼の右手に載せるように置き、左手で挟ませる。

「どこにこれが」

目を見開いて電源を入れる。

少しほこりがついてはいたが、正常に動作するようだった。

「避難所の裏手、山の斜面に落ちてたのを隊員が拾って届けてたんだ。ガワに見覚えあつた、君のだよね」

「ああ……」

不在着信がたまっていたが、すでにそれは過去の物語ばかりだった。

「狼で過ごすならば、もう必要ないかもしれないが」

「いや、」

カケルは顔を上げて微笑んだ。

「圭吾さんの実家に連絡することがあつて、番号がここに入ってたんだ。ありがとう竹中さん」

竹中はいつもの人の良い竹中らしい笑顔をみせる。「太一くんのことか」

「うん、母が気にしていて。引きとつて貰えないか、って」
それがいい、と竹中は何度もうなずいた。

太一が入っているだろう児童養護施設の名前を挙げ、圭吾さんの

御両親優しそうな方々だったな、披露宴で会ったきりだが、と遠い所をみる目になった。

どこか離れた場所でサイレンが鳴りだして、ふたりは現実に引き戻される。

山に入るんだぞ、人前には出るな、何度もそうふり返って、最後には「元気で」と言って彼は車で去っていった。

「元気で」はアンタの方に必要なことじゃないのか？ カケルは暗がりに遠ざかっていくテールランプが消えるまで見送った。

夜更けの空はどことなくまがまがしいオレンジ色に染まり、うっすらと化学的な匂いの漂う大気は、常に鳴りやまないサイレンや重機の低周波に冒され震えを帯びて彼の頬に当たる。

カケルには、世界自体が荒廃し、発狂しつつあるようにしか見えなかった。

戻って来るとは思わなかった電話を取り上げ、駐車場の敷石端に座って、おぼつかない左手で操作する。圭吾の実家の固定電話が登録されていた。見直して思い出したが、この番号を語呂合わせして圭吾と笑ったことがあった、ついくすと笑ってしまう。かなりスケベな内容で、夏実が「何？」と聞いてきた時に「なんでもない」と圭吾とカケルの声が揃って、それでまた大笑いしたことがあった。すぐ彼らのところに電話して窮状を訴えたいが、さすがに眠っている時間だろうか。夜が明けるまでどこかに隠れ、朝になったらすぐに電話してみよう、と、とりあえずジャージのポケットにスマホを突っ込もうとした。その時

軽い振動がきてカケルはぴくりと手を痙攣させる。さんざん傷めつけられたせいか、ほんのわずかな刺激でも恐ろしい、電話を取り落としそうになってあわてて包帯だらけの手を出す。更に前に飛ばし、カケルはへっぴり腰になって草むらの電話を拾い上げた。

「不器用だな、お前は」父の声がしたような気がして、口をへの字にしながら画面を見る。

ショートメールがひとつ。数字の羅列でしかない携帯番号からだった。

こうあった。

友人の借りた

兄のことごめんね

北海道に住めそうな所ある、一緒にどう？

避難所通ります7時北門のすぐ外に行くよ。大好きあいたい
すゞ

はつと身を起こした。すゞが見つかったら大変だ、彼らは覚醒した狼を殺すと言っていた。

カケルは迷わず、走り出した。走りながら包帯をむしるように取り去り、頭のネットも剥ぎ取って放り投げる、そして

狼となった。

狼は山から避難所に戻ろうとひたすら木立の合間を駆けていった。

もうすぐで夜が明ける午前7時少し前、避難所の近くからかすかに漂う匂いを捉え、急に足をとめる。

少しずつ近づいて、大きな岩の合間から覗き見ると、なだらかな尾根下、まばらな雑木林の中に狼の群れが待機しているのを見た。

下に駆け下りればちょうど第十二小避難所のあたりになる。

ぼつりぼつりと散る狼の姿は灌木とともに凍ったシルエツトとなつて白い霧の中に浮かんでみえた。

すゞの匂いはしない、だが、数頭に覚えがあった。

狼は飛び出す、群れは一斉に飛び退り、次の瞬間吼え声を上げた。「待ってくれ」

慌て過ぎて、カケルは木の根にけつまづく。「つつ!! 待ってくれ」

とびかかろうとした若いオスに脇のオスが咬みつき、地面にひっくり返す。次のオスがまたカケルを襲おうとしたところを、今度は耳を伏せて低く唸って威嚇した。

「誰か、人間に戻ってくれ」

「何の用だ」

脇から、低い女の声がした。霧を縫うように、すゞと一緒にいたメスが人間の姿で現れる。

「すゞは」

「下に降りていった……お前を探しに、か？」

ぴくりと頬をひきつらせ、「だから『後から説明する』と……」

「ダメだ」カケルが強く言った。「連れ戻さないと」

女の眉がぴくりと上がる。

「下の連中は、狼を見破る何かを開発したらしい、今出ていったら

殺される」

「お前の畏か」

「違う！」

女の表情は変わらず冷たい。

「奉仕者だったのだから？ お前」

「そんなことは今はどうでもいい、すゞが大変だ、早く」

「よくないね」

狼たちの輪がわずかに狭まる。

「ミナミは暴君だったが、裏切り者ではなかった、我々は裏切りを許さない」

「アホかお前ら、すゞが殺されちまうぞ」

言うが早いかカケルは「あれのをゆけ」叫んで横に大きく跳んだ、そのまま群れを飛び越え斜面を駆け下って行く、「追え！」女のひと声で他のオスが高く鳴き、それに合わせるように群れは一斉に彼を追った。

おはようも愛しているもなく、狼はまた人間に変わり、急に流れる景色のスピードについて行けずつんのめりそうになったカケルはそれでも体勢を立て直し、走ってこようとしたすゞに向かって叫ぶ。「そのまま逃げろ！ 山へ！」

「狼が出たぞ！ 山に群れが！」ゴーグルを点けた迷彩服の連中が走って位置につくのが見えた、「あれは狼だ、ゴーグル外してる奴はすぐ装着！」

「撃て」

銃声が一斉に響く、後ろから追いついた狼がいったんカケルを次つぎと追い越し、武装した人間たちに襲いかかった。

すゞの悲鳴にも似た叫び。「カケル！ 助けに来たよ！」

「そりゃこつちのセリフだ」

大混乱の中、すゞはなぜかぴよんぴよん跳んでいる、熱いフライパン上の豆みだいに。不思議なことにかすり傷ひとつ負いそうもな

い。

力が抜けそうになる。「いいからさっさと狼になって逃げる、俺は後で行く！」

「どこへ」

「匂いで探すから！」

「鼻よくないでしょ！」

あんな、言いかけて激しい衝撃を受け、地に押し倒された。獣の匂いと張りつめた筋肉の熱がカケルを覆う。

あのメスが、目の中に殺気をみなぎらせ口を開け、カケルの喉首に喰らいつく

その瞬間、メスはびくんとのけぞってカケルの脇に仰向けに吹っ飛んだ。

血しぶきがカケルの脇腹に軌跡となって散っている。更に耳元で銃声。銃の音がさえ判らない、音自体が頭にぶち当たったような衝撃波だった。カケルは耳を強く押さえて低く伏せた。どこかがえぐられるように痛む、しかし確認もできないほど、もみくちゃになっている、コンクリートミキサー車の中はこんなか？ 体が持ちあがり、また、叩きつけられ、一瞬気が遠くなった。

すゞがまた叫んだ。

「助けて！！」

声に反応してカケルが飛び起きる、「すゞ！」

そこを銃弾が捉えた。

サイレンは今では頭上のどこかかなり近い場所で狂ったように鳴り響いていた。

イツカコンナユメヲミタナ

カケルは泥の中、うつ伏せに倒れたまま、目の前に突きつけられた銃口に目を戻した。

竹中は、涙を流さずに泣いている。銃口はかすかに震えている。

いつ着替えたのか、竹中も迷彩色のつなぎに身を包んでいた。カーキ色のブーツを履き、銃も支給されたものらしく真新しく、すっかり武装している。

ゴーグルを頭に上げた時、彼の目の下に深い隈ができているのに気づいた。頬もげっそりやつれて血の気がない。

病状はかなり重いのだろう、戦場で見る死神というのはきっとこんな風体だろうか。カケルは何か語りかけようと口を開けたが、あきらめて頭を落とす。

竹中の後ろには、迷彩服の人間たち。

カケルの後ろ、山の斜面に続く藪の中には生き残った狼の群れ。

だめだ、カケルはまた頭を上げる。

このままで死ぬか。

最後に叫ぶ一言は 02

カケルは立ちあがった。

揺らめく視界の中、一回りぐるりと見渡してみる。

どこにそれだけの気力が残っていたのか、自分でも不思議だった。

「けっこう俺は根性があったのかもかもしれないな。これならもうひと頑張りすれば、」

コイツラゼンブヲ クイコロセル

カケルはほんの刹那、目をさまよわせる。

叫ぶことばはひとつしかない、

「曠野を行け」そう思っていたはず、つい0.001秒前までは。

何が正しいんだ？

俺はどうすればいい？ 答えを誰か教えてくれ。誰か。

急にふわりとシャボン玉が目の前を飛んだ。その向こうに笑顔。

カケルは大きく手を上げて叫ぶ。腹の底から。

「殺さないでくれ！ 俺を殺さないでくれ、助けて！」

「撃て」という命令と「待て」とが重なった。

待て、がわずかの差で勝った、銃声はなかった。

狙撃班の方に、竹中が片手を挙げた。

「少しだけ、待ってくれ」

カケルはようやく竹中に目を据える。

竹中は銃を構えたまま、だが、引き金から指を外している。

カケルは、口もとの血をぬぐって竹中に言った。

「電話を一本だけ、掛けさせてくれないか」

大丈夫、番号は覚えている。昨夜思い出した。

圭吾さんが言ったんだ、ねえカケルくん、これってさ、すっげえヤラシイよなあ。

すでに死人の貌をした竹中が、そのままの姿勢で答えた。

「どこに」

「圭吾さんの実家に」

「私が話す、番号を言え」

カケルは番号を伝え、竹中は小さく繰り返した。

朝焼けに染まる大気を、一すじの光が射す。

狂った世界にも、夜明けはあるんだ。カケルはかすかに笑う。殺せ、殺せという声はいまや耳には聴こえないうねりとなって彼に襲いかかっていた。しかし、カケルは光をしっかりとその目に捉えた。

俺は答えを掴んだ。俺は時に追いついたんだ。だから今から

「撃て」

どこか遠くで、声が響いた。

カケルは大きく両手を広げ、全てを自分の元から解き放った。

俺は狼だ。自分では気づいていなかったが、生まれた時から多分、教えてくれたのは、あの人だった。

15の誕生日に、俺は祖父母の家を出た。もちろん二人には感謝はしていた、ずっと。

でも、6歳になる少し前に施設に迎えに来てくれた一番初め的人是、本当はじいちゃんではない、ずっとそう信じていた。

その晩も多分、泣きながら眠ったはずだ、泣く理由はいくらでもあった。

豆が苦手だ、教義の時間に暗記ができない、おねしょをした、年上の班員にいじめられた……眠りは自分だけの時間、逃げ込める大切な世界だった。

誰かが頭に手を触れたので目が開いた。その手が軽く俺を揺する。「たいち」

揺り起こした力は優しい、うつすら目を開ける。

いつもの所員だろうか、もう朝なのか？ と思ったがどうも違う。部屋の中はまだ暗く、同室のヒカルもユウヤも起きた様子はない。

あたりは静けさに満ちていた。

「太一」

その人は俺の名前を呼んだ、懐かしい、いつも聞いていた声。

「太一、ごめん遅くなって」

俺もその人の名前を呼んだはずだ。

呼んでからはつきりと目が覚めて、がばつと起き上がった。

「ごめんな、さあ、おうちに帰ろう」

白っぽくぼんやりした姿しか覚えていない。

俺はしがみついて泣いた、泣いた。

暖かさは本物だった、と思う。

「俺の袖で八十拭くな、行くぞ」

彼はそう言っただけで笑った。

朝になって目が覚めた時、自分がまだいつものベッドにしていると気づいて、俺はまた泣いた。

夢だったと認めるには、あまりにも生々しい夢だったから。

何かが変わったと感じたのは、その日の午後。

父方の祖父母が突然訪ねてきた。面談室に入ると、二人はまじまじと俺を見た。

「ばあちゃん俺を手招きして、強く抱いた。その脇でじいちゃんと言った。」

「ごめんな、遅くなって」
聞いてからずいぶん経ってしまった、探すのに手間取って、大きくなつたなあ、今夜は何が食べたい？ 寿司か？ カレーか？ ケーキも売ってる店があるんだ、今どきめずらしい生クリームなんだ、さあ、おうちに帰ろうな、そうじいちゃんは俺の手を取った。

それも夢のようだった、でも、何かが違う。

俺は何度もふり返る。

帰ったところは、自分のうちではなかった。見たこともない場所、嗅いだ事もない匂い。

誰かがいない、いつも、何かが欠けている。

それは分ってはいたのだが、俺はそれを語ることはできなかった。

15になった5月の晩、十三夜月の中、太一は祖父母の家を出た。表の明るさに、彼はどこまでも歩き続ける。

どうやって行ったのか自分でも解らないまま、気がついたら草だらけの道をたどっていた。

どこにも、誰も住んでいる様子がない。

太一も聞いたことがあった。意思無き排除という名前の災厄が襲った地区に隣接していた町のひとつのようだった。

まだ立ち入り禁止は続いていたらしく、まれにパトロール車両が通りかかる、その時だけ草の中に伏せ、彼は構わず中に踏み込んでいった。

母屋は既に屋根が抜け落ちていた。

案外綺麗な状態で残っている離れの棟に入り、太一はそこで眠ることにした。

中も、閉め切っていた割にかび臭い匂いもせず、ほこりつぼさもあまり気にならなかった。

太一には懐かしい匂いに満ちていた。彼は上げてあった布団を敷いて、かすかな湿り気は気にせず横になる。枕に鼻を押し当て、何だか急に嬉しくなって布団の上をゴロゴロと転げ回った。

明るくなってから、太一は室内をあらため始めた。

母屋の方も見たい気がしたがあまりにも荒廃がひどいし、なぜかこちらの離れが妙に気になっていた。

時々回ってくるパトロールの音を耳にするたびに、低く身を伏せて音を立てずにじっとしている。

今度連れ戻される場所は、祖父母の家ではないかも知れない。ど

こかの施設に戻される恐れもあった。

後になって祖父から聞いたが、太一がいたあそこはまだマシな方だったらしい、それでも『国家情報省』の管轄となつてからは盲信と暴力とが日常を支配していた。状況はさらに、悪くなつていゝるだろう。

もう戻れない。

傾いた書棚から、青くて薄い背表紙が飛び出していた。

絵本のように、この部屋の住人のものなのだろうか、なぜ飛び出していたのだろう、何となく気になつて、引き出してみる。

書名は『東京は海のそこ』とあった。

一通りめくつてみる、確かに絵本だった、字がほとんどない。漫画みたいで、太一はつい最初から読みふける。

読んでいくうちに、記憶がつかつてきた。

ことばの部分を読んでくれる声が聴こえてくる、男の声は少し低く、落ちついている、女の子の声は張りがあつて、太一はどちらの声も大好きだった。

そうだ、この本を両脇から見て、俺はこの所を何度も読んでくれ、とせがんだ。なつちゃんが「セリフもないのにどうやって読むの」と言つたらそうちゃんは

「そうちゃん」

急に口へのぼつた名前にまだ記憶が追いつかないうちに、太一は立ち上がる。絵本が傾いて床に落ちた。

風を入れようと少し開けた窓の外に誰か立っていた。

ほんのかすかに、風が匂いを運んできた。

「そうちゃん？」

太一はおずおずと呼びかける。

「どうしてそれが気になったの？」

影が答えた。

張りのある声で、ドアを開けながら言う。

「一昨日そこに戻したばかりだったのに。大変だったのよ、絵本一冊運ぶのだって一苦勞」

「何？」太一は腰を浮かせる。「誰なんだよ」

ドアの向こうに立っていたのは、小柄な女性だった。

すらりとした立ち姿、長い髪を横で束ねている。

目は力強く彼を見つめていた。

「ちよっ……」

太一はことばにつまり、その場に釘づけになる。

「な、何で」一糸まとわぬその美しい姿に思わず息を呑んだ。

「アナタ、タイチだよね？」

よく通る声で彼女が訊ねる。太一は思わずうなずいた。

「よかった。私、おとといから張り込んだの、そろそろだと思っ
たから」

「何……そろそろって」

「お誕生日でしょ？ 昔タケナカさんから聞いたから。15歳おめで
どう」

そう言ってから彼女は両手を差し出した。

「さあ、行くよ」

「ど、どこへ」

「アタシたちの住処へ、あれ？ 本持つてくの？」

太一は手にした絵本を見る。彼女が手を打って笑い声をたてた。

「持つて行けないわよ、それ運ぶ時も大変だったんだからね。お裁
縫の上手な仲間に特製バッグ作ってもらってわざわざ、運んだのよ
ここまで」

「運んだ、つて？」

「アパートに残ってた荷物の中に、それが入ってたの、ここに来るなら一緒に連れて来ようと思って……」

言葉尻が途切れ、急に慌てて付け足す。

「別にあの人が本の中にいる、とかそんなこつ恥ずかしいコト考えてるんじゃない、ないんだからね。ただその本すつごく好きだったみたいだし他に大したもの……それにさ」

赤くなったのをごまかそうとしているのか、えへんえへんと咳払いしてから、その人は嬉しそうに笑った。

「たぶん、その本がアナタに会いたがってたんじゃないかな？ でももういいでしょ？」

太一は足を踏み出す、段差に気づかず軽くよろめくと、その様子をみて彼女がくすりと笑う。

「それにしてもあの人とそっくりだね、その不器用ぽいところもさ」「えっ？」

彼女は太一の元にやってきて、彼の手を取った。

「早く変わりなよ、はやく！」

「変わる？ 何にさ？」

「狼に！」

彼女は地団太をふむように言っつてその腕を引つ張つた。

「知らなかったの？ アナタは狼なんだよ、私もだけど」

引つ張る力はかなり強い、太一はよろめきながら叫ぶ。

「ど、どこが俺が何が狼つてそれどれ」

「違うよ、言っつてることメチャクチャ」

くすくす笑つていた彼女は、一瞬だけ目を真摯にとどめ、こう告げた。

「ピアスはなくても大丈夫、アタシが手をつないでるから。さあ、言っつて。」

『沃野よへを行け』

太一はその言葉を唱えた。
そして、狼となった。

狼になったとたん、彼はすべての答えを掴まえた。
自分が何者で、どこから来て、どこへ行くのか、何をすべきなの
か。

狼はどこまでも駆けていった、新しい仲間とともに。
まだ見たことのない沃野へと。

< 心優しき狼よ、曠野を行け 了 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6752bz/>

心優しき狼よ、曠野を行け

2014年7月8日08時05分発行